

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第557集

むかい なか の たて

向中野館遺跡第10・11次発掘調査報告書

盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査

2010

盛岡市都市整備部盛岡南整備課
(独)都市再生機構岩手都市開発事務所
(財)岩手県文化振興事業団

向中野館遺跡第10・11次発掘調査報告書

盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことの出来ない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、岩手県盛岡市の盛岡南新都市土地区画整理事業に関連して平成20年度に発掘調査を実施した、盛岡市向中野館遺跡の調査成果をまとめたものです。今回の調査では土塁や堀、平安時代の集落の広がりが確認されました。特にも、平安時代の据立柱建物跡がこの調査区周辺に多くみられるることは、当時の村の様子を探る上で、貴重な資料を提供することができました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所、盛岡市都市整備部盛岡南整備課、盛岡市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成22年3月

財團法人 岩手県文化振興事業団
理事長 武田牧雄

例　　言

- 1 本報告書は、岩手県盛岡市飯岡新田2地割133-2ほかに所在する向中野館遺跡第10・11次の発掘調査結果を収録したものである。
- 2 本遺跡の調査は、盛岡南新都市土地区画整理事業に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所及び盛岡市都市整備部盛岡南整備課と岩手県教育委員会との協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 岩手県遺跡情報検索システムに記載される遺跡番号はL E 26-0205、遺跡略号は第10次調査分がOMN-08-10、第11次調査分がOMN-08-11である。
- 4 発掘調査期間、調査面積及び調査担当者は以下のとおりである。

第10次調査	平成20年5月1日～11月10日／2,916m ²	／金子佐知子・本多準一郎・小椋勇紀
第11次調査	平成20年4月11日～11月10日／615m ²	／金子佐知子・小椋勇紀
- 5 室内整理期間は第10次分が平成20年12月16日～平成21年3月31日、第11次分が平成20年11月1日～平成20年12月15日で、金子佐知子と本多準一郎が担当した。
- 6 本報告書の執筆は、金子佐知子と本多準一郎が分担して行った。遺構に関しては文末に文責を示した。遺物に関しては文中に示していないが、以下の分担で行っている。

遺物出土状況	遺構担当者
土師器・須恵器・土製品・繩文土器	／金子佐知子
石器・金属製品・木製品・陶磁器	／ 本多準一郎
- 7 発掘調査では、独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所、盛岡市都市整備部盛岡南整備課、盛岡市教育委員会、高橋善躬氏のご協力をいただいた。
- 8 本報告書作成にあたり、次の方々、機関にご指導いただいた。(順不同・敬称略)
伊藤博幸(奥州市埋蔵文化財調査センター)、室野秀文(盛岡市遺跡の学び館)、
石崎高臣(奥州市世界遺産登録推進室)、櫻井友梓(岩手県教育委員会)、
大野順陽(宮城県多賀城跡調査研究所)、宮城県多賀城跡調査研究所、
村上伸之(佐賀県有田町歴史民俗資料館)
- 9 各種委託業務では以下の機関に依頼した。

航空写真	：株式会社東邦航空
石質鑑定	：花崗岩研究会
放射性炭素年代測定	：株式会社加速器分析研究所
炭化材樹種同定	：パリノ・サーヴェイ株式会社
鉄滓分析	：J F E テクノリサーチ株式会社
火山灰分析	：パリノ・サーヴェイ株式会社
火山灰分析	：弘前大学 柴 正敏
金属製品及び木製品の保存処理	：岩手県立博物館
- 10 今回の調査結果は、現地説明会(平成20年9月13日開催)、及び調査略報などがあるが、本書と記載が異なる場合は、すべて本報告書が優先する。
- 11 調査で得られた出土遺物や整理に係わる諸記録等については、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。なお、参考資料として掲載した遺物は、所有者に返却した。

目 次

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の立地と環境	1
1 地理的環境	1
(1) 遺跡の位置と立地	1
(2) 遺跡周辺の地形と地質	3
2 周辺の遺跡	4
3 基本層序	7
4 これまでの調査	9
III 野外調査と室内整理の方法	12
1 野外調査の方法	12
(1) 調査対象面積	12
(2) グリッドの設定	12
(3) 精査の方法及び遺構の記録	12
(4) 遺構の命名	15
(5) 広報・普及啓発活動	16
2 室内整理	16
(1) 遺物の整理	16
(2) 遺構実測図の整理	17
(3) 写真類の整理	17
IV 検出された遺構	21
1 調査の概要	21
2 竪穴住居跡	21
3 掘立柱建物跡	34
4 柱穴列	37
5 土坑	37
6 竪穴状遺構	57
7 焼土遺構	58
8 堀跡・溝跡	60
9 旧河道・遺物集中区	62
10 土壙跡	63
11 柱穴状土坑	64

V 出 土 遺 物	118
1 土器類・須恵器	118
(1) 壺	118
(2) 高 台 付 壺	120
(3) 高 壺	120
(4) 碗	120
(5) 鉢	120
(6) 壺	121
(7) 長 脚 壺	121
(8) 球 脚 壺	122
(9) 壺・瓶 類	122
(10) 大 壺・壺 類	122
2 石器・石製品	122
3 木 製 品	123
(1) 杖	123
(2) 挽 物	123
(3) 木札状木製品	123
(4) 板状木製品	123
(5) 不明木製品	124
4 土 製 品	124
5 陶 磁 器	124
(1) 碗・小碗・碗蓋	124
(2) 搪 鉢	125
(3) 壺	125
(4) 壺	125
(5) 盆・小 盆	125
(6) 不 明 器 種	125
6 時期不明の土器	126
7 金 属 製 品	126
(1) 鉄 製 品	126
(2) 煙 管	126
(3) 鏡	127
8 銭 貨	127
9 繩 文 土 器	128
VI ま と め	193
1 古 墳 時 代 末	193
2 奈 良 時 代	193
(1) 遺 構	193
(2) RA018堅穴住居跡出土土器について	194
3 平 安 時 代 の 遺 構	195

(1) 堪穴住居跡	195
(2) 挖立柱建物跡	196
(3) 土坑	196
(4) 遺構間接合	196
4 平安時代の土器について	196
(1) 土器の年代	196
(2) 墓書上器・刻畫土器	201
5 中世の遺構	207
6 近世の墓壙について	207
7 向中野館南館について	208
付編 向中野館遺跡の自然科学分析	211
1 向中野館遺跡の堪穴住居跡から出土した炭化材の樹種	211
2 向中野館遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)	214
3 向中野館遺跡第10次出土鉄滓類の成分分析	218
4 向中野館遺跡第10・11次調査における火山灰の分析調査	230
5 向中野館遺跡第10・11次調査出土の堆積物について	236
報告書抄録	331

図版目次

第1図 遺跡位置図	2	第20図 RA025堪穴住居跡(2)	79
第2図 遺跡周辺地形分類図	3	第21図 RA025堪穴住居跡(3)	80
第3図 周辺の遺跡	5	第22図 RA026堪穴住居跡	81
第4図 向中野館遺跡・細谷地遺跡調査位置図	6	第23図 RA027堪穴住居跡(1)	82
第5図 基本土層	7	第24図 RA027堪穴住居跡(2)	83
第6図 グリッド配置図	13	第25図 RA028堪穴住居跡	84
第7図 グリッド概念図	14	第26図 RA029・030堪穴住居跡(1)	85
第8図 実測図凡例	18	第27図 RA030堪穴住居跡(2)	86
第9図 遺構配置図	20	第28図 RA031堪穴住居跡	87
第10図 RA018堪穴住居跡(1)	69	第29図 RA032堪穴住居跡(1)	88
第11図 RA018堪穴住居跡(2)	70	第30図 RA032堪穴住居跡(2)	89
第12図 RA019・RA020堪穴住居跡(1)	71	第31図 RA033堪穴住居跡	90
第13図 RA020堪穴住居跡(2)	72	第32図 RA034堪穴住居跡(1)	91
第14図 RA020堪穴住居跡(3)、021堪穴住居跡	73	第33図 RA034・035堪穴住居跡	92
第15図 RA022堪穴住居跡	74	第34図 RB009掘立柱建物跡(1)	93
第16図 RA023堪穴住居跡(1)	75	第35図 RB009掘立柱建物跡(2)	
第17図 RA023堪穴住居跡(2)	76	O10掘立柱建物跡	94
第18図 RA024堪穴住居跡	77	第36図 RB011掘立柱建物跡	95
第19図 RA025堪穴住居跡(1)	78	第37図 RB012・013掘立柱建物跡(1)	96

第38図	RB013掘立柱建物跡（2）、RC001柱穴列、 RD027・028土坑	97	第76図	遺構内出土土器（18）	147
第39図	RD029～032土坑	98	第77図	遺構内出土土器（19）	148
第40図	RD033・034土坑	99	第78図	遺構内出土土器（20）・ 遺構外出土土器（1）	149
第41図	RD035～038土坑	100	第79図	遺構外出土土器（2）	150
第42図	RD039～043土坑	101	第80図	遺構外出土土器（3）	151
第43図	RD044～048・052土坑	102	第81図	遺構外出土土器（4）	152
第44図	RD049～051・053土坑	103	第82図	遺構外出土土器（5）	153
第45図	RD054～059土坑	104	第83図	遺構外出土土器（6）	154
第46図	RD061～063土坑	105	第84図	遺構外出土土器（7）	155
第47図	RD060・064～070土坑	106	第85図	遺構外出土土器（8）	156
第48図	RD071～079・081土坑	107	第86図	遺構外出土土器（9）	157
第49図	RD078～081土坑	108	第87図	遺構外出土土器（10）	158
第50図	RE004～006堅穴状遺構	109	第88図	遺構外出土土器（11）	159
第51図	焼土遺構・柱穴状土坑（1）	110	第89図	遺構外出土土器（12）	160
第52図	RG014・015溝跡	111	第90図	遺構外出土土器（13）	161
第53図	RZ018土塁跡現況図・断面図（1）	112	第91図	遺構外出土土器（14）	162
第54図	RZ018土塁跡断面図（2）	113	第92図	石器（1）	163
第55図	RZ018上塁跡・RG012堀跡、 旧河道地形測量図	114	第93図	石器（2）	164
第56図	RZ018土塁跡・RG012・013堀跡、 旧河道	115	第94図	石器（3）	165
第57図	RZ018土塁跡・RG012・013堀跡、 旧河道断面図	116	第95図	石器（4）	166
第58図	柱穴状土坑断面図	117	第96図	石器（5）	167
第59図	遺構内出土土器（1）	130	第97図	石器（6）	168
第60図	遺構内出土土器（2）	131	第98図	木製品（1）	169
第61図	遺構内出土土器（3）	132	第99図	木製品（2）、土製品（1）	170
第62図	遺構内出土土器（4）	133	第100図	土製品（2）	171
第63図	遺構内出土土器（5）	134	第101図	陶磁器（1）	172
第64図	遺構内出土土器（6）	135	第102図	陶磁器（2）、土器	173
第65図	遺構内出土土器（7）	136	第103図	参考資料1（陶磁器、煙管、銅鏡）	174
第66図	遺構内出土土器（8）	137	第104図	参考資料2（錢貨、錢貨、鐵製品、 繩文土器）	175
第67図	遺構内出土土器（9）	138	第105図	土器接合状況	197
第68図	遺構内出土土器（10）	139	第106図	遺構別土器集成図（1）	198
第69図	遺構内出土土器（11）	140	第107図	遺構別土器集成図（2）	199
第70図	遺構内出土土器（12）	141	第108図	遺構別土器集成図（3）	200
第71図	遺構内出土土器（13）	142	第109図	墨書き土器集成図（1）	202
第72図	遺構内出土土器（14）	143	第110図	墨書き土器集成図（2）	203
第73図	遺構内出土土器（15）	144	第111図	墨書き土器集成図（3）	204
第74図	遺構内出土土器（16）	145	第112図	刻書き土器集成図	205
第75図	遺構内出土土器（17）	146	第113図	向中野館遺跡遺構配賦図 (第3～11次調査)	209
			付図	柱穴状土坑平面図	

表 目 次

第1表 周辺の遺跡	5	第13表 木製品観察表	190
第2表 これまでの調査一覧	10	第14表 土製品観察表	190
第3表 調査報告書・覧表	11	第15表 陶磁器観察表	191
第4表 遺構名对照表	15	第16表 銅鏡観察表	191
第5表 柱穴状土坑計測表	65	第17表 煙管観察表	191
第6表 穴穴住居跡一覧表	67	第18表 古錢観察表	192
第7表 土坑一覧表	67	第19表 鉄製品観察表	192
第8表 壓穴状造構一覧表	68	第20表 繩文上器観察表	192
第9表 燃土遺構一覧表	68	第21表 向中野館遺跡・細谷地遺跡検出の 余良時代の堅穴住居跡一覧	193
第10表 清跡一覧表	68		
第11表 土師器・須恵器観察表	176	第22表 墨書き土器・刻書き土器一覧表	206
第12表 石器観察表	190		

写真図版目次

写真図版1 航空写真(1)	239	写真図版26 RA034堅穴住居跡(2)	264
写真図版2 航空写真(2)	240	写真図版27 RA035堅穴住居跡、 RB009掘立柱建物跡(1)	265
写真図版3 調査前風景	241	写真図版28 RB009掘立柱建物跡(2)	266
写真図版4 RA018堅穴住居跡(1)	242	写真図版29 RB010掘立柱建物跡	267
写真図版5 RA018堅穴住居跡(2)	243	写真図版30 RB011掘立柱建物跡	268
写真図版6 RA019、RA024堅穴住居跡	244	写真図版31 RB012掘立柱建物跡	269
写真図版7 RA020堅穴住居跡(1)	245	写真図版32 RB013掘立柱建物跡(1)	270
写真図版8 RA020堅穴住居跡(2)	246	写真図版33 RB013掘立柱建物跡(2)、 RC001柱穴列、RD027・028土坑	271
写真図版9 RA021堅穴住居跡	247	写真図版34 RD029~032土坑	272
写真図版10 RA022堅穴住居跡	248	写真図版35 RD033~035・037土坑	273
写真図版11 RA023堅穴住居跡(1)	249	写真図版36 RD036・038・039土坑	274
写真図版12 RA023堅穴住居跡(2)	250	写真図版37 RD040~043土坑	275
写真図版13 RA025堅穴住居跡(1)	251	写真図版38 RD044~047・052土坑	276
写真図版14 RA025堅穴住居跡(2)	252	写真図版39 RD048~050・054土坑	277
写真図版15 RA026堅穴住居跡(1)	253	写真図版40 RD051・053・055土坑	278
写真図版16 RA026堅穴住居跡(2)	254	写真図版41 RD056~058土坑	279
写真図版17 RA027堅穴住居跡	255	写真図版42 RD059・060・064土坑	280
写真図版18 RA028堅穴住居跡	256	写真図版43 RD061・062土坑	281
写真図版19 RA029堅穴住居跡	257	写真図版44 RD063・065土坑	282
写真図版20 RA030堅穴住居跡	258	写真図版45 RD066~069土坑	283
写真図版21 RA031堅穴住居跡	259	写真図版46 RD070~072土坑	284
写真図版22 RA032堅穴住居跡(1)	260	写真図版47 RD073~076土坑	285
写真図版23 RA032堅穴住居跡(2)	261	写真図版48 RD077~081土坑	286
写真図版24 RA033堅穴住居跡	262		
写真図版25 RA034堅穴住居跡(1)	263		

写真図版49	RE006堅穴状遺構	287	写真図版71	上器 (12)	309
写真図版50	RE004・005堅穴状遺構、 RF003・004焼土遺構	288	写真図版72	土器 (13)	310
写真図版51	RF005～007焼土遺構	289	写真図版73	土器 (14)	311
写真図版52	RG012堀跡 (1)	290	写真図版74	土器 (15)	312
写真図版53	RG012 (2)・013堀跡	291	写真図版75	土器 (16)	313
写真図版54	RG014・015堀跡	292	写真図版76	土器 (17)	314
写真図版55	IJ河道、RZ017遺物集中区	293	写真図版77	土器 (18)	315
写真図版56	RZ018上塁跡 (1)	294	写真図版78	土器 (19)	316
写真図版57	RZ018土塁跡 (2)	295	写真図版79	土器 (20)	317
写真図版58	RZ018土塁跡 (3)	296	写真図版80	土器 (21)	318
写真図版59	柱穴群	297	写真図版81	土器 (22)	319
写真図版60	上器 (1)	298	写真図版82	石器 (1)	320
写真図版61	土器 (2)	299	写真図版83	石器 (2)	321
写真図版62	土器 (3)	300	写真図版84	石器 (3)	322
写真図版63	上器 (4)	301	写真図版85	木製品 (1)	323
写真図版64	土器 (5)	302	写真図版86	木製品 (2)	324
写真図版65	土器 (6)	303	写真図版87	土製品・陶磁器 (1)	325
写真図版66	上器 (7)	304	写真図版88	陶磁器 (2)	326
写真図版67	土器 (8)	305	写真図版89	陶磁器 (3)・参考資料1 (陶磁器)	
写真図版68	土器 (9)	306	写真図版90	参考資料2 (銅鏡・彌膏)	328
写真図版69	土器 (10)	307	写真図版91	参考資料3 (古錢)・古錢	329
写真図版70	土器 (11)	308	写真図版92	鉄製品・繩文土器	330

I 調査に至る経過

盛岡南新都市土地区画整理事業は、盛岡市が21世紀に向けて、経済・文化などに対する各機能を兼ね備えた北東北の拠点都市として発展していくことを目指し、両者が有機的に結びついた軸状都市を形成するために策定された事業である。平成3年度から平成22年度までの20年間を事業予定として、対象面積313haに及ぶ土地区画整理事業が進められている。

この間、事業の対象地域に係わる埋蔵文化財の取り扱いについても協議が重ねられ、盛岡市教育委員会が試掘調査を行い、調査を必要とする範囲を確定し、本調査は（財）岩手県文化振興事業団の受託事業として実施することとなった。

本遺跡第10・11次調査については、岩手県教育委員会が盛岡市と協議の結果、平成20度の事業として確立した。その内訳は、第10次調査が盛岡市都市整備部盛岡南整備課委託分の宅地用地内2,916m²を、平成20年5月1日から11月10日まで、第11次調査が独立行政法人都市再生機構委託分の都市計画道路用地内615m²を、平成20年4月11日から11月10日までとなっている。

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

（1）遺跡の位置と立地（第1図）

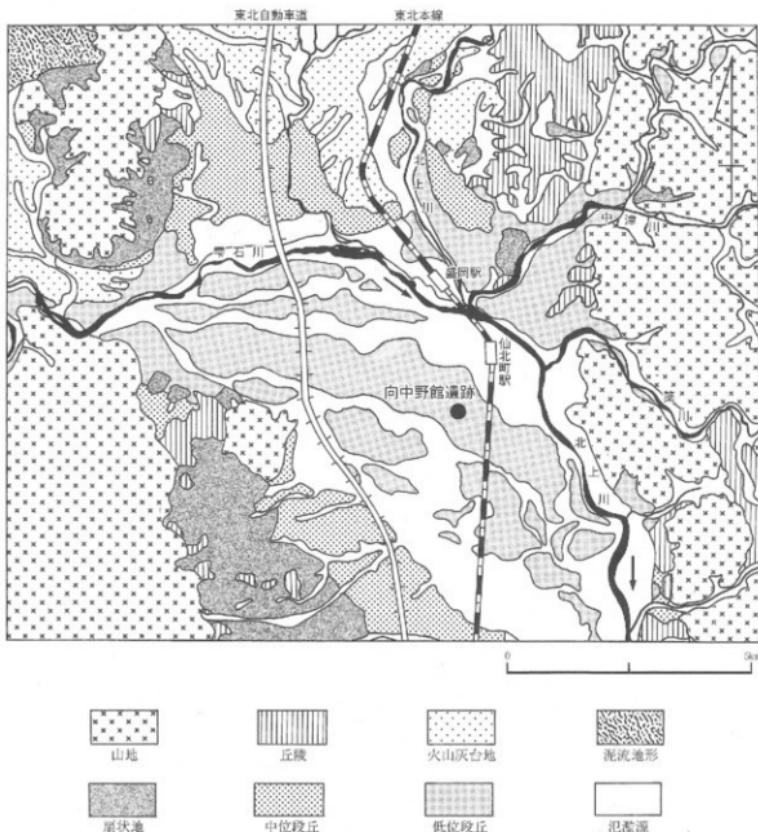
向中野館遺跡の所在する岩手県盛岡市は、岩手県のほぼ中央に位置し、東西約45.5km、南北約40km、総面積886.8km²、総人口約30万人を有する岩手県の県庁所在地である（平成20年4月現在）。北は、八幡平市、岩手郡岩手町・葛巻町、東は下閉伊郡岩泉町・旧川井村（現宮古市）、南は花巻市、紫波郡紫波町・矢巾町、西は岩手郡零石町・滝沢村の2市6町2村と隣接している。盛岡市の町造りは慶長2（1597）年に南部信直が盛岡城の築城に取りかかったことに始まる。明治22年には全国39都市の一つとして市制が施行され、平成20年は市制120年の節目に当たる。

向中野館遺跡は、東日本旅客鉄道仙北町駅から南西に約1.3kmに位置し、盛岡市飯岡新田地内に所在している。国土地理院発行の2万5千分の1地形図「盛岡」N J -54-13-14-2（盛岡14号-2）、同5万分の1地形図「盛岡」N J -54-13-14（盛岡14号）の図幅に含まれ、第10・11次調査区は北緯39度40分40秒、東経141度8分30秒付近に位置する。

調査区は零石川右岸の低位段丘及び氾濫原旧河道南側微高地に立地している。東西約50m、南北約80mの長方形で、第10次調査区は615m²、第11次調査区は2,916m²である。平成19年に行なわれた第5・6次調査区（向中野館遺跡の北館）が北側に隣接し、本調査区は向中野館遺跡の南館の位置にあたる。現況は宅地、畑で、標高は121～122m前後である。



第1図 遺跡位置図



第2図 遺跡周辺地形分類図

(2) 遺跡周辺の地形と地質 (第2・3図)

遺跡の立地する盛岡市の地形を概観すると、北上盆地の北部に位置し、東に北上山地、西に奥羽山脈が連なり、盆地に広がる市域からは北西側に岩手山（標高2,038m）、北東側に姫神山（標高1,124m）、南東側に早池峰山（標高1,913m）を望むことができる。盆地の中央を南流する北上川は、県北部の岩手町御堂観音境内にその源を発し、延長243km、流域面積10,150km²、支流数216を数える、東北地方最大の一級河川である。北上川は西側に連なる奥羽山脈と東側に広がる北上山地の間を流れ、宮城県石巻湾に注いでいる。この流域は盛岡市北部の四十四田峡谷付近までを上流域、一関市肱善寺峡谷付近までを中流域、石巻までを下流域に区分しており、盛岡市は中流域の上部に位置づけられる。

北上川中流域の地形は背後に控える山地構造の違いによって対照的な様相が見られる。北上川左岸

(東側) の北上山地は、老年期山地がその後の地殻変動によって隆起準平原化したもので、山地に續く丘陵部縁辺部に小規模な段丘と沖積地が認められるにすぎない。これに対して北上川右岸(西側) に連なる奥羽山脈は、新第三系及び火山岩類を主体とする構造山地であり、北上川に注ぐ多くの支流をもち、それぞれに多量の土砂を供給し、大小の段丘や扇状地、河岸平野、起伏量の小さい丘陵地が複雑に入り組む扇状地状の捨い平坦面を作り出している。これらの平坦面の大部分は、更新世中・後期に形成されたもので、支流によって開拓され段丘化したものである。

本地域の段丘区分について、北上川中流域の段丘を高位から西根段丘、村崎野段丘、金ヶ崎段丘に分類しているが、中流域北部ではこれに相当するものとして高位の石鳥谷段丘、中位の二枚橋段丘、低位の花巻段丘・都南段丘に区別している(中川ほか: 1963)。

向中野館遺跡の所在する北上川中流域北部右岸では、大規模な平坦面と奥羽山脈から供給される多量の堆積物による扇状地が形成されており、零石川以南、北上川以西には零石川の下刻・堆積作用により上位から、洪沢火山灰層上部以上を載せる火山灰台地、分火山灰層を載せる「中位段丘」、沖積段丘の「低位段丘」が形成されている。(第2図) 低位段丘面には零石川の連続する大きな旧河道が4条確認されている。文献資料等によれば、志波城は零石川の水害が原因で廃絶されたとされており、発掘調査の結果からも志波城北辺部は零石川の旧河道により消失していることが確認されている。さらに小規模な旧河道が網目状に入り組んでおり、小規模な自然堤防状微高地を形成している。本遺跡を含めた、古代遺跡の多くは低位段丘面の微高地や扇状地の縁辺部に位置している。

2 周辺の遺跡(第3図)

盛岡市に所在する遺跡は岩手県教育委員会が作成した2000年度版『岩手県遺跡情報検索システム(盛岡地方振興局管内北部・盛岡地方振興局管内南部)』によると716箇所が登録されている。第3図には零石川右岸を中心とする範囲に所在する43箇所の遺跡分布を示した。

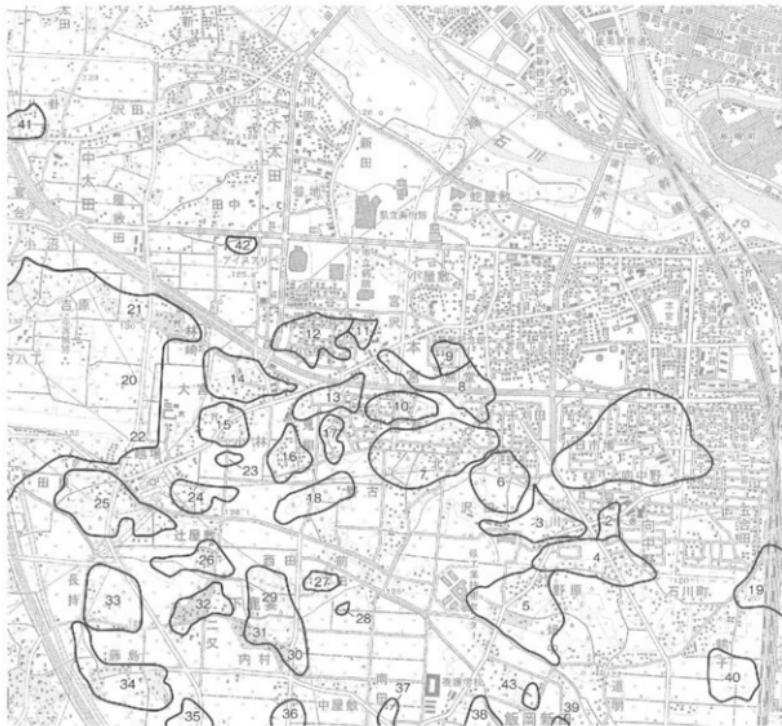
これらの遺跡分布状況を見ると、前述した地形の様相の違いに対応するかのように、異なった様相が見受けられる。

零石川左岸(北岸) 地域は、大館遺跡群をはじめとした縄文時代(主に中期)の集落遺跡が多く分布している。これに対して右岸(南岸) 地域は、本宮熊堂A遺跡(9)や台太郎遺跡(11)、細谷地遺跡(4)で縄文時代晩期の堅穴住居跡や生活痕跡が確認されている以外、陥し穴状土坑など狩猟場を示す遺構が確認される程度で、居住遺跡が確認されていない。その一方で、右岸地域は古代以降になると、集落遺跡が多く分布するという特徴が見られる。

本遺跡(2)周辺は、平成3年以降の盛岡南新都市計画整備事業に伴う発掘調査によって、その様相が明きらかになりつつある。この事業により調査された遺跡は、本宮北遺跡(14)、小幅遺跡(12)、宮沢遺跡(11)、本宮熊堂A遺跡・本宮熊堂B遺跡(8)、鬼柳A遺跡(13)、野古A遺跡(7)、飯岡沢田遺跡(6)、台太郎遺跡(1)、飯岡才川遺跡(3)、細谷地遺跡(4)、矢塙遺跡(5)が挙げられる。これらの遺跡は、志波城に先行する古墳から奈良時代の集落もしくは徳丹城へ城柵機能が移行した後の9世紀中頃以降の集落遺跡である。志波城存続期間と併行する時期の集落は非常に少なく、廃絶以降に大規模な集落を多く形成するという特徴がみられる。向中野館遺跡も後者の集落として営まれていたことは過年度の調査成果により判明している。中世以降は認識されている遺構数が少ないこともあるのか、古代までのようないわゆる地城差は見られなくなり、市内に散在する程度となっている。台太郎遺跡で中世の礎石を伴う建物跡、堀跡、土壙墓群などが確認されている以外は、ほとんどが城館

第1表 周辺の遺跡

No	遺跡名	内訳	文献(世名→本文44にある)	No	遺跡名	内訳	文献	No	遺跡名	内訳	文献	
1	台太郎	绳文羽田遺跡・古墳～平安墓葬～住	10, 12, 14, 17, 18, 22, 24～26 60(3)～中世～五角形の塔跡、墓地 31, 37, 40, 41, 58, 71, 73, 77, 78	10	輪郭	住(館)1, 墓、施?	9, 32 37, 41, 73	5	久那	本宮 第1章		
2	舟中野村	绳文土器～平安墓葬～日吉浜、木製品	14, 15, 52, 53, 58	11	宮沢	度(平安)	6, 47	16	鬼城B	古代		
3	殿町才川	針編木製・陶・中世鐵器～廻転、小網、圓溝	セシヨ今子駄發弓 絳文18(穴34)～古墳～平安墓葬	13, 19, 21, 37, 48, 54, 57	14	大宮北	平安墓葬(50後半?) 住2、住跡、施、溝	8, 70, 71 28, 29	17	鬼城C	古代 72(例 6女1.)	
4	相模地	絳文桃山～馬場34?、麻車、磨具～平安 東洛～(1150年)上、貴族貴族、上等級成灰	22, 23, 36, 37, 49, 54	15	大宮	古代～A、施	69, 73	23	小8	古代		
6	飯沼沢田	絳文桃山～古墳～一定耕作。	27, 28, 46	18	野古B	度、平安土器等 敷片	65	24	木門	古代		
7	青古久	金瓦、漆、陶土器を復元した上古器	9, 29, 30, 37, 71～73	22	西環礁	國文狩獵火10、船穴	72, 73	25	上瀬崎A	穂文化 古代		
8	木宮熊糞B	絳文土器、漆、印、インシテ利手品	2, 10, 11, 19, 20, 34	22	鬼城A	平安土器、平安大漁	72, 73	26	上瀬崎B	穂文化 古代		
9	木宮熊糞A	絳文晚期～後平安墓葬 →住居、積石塚、土鍋	37～39, 43, 45, 47 6, 8, 35, 45, 51, 73	31	内村	平安墓葬～住1、 施立、溝、平安大漁	78	27	西田B	古代		
12	小桜	平安墓葬～住40、円形周溝、 施立、溝	3～5, 7, 14～16, 19, 73	32	二又	平安墓葬～住1、 住	78	29	西田A	古代 78(例 もなし)		
13	鬼柳A	絳文早期～穴状遺構5	11, 19, 73	33	北瀬戸	度(平安)2、 施立、溝、谷	68	30	千葉原	古代		
19	青仙北	金瓦～平安墓葬～住跡、 円形周溝、ノロ波溝	63, 68, 70～73	34	面崎	住跡(古代)1	68	37	黒鹿丸	古代		
20	北波城跡	平安初期の城跡、歴史跡 以降は、太田川八丁堀跡	64, 75, 76, 80～83 ほか	36	諏訪1	古墳～平安墓葬等 →10、円形周溝	87	38	万持	古代		
21	林跡	平安墓葬(住1)、施立、溝跡 土壇、住跡(古墳)	69, 72～74	41	八卦	度(古)、平江1、 度、丘	89, 92	40	向中野塚	古代		
35	飯沼林跡B	平安墓葬(住5)、經立、田川遺 物失せらる多量の瓦片、円形周	33, 67, 68	12	北田中	土器等 (火葬では出土未だ)	66	43	佛野	丘陵 五重 新規		



第3図 周辺の遺跡



第4図 向中野館遺跡・細谷地遺跡調査位置図

跡である。

向中野館遺跡の記述は『南部叢書』第二冊や『新馬町』に附録として記載されている。詳細な場所の記述がないため、場所の特定には至っていなかったが、平成10年度の当センターの向中野館遺跡3次・4次調査、16年度の5次・6次調査において、堀跡や上橋が検出され、向中野館遺跡であることが判明した。出土遺物が少ないため、存続時期や館主などは特定までは至らなかった。今年度調査はちょうど南側（土塁を含む一体）を調査したものであるが、同じく出土遺物等が少なく全容には至っていない。

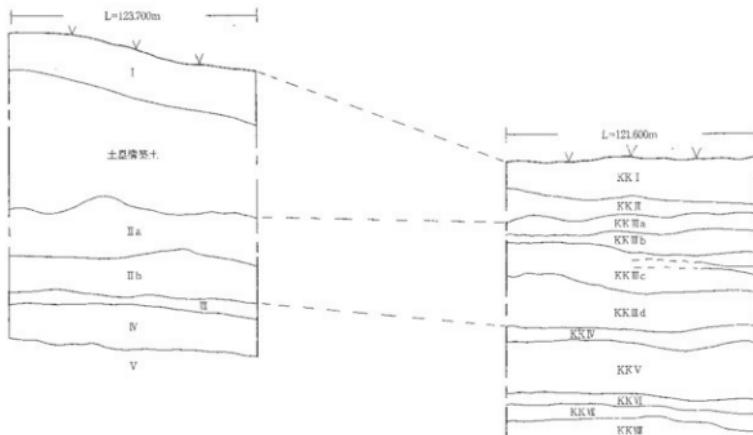
近世の遺構・遺物は各遺跡で僅かながらもみられるが、まとまって確認されているのは台太郎遺跡や小幅遺跡などに限っており、両遺跡とも掘立柱建物などの遺構が検出されている。（本多）

3 基本層序（第5図）

調査区は大部分が零石川によって形成された低位段丘（砂礫段丘Ⅲ）の縁辺で、北西側の一部は零石川の旧河道である。それぞれの層序は異なる。低位段丘上では、基盤の砂礫層をシルト層が覆っている。

低位段丘上の層序

- I層 黒褐色シルト（10YR2/2） 表土・現代の耕作土・盛土 粘性、しまりなし 小礫1～2% 層厚15～30cm 円礫のみの客土の部分もある
- II層 黒色シルト（10YR1.7/1） 粘性ややあり しまりあり 部分的にTo-aテフラを3%程度含む 上面及び中位が古代の遺構検出面 層厚5～25cm
本層は土塁直下では残存状況が良く、その部分では以下のように細分される
 - II a層 10YR2/1黑 粘性、しまりあり 土塁構築時の旧表土か
 - II b層 10YR1.7/1黑 粘性ややあり しまりあり



第5図 基本土層

III層	黒褐色シルト (10YR2/2) ~暗褐色シルト 粘性、しまりあり IV層への漸移層 II層の削平されている箇所では遺構検出面 層厚5~15cm
IV層	にぶい黄褐色シルト (10YR4/3) 粘性、しまりあり 層厚8~20cm 遺構最終検出面
V層	褐色砂 (10YR4/6) 粘性なし しまりあり 層厚10~40cm
VI層	黒褐色砂礫層 (10YR2/2) 層厚5~10cm 主に調査区南側で分布
VII層	褐色砂礫 (10YR2/2) 層厚20cm

旧河道の層序

旧河道では、砂礫層を粘土が覆うが、時折砂を多く含む砂質粘土となることがあり、一様ではない。下記III層にはアシ科と思われる植物茎が含まれている。このような植物は流れの速い川より、湿地に生育することから、この時期にはそのような環境だったと思われる。特にIII d層に多い。III b層には十和田aテフラと思われる火山灰が含まれる。

KK I層	10YR2/2黒褐 粘土質シルト 粘性ややあり しまりあり 上面に碎石 全体に礫を3%含む 層厚15~20cm
KK II層	10YR2/1黒 粘土質シルト 粘性あり しまりややあり 磨（Ø15~10cm）3~5%、灰白~褐灰中粒を5~7%含む 層厚4~18cm
KK III a層	10YR3/1~2/1黒褐~黒 粘土 粘性に富む しまりあり 植物茎片を少量含む 全体に白色粒を含む 層厚5~27cm
KK III b層	10YR3/1黒褐 砂質粘土 粘性弱 しまりあり 10YR7/2にぶい黄橙の火山灰 (To-aテフラ) が部分的に堆積する 古代の遺物包含層 層厚5~20cm 地点によって堆積しない
KK III c層	10YR3/1黒褐 粘土 粘性に富む しまりあり 黒色土の間層 (層厚2cm) が1~2層はいる箇所あり 層厚3~18cm 地点によって堆積しない
KK III d層	10YR3/1黒褐 粘土 粘性あり しまりややあり 植物茎片を多く含む 層厚10~25cm
KK IV層	10YR2/1黒 砂礫 粘性ややあり しまりあり 砂と礫 (Ø 1~10cm) の層 層厚10~13cm
KK V層	2.5Y4/1黄灰~10YR4/1褐灰 粘土層 非常に粘性に富む しまりややあり 下層ほど白色度が強く、上層は黒っぽい 層厚約20cm
KK VI層	10YR1.7/1黒 粘土 粘性に富む しまりややあり 層厚4cm
KK VII層	10YR4/1褐灰~2.5Y4/1黄灰 粘土層 層厚5cm
KK VIII層	10YR4/1褐灰~2.5Y4/1黄灰 砂礫層 層厚不明

以上の層序で古代の遺物が含まれるのは低位段丘上がII a層まで、旧河道がKKIII d層までであることから両者はほぼ対応するものと考えられる。

調査区内は曲輪内北西端が最も標高が高い。曲輪内は平坦であるが、調査区東端は近代において水田を造成するために改編を行っている。東側を南流する旧河道と同程度の標高の砂層まで削平され、その上に客土して、1mも標高が低くなっている。北側は段丘の縁辺にあたる。中世の地形変容に加え、おそらく市道敷設時の削平によって、調査区北側を東流する旧河道に向かって一気に下がっている。

調査区北側は現状では市道となっていたが、東寄りが礎層まで削平されていた。また、曲輪内部は宅地であったため、住宅基礎やゴミ穴、舗装時の攪乱がところどころ大きく口をあけており、東半分はⅡ～Ⅳ層上面まで削平されている。曲輪西半は表土を除去するとおおむねⅡ層が残存しているが、土壌下は最もⅡ層の残りがよく層厚25cm程度である。

旧河道の方向はN-70°-Eである。今次調査区内では南岸の一部が検出されたのみであるが、過去の調査結果と合わせると、幅28~31mの河道で、検出部分は長さ約90mである。深さは今次調査区内の最深部で1mである。南岸は緩やかに立ち上がる。埋没時期については不明であるが、T0-aテフラと思われる火山灰の堆積するKKⅢ b層が10世紀初頭頃だとするとその頃にはかなり埋没が進んでいたと思われる。上層のKKⅢ a層、下層のKKⅢ d層にはアシ科の植物茎片が多くみられ、水流が旧河道の中央部分にしかなかったとしても、調査区周辺は湿地状になっていたと考えられる。このような環境はおそらく中世においても同様であった可能性が高い。

4 これまでの調査（第4図）

（1）向中野館遺跡

本遺跡は平成7年に盛岡市教育委員会が、土地区画整理事業に伴って試掘調査を行って以降、平成18年までに9回の試掘調査、本調査が行われている。第3次調査以降の本調査については（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターにより、調査報告書が刊行されている（第2表）。

向中野館遺跡は、中世城館としては北館と南館からなっていると言われており、遺跡北側と土壌の残る南側の民家にそれぞれ屋号として残されている。

平成10年の第3・4次調査では、南北に伸びる本遺跡の主に中央計3,855m²を調査している。その結果、北館に属すると思われる南北2条、東西1条の堀跡、土橋、曲輪4か所のほか、平安時代の集落跡を検出した。

平成16年の第5・6次調査では北館と南館の間を調査し、東流する旧河道と、4次調査で検出した南北堀跡の延長を検出した。堀跡からは珠洲産拂り鉢の破片、木簡をはじめとした木製品が出土している。また、旧河道から9世紀後半を中心とする多数の土師器、須恵器のほか、木製品、木筒が出土した。土器には墨書き土器、刻書き土器の割合が多く、中でも「大」「太」の文字が多いことが注目される。旧河道は平安時代には埋没が始まっており、多くは湿地となっていたらしい。中世においてもこの湿地は北館と南館を隔てていたと思われる。

平成17年の第7・8次調査では、遺跡の北西端と東端2か所を調査し、過去に検出してきた堀跡と曲輪1か所を検出した。曲輪は規模が小さく、作事跡は確認できなかったことから、主郭はさらに東側に存在すると想定された。時期を特定できるような遺物も出土しなかった。また、平安時代の集落跡のほか、第5・6次調査で検出された旧河跡の延長部泥炭層中から木の集中箇所も検出されている。また、绳文時代の貯蔵穴と思われる袋状土坑も1基検出されており、周辺は狩猟、採集の場であった可能性が高い。

平成18年の第9次調査では、北館の主郭と目される部分を調査したことにより、北館のほぼ全城のようすが明らかになった。北館は複数の堀と曲輪から成るが、造構や遺物が少ない。今次調査においても、掘立柱建物跡2棟、竪穴建物跡3棟のみで、中世の遺物は陶器編1点のみであった。このような状況から、調査担当者は、北館は詰城的な使われ方をしており、南館が常の居所である可能性を示唆している。また、小規模な自然堤防上に立地する平安時代の集落跡もほぼ全城を調査し、9次調査

第2表 これまでの調査一覧

次	実施者	面積 (a)	調査期間	測量期間	遺 墓	遺 物	報告書	備 考
1	盛岡市	991	盛岡市教委	95.09.25～96.09.29	住居ほか			試掘調査
2	*	110	*	96.11.14～11.15	住居ほか			試掘調査
3	*	2944	温泉文化館センター	98.05.21～08.31	平安→中世12、土坑、溝 中世→昭和3	納文中井戸、石籠 土器群、鹿恵森 ◆6歳以上のカマドを持つ住居	下の1	一休調査
4	公同	911		98.07.01～09.04	◆瓶の伸びる方向に自安→北側の構造に自安がつく		下の2	
5	都志機械	467		04.07.15～10.08	平安→北坑、奈良建窯茶器部。	土器、白磁土器、青磁土器、 壺器、白物、蓋等の木製品。		本件作成時、報告書未刊行・詳細不明
6	盛岡市	3.074	*	04.06.07～10.08	遺物包含部 中世→昭和2つ、柱穴状土坑	モザイクの残光、半圓頭の瓦虫	下の3	佐藤会員
7	都志機械	795	*	03.07.15～11.15	◆平安食卓の焼き→住居5、土坑	土器群、漆器群、不明鉄製品		
8	盛岡市	1.202		03.07.15～11.15	◆北端の遺構に自安がついた	中世の大製窯?、水素窯	下の4	一休調査
9	盛岡市	2.052	*	06.06.16～08.30	平安→昭和2 中世→昭和2つ、柱穴状土坑 昭和建窯茶器部 元世→昭立柱建物跡6 井戸跡 ◆北端は遺構、遺物少なく、點跡か	上井戸、漆器群 中世建窯茶器1片 近江御田畠、鏡	下の5	内中野館北船の北側に ある点跡を調査

- 1) 2000 「盛岡野球場第4次・小堀改修」11次、台人前池改修事業19年度改修西岸工事『岩手県文化財保護条例に基づく報告書』321集
 2) 2000 「向中野館跡第1次、『昭和改修第10次発掘調査報告書』岩手県文化財保護条例に基づく報告書』305集
 3) 2007 「向中野館跡第3次、第6次発掘調査報告書」岩手県文化財保護条例に基づく報告書320集
 4) 2007 「向中野館跡第7・8次発掘調査報告書」岩手県文化財保護条例に基づく報告書501集
 5) 2006 「美濃建設第10～11次、向中野館跡第8次、台人前池改修第20次発掘調査報告書」岩手県文化財保護条例に基づく報告書516集

では2棟の堅穴住居跡を検出している。

(2) 隣接する遺跡

向中野館遺跡の南と西側に接する細谷地遺跡でも、平成8年度から継続して本調査が行われている。細谷地遺跡と向中野館遺跡の間には現状において地形上の境界ではなく、同一の自然堤防上に立地している。西側には飯岡才川遺跡があり、平成10年度から本調査が継続されている。

ア 細谷地遺跡

平成12年の第4次調査以降の本調査については、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターにより、4～8・9・10・13・14・16・17次の調査報告書が刊行されている。

これまでに、奈良・平安時代の集落跡、縄文時代の狩場、集落跡、近世の民家跡が検出された。

奈良時代の集落跡は向中野館遺跡今次調査区の主に南側に立地する。自然堤防上に見られる平行する2条の沢状の地形の内側に20棟の堅穴住居跡が点在する。8世紀中葉～後半が主体で、前半も少数存在する。堅穴住居跡の切りあいは見られない。煙道の方向は北西を指向しており、N-45°-W-N-60°-Wに集中している。

平安時代の集落跡は遺跡の今次調査区の西側から南側に自然堤防上に大きく広がっている。集落の北は向中野館遺跡の北館と南館を画する旧河道南岸を限界としている。集落の西端・東端は確認したが、検出状況からさらに南側に延びるものと思われる。長さは調査済みの部分は500mほどである。時期は大むね9世紀後半から10世紀初頭に属するとみられる。第17次調査までに約150棟の堅穴住居跡が検出されている。また、堅穴住居跡の中に10棟の掘立柱建物跡も点在しており、特に向中野館遺跡今次調査区に接する区域に集中している。2間×2～3間の側柱の建物が多い。土坑も多く検出されているが、特に土器の生産に関連すると思われる土器の割片を多く含む焼成土坑も数基見られる。

縄文時代の狩場は遺跡西端の旧河道周辺に多くみられる。集落跡は、南側から1棟の焼失住居跡、フ拉斯コ状土坑数基が検出されている。

近世の民家跡は遺跡西端と東端から検出されている。

イ 飯岡才川遺跡

平成10年の2次調査以降、継続して調査が行われており、2～9・12・13次調査の報告書が財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターから刊行されている。遺跡の北側からは奈良・平安時代の古墳や墓壇が検出されており、古代の墓域であることがわかっている。また、遺跡中央から東側の今次調査区に隣接する部分からは平安時代の集落が検出されている。竪穴住居跡のほか、2間×2間の倉庫とみられる据立柱建物跡が集中していることが注目される。

(金子)

参考引用文献

- ＊（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター→岩手埋文、教育委員会→教委
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書→岩手埋文報告書と略
岩手県企画開発室 1974 「北上川系開発地域土地分類基準調査－日誌－」
岩手放送株式会社 1975 「北上川」岩手の地誌二部作 第二部
中川久夫ほか 1963 「北上川上流沿岸の第四系および地形」『地質学雑誌』69 : pp.163-171
盛岡市遺跡の学び館 2007 「第6回企画展まちづくりと考古学～盛岡開発と遺跡発掘調査～」

第3表 調査報告書一覧表

- ・（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター発行報告書（年は西暦下二桁）

凡例→「○遺跡名○次発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第○集
『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成○年度分）』。（＊12年度から「分」とれる）
『平成○年度発掘調査報告書』

No.	書名(略)	年	集数	No.	書名(略)	年	集数	No.	書名(略)	年	集数
1	矢森-第1次	94	205	21	飯田川-第3次	02	393	41	平成16年度	05	469
2	本宮熊堂B-第1次	95	226	22	略報(平成13年度)	02	397	42	矢盛-第6次	05	488
3	小畠-第2次	96	244	23	綿谷地-第4-5次	02	414	43	難波A-24-熊堂B-25	06	479
4	略報(平成7年度)	96	246	24	白太郎-第23次	03	415	44	白太郎-第54次	06	486
5	小畠-第4次	96	265	25	白太郎-第26次	02	416	45	本宮熊堂B-第27次	06	487
6	略報(平成8年度)	97	266	26	白太郎-第35次	03	417	46	飯岡沢田-第9-10次	06	489
7	小畠-第5次-第7次	98	267	27	飯岡沢田-第3次	03	418	47	平成17年度	06	490
8	大谷北-本宮熊堂A	98	281	28	飯岡沢田-第5次	03	419	48	飯岡才川-第8-9次	07	491
9	唯報(平成9年度)	98	282	29	野古A-第12次	03	420	49	綿谷地-第9次-第10次	07	500
10	難波B-5次-白太郎16次	99	293	30	野古A-第15次	03	421	50	野古A-第23-24-29次	07	501
11	難波B-4次-免橋A4次	99	308	31	白太郎-第44次	03	422	51	本宮熊堂A-第36-29次	07	502
12	白太郎-第15次	99	309	32	略報(平成14年度)	03	423	52	向中野船-第5-6次	07	503
13	略報(平成10年度)	99	311	33	飯岡林崎II-	01	427	53	向中野船-第7-8次	07	504
14	向中野4-小畠11-白太郎19	00	321	34	矢盛3次-熊堂11次	04	451	54	*1	08	508
15	向中野3次-小畠10次	00	338	35	本宮熊堂A-第17次	04	453	55	福谷地-第13次-第14次	08	513
16	略報(平成11年度)	00	340	36	綿谷地-第8次	04	454	56	綿谷地-遺跡第15次	08	514
17	白太郎-第22次	01	365	37	略報(平成15年度)	04	455	57	飯岡才川-第12次	08	515
18	白太郎-第18次	01	369	38	本宮熊堂B-第18次	05	458	58	*2	08	516
19	唯報(平成12年度)	01	370	39	本宮熊堂B-第19-20次	04	467	59	平成19年度	08	524
20	熊堂B-第10次	02	377	40	白太郎-第51次	05	468	60	矢盛-第12-13次	09	534
								61	綿谷地-第16-17次	09	535
								62	平成20年度	09	546

・岩手県教育委員会発行報告書

- 63) 1979年「東北新幹線開通係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」岩手県文化財調査報告第35集
- 64) 1982年「東北新幹線開通係埋蔵文化財調査報告書ⅩⅢ」岩手県文化財調査報告第68集
- 65) 1990年「岩手県内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ」岩手県文化財調査報告第86集
- 66) 1991年「岩手県内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ」岩手県文化財調査報告第90集
- 67) 1992年「岩手県内遺跡詳細分布調査報告書Ⅲ」岩手県文化財調査報告第91集
- 68) 1993年「岩手県内遺跡詳細分布調査報告書(平成4年度)」岩手県文化財調査報告第93集

No.	書名(略)	年	No.	書名(略)	年	No.	書名(略)	年
69	-昭和55-58年度-	1985	74	-平成10年度発掘調査概報-	1999	80	平成8・9・10年度	1999
70	-昭和59年度-	1986	75	-平成11年度調査概報-	2000	81	平成11-14年度	2003
71	-昭和60・61年度-	1987	76	-平成12年度発掘調査概報-	2001	82	平成15・16年度	2005
72	-昭和62年度-	1989	77	-平成13年度発掘調査概報-	2002	83	平成17・18年度	2008
73	平成5・6年度	1998	78	-平成15年度・16年度発掘-	2005			
			79	-平成17・18年度発掘調査報告	2008			

*74の書名は、「盛岡遺跡群」

III 野外調査と室内整理の方法

1 野外調査の方法

(1) 調査対象面積

調査対象面積は、調査開始時点では第10次調査が3,474m²、第11次調査が747m²であった。しかし、調査区の変更・追加などが生じたため、最終調査面積は第10次調査が2,916m²、第11次調査が615m²となつた。

(2) グリッドの設定（第6・7図）

盛岡南新都市地区画整備事業にわたる調査では、盛岡市教育委員会の方針に準じて平面直角座標系第X系（日本測地系）を座標変換した調査座標を用いてグリッドの設定を行つてある。具体的には、本道跡が所在する太田地区的調査座標点X = -35,000,000、Y = 26,000,000を基点として一辺50×50mの正方形グリッド（大グリッド）を設定し、さらにそれを25等分して2×2mの小グリッドとしている。グリッドの呼称は、北西隅を基点として大グリッドは南北方向へ1～25、東西方向へA～Y、小グリッドは南北方向へ1～25、東西方向へa～yとしており、小グリッドの呼称は「1 A 5 b」などとなる。なお、現地においては以下の基準点4点を打設し、それらをもとに調査区全体をカバーできるようにグリッドの設定を行なつた。

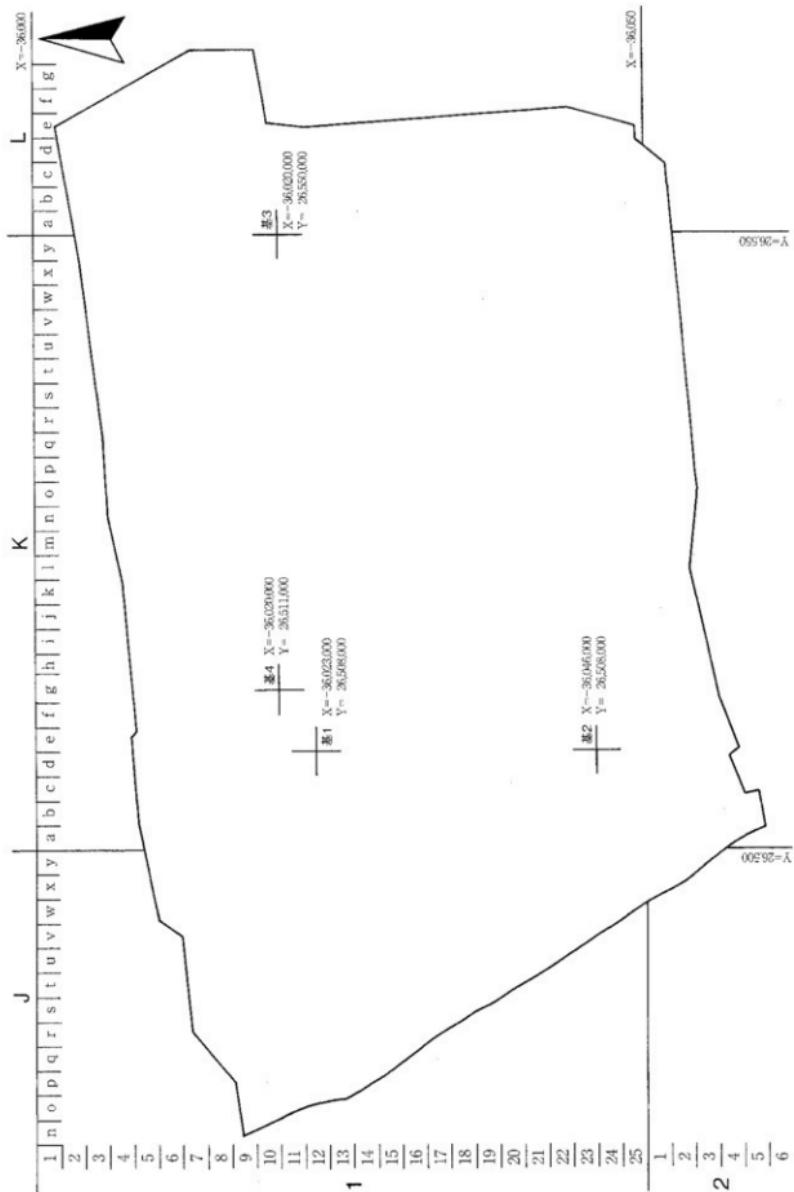
点名	グリッド名	X	Y	標高 (m)
基1	-	-36,023,0000 (-35,715,3116)	26,508,0000 (26,208,4075)	123.098
基2	1 K 24 e	-36,046,0000 (-35,738,3120)	26,508,0000 (26,208,4072)	123.852
基3	1 L 11 a	-36,020,0000 (-35,712,3116)	26,550,0000 (26,250,4067)	122.537
基4	-	-36,020,0000 (-35,712,3119)	26,511,0000 (26,211,4077)	123.881

※ () は世界測地系

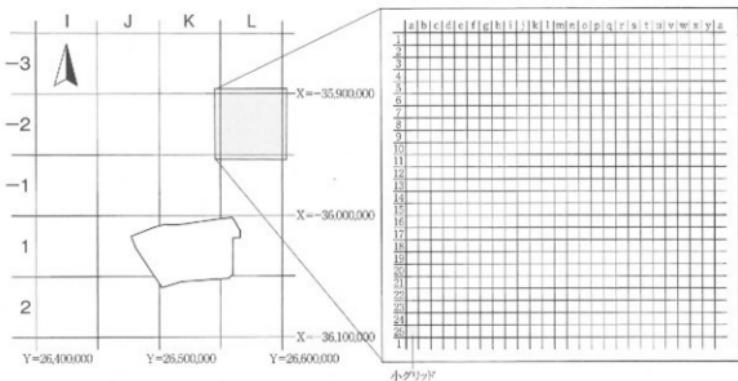
(3) 精査の方法および遺構の記録

調査に先立つて調査区内の雑物撤去を行つた結果、土壘が現状で確認された。そこで土壘以外の箇所の遺構の有無を確認するために調査区内の数ヶ所にトレンチを設定して人力で試掘を行つた。試掘の結果、調査区内は大幅に削平されている部分があることが判明した。特に東半ではI層（表土=盛土・耕作土）直下にIV層（地山=遺構検出面）が露出する状況が確認された。その後、調査の迅速化と人力掘削量の軽減を図るために調査員監督の下で重機（バックホー）によってI層を掘削し、その後人力で遺構検出を行つた。ただし、土壘部分は重機掘削は行っていない。遺構検出は西半ではII層とIII層の2回にわたり行い、東半では表土除去後のIV層で行つてある。

遺構の掘り下げは住居跡、大型の土坑、堅穴状遺構では4分法で、その他の遺構では2分法によつ



第6図 グリッド配置図



第7図 グリッド概念図

て、土層観察を行いながら進めた。遺構のプランや新旧関係が不明な場合は適宜サブレンチを設定して層位確認を行っている。なお、竪穴住居や一部の土坑ではベルトを境界とした区画設定を行っており、その区画ごとに遺物の取り上げを行っている。区画の名称は北東隅からQ1～Q4とし、取り上げ時の層位とともに区画名を付記している（凡例図参照）。また出土位置を記録した遺物は遺構ごとに土器は土1～・石器、石製品は石1～のように番号を付している。

また、旧河道及びRZ017遺物集中区の遺物の取り上げに際しては、2m四方の小グリッドでは小さすぎると判断し、4つの小グリッドをつなげた4×4mの単位で、層ごとに取り上げた。その際は北西側の最も若い番号のグリッド名を冠し、「×4」を付して、例えば「1J80×4」のように標記している。

遺構の記録は、完掘時、土層断面、遺物出土状況には写真撮影と実測図の作成を行っている。遺構の平面図の作成は、グリッドラインに沿って1m方間に張り巡らせた水糸を基準としたオフセット測量を基本とし、一部の遺構では光波測距機も使用している。断面図は簡易造り方測量によって作成した。縮尺は1/20を基本とし、遺物出土状況やカマドなどは1/10、遺構配置図は1/200で作成している。土壌については、最初に光波測距機とレベルを用いて、現況の等高線図及び実測図を1/100で作成した。その後、トレンチを数か所設定して、土壌構築土と現表土、構築当時の表土を確認したのち、現表土を除去して、構築土を現した。この状態で、掘り上げた堀RG012とともに（株）北日本朝日航洋に地形測量を業務委託し、光波測距機によって等高線図と実測図を作成している。

写真撮影は、モノクロフィルム撮影には6×7cm判カメラ・35mmカメラを各1台使用した。報告書作成には、主に6×7cm判で撮影した写真を使用している。カラーリバーサル撮影には35mm判カメラを1台使用した。なお、この他にもメモ用としてオリンパス社製のコンパクトデジタルカメラ（400万画素）も適宜使用している。調査区の航空写真については（株）東邦航空に依頼し、土壌の構築土を現し、堀（RG012）を掘り上げた時点で1回、土壌を除去し、発掘調査が終了した際に再度撮影している。

(4) 遺構の命名

遺構の名称は、盛岡市教育委員会で使用している略号に準じて付し、遺跡全体で通し番号としている。野外調査時には種別の変更や欠番を避けるために○号住・○号土坑などといった仮遺構名とした。室内整理も仮番号で行ったが、報告段階で略号に振り替えている。仮遺構名と変更した略号の対応関

第4表 遺構名対照表

塗穴住居跡		土坑		壁穴状遺構			
報告遺構名	旧遺構名	報告遺構名	旧遺構名	報告遺構名	旧遺構名		
RA018	9号住	RD044	6号土坑	RE004	7号住		
RA019	1号住	RD045	50号土坑	RE005	4号壁穴状遺構		
RA020	10号住	RD046	61号土坑	RE006	2号壁穴状遺構		
RA021	46号土坑	RD047	49号土坑	他の遺構へ登録替え			
RA022	8号住	RD048	65号土坑	塗穴住居跡へ			
RA023	6号住	RD049	32号土坑	1分壁穴状遺構			
RA024	3号住	RD050	31号土坑	上坑へ			
RA025	12号住	RD051	62号土坑	3号壁穴状遺構			
RA026	15号住	RD052	56号土坑	土坑へ			
RA027	13号住	RD053	39号土坑	5号壁穴状遺構			
RA028	16号住	RD054	22号土坑				
RA029	17号住	RD055	19号土坑				
RA030	11号住	RD056	7号土坑				
RA031	14号住	RD057	13号土坑				
RA032	5号住	RD058	14号土坑				
RA033	4号住	RD059	15号土坑				
RA034	2号住	RD060	12号土坑				
RA035	1号壁穴状遺構	RD061	9号土坑				
掘立柱建物跡		RD062	10号土坑				
報告遺構名	旧遺構名	RD063	8号土坑				
RB009	3号掘立柱建物跡	RD064	21号土坑				
RB010	2号掘立柱建物跡	RD065	6号土坑				
RF011	1号掘立柱建物跡	RD066	16号土坑				
RD012	4号掘立柱建物跡	RD067	5号土坑				
RB013	5号掘立柱建物跡	RD068	1号土坑				
柱穴		RD069	4号土坑				
報告遺構名	旧遺構名	RD070	20号土坑				
RQ001	1号柱穴	RD071	30号土坑				
土坑		RD072	25号土坑				
報告遺構名	旧遺構名	RD073	27号土坑				
RQ001	1号柱穴	RD074	26号土坑				
		RD075	28号土坑				
報告遺構名	旧遺構名	RD076	38号土坑				
RD027	11号土坑	RD077	39号土坑				
RD028	47号土坑	RD078	29号土坑				
RD029	54号土坑	RD079	41号土坑				
RD030	57号土坑	RD080	59号土坑				
RD031	51号土坑	RD081	42号土坑				
RD032	52号土坑	他の遺構へ登録替え					
RD033	23号土坑	RB009の柱穴へ	55号土坑				
RD034	3号壁穴状遺構	壁穴住居跡へ	46号土坑				
RD035	17号土坑	登録抹消した遺構					
RD036	5号壁穴状遺構	掘り上げ時の崩れ					
RD037	44号土坑	58号土坑					
RD038	43号土坑	覆乱					
RD039	24号土坑	木の根					
RD040	3号土坑	木の根					
RD041	2号土坑	木の根					
RD042	63号土坑	木の根					
RD043	48号土坑	木の根					

係は第4表の通りである。なお、収納にあたっては、図面、写真類は報告名と対応させたが、土器に行った注記は仮構造名のままである。

遺構の略号は以下の通りである。

R A…堅穴住居跡 R B…掘立柱建物跡 R C…柱穴列 R D…土坑
R E…堅穴状遺構 R F…焼土遺構 R G…堀・溝跡 R Z…土塁・遺物集中区
P P…柱穴状土坑

(5) 広報・普及啓発活動

平成20年8月1日 教職経験者10年研修講座社会体験研修（3名参加）

*本遺跡及び細谷地遺跡

平成20年8月27日 中学生職場体験（北陵中学校2年生6名）

平成20年9月13日 現地説明会（94名参加）

2 室内整理

(1) 遺物の整理

今回の調査で出土した遺物は、野外調査の雨天時や室内整理作業員が水洗を行った。

その後、土器については袋ごとに遺物番号を付け、重量を計測した上で、手書きで注記を行い、接合後、掲載遺物を選別した。接合は、土師器・須恵器とともに器種ごとに遺跡全体で遺構間接合を行った。土器は原則として、口径、底径が1/4以上あるものを掲載したが、破片であっても、遺構内に他に遺物がない場合、遺構内で他に例のない種類の遺物については掲載している。また、墨書きや刻書のあるものについては、細片であっても掲載することにした。これらは、必要に応じ石膏で復元後、実測、底部等の探拓、石膏部分の彩色、写真撮影、実測図トレースを行った。なお、掲載遺物は重量を計測している。

砾石器は表面観察をし、擦痕、敲打痕のあるものを登録し、報告した。剥片石器は2点のみなので、掲載した。いずれも、実測は㈱ラングに委託し、接触型3次元計測器を用いて、デジタル化したデータを図化して行った。

木製品は、取り上げ時から現代のものと考えられるものを除いたうえで、登録している。杭は一端もしくは両端が尖るものについて、明瞭な加工痕がみられるものを登録し写真を撮影した。掘出土の杭については地点ごとに1点ずつ計3点について実測を行い、C14年代の測定も行っている。板状の製品についてはすべて登録し、肉眼及び赤外線カメラによって黒墨の有無を確認し、実測、写真撮影を行った。その後、岩手県立博物館に委託し、保存処理を行った。

鉄製品は、現代のものと考えられる資料以外で、形状のわかるものを掲載した。まず、簡単に泥を落とした後、ソフトエックス線撮影を行い、もとの形状を確認した。そのうえで、鎖を落とし、実測・トレース・写真撮影を行った。その後、岩手県立博物館に委託し、保存処理を行った。

土製品は全点掲載し、実測・トレース・写真撮影を行った。

古銭は全点探拓し、計測を行った。

陶磁器は遺構内出土のもので近世と思われるものを掲載した。

銅製品は遺構内出土のものを掲載した。

炭化材は、遺構内出土のもので残存状況の良いものについて、樹種同定を行った。また、C14年代

測定も行っている。

なお、近世墓から出土した陶磁器、古銭、銅製品は、所有者に返却したが、参考資料として上記の手順で整理作業を行い、実測図を掲載している。

以上の工程を経て遺物図版、遺物写真図版を作成している。

(2) 遺構実測図の整理

掲載した遺構図面は、野外調査で作成した実測原図をもとに必要に応じて第二原図（修正図）を作成し、トレースと版下作成を行っている。整理が終了した実測原図・第二原図には通し番号を付し、台帳を作成した後に収納した。なお、遺構図版中の表現方法は第8図の通りである。

(3) 写真類の整理

遺構写真

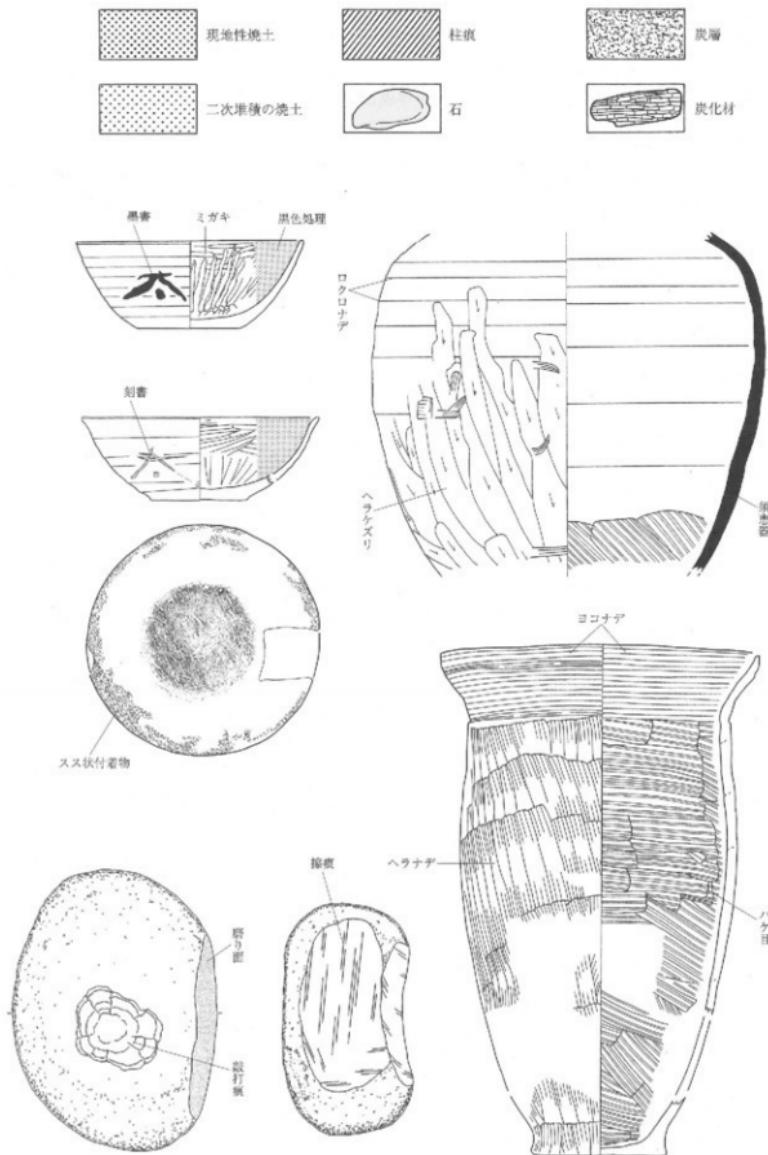
6×7cm判及び35mm判のモノクロはネガ・コンタクトプリントとともにアルバムに整理し、リバーサルフィルムも専用のアルバムに収納して、写真台帳を作成した。

遺物写真

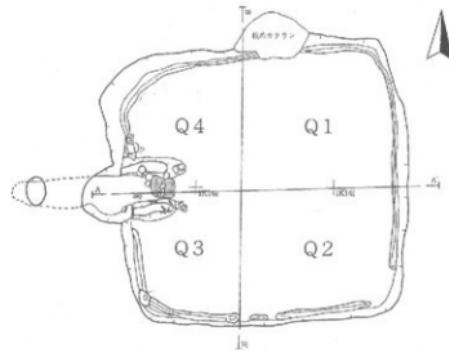
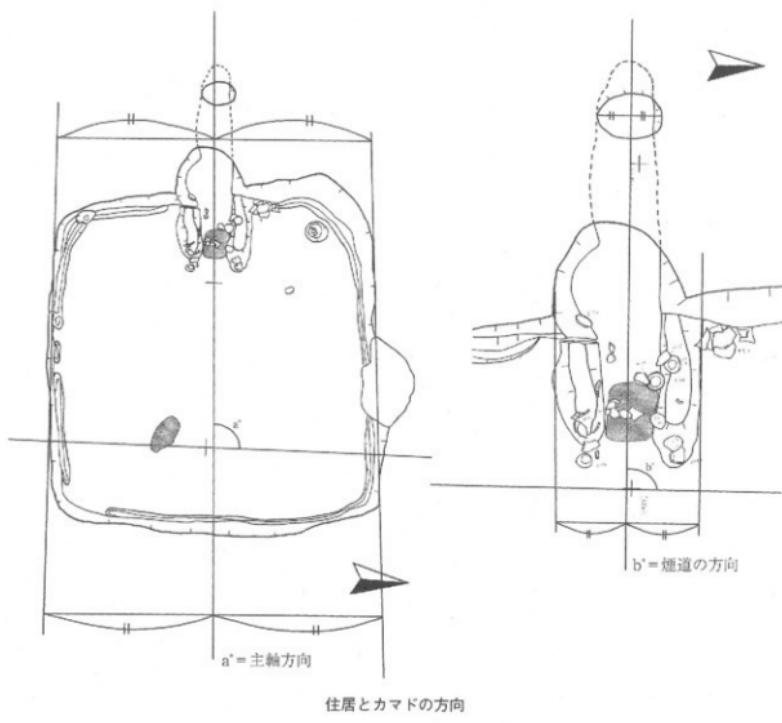
遺物写真は、当センター写真技師によりデジタルカメラ（キャノン社製一眼レフタイプ、1280万画素）で撮影した。RAWモードで撮影し、印刷段階でJPEG形式に変換している。（金子）

凡　例

- 1 本報告書に掲載した遺構図の方位は平面直角座標第X系の座標北を、遺構図の水系レベルは海拔高度を示す。
- 2 遺跡内に設けた基準点の成果は、日本測地系における値である。
- 3 遺構図の縮尺は、住居跡、掘立柱建物跡が1/50、柱穴列、土坑、竪穴状遺構、焼土遺構が1/40、溝跡平面1/00、1/50、断面1/50である。住居跡のカマドは必要に応じ1/25で掲載した。柱穴群の平面図は、1/100、土壘、堀跡平面図は1/400、断面図は1/50である。なお、土器の出土状況など必要に応じ縮尺を変えて掲載しているものもあるが、縮尺率を表示している。
- 4 届名は基本層序にはローマ数字を、遺構の埋土にはアラビア数字を用いた。
- 5 遺構図版中、遺物に付された番号は（ ）内が取り上げ番号、（ ）のないものが、掲載番号である。
- 6 土層の色調は、農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を使用した。
- 7 遺物実測図の縮尺は、土器1/3、石器1/3、金属製品・土製品1/2、錢貨1/2、陶磁器1/2である。
- 8 遺物写真図版の縮尺は、遺物実測図の縮尺には準じている。



第8図 実測図凡例



遺物取り上げ時の区画

凡例図



第9図 造構配置図

IV 検出された遺構

1 調査の概要

今回の向中野館遺跡第10・11次調査では、奈良～平安時代の集落跡、中世の城館跡を調査した。遺構総数は、竪穴住居跡18棟、掘立柱建物跡5棟、柱穴列1条、土坑55基、竪穴状遺構3基、焼土遺構5基、溝跡2条、堀跡2条、土塁1条、旧河道の遺物集中区1か所、柱穴状土坑261個である。

2 竪穴住居跡

RA018竪穴住居跡（第10・11図、写真図版4・5）

＜位置・検出状況＞調査区西よりの1K14eグリッド周辺に位置する。北側壁の一部を木根の擾乱で破棄されている。また、カマド上部の埋土と煙道上面が木根により擾乱を受けている。検出面は2層である。

＜重複関係＞北側壁の上部がRG014溝跡と重複し、本住居跡が古い。

＜規模・平面形状＞隅丸方形である。一辺の長さは4.22×4.09mで、豊高は39cmである。主軸方向はN-96°-Wである。

＜埋土＞4層に細分される。自然堆積と思われる黒～黒褐色土である。床面上に堆積する4層に炭粒や焼土が多く含まれ、炭化材も検出されることから、焼失住居と考えられる。埋土中層にも炭と焼土の粒が含まれる。また、カマド付近の埋土1層の一部にTo-aテフラをブロック状に含んでいる。

＜床面・掘り方・貼り床＞おおむね平坦で、締まっている。中央寄りの床面の一部が45×23cmの椭円形に焼土化している。床面は礎層直上で、貼り床はない。

＜壁・壁溝＞壁は直立気味に立ち上がる。壁溝が、南東の隅を除いて周っている。

＜柱穴＞南西隅の壁溝内に小穴が1個、床面に北西隅に小穴が1個あるが、いずれも浅い。

＜カマド＞西壁の中央に位置する。袖は壁寄りがIV層の削り出し、手前が土師器坏、壺などを芯材にしてIV層起源の砂質シルトを主体とした褐色土～黒褐色土で構築している。南側の袖は壁際が破壊されている。燃焼部には焼土が36×30cmの範囲に形成されている。焼土の厚さは約4cmである。煙道はくりぬき式で、長さ1.5m、焚口よりは木根があり、上部は擾乱を受けている。煙道の底面は焚口から煙出しまで平坦である。煙道の方向はN-92°-Wである。

＜付属施設＞ない。

＜遺物＞（第59～61図1～20、写真図版60・61）カマド内、カマド袖上、カマド脇の壁際から出土した土器が多い。器種は須恵器坏、土師器（内黒、非内黒含む）坏、壺、球胴壺、鉢、高台付坏である。66はカマド右袖上から出土しているが、袖と土器の間に間層が若干でも入るかどうか確認できなかつた。出土した土器は7,329gで、うち6,993gを掲載した。また、埋土中や壁際、床直上から石が5,957g出土した。

＜時期＞出土遺物から、奈良時代に属すると考えられる。

RA019竪穴住居跡（第12図、写真図版6）

＜位置・検出状況＞調査区西側の1J23vグリッド周辺に位置する。東側は擾乱とRG012堀跡によって

削られ、西南側は調査区外に延びており、北西隅付近のみ調査できた。周辺はIV層まで削平されており、本遺構も上面は削られていると思われる。IV層で検出した。

<重複関係>東側をRG012堀跡によって切られる。

<規模・平面形状>方形を基調としていると思われ、北壁は約2m残存している。壁高は9cmである。主軸方向は不明であるが、北壁はほぼN-90°-Wである。

<埋土>IV層起源の粒を含む黒褐色土が主体である。自然堆積と思われる。

<床面・掘り方・貼り床>床面は硬くしまっている。貼り床はない。

<壁・壁溝>外傾して立ち上がる。壁溝はない。

<柱穴>ない。

<カマド>調査部分にはない。

<付属施設>ない。

<遺物>北壁際床面上～鉄滓が出土した。本鉄滓の成分分析を行ったところ、精錬鍛冶の末期か、鍛錬鍛冶に伴う鉄滓との結果を得ている（付図3）。土器はないが、本住居跡を切るRG012堀跡の住居よりの埋土から土師器が出土している。

<時期>周辺から出土した土器などから平安時代の可能性が高い。

RA020壁穴住居跡（第12～14図、写真図版7・8）

<位置・検出状況>1K15bグリッド周辺に位置する。検出面はIII層で、長方形の黒褐色プランとして検出した。

<重複関係>東壁をRD031土坑、南東隅付近をRD032土坑と重複しており、いずれよりも古い。

<規模・平面形状>平面形は長方形で、規模は4.76×3.41mである。主軸方向はN-96°-Eである。

<埋土>4層に細分した。ほとんどが黒褐色土で、最上層と下層は自然堆積の可能性があるが、中位の2層はII層起源の板状構造の黒褐色土ブロックが斑に混入しており、埋め戻した可能性が高い。

<床面・掘り方・貼床>床面には貼床が敷設されているが、掘り方は中央部分が浅く、壁寄りがやや深い。おおむねしまっているが、東壁中央寄りの床は特に硬くしまっており、貼り床も厚く、2層に細分される。おそらく、複数回にわたって貼り床を施したと思われる。この部分には褐鉄が形成されている箇所があり、図に示した。なお、東壁中央よりの埋土からカマドに使用したような褐色土が塊状に検出された。

<壁・壁溝>外傾気味に立ち上がる。壁高は42cmである。壁溝はない。

<カマド>東壁で2基検出した。1号カマドは北寄りに位置する。袖、燃焼部は検出されず、煙道と煙出しのみである。煙道の南壁はRD031土坑によって削られている。また、木根により、搅乱を受けているとみられるが、断面では搅乱の範囲を明確にできなかった。残存状況を見ると底部は燃焼部から上昇気味に延びて、煙出しに至って下降するようである。煙道の長さは壁から1.34m、方向はN-83°-Eである。掘り込み式か、割り抜き式かは不明である。

2号カマドは南端に位置する。南半分をRD032土坑によって、破壊されている。袖、天井ともに残存していないが、燃焼部から煙道に入る部分の壁面北側にカマド構築礎が出土した。また、燃焼部に形成された焼土が壁際に27×21cmの楕円形の範囲に検出された。焼土の厚さは2cmである。煙道は壁から長さ1.15m、方向はN-116°-Eである。壁寄りの一部が焼土化している。煙道の底面は燃焼部から急に立ち上がり、水平に延びて煙出しに至る。上面が削平されているため、掘り込み式か、割り抜き式かは不明である。

1号カマドは燃焼部、袖ともに残存していないことから2号カマドより古いと思われる。

なお、1号カマドと2号カマドの中間の床硬化面の貼り床を1層除去したところ、焼土が3か所検出された。最も大きい焼土は30×25cmの楕円形で、厚さ4cmである。RD031土坑によって破壊されている本住居の壁寄りに位置していると思われる。また、最も大きい焼土の西側に径15~20cmほどの小さな焼土が2か所ある。この2か所の焼土はカマド袖の芯に使用した礫の痕跡とも考えられること、これら焼土の上に貼り床を敷設して床面を整えていること、1号カマドに比して2号カマドが南によりすぎていることなどから、最も大きい焼土も古いカマドの燃焼部であった可能性が高いとみて精査を行ったが、RD031土坑の底面、壁面にも煙道や煙出しと思われる痕跡は見つからなかった。

＜柱穴＞ない。

＜付属施設＞北壁の東寄りに土坑が1基ある。径40×35cmで、深さ4cmと浅い。埋土は炭化材や焼土粒が混入した黒褐色土である。

＜遺物＞（第61・62図21~31、写真図版61~63）土器は須恵器壺、壺、土師器（内黒、非内黒、両面黒色含む）壺、甕（ロクロ、手づくね）、球胴甕、高台付坏があり、総量は6,480gである。うち3,337gを掲載した。土坑1、1号カマド、2号カマド周辺と、東壁寄りの床硬化面上を中心に出土している。完形に近い形で出土した土器ではなく、すべて破片の状態である。土坑1の埋土上面から土器片が出土し、接合の結果、78・79・90の壺、80・85・87の甕となった。27・30の土師器甕はRD032土坑出土の破片と、31の須恵器壺はRB009掘立柱建物跡のPP113出土の破片と接合した。また、埋土下層から礫1点2,230gが出土した。

＜時期・性格＞出土土器の年代観から平安時代に属すると考えられる。

（金子）

RA021竪穴住居跡（第14図、写真図版9）

＜位置・検出状況＞調査区西側、土壘下の1K20bグリッド付近に位置する。検出面はIV層である。黒褐色の広がりとして検出した。東側の大部分が風倒木と南側を現代の排水溝によりかく乱を受けている。当初、土坑として精査を進めていたが、未調査分の土壘断面に住居跡を検出したことから、本遺構は住居跡の一部と考えられる。よって本調査では北西隅部分の一部のみしか調査していない。

＜重複関係＞ない。

＜規模・平面形状＞土壘下にかかる部分が未調査のため全容は不明である。検出した部分の一辺は3.6m以上×1.3m以上と推定され、深さは26cmである。

＜埋土＞5層に分層した。黒褐色土主体のレンズ状の自然堆積と思われる。2層、3層に赤褐色焼土が混入する。検出した土壘断面にも赤褐色焼土が確認でき、その底面付近には炭化物層が認められる。

＜底面・壁＞底面は礫層中で、やや凹凸が見られる。壁は外傾気味に立ち上がる。

＜遺物＞出土していない。

＜時期・性格＞遺物等が出土していないため、はっきりとした時期は不明である。また、検出状況、未調査分の断面観察等から焼失住居跡の可能性が高いと考えられる。

（本多）

RA022竪穴住居跡（第15図、写真図版10）

＜位置・検出状況＞調査区北側の1K11nグリッド周辺に位置する。南東約4分の1と北壁の約2分の1は攪乱によって失われている。また、南西隅は木根によって壁が破壊されている。周辺はIV層まで削平されおり、検出面はIV層である。

＜重複関係＞北壁中央をPP222が切っている。

＜規模・平面形状＞残存状況から隅丸方形を呈すると思われる。規模は286×2.75m、主軸方向はN-93°-Eである。

＜埋土＞黒色土ブロック、IV層起源の褐色土粒を含む黒褐色土が主体で、3層に細分される。自然堆積か、人為堆積かは不明である。

＜床面・掘り方・貼り床＞床は非常に硬くしまり、平坦である。砂質シルトにより貼り床が敷設され、掘り方は均一に細かい凹凸がある。

＜壁・壁溝＞壁は直立気味に立ち上がる。

＜柱穴＞検出されなかった。

＜カマド＞東壁北寄りに位置する。袖及びカマド内から多量の板状の礫が出土した。袖は壁際には土器片、手前に礫を芯として用いて、黒褐色土を貼て構築している。焼土は燃焼部の奥、壁に近い場所に不整形に形成されている。焼土の厚さは4cmである。支脚は土器片の上に礫を置いたものである。煙道は割り抜き式で長さが1.5mである。底部は燃焼部から煙道の入り口まで一旦上昇するが、煙道に入り、煙出しに向かって徐々に下降する。煙出しの埋土上半からは長さ20~30cmぐらいの礫が多く出土している。煙道の方向はN-93°-Eである。

＜付属施設＞カマドの左袖下～北東隅からごく浅い土坑が検出された。39×23cmの楕円形で、深さは2~3cmである。カマドの左袖が一部かかっているところを見ると、カマド構築前に開口していたと考えられる。土器が出土している。

＜遺物＞（第63図32~38、写真図版63）カマド内、カマド袖、カマド周辺、土坑1から土器が出土している。土師器（内黒）壺、甕、須恵器壺があり、総量は1,820gである。うち1,080gを掲載した。32・33の壺、37の甕はカマドの袖、袖下から出土した土器である。34の壺はRA023竪穴住居跡出土の破片と、38の須恵器壺破片はRE004竪穴状遺構出土の破片と接合したものである。また、477の刀子と思われる鉄製品が埋土中から出土した。そのほか石904gが埋土中から出土している。

＜時期＞出土遺物から平安時代と考えられる。

RA023竪穴住居跡（第16・17図、写真図版11・12）

＜位置・検出状況＞調査区北側の1K15pグリッド周辺に位置する。西側壁を近代の馬小屋の搅乱によって破壊されている。検出面はⅢ層である。

＜重複関係＞PP29・255・256・264・267に切られており、本遺住居が古い。

＜規模・平面形状＞残存状況から推測すると隅丸方形を呈していたと考えられる。残存している東辺の長さは425mである。なお、搅乱の範囲と西側に残る焼土の位置から、南北壁は39m以上と考えられる。主軸方向はN-113°-Eである。東壁の中央付近が外側に少し張り出している。

＜埋土＞しまりのある黒色土が主体で、下半には焼土粒が少量含まれ、壁際に壁の崩壊土のIV層起源の褐色土を含む黒褐色土が堆積する。全体に自然堆積の層相を示す。カマド北側にはカマドの崩壊土とみられる黒褐色土が1.2×0.65mの範囲に堆積している。この黒褐色土からは礫や土器が出土している。

＜床面・掘り方・貼り床＞床面は全面かたくしまっている。貼り床、掘り方はない。床は礫層より若干上に形成されているが、北東隅は礫層が露出している。カマド南側、土坑1の西側では0.8×0.7mの楕円形に床面が焼けて焼土となっている。また、西側の馬小屋による搅乱の範囲となるが、住居の西壁付近とみられる地点に現地性の焼土が2か所検出された。径は40×30cm、45×28cmで、いずれも現地性焼土である。本住居に伴うものと考えられる。

＜壁・壁溝＞外傾して立ち上がる。壁溝は北東隅と南壁際にのみ検出された。壁高は32cmである。
 ＜柱穴＞検出しなかった。

＜カマド＞東壁の南寄りに位置する。袖は礫を芯材とし、IV層起源の砂質シルトや黒褐色土を貼り付けて構築している。燃焼部は底面に69×40cmの楕円形の焼土が形成されている。焼土の厚さは5cmである。また、袖の内側も焼土化している。燃焼部奥には土器片を乗せた礫と倒立させた甕底部（52）、礫を並べて支脚としている。煙道は長さ1.27m、刺り抜き式である。煙道の底面はカマド燃焼部から煙道入口で一旦上昇し、ほぼ水平に延びて煙出しに至ってやや下がる。煙道の方向はN-116°-Eで、煙出しはやや南方へ曲がっている。煙出しは上面が現代の擾乱によって削られている。

＜付属施設＞ カマド南側から土坑が1基検出された。径53×51cm、深さ27cmである。埋土下層から土器が出土している。また、カマド北脇の東壁が若干外側に張り出している。

＜遺物＞（第63～65図34・39～54、写真図版63・64）土器は主に住居東半の埋土中、床面から出土した。須恵器坏、壺、土師器（内黒、非内黒、両面黒色）坏、甕、高台付坏、甕があり、全体で3,638g出土した。うち17点、2,404gを掲載した。45の坏、50・51の甕は土坑1から出土したものである。34は本遺構埋土1層出土の破片とRA022竪穴住居跡のカマド埋土と埋土下層から出土した破片、42は本住居跡埋土1層とRA034の埋土やカマド埋土出土の破片、46はRA026竪穴住居跡出土の破片とを接合したものである。また、埋土Q4の1層から478の釘と思われる鉄製品とQ4の2層から479の鉄鎌と思われる鉄製品が、埋土中から礫が3,752g出土した。カマド埋土から鉄滓の小片が出土している。

＜時期＞出土遺物から平安時代と考えられる。

RA024竪穴住居跡（第18図、写真図版6）

＜位置・検出状況＞調査区中央の1K19eグリッド周辺に位置する。ほとんどを現代の擾乱に破壊され、残存するのは北西隅とカマド袖、煙道～煙出しの一部のみである。北東隅の壁もわずかに残っている。
 ＜重複関係＞PP80・PP81と重複し、本遺構が古い。

＜規模・平面形状＞隅丸の方形を基調としているとみられる。残存する北壁の両隅間の長さは3.83mである。北壁の方向はN-73°-Wである。

＜埋土＞黒～黒褐色シルトが主体で、中位にはIV層起源の褐色土ブロックを多く含む。

＜床面・掘り方・貼り床＞床面は平坦でやや綺まっている。貼り床、掘り方はない。

＜壁・壁溝＞外傾して立ち上がる。壁溝はない。壁高は17cmである。

＜柱穴＞北西隅付近に1個、南側の擾乱中に同様の埋土の柱穴を1個確認した。

＜カマド＞西壁に位置する。ほとんど擾乱によって削平されている。袖は壁寄りの一部が残っているに過ぎない。芯材は見つかっていない。袖の構築土は黒褐色のシルトで、非常に硬くしまる。燃焼部は焼土が若干残っている程度である。煙道は1.5m前後であったと思われるが、住居跡の壁が残っていないため、不明である。残存している煙道の底面は水平で、煙出しに至ってわずかに下降する。煙道の方向はN-78°-Wである。

＜付属施設＞西壁のカマドより北側に袋状の土坑を検出した。径は87×46cmで、住居西壁から張り出るように穿たれている。土坑西壁は若干オーバーハングする。埋土はIV層粒を含む黒褐色土である。また、カマド南側のわきに壁の推定ラインより若干西側にはみ出すように焼土が検出された。径35×30cmの楕円形で焼土の厚さは5cmである。RA032・033竪穴住居跡にみられるようなカマド脇の張り出しの土坑の底部が焼けているものに類似している。

＜遺物＞（第65図55～57、写真図版64・65）主に埋土中から土器が出土している。須恵器壺、甕、土

師器（内黒、非内黒）壺、甕（ロクロ、てづくね）があり、総量は591gである。うち360gを掲載した。17は土坑1の埋土から出土した甕である。

＜時期＞出土遺物から平安時代と考えられる。

RA025窓穴住居跡（第19～21図、写真図版13・14）

＜位置・検出状況＞調査区東側の1K16tグリッド周辺に位置する。住居南側5をRA035窓穴住居跡及び擾乱に破壊されている。付近は宅地であったため擾乱が激しく、壁やカマドの大部分が破壊されている。

＜重複関係＞RA035窓穴住居跡・RB012・013掘立柱建物跡、RD013土坑、PP177・271・272・277・284・338と重複し、いずれよりも本遺構が古い。

＜規模・平面形状＞残存状況から判断すると隅丸方形を基調としている。一辺の長さは北5.8mである。北辺の傾きはN-61°-Wである。

＜埋土＞上面がIV層まで削平されており、検出時に擾乱を取り除こうと削りすぎたこともある、埋土はあまり残存していない。IV起源の褐色土粒を下層に含む黒褐色土で、2層に細分されるが、自然堆積か、人為堆積かは不明である。

＜床面・掘り方・貼り床＞床面はほぼVI層の礫層上に形成されている。貼り床、掘り方はない。おおむね平坦で、しまっている。

＜壁・壁溝＞直立気味に立ち上がる。壁溝はない。壁高は15cmである。

＜柱穴＞床面から9個の柱穴が検出された。住居跡の付近は掘立柱建物跡や柱穴状土坑が多く、埋土から掘り込まれていたことが確認できたPP177・277のほかにもこれら9個の柱穴の中に後世のものが含まれている可能性もあるが、埋土が似通っており、抽出することができなかった。過去の周辺の調査例では本住居のように規模の大きな住居には少なくとも2個以上の柱穴があるのが普通である。基本的には方形、あるいは台形の柱穴配置をもつものと推定される。

＜カマド＞北壁東寄りに1基、西壁中央付近に1基、東壁北端寄りに1基の計3基検出された。いずれも袖、天井ともに残っていない。これらのカマドのうち、わずかながらも袖の基部となるような高まりが認識されたこと、袖の芯材の可能性のある礫や土器片が多く出土したこと、燃焼部の焼土が埋土除去後明瞭に見えたことから最終段階のカマドは1号カマドと思われる。2号カマドと3号カマドの新旧関係は不明である。

1号カマドの燃焼部は58×51cmの円形に焼土が形成されている。焼土はよく発達し、厚さ9cmである。燃焼部の奥、壁寄りには両脇に長さ15cm、幅10cm前後の礫が据えられている。燃焼部及び周辺からは土器片が多く出土した。煙道は長さ1.2m、上面は擾乱により削平されているため、掘り込み式か、削り抜き式か不明である。煙道の方向はN-35°-Eである。

2号カマドの燃焼部は床面の焼土粒が含まれる黒褐色土を2cmほど削った段階で確認した。50×45cmの不整形に焼しが形成されている。焼土の厚さは4cmである。袖、袖の芯材の据え方などは検出されなかった。煙道は擾乱で手前が削られているが、長さ1.8mの削り抜き式である。底面は燃焼部から煙道入口まで平坦であるが、煙出しに向かって徐々に下降する。煙道の方向はN-63°-Wである。

3号カマドの燃焼部も床面を若干削って検出された。径42×38cmで、焼土の厚さは5cmである。煙道の入口と南側の一部は柱穴状土坑によって破壊されている。長さは約1.5m、上面が削平されているため、掘り込み式か削り抜き式が不明である。底面は煙道入口から煙出しに向かって緩やかに下降する。煙出し埋土から須恵器甕破片（66）が出土した。煙道の方向はN-118°-Eである。

＜付属施設＞北東隅に土坑が1基検出された。浅い土坑で埋土中から土器破片が出上している。位置がカマドの脇であることから貯蔵穴の可能性がある。

＜遺物＞（第65図58～66、写真図版65）土器は須恵器壺、壺、土師器（内黒、非内黒）壺、甕（ロクロ、手づくね）があり、総量は3,839gである。うち1,681gを掲載した。64は本住居跡出土の破片と、RA033堅穴住居跡、RD064土坑、遺構外出土の破片が接合したものである。また、66は本住居跡とRA033堅穴住居跡出土の破片が接合したものである。

＜時期＞出土遺物から平安時代と考えられる。

（金子）

RA026堅穴住居跡（第22図、写真図版15・16）

＜位置・検出状況＞調査区北東の1K8yグリッド周辺に位置する。検出面はIV層である。暗褐色土の方形のプランとして検出した。

＜重複関係＞北側上面の一部分をRD048土坑にきられ、東側の殆どと、西側上面の一部分がかく乱により削られている。

＜規模・平面形状＞大部分がかく乱を受け全容は不明である。残存部から推定される規模は4×435m以上、壁高は34cmを測る。平面形は概ね長方形を呈すると思われ、主軸方位はN-125°-Wと推測される。

＜埋土＞3層に分層した。大部分がかく乱を受けている。残存部から1層・2層は黒褐色土を主体としたレンズ状の自然堆積だったと思われる。1層、2層にはTo-aテフラ粒と思われるものが部分的に含まれているが、微量だったため同定はしていない。3層は地山ブロックが少量混入している黒褐色土である。地山ブロックを含んではいるが混入している量が小量であることとレンズ状の堆積を示していることから自然堆積と考えられる。4層は貼り床である。

＜床面・掘り方・貼り床＞床面はやや凹凸があり硬く締まっている。貼り床の部分と地山の部分が見られる。貼り床には主に明黄褐色土を主体に黒褐色土との混合土が用いられ、部分的に黒褐色土のみの部分がある。掘り方は床面から6～9cmを測り、所々にやや大きめの凹部がある。

＜壁・壁溝＞壁は、北壁は外傾して立ち上がり、西壁は直立気味に立ち上がる。東壁・南壁はかく乱により残存していない。壁溝は検出されなかった。

＜柱穴＞検出されなかった。

＜カマド＞西壁の南側よりに位置する。カマド本体があったと思われる場所と煙道の上面がかく乱を受け、ほとんど残存していない。煙道入り口付近に壁が張り出している部分があり、おそらく袖の一部が残存したものと考えられる。黒褐色土に明黄褐色土を主体とした土を貼り付けて構築され芯材として礫を用いている。燃焼部焼土は検出されなかったが、周辺からやや大きめの礫や土器を含んだ焼土を2基検出した。おそらくかく乱を受けた際に動かされたと思われる。カマドを構築していた土や芯材として用いられた礫、燃焼部などの焼土だったと思われる。煙道部は、住居壁際から煙道部中ほどの上面がかく乱を受けているが、幸うじて天井部が残っており割り貫き式となっている。底部は煙道部入り口で一旦上昇した後、すぐに下降して緩やかに逕出しに至る。煙道の方向は住居の主軸とほぼ同じN-126°-Wである。

＜付属施設＞北東の隅、床面上で焼土2基を検出した。いずれも焼成が良くなく暗褐色土等も混ざっていることから現地性のものではなく、何らかの理由で廃棄された焼土と思われる。

＜時期＞床面出土の土器から平安時代の9世紀末～10世紀初めと考えられる。

＜遺物＞（第66、67図46、67～75、写真図版64～66）土器は須恵器甕、壺、土師器（内黒、非内黒）壺、

高台付坏、壺（手づくね）が2,112g出土し、うち1,244gを掲載した。71は本住居跡出土の破片と旧河道出土の破片、73は本住居跡出土の破片とRD062土坑出土の破片が接合したものである。（本多）

RA027堅穴住居跡（第23・24図、写真図版17）

＜位置・検出状況＞調査区東側の1K15yグリッド周辺に位置する。土坑、柱穴状土坑、攪乱によって、壁、床面、煙出しが破壊されている。

＜重複関係＞RD045・052土坑、RF003・004焼土遺構、PP279～282・300・305～308・314・316柱穴状土坑と重複しており、いずれよりも古い。

＜規模・平面形状＞西壁がやや胴張りの隅丸方形を呈する。規模は4.12×3.80mである。東壁のカマド北脇がやや張り出し気味である。主軸方向はN-111°-Eである。

＜埋土＞粘性、しまりのある黒褐色土が主体である。混入するIV層起源の褐色土粒の大きさ、多寡で3層に細分した。自然堆積と思われる。埋土中で焼土粒をまばらに含むブロックが主に住居北半で検出されたが、いずれも床面から浮いており、原位置ではない。

＜床面・掘り方・貼り床＞床面はVI層の礫層より若干上面に形成され、貼り床はないがおおむね硬くしまっている。貼り床はない。

＜壁・壁溝＞緩やかに内湾気味に立ち上がる。壁溝はない。壁高は14cmである。

＜柱穴＞本住居跡に伴うと思われる柱穴はない。

＜カマド＞東壁の北寄りに位置する。煙出しと煙道の一部が攪乱で破壊されている。袖は土器破片を芯材として、IV層起源の褐色シルトを貼って構築しているが、残存状況はあまり良くない。カマド埋土には、袖や天井に使用されたと思われるシルトブロックが混入する。燃焼部は46×30cmの不整形に焼土が形成されている。煙道は破壊されており、0.6mほど残存している。掘り込み式か、削り抜き式かは削平のため不明である。煙道の方向はN-118°-Eである。支脚は検出されていない。

＜付属施設＞カマド北脇の東壁が若干張り出し気味となっており、袋状の土坑となっていたことが推定される。この部分はPP306によって破壊されているが、残存する底面は焼土化している。焼土の厚さは1～2cm程であるが、この焼土を除去したところ、土器破片がまとめて出土した。

＜遺物＞（第67・68図76～88、写真図版66・67）土器は須恵器壺、壺、土師器（内黒、非内黒）坏、高台付坏、壺（手づくね）が3,266g出土している。うち13点、2,645gを掲載した。カマド周辺、カマド埋土、袖、カマド北脇の焼土下から多く出土している。なお、床面焼土下より礫1点230gが出土した。

＜時期＞出土遺物から平安時代に属すると考えられる。

RA028堅穴住居跡（第25図、写真図版18）

＜位置・検出状況＞調査区南東の1K25yグリッドに位置する。周辺はIV層まで削平されており、さらに住居跡は北半及び西壁を大きな攪乱によって壊され、南側のみ残存している。住居跡全体の2分の1から3分の1ぐらゐの残存状況である。加えて、カマドを水道管の攪乱により、切られている。検出面はIV層である。

＜重複関係＞残存部分では認められない。

＜規模・平面形状＞残存する南辺は3.85mで、方形を基調とすると考えられる。南壁の方向はN-115°-Eである。

＜埋土＞残存している部分は黒褐色土である。IV層起源の褐色土粒をわずかに含む。

＜床面・掘り方・貼り床＞床面は若干凹凸があり、しまっている。礫層よりやや上面に床面が形成され、

貼り床、掘り方はない。

<壁・壁溝>外傾して緩やかに立ち上がる。壁高は8cmと浅い。

<カマド>東壁の南端に位置する。北側の袖及び燃焼部は攪乱に切られている。南側の袖も失われている。燃焼部の焼土は径36cm以上あると思われ、厚さは5cmである。煙道も上面が削られているが、壁際を須恵器大甕の破片で補強されていることから、掘り込み式と考えられる。長さは1.7mで、底面は燃焼部からほぼ水平で焼出しに至って若干下降する程度である。煙道の方向はN-111°-Eである。煙道入口付近の底面には天井から落下したと思われる焼土が堆積している。

<柱穴>検出されていない。

<付属施設>カマド南側の脇の南東隅から土坑が検出された。位置から貯蔵穴と考えられるが、カマドの袖の位置と重なっており、新旧があると思われる。

<遺物>（第68・69図89～94、写真図版67）土器は須恵器甕、土師器（内黒、非内黒）壺、高台付壺、甕（手づくね）が2,966g出土しており、うち、2,735gを掲載した。煙道及び土坑1、カマド周辺からの出土が主で、煙道の壁際に並べられた須恵器大甕が最も多い。

<時期・性格>出土遺物から平安時代と考えられる。

RA029竪穴住居跡（第26図、写真図版19）

<位置・検出状況>調査区東端の1L24cグリッドに位置する。検出面はIV層であるが、周囲にはアスパラガスの根が繁茂していたためその根を除去する過程で、住居跡があることがわかった。埋土上面全体と北壁の半分がアスパラガスにより搅乱を受けている。また、住居西壁の約2分の1、カマド煙道も深い搅乱により失われている。

<重複関係>認められない。

<規模・平面形状>隅丸長方形を呈していると思われ、残存する辺の長さは2.52×2.45mである。主軸方位はN-79°-Wである。

<埋土>粘性のある黒～暗褐色土で、IV層起源の褐色粒とII層起源の黒色土粒の多寡で4に細分される。床直上には部分的にカマドの構築土かと思われるIV層起源のシルトや混入物のない黒色土が薄く堆積する。自然堆積か、人為堆積かは判然としない。

<床面・掘り方・貼床>床面は平坦で、縦まっている。貼り床があり、褐色土粒の混入する黒褐～暗褐色土を敷設している。掘り方は細かい凹凸が住居全体に認められる。

<壁・壁溝>外傾して立ち上がる。壁高は16cmである。壁溝は認められない。

<カマド>西壁の中央寄りやや南側に位置する。煙道と袖の一部が現代の深い搅乱により破壊されている。袖はわずかに残存しており、IV層起源のシルトで構築している。南側の袖の上から20×26cmの角礫が出土した。カマドの構築材の可能性がある。燃焼部にはわずかに焼土が形成されている。焼土の厚さは最大で4cmほどである。

<柱穴>ない。

<付属施設>認められない。

<遺物>ない。

<時期・性格>遺構の形態から平安時代と考えられる。

RA030竪穴住居跡（第26・27図、写真図版20）

<位置・検出状況>1L25cグリッド周辺に位置する。本遺構は東側を削平されており、南側は調査

区外に延びているので、調査した部分は住居北西部分のみで、全体の約4分の1程度と推測される。検出面はIV層で、黒褐色の方形プランとして検出した。

<重複関係>調査部分では認められない。

<規模・平面形状>平面形は方形を基調としていると思われる。調査部分の辺の長さは北辺が1.95m、西辺が3.35mである。北辺の方向はN-87°-Wである。

<埋土>黒褐色土が主体で3層に細分した。最上層及び壁際最下層の黒色土層は自然堆積と思われるが、主体と思われる黒褐色土には比較的大きいIV層起源の褐色シルトおよびII層起源の黒色土が斑に混入し、人為堆積の層相を示す。

<床面・掘り方・貼床>床面はIV層を掘り込み、貼り床を敷設している。貼り床は黒色土と褐色土の2層に明確に分かれている。住居跡の西壁際と、北壁から0.5~1mの範囲は掘り方がL字型に深くなっている、深い部分に褐色土を敷設している。住居跡中央付近も掘り方が深いが、貼り床に差異は認められない。床面はおおむね硬くしまっている。

<壁・壁溝>壁は直立気味に立ち上がる。壁高は28cmである。壁溝は認められない。

<カマド>西壁に位置する。カマドの燃焼部の一部及び南側の袖は調査区外に延びている。袖と燃焼部が残っている。北側の袖は煙を芯材とし、IV層起源の褐色シルトで構築している。燃焼部には径48cm、厚さ7cmに焼土が発達している。煙道は長さ約1.9mで割り抜き式である。煙道の底面は煙出しに至るまではほぼ平坦である。煙出しの埋土中から拳大の礫が多く出土した。

<柱穴>北西隅から1個検出した。深さは20cm足らずで、土坑の可能性もある。

<付属施設>床面北西隅寄りとカマドの北側袖の脇から土坑が検出された。土坑1は径が84cmとやや大きめであることから土坑としたが、深さが38cmあり、柱穴の可能性もある。土坑2は位置や埋土上層から土器が出土していることから貯蔵穴の可能性がある。また、土坑2の東側とカマド北側袖の下から床下土坑を検出した。埋土は黒褐色土で、周辺の貼り床とは色調が異なっていることから土坑と認識した。

<遺物>（第70図95~101、写真図版68）土器は須恵器壺、煮、甕、土師器（内黒、非内黒）壺、甕（手づくね）が1,997g出土し、うち7点、613gを掲載した。埋土、カマド、床下土坑から出土している。また、埋土中から平坦面を持つ石（図中右1）、10,200gが出土している。

<時期・性格>出土土器の年代観から平安時代と考えられる。

（金子）

RA031竪穴住居跡（第28図、写真図版21）

<位置・検出状況>調査区北側の1J9gグリッド付近に位置する。検出面はIV層である。黒褐色の長方形のプランとして検出した。

<重複関係>北側部分を中世の土塁と近世墓に切られる。

<規模・平面形状>北側部分が後世の造構に壊されているため全容は不明である。残存部から概ね方形を呈すると推測され、4.1×2.5m以上、壁高43cmを測る。主軸方位はN-100°-Wである。

<埋土>6層に分層した。1層、2層は混入物をほとんど含まない黒色、暗褐色土の層である。レンズ状の堆積から自然堆積と考えられる。3層、4層については壁が崩落してきた層と思われる。東壁際の貼り床直上の5層は明褐色土の堅く締まっている層で、昇降施設を構築した土と思われる。6層は貼り床である。

<床面・掘り方・貼り床>床面はほぼ平坦で硬く締まり、貼り床の部分と地山の部分がある。貼り床には、黒褐色シルトに明褐色～黄橙粘土質土の混合土が用いられている。掘り方は床面から4~16

cmの深さを測り、壁際が深くなっている。

＜壁・壁溝＞東壁は外傾して立ち上がる。西壁は直立気味に、南壁は直立～外傾気味に立ち上がる。北壁は残存していない。壁溝は検出されなかった。

＜柱穴＞検出されなかった。

＜カマド＞土塁と近世墓に壊され殆ど残存していないが、西壁付近に焼土1基と煙道と思われる部分を検出したことから西壁にカマドが構築されていた可能性が考えられる。焼土は木根によりかく乱を受け明確な燃焼部かは判断できなかった。煙道部分も近世墓に大部分を壊されているため、掘り込み式か割り貫き式かは不明である。煙道の方向は残存部からN-95°-Wと推測される。

＜付属施設＞出入り口だったと思われるステップ状の施設を検出した。床面精査中に東側に小礫が広がる部分を検出したが、礫層面が住居周辺にあるため床面との明瞭な違いに気がつかず、貼り床の精査中に断面観察によって確認したものである。貼り床直上に明褐色土と小礫を用い東壁に向かって緩やかに上るステップ状の施設を構築している。高さなど床面との違いは明瞭ではなく、周辺と比べやや高い程度である。堅さや締まり具合等は床面とほぼ同じ様相を呈している。

＜遺物＞(第70図86-102～104、写真図版67-68) 出土土器の総量は、住居跡としては少なく492gである。86-102～104の4点を掲載した。

＜時期＞埋下土位出土の土器から奈良時代と思われるが、出土数が少ないとまではっきりしたところは不明瞭である。
(本多)

RA032竪穴住居跡 (第29・30図、写真図版22・23)

＜位置・検出状況＞1K12kグリッド周辺に位置する。検出面はIV層上面で、黒褐色の方形プランとして検出した。

＜重複関係＞RD054土坑に北西隅を、RG014溝跡に埋土上層を切られている。

＜規模・平面形状＞平面形は方形で、一辺4.02×4.02mである。主軸方向はN-115°-Eである。

＜埋土＞黒褐色土が主体となって堆積しており、5層に細分した。ほとんどが自然堆積と思われるが、北壁際に堆積する3層はIV層起源の褐色土やII層起源の黒色土を斑に含んでおり、層相から埋め戻しと考えられる。壁際の5層は壁の崩壊土とみられる。

＜床面・掘り方・貼床＞床面はVI層まで掘り込んでおり、平坦である。南壁際を除いて硬化しており、範囲を図示した。貼り床にはほぼ全面に施され、IV～V層起源の褐色砂質シルトを敷設している。掘り方は一様で、細かい凸凹が認められる。

＜壁・壁溝＞外傾して立ち上がる。特に南壁は崩落のためかハの字状に開きながら立ち上がる。壁溝は北壁際に断続して約2.2m認められた。壁高は43cmである。

＜カマド＞東壁南寄りに設置されている。南側の袖は破壊されているとみられ、残りが悪いが、天井、北側の袖は比較的の残りが良い。長さ30cmほどの板状の礫を煙道入口に、長さ30cmの角柱状の礫をカマド天井に、拳～20cm程の角礫を袖に芯材として据え、暗褐色のシルトを貼って構築している。燃焼部には径20cm内外、厚さ3cmの楕円形に焼土が形成され、袖の内側の一部焼土化している。支脚は土器片の上に礫を乗せたもので、燃焼部の奥に据えられている。煙道は長さ約1.8mで、掘り込み式である。煙出しの部分は検出段階で、1.2×1.1mの円形の土坑を切っているように見えたが、土層断面の観察から掘り方であると判断した。煙道の底面は入口でやや上昇するが、煙出し直下ではほぼ水平である。煙道の埋土は自然堆積と考えられる。煙道の方向はN-125°-Eである。

＜柱穴＞東壁際に1個検出したが、形状がやや不整形なうえ、深さも16cmと浅い。直上から25×19cm

の盤上の礫が出土している。

＜付属施設＞4基の土坑を検出した。いずれも壁際に位置している。土坑2の埋土中にはTo-aテフラが粒状に少量含まれる。土坑3はカマド北側の袖脇に位置し、東壁から張り出している。形状から袋状の貯蔵穴と考えられるが、埋土上面は貼り床が敷設されることから、住居廃絶時には使用されていなかったと思われる。中央に22×20cmの深さ4cmほどの副穴が認められ、土器片が出土している。埋土を除去したところ、底面の西寄りから焼土が検出された。厚さは約2cmの現地製の焼土である。土坑4はカマド南脇で検出された小型の土坑で、深さ3cmと浅い。

＜遺物＞（第70-71図106～111、写真図版68・69）土器は須恵器壺、土師器（内黒、非内黒）壺、甕（手づくりね）が2,118g出土しており、うち7点、1,600gを掲載した。カマド内、カマド袖からの出土が多い。また、床直上、カマド煙道埋土中から礫が各1点、計1,901g出土した。

＜時期・性格＞出土した土器から、平安時代と考えられる。

RA033豊穴住居跡（第31図、写真図版24）

＜位置・検出状況＞の1K20hグリッドに位置する。北側半分の上面を擾乱によって削平されている。検出面はⅢ層で、黒色の方形プランとして検出した。

＜重複関係＞西南隅でRD064土坑と重複しているRD064土坑は当初木根の擾乱と思われたため、新旧をよく確認せずに精査を行ってしまったが、精査時に掘削した埋土の状況から本住居跡の方が古いと思われる。また、図示していないが、土坑1の上にPP197が入っており、本住居跡が古い。

＜規模・平面形状＞一辺2.91×2.84mの隅丸方形である。主軸方向はN-116°-Eである。

＜埋土＞4層に細分した。墨～墨褐色土で、壁際と最上層は混入物が少ないが、IV層起源の褐色土粒を含む黒色土が主体である。自然堆積と考えられる。北壁寄りの床面から焼土が堆積している箇所が3か所検出された。焼土の厚さは2cm程度、ブロック状であり、現地製ではない。

＜床面・掘り方・貼床＞床は砂礫層のVI層上面まで掘り込んでおり、平坦でしまっている。部分的に掘り方があるが、特に敷設したような貼り床はなく、使用過程で形成された硬化面である。

＜窓・壁溝＞壁の崩落のためか、外傾及び外反気味に立ち上がる。北壁は削平のため、極わずかしか残っていない。壁高は25cmである。壁溝はない。

＜カマド＞東壁の南寄りから検出した。天井は残存していない。袖は幾分削平されているとは思われるが残存しており、IV層起源の暗褐色土によって構築している。両袖ともに部分的に焼土化しているが、特に南側は全体に焼土化している。燃焼部の底面に焼土は形成されていない。支脚とみられる礫が両袖際に据えられている。煙道は長さ約1.5mで、剥り抜き式である。底面は燃焼部からほぼ水平で煙出しに至り、若干下がる。埋土は自然堆積と思われ、底直上には焼土を多く含む暗赤褐色土が堆積する。煙道の方向は主軸方向と同じN-116°-Eである。

＜柱穴＞認められない。

＜付属施設＞カマド北脇から土坑が1基検出された。東壁に張り出すように構築されている。深さは床面より4cm程度で、埋土には焼土を含む墨褐色土が堆積する。底面は手前が焼土化しており、焼土の厚さは3cmに達する。現地製の焼土と思われ、カマド北袖の土坑側や床面の一部も焼けている。

＜遺物＞（第72図64・66・112～118、写真図版65・69）土器は須恵器壺、土師器壺（内黒、非内黒）、碗、甕（ロクロ、手づくりね）が1,791g出土し、うち9点、1,259gを掲載した。埋土中も土器が多いが、カマド南側の南東隅や土坑1、カマド周辺からも出土している。また、検出面から鉄片1点4gが出土しているが、小片で器種がわからず、上面が擾乱を受けているため新しいもの可能性があったの

で、掲載していない。

＜時期・性格＞出土遺物から平安時代と考えられる。

RA034堅穴住居跡（第32・33図、写真図版25・26）

＜位置・検出状況＞調査区南より東側の1K2IIグリッドに位置する。北壁の一部を現代の住宅の基礎で破壊されている。周辺はIV層まで削平されており、住居埋土、壁も同様に削平されていると思われる。

＜重複関係＞PP199と重複し、本住居跡が古い。

＜規模・平面形状＞隅丸方形を呈する。一辺の長さは、4.0×3.93mである。主軸方向はN-82°-Wである。

＜埋土＞住居中央は黒色土、壁寄りは粘性に富む黒褐色土である。壁際には壁の崩壊土が堆積する。自然堆積の層相を示す。住居西壁寄りの埋土中から焼土を含む黒褐色土が検出されたが、現地性のものではなかった。貼り床はなく、床面は使用過程で形成されたものと思われる。掘り方があり、若干壁寄りが深く、中央が浅い傾向がある。

＜床面・掘り方・貼床＞床面は平坦で、しまっている。掘り方は凹凸があるが、明瞭な貼り床はない。

＜壁・壁溝＞外傾して立ち上がる。壁高は19cmである。壁溝は認められない。

＜柱穴＞認められない。

＜カマド＞西壁中央よりやや北寄りに位置する。天井は残存していない。袖はかなり削平されたと思われるが、IV層起源の褐色土ブロックを混入した黒褐色土で構築された基部が残っている。燃焼部には明瞭な焼土は認められないが火を受けて硬化し、にぶい橙色となった部分が認められる。カマド中央の埋土中から小児の頭大の礫が出土した。袖か天井の構築礫か。煙道は割り抜き式で長さ1.5mである。底面は燃焼部から煙道入口まで上昇し、その後、煙出しに向かって下降し、煙出しは一段下がる。煙出し埋土には拳～掌大の礫が多数含まれており、IV層起源の褐色土ブロックが多く含まれる層もあることから、一部埋め戻されている可能性もある。

＜付属施設＞検出されなかった。

＜遺物＞（第73・74図119～133、写真図版69～71）カマド内及びカマド周辺から多くの土器が出土している。須恵器坏、壺、土器部（内墨、非内墨）坏、壺（手づくね）である。特に燃焼部奥と煙道入口には潰れた壺（128・130）が出土している。土器の総量は5,811gで、うち16点、4,780gを掲載した。また、カマド煙出しから礫1点588g、埋土中から1点1,410gの礫が出土した。

＜時期＞出土遺物から、平安時代と考えられる。

RA035堅穴住居跡（第33図、写真図版27）

＜位置・検出状況＞調査区東側の1K18uグリッド周辺に位置する。東壁の一部を現代の搅乱により削られている。調査区周辺はⅡ～Ⅲ層が削平され、IV層及びVI層が露出しており、検出面はIV層及びVI層である。

＜重複関係＞RA025堅穴住居跡、RB012掘立柱建物跡と重複する。RA025堅穴住居跡より本遺構が新しいが、RB012掘立柱建物跡より古いと思われる。

＜規模・平面形状＞一辺の長さが3.57×3.1mの東西にやや長い隅丸長方形である。北壁の方向N-9°-Wである。

＜埋土＞粘性がなく、硬くしまる黒褐色土が主体で、上層及び壁際には礫を含む。古代の住居跡とは異なる層相で、一見すると現代の搅乱の埋土に近いが、搅乱と異なる点はよくしまっていることであ

る。

＜床面・掘り方・貼り床＞壁際は礫が露出しあまりしまりがない。中央部分は黒褐色土の硬化面が形成されているが、貼り床はなく、使用過程での形成と思われる。おおむね平坦であるが、壁際はやや低い。

＜壁・壁溝＞直立気味に立ち上がる。壁は礫層が露出しており、崩壊のためか、北壁、東壁の北寄りは外傾している。壁溝はない。壁高は46cmである。

＜柱穴＞8個検出された。うち東壁際の3箇は東壁から25~30cmほど離れているが、ほかは壁際に位置する。深さは8~22cm程度で、10cm以下の浅いものもある。埋土は底面や壁の崩壊した砂礫を多く含む黒褐色シルトで、壁や底がわかりにくい。

＜カマド＞ない。

＜付属施設＞床面北寄りから、炭片と焼上ブロックの広がりが検出された。67×59cmの不整形で、硬化した焼土面はない。厚さは1cm程度である。

＜遺物＞床面及び壁際から長さ20~25cm、幅10~16cmの角礫1点183gが出土しているが、他の遺物はない。礫には使用痕は認められない。

＜時期＞住居の形態から中世の積穴建物跡と考えられる。

3 挖立柱建物跡

RB009掘立柱建物跡（第34・35図、写真図版27・28）

＜位置・検出状況＞調査区北西1J13yグリッド周辺に位置する。検出面はⅢ層である。堀によって切られた低位段丘の北端にある。北西隅のPP109は木根が入り込んでおり、形状、埋土は攪乱を受けている。北側0.5mにRD029土坑がある。

＜重複関係＞ない。

＜規模・構造・方向＞桁行2間、梁行2間の側柱の建物跡である。規模は桁行総長5.50m、梁行総長5.45mである。軸方向は梁行でN~S~Wである。

＜柱位置・柱間＞柱穴は8個検出された。ほぼ正方形の柱配置である。東側のPP110は新旧2個の柱穴である。柱穴距離は桁方向で2.75mの等分、梁行方向はPP109~PP114が3.03m、2.28m、PP131~PP112が2.75m、2.28mである。

＜掘り方・柱痕・埋土＞柱穴の掘り方はおおむね円形に近いが、北西隅のPP109は隅丸の長方形に近い。木根による攪乱のためか。また、北東隅のPP131は東側がやや角張った掘り方である。径は58~125cm、深さ34~56cmである。PP108・PP110・PP111~114には柱痕跡が認められた。径28~42cmの黒~黒褐色シルトである。PP110とPP113の柱痕跡にはTo-aテフラが粒状に混入する。柱穴内に埋め戻した土にはIV~V層の粒が斑に混入する。

＜遺物＞（第75図31・134、写真図版63・71）PP113・PP108から須恵器壺、土師器（内墨）壺、甕（非ロクロ）の土器2点144gが出土し、2点すべてを掲載した。31はPP113の埋土から出土した破片とRA020積穴住居跡の検出面から出土した破片が接合した須恵器小型壺破片である。134はPP108の埋土下位から出土した須恵器壺破片である。

＜時期・性格＞出土遺物及び、柱痕跡中のTo-aテフラから平安時代の建物跡と考えられる。

RB010掘立柱建物跡（第35図、写真図版29）

＜位置・検出状況＞調査区北側の1K10lグリッド周辺に位置する。本建物跡は現代の深い搅乱によって削られており、検出面はⅢ層と搅乱除去後のV層である。東側のPP92・PP93はほとんど底部しか残っていない。また、西側のPP95は搅乱によってほとんどが失われており、南側壁が搅乱の壁にからうじて残っている程度である。また、南西隅のPP91は搅乱によって、一部が削られている。

＜重複関係＞南西隅のPP91がRA032堅穴住居跡の北壁と重複しているが、本建物跡の存在を認識するのが遅かったため、新旧を確認できなかった。

＜規模・構造・方向＞本建物跡の北側は中世城館の構築時に段丘崖を削平している可能性があり、大きく削り取られていること、搅乱によって失われていることから、本来の建物跡の規模は不明である。現在の残存状況から、少なくとも桁行2間、梁行2間以上の建物跡と思われるが、隅柱か総柱かは不明である。規模は桁行総長3.24m、梁行総長3.20mである。柱穴距離は桁方向でPP91～PP32が1.52m、PP32～PP33が1.82m、梁行方向はPP93～PP92が1.52m、PP92～PP33が1.67mである。方向は梁行でN-1°-Eである。

＜掘り方・柱痕・埋土＞柱穴の掘り方はおおむね円形を基調としていると思われる南西隅のPP91、南東隅のPP33はやや角張った掘り方である。径は残りの良いもので45～54cm、深さ42～47cmである。上面が搅乱によって削平されているPP93・92は深さ6～8cm程度である。柱痕はすべての柱穴に認められ、径15～18cmの混入物の少ない黒褐色土である。埋土はⅣ層粒及びⅤ層粒が斑に混入する暗褐色～黒褐色土である。

＜遺物＞ない。

＜時期・性格＞埋土の状況から平安時代に属する可能性が高い。

RBO11掘立柱建物跡（第36図、写真図版30）

＜位置・検出状況＞調査区南西よりの1K22iグリッド周辺に位置する。検出面はⅢ層であるが、南側側柱のPP67はRD066土坑掘り上げ後、土坑底面で検出した。

＜重複関係＞RD065・066土坑と重複している。RD065土坑より古いが、RD066土坑との新旧関係は確認できなかった。

＜規模・構造・方向＞桁行2間、梁行2間の総柱の建物跡である。規模は桁行総長3.04m、梁行3.04mである。方向は梁行でN-2°-Eである。

＜柱位置・柱間＞9個の柱穴が検出された。正方形の総柱の建物跡である。柱間寸法は東側の梁行が北から1.37m、1.67m、西側が1.57mの等分、北側桁行が1.67m、1.22m、南側が1.52mの等分である。

＜掘り方・柱痕・埋土＞柱穴は円形で残りの良いもので径38～47cm、深さ28～41cmある。柱痕跡が確認されたのはPP18とPP21である。混入物の少ない黒褐色土で、径は18～24cmである。埋土はⅣ層の暗褐色土や黒色土ブロックが斑に混入する暗褐色～黒褐色土で埋め戻されている。なお、4個の柱穴からTo-aテフラが検出された。柱痕跡ではなく、埋め戻した埋土に小さな粒状に少量混入している。PP19では埋土上層に小粒子状に全体に混入している。

＜遺物＞ない。

＜時期・性格＞埋め戻した埋土中に含まれるTo-aテフラ粒やから本建物跡は平安時代に属し、10世紀初頭のTo-aテフラ降下後に機能していたと考えられる。

RBO12掘立柱建物跡（第37図、写真図版31）

＜位置・検出状況＞調査区東南の1K18r～1K23tグリッドに位置する。周辺はⅣ～Ⅴ層まで削平さ

れており、表土を除去すると、上記の層が露出する。加えて、本建物跡の北半は現代の搅乱を受けており、上面が削平されている。

＜重複関係＞RA025堅穴住居跡と北東隅の柱穴が、重複しており、本建物跡が新しい。また、RA035堅穴住居跡とRA140堅穴住居跡が重複しており、本建物跡が新しい。

＜規模・構造・方向＞桁行5間、梁行1間である。北側1間に間仕切りと思われるPP138がある。規模は桁行総長が東側のPP139～PP143が12.4m、西側のPP132～PP137が11.4m、梁行きが4.5mである。方向は桁行きでN-1°-Wである。

＜柱位置・柱間＞12個の柱穴が検出された。桁行が東側のPP139～PP143が2.42～3.64m、PP132～PP137が1.97～2.58m、梁行が北側のPP132～PP139で4.24m、南側のPP137～PP143で4.20mである。PP145とPP144は東西の側柱筋上にあるが建物を構成する柱となるかは不明である。

＜掘り方・柱痕・埋土＞円形を基調としている。径30～58cm、深さ20～39cmである。柱痕跡はほとんど検出できなかったが、PP140で黒褐色土上の混入物の少ない粘性の強い層として検出した。埋土はIV層粒の混入した黒褐色土主体のもの、黒褐色土粒とIV層粒が糞に混入した埋土の2種に分かれる。

＜遺物＞ない。

＜時期・性格＞RA025・035堅穴住居跡を切っていること、埋土の状況から中世以降と思われるが、具体的には不明である。

RB013振立柱建物跡（第37・38図、写真図版32・33）

＜位置・検出状況＞調査区東側の1K14w～1L19aグリッドに位置する。本遺構の東側は水田の造成によって近代に大きく削りとられ、さらに周辺は全体にIV層まで削られている。カクランの多い表土を除去すると、IV層が露出する状況である。本遺構の位置には近代～現代にかけて継続的に建物が建てられていたと思われ、個々の柱穴もガラスや現代の陶磁器を含む新しい穴などの搅乱によって削られているものが多い。本遺構はおそらく東側に延びていたものと考えられるが、上記のような状態のため、西側2間分のみの検出である。

＜重複関係＞RA025・027堅穴住居跡と重複しており、RA025堅穴住居跡より本遺構が新しい。RA027堅穴住居跡とは直接切りあっている柱穴がないが、本遺構が新ないとおもわれる。また、RD045・052土坑、RF003～006焼土遺構と重複しているが、直接切りあっていないため新旧は不明である。RF003～006焼土遺構に関しては、本建物跡に伴う可能性があるが、図中にはRF006焼土遺構のみ載せている。

＜規模・構造・方向＞検出部分は梁行3間、桁行2間であるが、桁行はさらに東側に延びるものと思われる。上記の上屋柱に北、西、南側に半間の下屋柱が廻る。南側にはさらに軒支柱と思われる柱穴が検出された。柱配置から、検出部分はおそらく東側に延びる民家の台所と思われ、ニワ部分に6本の独立柱が立っている。また、重複する焼土遺構のうちRF006焼土遺構は本建物のカマドの燃焼部に形成された焼土の可能性がある。規模は梁行総延長が11.1m、検出部分の桁行建締延長が7.0mである。建物の方向は梁行でN-1°-Wである。

＜柱位置・柱間＞検出された柱穴は27個である。柱穴寸法は西側の上屋柱がPP117～PP115が2.50m、PP115～PP116が2.50m、PP116～PP118が2.68m、下屋柱は西側のPP148～PP156間で北から1.00m、1.15m、1.24m、1.15m、0.94m、1.00m、0.94m、0.90m、南側のPP156～PP162は西から1.15m、1.00m、0.90m、0.90mである。なお、西側上屋柱と下屋柱の間はPP117～PP148間で1.21m、PP118～PP155間で1.21m、南側上屋柱と下屋柱の間はPP118～PP158間で1.00m、PP119～PP162間で1.00m、北側上屋柱と

下屋柱の間はPP121～PP163間、PP123～PP164間いずれも1.30mである。

＜掘り方・柱痕・埋土＞上屋柱、下屋柱ともに円形を基調としているが、西南隅の上屋柱PP118は隅丸の方形に近い。径は上屋柱が大きく78～110cm、深さ52～80cm、下屋柱が径33～52cm、深さ8～34cmである。軒支柱は径40～85cm、深さ23～44cmである。柱痕跡は裏込めの埋土よりも混入物の少ない黒褐色土で、上屋柱のPP115・115・116・121・123・124に認められ、PP116は木質が残存していた。埋土はIV層、黒褐色土粒が斑に混合した上で、礫が多く含まれるものもある。比較的新しそうな様相である。

＜遺物＞(第100図403～404、写真図版87)上屋柱 (PP115・116・121・123・124) から陶磁器破片242gが出土し、うち9点を掲載した。また、PP124の柱痕中から484の鉄釘が出土した。

＜時期・性格＞近世の農民住宅の一部で台所部分の可能性が高い。

4 柱 穴 列

RC001柱穴列（第38図、写真図版33）

＜位置・検出状況＞1 K14t～1 K14vグリッド周辺に位置する。検出面はIV層である。東半分のPP172、は現代の搅乱に一部が切られ、PP173は現代の搅乱除去後にVI層で検出した。

＜重複関係＞認められない。

＜規模・平面形状＞東～西方向に並ぶ柱穴列で、4個の柱穴で構成される。柱穴の上面規模は、PP126が 0.47×0.45 m、PP127が 0.43×0.42 m、PP172が 0.33×0.27 m、PP173が 0.22 mである。深さはPP126が 0.24 m、PP127が 0.30 m、PP172が 0.17 m、PP173が 0.25 mである。芯々間の距離はPP126～127間が 2.0 m、PP127～172が 1.80 m、PP172～173が 2.0 mである。

＜埋土＞PP126・127には柱痕跡が認められる。粘性のある黒色土である。埋土はIV層及びV層の粒が混入した黒褐～褐色土である。

＜遺物＞(第38図412、写真図版88) PP126から陶器53gが出土し、うち412の1点53gを掲載した。

＜時期＞出土した陶器から近世以降の遺構と考えられる。

(金子)

5 土 坑

RD027土坑（第38図、写真図版33）

＜位置・検出状況＞調査区西側、堀外側の1 J14uグリッド付近に位置する。検出面はV層である。黒色の広がりとして検出した。

＜重複関係＞RG012堀跡に切られる。

＜規模・平面形状＞平面形は橢円形を呈する。規模は長軸 $2.81 \times$ 短軸 1.47 m、深さは50cmである。

＜埋土＞4層に分層した。黒色土主体のレンズ状を呈する自然堆積である。周辺の地盤が礫層のため、どの層にも礫が多く混入している。

＜底面・壁＞底面は礫層中で、南側から北側に向けて緩やかな傾斜が見られる。壁は緩やかに外傾して立ち上がる。

＜遺物＞埋土上位から土師器壺破片43gが出土したが、小片のため掲載できなかった。

＜時期・性格＞遺物等が出土していないためはっきりとした時期は不明であるが、重複関係から中世以前と推測される。付近に似たような土坑がなく性格については不明である。

RD028土坑（第38図、写真図版33）

＜位置・検出状況＞調査区西側土壘下の1J18yグリッド付近に位置する。検出面はIV層である。黒褐色の円形のプランとして検出した。

＜重複関係＞ない。

＜規模・平面形状＞平面形は円形を呈する。規模は1.21×0.95mで、深さは25cmである。

＜埋土＞5層に分層した。自然堆積の様相を呈しているが、どの層にも黒褐色土を主体に地山の明黄褐色土がブロックで多く混入していることから人為堆積と考えられる。

＜底面・壁＞底面はIV層中ではほぼ平坦である。壁は直立気味に立ち上がる。

＜遺物＞出土していない。

＜時期・性格＞遺物などが出土していないため、時期・性格ともにはっきりしないが、時期については土壘下からの検出であることから中世以前のものと考えられる。

RD029土坑（第39図、写真図版34）

＜位置・検出状況＞調査区北西土壘下の1K11aグリッド付近に位置する。検出面はIV層である。暗褐色土の広がりとして検出した。

＜重複関係＞遺構との重複はないが、西側が木根などのく乱を受けて削られている。

＜規模・平面形状＞平面形は橢円形を呈する。規模は2.57×1.23m、深さは42cmである。

＜埋土＞4層に分層した。黒褐色土を主体としたレンズ状の自然堆積である。2層には灰白色の火山灰が多量に含まれている。同定の結果、To-aテフラと判断された。

＜底面・壁＞底面はIV層中で、中央部に向かって緩やかに傾斜しているが概ね平坦である。壁は外傾して緩やかに立ち上がる。

＜遺物＞埋土中から土師器（内黒、非内黒）壺、甕（非ロクロ）257gが出土したが、小破片のため掲載していない。

＜時期・性格＞検出状況、火山灰の堆積状況などから平安時代のものと考えられるが出土遺物は小破片のためはっきりとした時期・性格ともに不明である。

RD030土坑（第39図、写真図版34）

＜位置・検出状況＞調査区西側土壘下の1K16bグリッド付近、RA018竖穴住居跡の西隣りに位置する。検出面はIV層である。黒褐色土に灰白色が橢円に廻る橢円形のプランとして検出した。

＜重複関係＞ない。

＜規模・平面形状＞平面形は橢円形を呈する。規模は1.22×0.70mで、深さは30cmである。

＜埋土＞5層に分層した。黒褐色～暗褐色土を主体としたレンズ状の自然堆積である。2層は灰白色的火山灰層である。同定の結果、To-aテフラと判定された。3層には地山の明黄褐色土が若干混入するが、埋没過程で混入したものと思われる。

＜底面・壁＞底面はIV層中で、中央部が若干盛り上がるが概ね平坦である。壁は外傾して緩やかに立ち上がる。

＜遺物＞埋土中から土師器（内黒）壺、甕（非ロクロ）10gが出土した。

＜時期・性格＞出土遺物が小破片のためはっきりした時期は不明である。埋土の堆積状況などから平安時代と推測され、火山灰が降下した時にはある程度埋まっていたと考えられる。性格は、住居跡の

すぐ近くに位置していることなどから貯蔵穴のようなものに用いられた可能性が考えられる。(本多)

RD031土坑（第39図、写真図版34）

＜位置・検出状況＞1K16dグリッド付近に位置する。検出面はⅢ層で、黒色の楕円形プランとして検出した。

＜重複関係＞本土坑がRA020堅穴住居跡の東壁と1号カマドの煙道壁を切っており、本土坑が新しい。

＜規模・平面形状＞平面形は楕円形である。長軸は南北方向で1.66m、短軸は東壁の一部を搅乱が切っているが、1.27mである。

＜埋土＞2層に細分した。上層は黒色土で、木根がはびこる。下層はⅣ層の粒を含む黒褐色土である。自然堆積の可能性が高い。

＜底面・壁＞底面は平坦で、深さは37cmである。壁は外傾して立ち上がり、開口部で大きく開く。

＜遺物＞埋土より209gの土器と鉄滓1点47gが出土したが、小片のため図化に至らなかった。

＜時期・性格＞重複関係からRA020堅穴住居跡より新しく、埋土の状況から平安時代に属すると考えられる。

RD032土坑（第39図、写真図版34）

＜位置・検出状況＞1K17cグリッド付近に位置する。検出面はⅢ層で、RA020堅穴住居跡に接する黒褐色の円形プランとして検出した。

＜重複関係＞RA020堅穴住居跡の南東隅を切り、本土坑の方が新しい。

＜規模・平面形状＞円形で、開口部径は1.86×1.75mである。

＜埋土＞4層に細分した。黒色土が主体で、壁際にⅣ層起源の褐色土粒を多く含む。上層には焼土粒を若干含むが、本土坑がRA020堅穴住居跡の2号カマドを切っていることによるものと思われる。自然堆積の層相を示す。

＜底面・壁＞底面は平坦で、壁は内湾気味に立ち上がる。

＜遺物＞（第75図27・30、写真図版62・63）埋土中、底面から拳～小兒頭大の礫が多く出土したが、カマドを切って掘り込んだことによるものか。土器は埋土及び底直上から土師器（内黒、非内黒）壺、壺（ロクロ、非ロクロ）が844g出土し、うち2点597gが掲載した。27・30はRA020出土の土器破片と接合したものである。また、480gの鉄釘が埋土から出土した。

＜時期・性格＞重複関係からRA020堅穴住居跡より新しく、埋土の様相から平安時代に属すると考えられる。

RD033土坑（第40図、写真図版35）

＜位置・検出状況＞1K17dtグリッド付近に位置する。検出面はⅣ層で、黒褐色の不整形プランとして検出した。南側および南東側を搅乱によって失われている。

＜重複関係＞RD034土坑と隣接し、壁が一部接しているが、重複関係は明らかにできなかった。

＜規模・平面形状＞平面形は南北に長い不整形のプランをしており、開口部の2.03×2.45m以上である。

＜埋土＞黒褐色土で2層に細分される。下層はⅣ層起源の褐色土粒を少量含む。上層は小礫を少量含み、しまりのないボロボロの土である。自然堆積と思われるが、古代の埋土に比して新しそうな様相である。

＜底面・壁＞底面は礫層上面に達し、平坦である。壁はいったん直立気味に立ち上がり、開口部で開

く。深さは38cmである。

＜遺物＞埋土より481の模状鉄製品が出土した。そのほか埋土より土師器壺小片が7g出土した。

＜時期・性格＞埋土の状況から比較的新しい時期（近現代を含む）の遺構と思われる。形状、埋土が隣接するRD034土坑に類似しており、同様の性格と考えられる。

RD034土坑（第40図、写真図版35）

＜位置・検出状況＞1K17eグリッド付近に位置する。検出面はIV層で、長円形のプランとして検出した。南側は現代の搅乱に切られ、南西側の壁の一部はRD033土坑と接する。

＜重複関係＞RD033土坑と壁の一部が接しているが新旧関係は明らかにできなかった。

＜規模・平面形状＞平面形はゆがんだ長円形である。上面規模は1.82×2.52mである。

＜埋土＞黒褐色土が主体で、3層に細分される。壁際には壁の崩壊土が堆積する。全体にしまりなく、ボロボロの土である。

＜底面・壁＞底面は礫層上面に達し、平坦である。壁はいったん外傾して立ち上がり、開口部でやや開く。深さは28cmである。

＜遺物＞出土していない。

＜時期・性格＞RD033土坑との類似性から同時期で、埋土の状況から、近現代を含む比較的新しい時期の遺構と考えられる。

RD035土坑（第41図、写真図版35）

＜位置・検出状況＞1K16gグリッド付近に位置する。検出面はIII層で、黒褐色の隅丸台形プランとして検出した。北西隅を現代の搅乱によって切られている。

＜重複関係＞PP11柱穴状土坑と重複し、本土坑が古い。

＜規模・平面形状＞平面形は南北方向に長軸をとる隅丸の台形で、南側の辺が北側の辺より長い。開口部の規模は1.80×1.36mである。

＜埋土＞3層に細分したが、黒褐色土が主体である。上層はIV層起源の褐色土粒を少量含む黒褐色土、最下層は粘性に富む黒褐色土である。壁際の一部に壁崩壊土が堆積する。自然堆積の層相を示す。

＜底面・壁＞底面は南側に向かって傾斜する。南側は深さ35cm、北側は17cmである。壁は外傾して立ち上がる。南壁の中位～上位には部分的に焼土が形成されている。焼土の厚さは2～3cm程度である。

＜遺物＞検出面及び埋土中より須恵器壺、土師器（内墨、非内墨、両面墨）壺、土師器壺（非ロクロ）破片の131gの土器が出土したが、小片のため図化していない。

＜時期・性格＞出土遺物と埋土の様相から古代に属すると考えられ、焼土が形成されていることから焼成土坑である。

RD036土坑（第41図、写真図版36）

＜位置・検出状況＞2K3dグリッド付近に位置する。検出面はIII層で、黒色の隅丸台形プランとして検出した。本土坑は調査区南端にあたり、南側は調査区外に延びている。

＜重複関係＞認められない。

＜規模・平面形状＞平面形は南北方向に長軸をとる隅丸台形と思われ、上面規模は2.17×2.67mである。

＜埋土＞黒色～黒褐色土主体で、IV層起源の褐色土粒の混入割合によって5層に細分した。壁際には壁崩壊土が堆積し、下層には炭粒が少量含まれる。自然堆積と思われる。

＜底面・壁＞底面は礫層上面に達し、平坦である。壁はいったん直立～外傾気味に立ち上がり、開口部でやや開く。深さは47cmである。

＜遺物＞埋土上層から土師器壺破片18gが出土したが、小片のため図化していない。また、東壁寄りの底面直上から径15～20cmほどの礫が2点出土した。これらの礫には使用痕は認められなかった。

＜時期・性格＞埋土の性質から古代に属すると推測される。 (金子)

RD037土坑（第41図、写真図版35）

＜位置・検出状況＞調査区北よりの1K10tグリッド付近に位置する。検出面はIV層である。黒褐色土の楕円形プランとして検出した。

＜重複関係＞ない。

＜規模・平面形状＞平面形は不整楕円形を呈する。規模は1.53×1.26mで、深さは17cmである。

＜埋土＞3層に分層した。2・3層は黒褐色土に地山の黄褐色土多量に混入していることから、人為堆積と考えられる。また、3層には廃棄した際に混入したと思われる明赤褐色焼土が少量混入している。

＜底面・壁＞底面は中央部がやや窪み、凹凸が見られる。壁は北側が鋭角的に、南側が緩やかに立ち上がる。

＜遺物＞出土していない。

＜時期・性格＞遺物等の出土がなく時期は不明である。性格も付近に似た土坑がなく不明である。

(本多)

RD038土坑（第41図、写真図版36）

＜位置・検出状況＞1K16rグリッド付近に位置する。検出面はIII層で、長方形の黒褐色プランとして検出した。南側は攪乱に上面を大きく削られ、壁の立ち上がりがわずかに残る。そのほかの部分も柱穴状の攪乱で一部破壊されている。

＜重複関係＞PP129柱穴状土坑に北壁を切られており、本土坑が古い。

＜規模・平面形状＞平面形は南北方向に長軸をとる隅丸長方形である。開口部の規模は1.78×1.28mである。

＜埋土＞しまりのある黒褐色土で、上下2層に細分した。IV層起源の褐色土粒が多く含まれ、いずれも埋め戻しと考えられる。

＜底面・壁＞底面は礫層上面まで掘り込まれ、平坦である。壁は外傾して立ち上がり、断面形は逆台形状である。深さは23cmである。

＜遺物＞埋土から土師器（内黒、非内黒）壺、土師器壺破片66gが出土しているが、小片で図化していない。

＜時期・性格＞出土遺物は古代の土器であるが、流れ込みの可能性もある。また、埋土については古代よりやや新しい様相ではあるが、時期や性格は不明である。

RD039土坑（第42図、写真図版36）

＜位置・検出状況＞1K21nグリッド付近に位置する。検出面はIII層で、長方形の黒褐色プランとして検出した。

＜重複関係＞認められない。

＜規模・平面形状＞平面形は細長い長方形を基調とするが、北側の辺は胴張りで長円状である。開口部の径は1.94×0.47mである。

＜埋土＞IV層起源の褐色土粒を含む黒褐色土の単層で、しまりはあるが、比較的新しそうな様相である。

＜底面・壁＞断面形は逆台形で、深さは16cmである。底面は平坦で、壁は内湾～外傾気味に立ち上がる。

＜遺物＞出土していない。

＜時期・性格＞埋土は新しい様相を示しているが、出土遺物・重複関係ともに無く不明である。

RD040土坑（第42図、写真図版37）

＜位置・検出状況＞調査区南側の1K23oに位置する。検出面はIV層である。周辺はIV層まで削平されており、表土を除去するとIV層が露出する。本土坑も上面をかなり削平されていると思われる。

＜重複関係＞ない。

＜規模・平面形状＞規模は2.53×0.98mで、平面形状は長円形である。

＜埋土＞IV層起源の褐色土粒、ブロックを含んだ黒褐色土で、埋め戻しの可能性がある。

＜底面・壁＞底面は礫層に達するため、若干凹凸があり、壁は浅く立ち上がる。深さは12cmである。

＜遺物＞埋土から土師器（非内黑）壺、須恵器壺の破片14gが出土しているが、小片で図化していない。

＜時期＞出土遺物は流れ込みの可能性があり、時期、性格は不明である。

RD041土坑（第41図、写真図版37）

＜位置＞調査区南側の1K24pに位置する。検出面はIV層である。周辺はIV層まで削平されており、表土を除去するとIV層が露出する。本土坑も上面をかなり削平されている可能性が高い。

＜重複関係＞ない。

＜規模・平面形状＞規模は1.34×1.30mで、平面形状は楕円形である。

＜埋土＞焼土粒を含んだ黒～黒褐色土で、上下2層に細分される。下層は炭が含まれる。

＜底面・壁＞底面が礫層に達しているため、若干の凹凸があり、北側の底面の一部が焼土化している。

断面は削平が著しいため、皿状である。深さは11cmである。底面は礫が露出している。

＜遺物＞ない。

＜時期＞時期が示されるような遺物はないが、焼成土坑であり、埋土の層相からも古代の可能性が高い。

（金子）

RD042土坑（第42図、写真図版37）

＜位置・検出状況＞調査区東側の1L13bグリッド付近に位置する。検出面はIV層である。黒褐色の広がりとして検出した。周囲に様々ななく乱があり、当初は検出状況などから木根等のかく乱と考えて精査を進めたが、埋土下位より土師器の甕が出土したことから土坑に認定したものである。

＜重複関係＞ない。

＜規模・平面形状＞平面形は楕円形を呈する。規模は長軸1.63×短軸0.72m、深さは20cmである。

＜埋土＞6層に分層した。黒褐色土を主体に構成される。2層に灰白色のTo-aテフラと思われるものがブロックで混入している。3・4層に地山ブロックが多く混入する。また、底面付近に盛り上がったような状態で地山と黒褐色土の混合土が堆積していることなどから3・4層は人為堆積と考えられる。

＜底面・壁＞底面はIV層中で、ほぼ平坦であるが、一部凹凸が見られる。壁は外傾気味に立ち上がる。
 ＜遺物＞（第75図135・136、写真図版71）埋土から土師器壺破片852gが出土し、うち埋土中や底面から出土した805gを掲載した。

＜時期・性格＞出土遺物などから奈良時代と考えられる。何らかの理由で土器を廃棄した後に埋めたと思われるが、性格については不明である。 （本多）

RD043土坑（第42図、写真図版37）

＜位置・検出状況＞1K17wグリッドに位置する。検出面はIV層で、RA025竪穴住居跡の壁際から黒褐色の不整形プランとして検出した。付近はIV層まで削平され、本土坑も上面をかなり削平されているものと思われる。

＜重複関係＞RA025竪穴住居跡を切り、PP338柱穴状土坑に切られる。RA025竪穴住居跡より新しく、PP338柱穴状土坑より古い。

＜規模・平面形状＞平面形は不整形で、上面規模は $1.04 \times 0.72\text{m}$ である。

＜埋土＞黒～黒褐色土で、IV層起源の褐色土粒の多寡により3層に細分した。自然堆積か、人為堆積かは不明である。

＜底面・壁＞底面は疊層上面に達し、若干の凹凸がある。壁はやや内湾気味に立ち上がる。深さは12cmである。

＜遺物＞（第76図137、写真図版71）埋土から土師器（非内黒）壺破片40gが出土しており、1点23gを掲載した。

＜時期・性格＞土器は出土しているものの、削平のため層相もよくわからない。平安時代以降と思われる。

RD044土坑（第43図、写真図版38）

＜位置・検出状況＞1K22wグリッドに位置する。検出面はIV層で、黒褐色の楕円形プランとして検出した。

＜重複関係＞ない。

＜規模・平面形状＞平面形は楕円形で、開口部の規模は $1.23 \times 1.0\text{m}$ である。

＜埋土＞2層に細分したが、ほとんどが焼土粒を含む黒褐色土である。人為堆積の可能性がある。

＜底面・壁＞底面は疊層に達し若干の凹凸が認められる。壁は内湾気味に立ち上がる。深さは16cmである。埋土に焼土粒が残っていたことから壁、底面に焼成を受けた痕跡を探したが、確認できなかった。

＜遺物＞（第76図138、写真図版71）特に北半の埋土から土師器（内黒、非内黒）壺、土師器壺（ロクロ、非ロクロ）破片354gの土器が出土しており、うち1点88gを掲載した。

＜時期・性格＞出土遺物から平安時代と考えられるが、土坑内で焼成を行ったものか、他所で不要になった土器や焼土を廃棄したものか、不明である。

RD045土坑（第43図、写真図版38）

＜位置・検出状況＞1K16yグリッド付近に位置する。検出はRA027竪穴住居跡を精査中に床面で土坑のあることに気づいたことによる。埋土と周辺土壤の区別がつきにくく、精査時も東壁を掘りすぎている。また、RD052土坑、PP314柱穴状土坑と接しており、さらに上面では重複していると思われるが新旧関係は分からなかった。

＜重複関係＞検出はRA027竪穴住居跡の床面であるが、本土坑の埋土上層とRA027竪穴住居跡の埋土がややグライ化していたために、埋土上では気づかなかったと思われる。本土坑が竪穴住居跡より新しいと考えられる。PP314柱穴状土坑、RD052土坑との新旧は不明である。

＜規模・平面形状＞平面形は梢円形で、規模は $1.05 \times 0.73\text{m}$ である。

＜埋土＞しまりのある黒褐色土で、礫を含む。礫の多寡で2層に細分され、下層は礫を非常に多く含む。自然堆積か、人為堆積かは不明であるが、周辺の同規模の柱穴状土坑と性質が似通っている。

＜底面・壁＞断面形は逆台形で、検出面からの深さは 53cm である。礫層を掘り込んでいるため、底面、東壁は凹凸がある。

＜遺物＞埋土最上層から土師器壺破片 23g が出土しているが、細片のため図示できなかった。

＜時期・性格＞規模から土坑として報告したが、柱穴の可能性もある。柱穴とした場合の並びは確認できなかった。周辺柱穴及びRB013掘立柱建物跡と同様、近世末～近代に属すると思われる。

RD046土坑（第43図、写真図版38）

＜位置・検出状況＞調査区南端の2K2sグリッドに位置する。検出面はIV層で、黒褐色の隅丸方形プランとして検出した。南壁の一部に木の根の擾乱を受けている。

＜重複関係＞ない。

＜規模・平面形状＞平面形は東西方向に長軸をとる隅丸長方形で、規模は $1.54 \times 0.90\text{m}$ である。

＜埋土＞底面及び壁際に壁の崩壊土である灰黄褐色土が堆積するが、ほかはIV層起源の褐色土粒を含むしまりのない黒褐色シルトである。自然堆積と思われる。

＜底面・壁＞底面はIV層中で、平坦である。壁は外傾して立ち上がり、深さは 20cm である。断面形は逆台形である。

＜遺物＞出土遺物はない。

＜時期・性格＞出土遺物はないが、埋土の様相から古代に属すると考えられる。性格は不明である。

RD047土坑（第43図、写真図版38）

＜位置・検出状況＞調査区南端の2K1vグリッドに位置する。検出面はIV層で、黒褐色の梢円形プランとして検出した。

＜重複関係＞ない。

＜規模・平面形状＞平面形は南北方向に長軸をとる梢円形で、規模は $1.76 \times 1.40\text{m}$ である。

＜埋土＞粘性のある黒褐色土が主体であるが、南側壁際～底部直上に微細な焼土粒を含む。自然堆積の層相を示す。

＜底面・壁＞底面は南側ほど深く、北側は浅い。礫層まで達しており、全体に凹凸がある。底面の南寄りに焼土が形成されている。壁は南側が急で、北側はごく緩やかに立ち上がる。深さは 25cm である。

＜遺物＞（第76図139、写真図版71）埋土から須恵器壺、土師器（内黒、非内黒）壺、土師器壺破片 141g の土器が出土し、うち1点 18g を掲載した。また、埋土から礫1点 126g が出土した。

＜時期・性格＞出土遺物から平安時代に属し、焼土の形成状況から焼成土坑と考えられる。

RD048土坑（第43図、写真図版39）

＜位置・検出状況＞調査区北東の土壘上、1K8yグリッドに位置する。

＜重複関係＞RA026竪穴住居跡と重複し、本土坑が新しい。また土壘上に構築されていることから、

土壘より新しい。

＜規模・平面形状＞平面形は東西方向に長軸をとる楕円形で、規模は1.34×1.09mである。

＜埋土＞しまりのないボロボロの黒褐色土で、埋め戻されている。

＜底面・壁＞断面形は箱形で、底面はほぼ平坦である。壁面は急に立ち上がる。南側は土壘の傾斜下で壁高は浅い。底面は平坦である。

＜遺物＞中コンテナ1箱分の馬骨が出土した。そのほかの遺物はない。

＜時期・性格＞埋土の層相から近現代以降と思われ、ウマの墓と考えられる。 (金子)

RD049土坑（第44図、写真図版39）

＜位置・検出状況＞調査区北東よりの1L6bグリッド付近に位置する。検出面はV層で黒褐色土の広がりとして検出した。当初はRD050土坑として精査していたが、断面観察によって土坑に登録したものである。

＜重複関係＞RD050土坑に切られる。

＜規模・平面形状＞平面形は不整形を呈し、規模は長軸1.65×短軸1.37m、深さは最深部で17cmである。

＜埋土＞黒褐色土の単層である。小礫が多く混入する。

＜底面・壁＞底面は疊層中で中央部分がやや陥る。壁は緩やかに外傾して立ち上がる。

＜遺物＞埋土上位から土師器壺破片13g、上位～中位から76gの陶磁器が出土した。

＜時期・性格＞明確な時期は不明だが、重複関係からRD050土坑よりも古い。ただ、遺構の形状等が明瞭でないこと埋土の状況などから地形的な窪みの可能性も否めない。

RD050土坑（第44図、写真図版39）

＜位置・検出状況＞調査区北東よりの1L6aグリッド付近に位置する。検出面はV層で黒褐色土の広がりとして検出した。

＜重複関係＞RD049土坑を切る。

＜規模・平面形状＞平面形はほぼ円形を呈し、規模は2.25×2.28m、深さは39cmである。

＜埋土＞6層に分層した。黒褐色土を主体としたレンズ状の自然堆積と思われる。2層は4層まで埋まった時点で土壘から崩れ落ちてきた土か壁が崩落した土と考えられるが、どちらかは判断が付かなかった。6層は地山のブロックが他の層になく混入しており人為堆積の可能性もある。

＜底面・壁＞底面は疊層中でほぼ平坦である。壁は概ね外傾気味に立ち上がる。

＜遺物＞（第101図413、写真図版88）埋土上位より413の肥前産磁器が出土している。

＜時期・性格＞検出状況、出土遺物などから江戸時代後期以降のものと思われるが、性格については不明である。

RD051土坑（第44図、写真図版40）

＜位置・検出状況＞調査区東側の1L13bグリッド付近に位置する。検出面はIV層である。黒褐色の広がりとして検出した。東側の大部分をかく乱により削られている。

＜重複関係＞ない。

＜規模・平面形状＞全容は不明だが、残存部から楕円形を呈すると推測される。規模は0.68以上×2.1m、深さは13cmである。

＜埋土＞3層に分層した。黒褐色土を主体としたレンズ状の自然堆積と考えられる。2・3層に地山

ブロックが混入するが、埋没過程で入り込んだと推測される。

＜底面・壁＞底面はIV層中ではほぼ平坦である。壁は外傾気味に立ち上がる。

＜遺物＞（第76図140・141、写真図版71）490gの土器が出土し、すべてを掲載した。140の壺と141の甕は底面より出土している。

＜時期・性格＞出土遺物から古墳時代末頃と考えられる。焼土などの痕跡も無く断定はできないが住居跡の一部だった可能性も考えられる。（本多）

RD052土坑（第43図）

＜位置・検出状況＞調査区東側の1L16aグリッドに位置する。本土坑はRA027堅穴住居跡と重複しているが、住居跡の埋土及び本土坑の埋土上層はグライ化しており区別するのが困難であった。本土坑はRA027堅穴住居跡の埋土を除去した床面でRD045土坑とともに認識したが、おそらく住居跡の埋土上で検出すべきものであったと考えられる。床面ではRD045土坑と本土坑は区別できず、当初一体の土坑と考えて埋土の除去を行ったが、精査の段階で2基と認識されたものである。また、規模からRB013掘立柱建物跡のような建物を構成する柱穴の可能性も考えられたが、対応する柱穴が見つからなかったことから、今回は土坑として報告する。

＜重複関係＞RD045土坑、PP314柱穴状土坑と接しているが、新旧関係は明らかでない。また、RA027堅穴住居跡と重複し、本土坑が新しいと考えられる。

＜規模・平面形状＞平面形は東西に長軸をもつ不整形で、規模は1.54×0.70mである。西側はPP314柱穴状土坑と南側はRD045土坑と切りあっており、形状は正確には不明である。東側が梢円形に一段深く、西側は浅い。

＜埋土＞黒褐色土主体で、RD045土坑と類似しており、精査中に区別するのは困難であった。自然堆積か、人為堆積かは不明であるが、周囲のRB013掘立柱建物跡の柱穴と似通っている。

＜底面・壁＞底面は東側の深い部分は平坦であるが、西側に向かい一段上がって、徐々に緩やかに立ち上がる。東側の横断面は壁が直立気味の逆台形、西側横断面は半円形である。底面、壁面ともに礫層中である。検出面からの深さは最深部で44cmである。

＜遺物＞（第76図142、写真図版72）埋土中から土師器（非内黑）壺、土師器甕破片82gが出土しており、うち142の土師器壺1点37gを掲載した。

＜時期・性格＞埋土の様相から近世末から近現代に属する。性格は不明であるが、掘立柱建物跡を構成する柱穴の可能性もある。

RD053土坑（第44図、写真図版40）

＜位置・検出状況＞調査区北側の1K8!グリッドに位置する。付近は段丘の北端際で曲輪造成により、切土されており、土坑は曲輪北端の土塁直下にある。この付近は大きな現代の擾乱によって土塁が削平され、その埋土を除去したところ、壁際に炭層、焼土層をもつ土坑断面を検出したことによる。本土坑の南側は擾乱により破壊されている。検出面は土塁が削平された後のIV層である。

＜重複関係＞RZ018土塁直下に位置し、土塁よりも古い。

＜規模・平面形状＞平面形は不整な梢円形で、上面の径は残存位置で2.25mである。

＜埋土＞埋土の最上層と使用面の直上はII層及びIV層の粒を含む黒褐色土で埋め戻されている。埋土中位は自然堆積の層相を示す。

＜底面・壁＞底面から壁際に現地性の焼土層（5層）が形成されている。最大で3cmの厚さがある。

底面には炭粒、炭粉を含む炭化物層（6層）が約1～2cmの厚さに形成されている。底面北側の壁際が特に厚い。底面は平坦で、壁はいったん直立気味に立ち上がったのち開口部で開く。炭化物層を除去すると掘り方で、細かい凹凸はあるものの平坦である。深さは45cmである。

＜遺物＞（第76・85図143・151、写真図版72）埋土上層及び検出面から92g、埋土下層から81g、掘り方から4gの計177gの土器が出土した。器種は須恵器甕、土師器（内黒、非内黒）壺、甕（ロクロ、非ロクロ）である。うち埋土下層から出土した143の須恵器甕破片1点38gを掲載した。また、埋土上層から482の板状鉄製品が出土している。

＜時期・性格＞出土遺物から平安時代に属すると考えられ、土坑内で焼成を行っていることから焼成土坑に分類される。

RD054土坑（第45図、写真図版39）

＜位置・検出状況＞調査区北側の1K11kグリッドに位置する。東側の壁の一部は、攪乱によって破壊されている。本土坑はRA032竪穴住居跡と重複しており、住居跡の埋土精査中に住居跡の埋土を切る土坑として検出した。

＜重複関係＞RA032竪穴住居跡、RF014溝跡の北壁と重複し、本土坑が新しい。

＜規模・平面形状＞南北方向に長軸をもつ長円形で、径は1.47×0.82mである。

＜埋土＞埋土上層は土坑と気づかず除去したため不明であるが、下層はIV層粒及び焼土粒を斑に含む黒褐色土である。埋め戻されている可能性もある。

＜底面・壁＞底面は平坦で、壁は直立気味に立ち上がる。深さは43cmである。埋土中に焼土粒を含んでいるが、壁、底面に焼土の形成や被熱した痕跡はない。

＜遺物＞ない。

＜時期・性格＞埋土の様相から比較的新しいと考えられるが、具体的には不明である。

RD055土坑（第45図、写真図版40）

＜位置・検出状況＞調査区中央からやや北側の1K14jグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。周辺には木根と思われる攪乱が多数あり、本土坑も壁が破壊されている。

＜重複関係＞ないが、北側と東側を攪乱で破壊されている。

＜規模・平面形状＞楕円形と思われ、径は残存値0.44mである。

＜埋土＞IV層起源の褐色土粒を含む黒褐色シルトの単層である。人為堆積かどうかは判断できなかつた。

＜底面・壁＞底はやや南東側に傾斜する。壁は若干外傾して立ち上がる。壁高は18cmである。

＜遺物＞（第76図144・145、写真図版72）577gの土器が出土し、すべて掲載した。埋土中位から144の土師器壺、上層から145の須恵器長頸瓶が出土した。145はRD064土坑出土の破片と接合している。平面図は土師器壺、断面図は長頸瓶の出土状況である。

＜時期・性格＞平安時代に属すると考えられる。長頸瓶と壺が出土したことにより、これらの遺物が藏骨器と蓋で、土坑は墓の可能性もあるかと思われたが、それを裏付けるような出土状況ではなかつた。

RD056土坑（第45図、写真図版41）

＜位置・検出状況＞調査区中央からやや西寄りの1K15iグリッド周辺に位置する。RD057土坑の西側

である。検出面はⅢ層である。

＜重複関係＞PP9柱穴状土坑に切られている。

＜規模・平面形状＞南北方向に長軸をもつ隅丸の長方形で、規模は $1.80 \times 1.16\text{m}$ である。

＜埋土＞炭粒やIV層粒を含む黒褐色シルトで、自然堆積である。

＜底面・壁＞掘り方は南側が一段深い。北側は緩やかに上昇し、壁が立ち上がる。主に南側の深い部分をIV層粒を含む黒褐色シルトで埋め戻し、平坦な底面を形成している。南寄りの底面に現地性の焼土が形成されている。厚さは5cmである。壁はやや外反気味に立ち上がる。深さは検出面から13cm、掘り方までは約30cmである。

＜遺物＞（第76図146～148、写真図版72）埋土上層から土師器（非内黒）坏、土師器壺、土師器鉢の破片が169g、中位から土師器（内黒）坏、壺破片が151g、南壁際から土師器鉢破片17gの計337gの土器が出土した。すべてを掲載した。

＜時期・性格＞146は流れ込みの可能性があり、他の2点の出土遺物から、奈良時代に属する可能性が高い。

RD057土坑（第45図、写真図版41）

＜位置・検出状況＞調査区中央の1K15jグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。東側にRD058土坑が隣接する。周辺は木根の搅乱が多い。

＜重複関係＞重複していない。

＜規模・平面形状＞不整な円形で、径 $0.72 \times 0.56\text{m}$ である。

＜埋土＞上層はIV層起源の褐色土粒を含む黒褐色土、下層はⅡ層起源の黒色土粒を含む暗褐色土である。いずれも自然堆積と考えられる。

＜底面・壁＞底面は緩やかに内湾し、壁も緩やかに外傾して立ち上がる。深さは14cmである。

＜遺物＞ない。

＜時期・性格＞時期は不明である。木根の可能性もあるが区別できなかった。

RD058土坑（第45図、写真図版41）

＜位置・検出状況＞調査区中央の1K15kグリッド周辺に位置する。検出面はⅢ層中である。本土坑の北側、東側には木根による搅乱が集中している。本土坑の西側にRD057土坑がある。

＜重複関係＞PP184・10柱穴状土坑と重複しており、本土坑が古い。

＜規模・平面形状＞不整形で、径 $2.50 \times 1.44\text{m}$ である。

＜埋土＞黒褐色土で、含まれるIV層起源の褐色土粒の多寡で2層に細分される。自然堆積と考えられる。

＜底面・壁＞底面は礫層に達する。おおむね平坦で、壁は外傾して立ち上がる。東側の整礫層のため凹凸がある。深さ38cmである。

＜遺物＞埋土から土師器（内黒、非内黒）坏、土師器壺（非ロクロ）、須恵器壺破片の228gの土器が出土したが、小片で図化できなかった。

＜時期・性格＞出土遺物と埋土の様相から、古代の可能性がある。

RD059土坑（第45図、写真図版42）

＜位置・検出状況＞調査区中央の1K15lグリッド周辺に位置する。検出面はⅢ層中である。東側と南

側の一部を搅乱に切られており、壁が失われている。

＜重複関係＞PP186・187柱穴状土坑に切られており、本土坑が古い。

＜規模・平面形状＞やや胴の張った隅丸長方形で、長軸方向は北西～南東方向である。規模は長軸が3.85m、短軸が残存値で1.77mである。

＜埋土＞壁際底面の一部には混入物の少ない黒色土が堆積するが、他は黒褐～暗褐色土で、IV層粒の混入割合で4層に細分した。堆積状況はレンズ状であるが、層相はIV層起源の褐色土とII層起源の黒色土が斑に混入しており、埋め戻しの可能性が高い。

＜底面・壁＞底面は一部礫層に達するが、おおむね平坦である。壁は外傾～内湾気味に立ち上がる。深さは20cmである。

＜遺物＞埋土上層から土師器（非内黒）坏、壺（非ロクロ）破片22g、下層から土師器壺（非ロクロ）13gの土器が出土したが、小片で団化に至っていない。

＜時期・性格＞埋土の状況、出土遺物から古代と考えられるが、性格は明らかでない。

RD060土坑（第47図、写真図版42）

＜位置・検出状況＞調査区中央からやや西寄りの1K17iグリッド周辺に位置する。検出面はⅢ層である。

＜重複関係＞ない。

＜規模・平面形状＞いびつな長円形で、規模は1.52×0.62mである。

＜埋土＞IV層起源の褐色土粒を含む黒色土の単層で、自然堆積である。

＜底面・壁＞底面は平坦～やや内湾気味で、壁も内湾気味に立ち上がる。深さは14cmである。

＜遺物＞ない。

＜時期・性格＞層相から古代より新しいと思われるが、具体的には不明である。

RD061土坑（第46図、写真図版43）

＜位置・検出状況＞調査区中央の1K17kグリッド周辺に位置する。検出面はⅢ層である。

＜重複関係＞RD062土坑を本土坑が切っており、本土坑の方が新しい。なお、RD062土坑は本土坑南側のRD063土坑にも切られている。

＜規模・平面形状＞東西に長軸を持ついびつな隅丸長方形で、規模は3.16×1.34mである。

＜埋土＞IV層起源の褐色土粒をやや多く含む黒褐色土で、埋め戻しと考えられる。

＜底面・壁＞底面は礫層が露出するが、ほぼ平坦である。東側は一段高くなっているが、形状も東と北側にひろがる。低い方の底面は比較的形の整った隅丸長方形であり、底面が高い部分は別の土坑で、2基の土坑が重複しているようにも思われたが、埋土に違いがなく一気に埋め戻されたような単層であることから、同一の土坑としてあつかった。

＜遺物＞埋土から土師器（非内黒）坏、土師器壺（非ロクロ）の破片162gの土器が出土したが、小片で団化に至らなかった。

＜時期・性格＞出土土器から平安時代と思われる。

RD062土坑（第46図、写真図版43）

＜位置・検出状況＞調査区中央の1K18jグリッド周辺に位置する。検出面はⅢ層である。

＜重複関係＞RD061・063土坑、PP24・27・28・79・188・189柱穴状土坑と重複し、いずれよりも古い。

<規模・平面形状>重複があるので、全容は明らかでないが南北に長軸を持つ隅丸長方形と見られる。規模は $3.10 \times 1.58\text{m}$ である。

<埋土>上層は混入物の少ない黒～黒褐色土で自然堆積と思われる。下層はIV層起源の褐色土とII層起源の黒色土が斑に混合する黒褐色土で、埋め戻しと思われ、南側に厚い。西壁際に壁の崩壊土が部分的に堆積する。

<底面・壁>底は平坦で、礫層上面まで達する。壁は底面から丸みを持って立ち上がり、外傾する。深さは24cmである。

<遺物>（第76・77図73・149、写真図版66・72）埋土から土師器（内黒、非内黒）坏、土師器壺（非ロクロ）、須恵器壺の破片428gが出土しており、うち2点365gを掲載した。73はRA026竪穴住居跡から出土した破片と接合したものである。

<時期・性格>出土土器から平安時代と考えられるが、性格は不明である。

RD063土坑（第46図、写真図版44）

<位置・検出状況>調査区中央の1K18kグリッド周辺に位置する。本土坑の南側は現代の住宅の搅乱によって上面が削られている。

<重複関係>RD062土坑を切り、本遺構が新しい。

<規模・平面形状>東西に長軸を持つ隅丸の長方形で、規模は $3.56 \times 2.24\text{m}$ である。

<埋土>黒褐色土が主体で8層に細分される。下層壁際には自然堆積と思われる混入物の少ない黒色土が堆積する。中層～上層はII層起源の黒色土ブロック、IV層起源の褐色土ブロックが斑に混合する黒褐色土や焼土ブロックを斑に含む廃棄土で埋め戻されている。上層には炭片も含まれる。

<底面・壁>底面は平坦で、RD062土坑との間に段差はない。ともに底は礫層の上面まで達する。壁はやや内湾気味に立ち上がる。

<遺物>（第77図150～152、写真図版72）主に埋土上層から土師器（内黒、非内黒）坏、高台付坏、壺（非ロクロ）、須恵器坏、須恵器壺の破片370gが出土している。うち3点108gを掲載した。

<時期・性格>出土遺物から平安時代に属すると考えられる。焼成土坑の可能性もあるが、焼土が二時堆積のものであることから、可能性を指摘するにとどめたい。

RD064土坑（第47図、写真図版42）

<位置・検出状況>調査区中央からやや西側の1K20gグリッド周辺に位置する。RA033竪穴住居跡と重複している。周辺には風倒木痕の黒色土があり、当初は本土坑の存在に気づかなかつたが、RA033竪穴住居跡の埋土を精査中に住居跡を切って構築されている本土坑を検出した。

<重複関係>RA033竪穴住居跡と重複し、本土坑が新しいと思われる。

<規模・平面形状>当初存在に気づかなかつたため、本土坑の北東部は不明であるが、残存部分～北東～南西に長軸を持つ長楕円形と推測される。規模は $1.61 \times 1.22\text{m}$ である。

<埋土>炭粒、焼土粒、IV層起源の褐色土粒を含む黒～黒褐色土が主体で3層に細分される。自然堆積と思われる。

<底面・壁>底面は平坦で壁は内湾気味に立ち上がる。南側の壁面の一部に焼土が形成されている。厚さは4～5cmである。深さは検出面から22cmである。

<遺物>（第77図64・145、写真図版65・72）主に埋土下層から62gの土器破片が出土した。器種は土師器（内黒、非内黒）坏、土師器（非内黒）高台付坏、土師器壺（非ロクロ）、須恵器壺である。う

ち2点、30gを掲載した。64はRA025竪穴住居跡から出土した破片と、145はRD055土坑から出土した破片と接合したものである。

＜時期・性格＞出土遺物と埋土の様相から平安時代に属し、焼土の形成から焼成土坑と考えられる。

RD065土坑（第47図、写真図版44）

＜位置・検出状況＞調査区中央からやや南寄りの1K21jグリッド周辺に位置する。検出面はⅢ層である。

＜重複関係＞RB011掘立柱建物跡のPP130、PP22柱穴状土坑と重複し、本土坑が新しい。

＜規模・平面形状＞東壁がやや崩れた隅丸長方形で、長軸は東西にもつ。規模は2.55×1.07mである。

＜埋土＞東側壁際に窓の崩壊土が若干堆積するほかはⅡ層起源と思われる黒褐色土粒、Ⅳ層起源の褐色土ブロックを斑に含む黒褐色土の単層で一気に埋め戻したような層相である。

＜底面・壁＞底は平坦である。壁はいたん直立気味に立ち上がり、開口部でやや開く。深さは30cmである。

＜遺物＞埋土から土師器壺、須恵器壺、須恵器大甕の破片167gが出土したが、小片で図化に至らなかつた。

＜時期・性格＞埋土にTo-aテフラ粒を含むRB011掘立柱建物跡を構成する柱穴を切っていることから、To-aテフラ降下以後の平安時代と考えられる。また、埋土の状況から墓壙の可能性が高い。

RD066土坑（第47図、写真図版45）

＜位置・検出状況＞調査区中央からやや南寄りの1K22iグリッド周辺に位置する。検出面はⅢ層である。

＜重複関係＞RB011掘立柱建物跡のPP67と重複しているが、精査の際にRB011の存在に気づかなかつたため新旧関係は明らかにできなかつた。

＜規模・平面形状＞東西に長軸を持つ楕円形で、径が1.93×1.37mである。

＜埋土＞上層は焼土粒を含む黒色土、下層は焼土と炭粒を含む黒褐色土で、自然堆積と思われる。底面からやや浮いた状態で炭も出土した。

＜底面・壁＞底面は平坦であるが、西側が少し浅い。壁は直立気味である。東側と南側の窓の一部に焼土が形成されている。現地性であるが薄く、うっすらと焼けている程度である。深さは33cmである。

＜遺物＞（第78図153、写真図版72）埋土上層から土師器（非内黒）壺、甕（非ロクロ）の破片26g、下層から土師器（内黒、非内黒）壺、非内黒高台付壺、甕（非ロクロ）の破片38gが出土し、埋土上層から出土した153の1点16gを掲載した。

＜時期・性格＞RB011掘立柱建物跡との新旧関係が不明であるが、出土遺物から平安時代に属し、焼土の形成から焼成土坑と考えられる。

RD067土坑（第47図、写真図版45）

＜位置・検出状況＞調査区中央からやや南寄りの1K23jグリッド周辺に位置する。不整形のプランで、当初は木根の擾乱と考えていたが、埋土除去中に壁及び底面に焼土が検出され、土坑と認識した。検出面はⅢ層である。

＜重複関係＞RE006竪穴状造構と重複し、本土坑が新しい。

5 土坑

<規模・平面形状>北西～南東に長軸を持つ不整形で、径は1.68×1.00mである。

<埋土>IV層起源の褐色土粒を含む黒色土である。

<底面・壁>底は若干の凹凸があり内湾気味である。西側が深く、東側が浅い。立ち上がりは西壁を除いて外傾～内湾気味、西壁は緩やかにだらだらとしている。壁際及び底面に部分的に厚さ1cmほどの薄い焼土が形成されている。

<遺物>埋土から10gの土師器甕（非ロクロ）小片が出土したが、図化に至らなかった。

<時期・性格>埋土の様相と出土遺物から平安時代に属し、焼成土坑と考えられる。

RD068土坑（第47図、写真図版45）

<位置・検出状況>調査区南側の1K23mグリッド周辺に位置する。検出面はⅢ層である。

<重複関係>ない。

<規模・平面形状>南北にやや長い隅丸の長方形で、規模は1.48×1.43mである。

<埋土>墨～黒褐色土が主体で、2層にはTo-aテフラの粒を含む。底面～壁際には壁のIV層崩壊土が堆積する。すべて、自然堆積と思われる。

<底面・壁>底面は平坦で、壁は外傾～直立して立ち上がる。深さは11cmである。

<遺物>埋土から土師器（非内黒）坏、高台付坏、須恵器坏、須恵器甕の破片122gが出土したが、小片で図化に至らなかった。

<時期・性格>出土遺物と埋土中に含まれるTo-a粒から平安時代と考えられる。性格は不明である。

RD069土坑（第47図、写真図版45）

<位置・検出状況>調査区南側の1K25iグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。

<重複関係>ない。

<規模・平面形状>平面形は南北に長軸を持ち、北辺が南辺より長い隅丸の台形である。規模は1.94×1.54mである。

<埋土>黒色土が主体で、下層には炭粒を少量含む。3層に細分した。北壁際に撹乱が入る。

<底面・壁>底面は北側が深く、南側が浅くだらだらと立ち上がる。北の壁面は内湾して立ち上がるが、木の根の搅乱により若干抉れている部分がある。深さは最深部で26cmである。主に北西隅の壁面に焼土が形成されている。

<遺物>（第78図154、写真図版72）埋土から土師器甕（非ロクロ）破片119gが出土し、うち1点55gを掲載した。

<時期・性格>出土遺物と埋土の様相から平安時代の焼成土坑と考えられる。

RD070土坑（第47図、写真図版46）

<位置・検出状況>調査区南西端2K2gグリッド周辺に位置する。検出面はⅢ層である。

<重複関係>ない。

<規模・平面形状>南北に長軸を持つ梢円形で、径1.30×0.93mである。

<埋土>上層は混入物の少ない黒色土、下層は焼土やIV層起源の褐色土粒を含む黒褐色土である。南側壁際には壁の崩壊土が堆積する。自然堆積の層相を示す。

<底面・壁>底面は北側が深く、南側が浅い。緩やかな起伏がある。底面南側の浅い部分に焼土が形成されている。焼土の厚さは2～4cmである。壁は南側を除き緩やかに外反気味に立ち上がる。南側

は外傾している。深さは28cmである。

＜遺物＞埋土から土器器窓（非ロクロ）破片39gが出土したが、小片のため図化していない。

＜時期・性格＞埋土の様相から古代に属し、焼土の形成から焼成土坑と考えられる。（金子）

RD071土坑（第48図、写真図版46）

＜位置・検出状況＞調査区北側の1K9f付近に位置する。当初はRD072土坑として精査中に断面等の観察から土坑として認定したものである。

＜重複関係＞RD072土坑に切られる。

＜規模・平面形状＞平面形はほぼ円形を呈し、規模は1.14×1.26m、深さは最深部で80cmである。

＜埋土＞3層に分層した。2層は地山ブロックが混入する人為堆積の土で、1・3層は黒褐色土を主体とした土で自然堆積の様相を呈しているが、1層は全体的に締まりがなく軟らかな土であることから、陥没した土と考えられる。3層は骨片等が出土しており、棺桶が腐食した層と推測される。

＜底面・壁＞底面は礫層中でほぼ平坦である。壁は、南側は外傾気味に立ち上がり、北側は直立気味に立ち上がる。

＜遺物＞（第103・104図439・448～450・483、写真図版89・90・92）棺桶底板の一部、四肢の一部と思われる人骨と骨片が出土している。副葬品は444の鏡、448～450の埋管が底面付近より出土している。また、埋土下位から土器器窓（非内黒）壺、土器器窓（非ロクロ）破片12gと溶岩が出土したが、流れ込みであろう。

＜時期・性格＞出土遺物から18世紀中葉以降の土葬墓と考えられる。

RD072土坑（第48図、写真図版46）

＜位置・検出状況＞調査区北側の1K9fグリッド付近に位置する。検出面はⅡ層である。土壘斜面上に黒褐色の楕円形の広がりとして検出した。

＜重複関係＞RD071土坑を切る。

＜規模・平面形状＞平面形はほぼ円形を呈すると思われ、規模は1.13×0.62m以上と推測される。深さは一番深い所で110cmである。

＜埋土＞3層に分層した。黒褐色土主体で1層は全体的に締まりがなく陥没した土と考えられ、2・3層は壁が崩落した土と思われる。

＜底面・壁＞底面は砂礫層中でやや凹凸が見られる。壁は底面から内湾気味に立ち上がり、中程から直立気味に立ち上がる。北壁はRD071土坑と重複しており明瞭ではない。

＜遺物＞（第103図440～442、写真図版89）頭蓋骨と人骨の一部が底面から出土している。副葬品は出土していないが、重複するRD071土坑に混入した可能性も考えられる。

＜時期・性格＞重複関係などから18世紀中葉以降の土葬墓と考えられる。

RD073土坑（第48図、写真図版47）

＜位置・検出状況＞調査区北側の1K8fグリッド付近に位置する。検出面はV層である。当初、土壘斜面上にRD074土坑として検出したものだが、精査中に断面の観察から別土坑として登録したものである。

＜重複関係＞RD074土坑に切られる。

＜規模・平面形状＞平面形は円形を呈し、規模は0.80×0.74m、深さは最深部で51cmであるが、

RD074土坑に切られているため本来はもっと深かったと思われる。

＜埋土＞2層に分層した。黒褐色土主体で自然堆積の様相を呈しているが、締まりのないやわらかい土であることから陥没した土と考えられる。2層中に小礫が混入しているが人為的なものかは判断が付かなかった。

＜底面・壁＞底面は砂礫層中ではほぼ平坦である。壁は外傾気味に立ち上がる。

＜遺物＞出土していない。

＜時期・性格＞検出状況、重複関係などから18世紀中葉以降の近世の墓と推測される。

RD074土坑（第48図、写真図版47）

＜位置・検出状況＞調査区北側の1K9fグリッド付近に位置する。検出面はV層である。土壌斜面上に黒褐色の楕円形の広がりとして検出した。

＜重複関係＞RD072・071土坑に切られ、RD073・076土坑を切る。

＜規模・平面形状＞切り合いが多いため全容は明瞭ではないが、残存部からほぼ円形を呈すると推測される。規模は $0.87 \times 0.76\text{m}$ 以上、深さは最深部で76cmである。

＜埋土＞4層に分層した。自然堆積の様相を呈しているが、全体的に締まりがなく軟らかな土であるため、おそらく陥没した際にこのような堆積になったと思われる。2層は人為堆積か壁の崩落土か判断が付かなかった。

＜底面・壁＞底面は砂礫層中ではほぼ平坦である。壁は直立気味に立ち上がる。

＜遺物＞出土していない。

＜時期・性格＞重複関係などから18世紀中葉以降の近世の墓と推測される。

RD075土坑（第48図、写真図版47）

＜位置・検出状況＞調査区北側の1K8fグリッド付近に位置する。検出面はV層である。土壌斜面下方に暗褐色の円形プランとして検出した。

＜重複関係＞RD076土坑を切る。

＜規模・平面形状＞平面形は楕円形を呈し、規模は長軸 $0.92 \times$ 短軸 0.70m 、深さは最深部で61cmである。

＜埋土＞2層に分層した。黒褐色土を主体とした自然堆積の様相を呈しているが、1層は全体的に締まりがなくやわらかい土であることから陥没した土と考えられる。2層は粘性があり、棺桶が腐敗した層と推測される。

＜底面・壁＞底面は礫層中でやや凹凸がある。壁は北壁が内傾気味にそれ以外の壁は外傾気味に立ち上がる。

＜遺物＞（第104図454、写真図版91）底面から人歯が数点と454の寛永通宝が1点出土している。

＜時期・性格＞副葬銭から18世紀中葉以降の土葬墓と考えられる。

RD076土坑（第48図、写真図版47）

＜位置・検出状況＞調査区北側の1K9gグリッド付近に位置する。RD075土坑を精査中、南壁に黒褐色土のプランとして検出したものである。

＜重複関係＞RD075土坑に切られる。

＜規模・平面形状＞平面形は隅丸方形状を呈し、一辺の長さは $1.16 \times 1.10\text{m}$ 、深さは最深部で154cmである。

＜埋土＞大部分は棺桶が腐った後上部の土が崩れないままに空洞化し、陥没した形跡がない状態であった。底面から30cmほどは砂礫と黒色土が堆積しており、埋葬の際の埋め土や棺桶が腐食した土と考えられる。

＜底面・壁＞底面は砂礫層中で、ほぼ平坦である。壁は直立気味に立ち上がる。

＜遺物＞（第103図443・451、写真図版89・90）底面付近から四肢の一部と思われる人骨、骨片、棺桶の底板の一部、埋土下位から443の陶磁器片、底面から451a・451bの煙管が出土している。

＜時期・性格＞検出状況、出土遺物などから18世紀中葉以降の土葬墓と考えられる。

RD077土坑（第48図、写真図版48）

＜位置・検出状況＞調査区北側の1K9gグリッド付近に位置する。RD078土坑を精査中、南西壁に黒色土のプランとして検出したものである。

＜重複関係＞RD078土坑に切られる。

＜規模・平面形状＞RD078土坑との重複により全容は不明だが、残存部から平面形は隅丸方形を呈すると推測される。規模は一辺が0.73以上×0.75m、深さは最深部で95cmである。

＜埋土＞黒褐色土を主体としている。全体的に締まりがなく軟らかい土のため大部分が陥没した土であると推測される。底面には粘性のある黒色土が堆積しており、棺桶等が腐食した層と推測される。

＜底面・壁＞底面は礫層中でほぼ平坦である。壁は直立気味に立ち上がる。

＜遺物＞（第103・104図445・452・458～464、写真図版90・91）人骨の骨片、歯、458～464の寛永通宝が7点、445の鏡、452の煙管が底面付近から出土している。

＜時期・性格＞副葬鏡から18世紀中葉以降の土葬墓と考えられる。

RD078土坑（第48図、写真図版48）

＜位置・検出状況＞調査区北側の1K8gグリッド付近に位置する。検出面はⅢ～Ⅳ層である。土壌斜面下方に黒褐色の円形のプランとして検出した。

＜重複関係＞RD076・079土坑を切る。

＜規模・平面形状＞平面形はほぼ円形を呈し、規模は1.36×1.14m、深さは最深部で103cmである。

＜埋土＞3層に分層した。1層に混入している礫は人為的なものかは判断がつかなかった。主に黒褐色土を主体とした自然堆積の様相を呈しているが、全体的に締まりがなく軟らかな土であることから、陥没した土がこのように堆積したと推測される。3層は骨片等が出土しており、棺桶が腐食した層と思われる。

＜底面・壁＞底面は礫層中でほぼ平坦である。壁は直立気味に立ち上がり、北側壁の一部は外傾気味に立ち上がる。

＜遺物＞（第103・104図446・447・453・455～457、写真図版90・91）棺桶の底板の一部、四肢の一部と思われる人骨と骨片、455～457の寛永通宝が埋土中位から3点出土し、446・447の鏡が2点底面から出土している。寛永通宝については、RD077・079土坑と重複しており、それらの土坑から混入した可能性も否めない。

＜時期・性格＞副葬鏡から18世紀中葉以降の土葬墓と考えられる。

RD079土坑（第48図、写真図版48）

＜位置・検出状況＞調査区北側の1K9hグリッド付近に位置する。RD078土坑を精査中、南東壁に

プランを検出したものである。

＜重複関係＞RD078土坑に切られる。

＜規模・平面形状＞平面形は残存部からほぼ円形を呈すると推定され、規模は0.69以上×0.78m、深さは最深部で90cmである。

＜埋土＞黒褐色土を主体とし、全体的に縮まりがなく軟らかな土であることから陥没した土が堆積したものと思われる。底面付近は砂礫層と黑色土が堆積する。埋葬の際の埋め土、棺桶が腐食した土と考えられる。

＜底面・壁＞底面は砂礫層中でほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がる。

＜遺物＞（第104図466～468、写真図版91）底面付近より人骨の一部と思われる骨片、465～468の寛永通宝4点が出土している。

＜時期・性格＞副葬鏡から18世紀中葉の土葬墓と考えられる。

RD080土坑（第49図、写真図版48）

＜位置・検出状況＞調査区北側の1K9hグリッド付近、RA031堅穴住居跡内に位置する。検出面はIV層である。RA031堅穴住居跡精査中に床面付近に暗褐色土の広がりとして検出した。

＜重複関係＞RD077・079土坑に切られる。

＜規模・平面形状＞平面形は残存部から概ね楕円形を呈すると推測される。規模は0.72以上×1.98m、深さは26cmである。

＜埋土＞2層に分層した。残存部からは暗褐色土主体としたレンズ状の自然堆積であると思われる。RA031堅穴住居跡埋土に色調など酷似しているが縮まりがかなりある。

＜底面・壁＞底面は、礫層中では緩やかに湾曲している。壁は緩やかに立ち上がる。

＜遺物＞出土していない。

＜時期・性格＞遺物等が出土していないため不明だが、RA031堅穴住居跡の埋土断面に切りあいが確認できなかったことと埋土に縮まりがあることなどから床面として使用されていたと思われ、RA031堅穴住居跡よりも古い時期と考えられる。性格については不明である。

RD081土坑（第48・49図、写真図版48）

＜位置・検出状況＞調査区北側の1K8iグリッド付近に位置する。検出面はIV層で、黒褐色の楕円形のプランとして検出した。

＜重複関係＞ない。

＜規模・平面形状＞平面形は楕円形を呈し、規模は長軸1.20×短軸0.69m、深さは65cmである。

＜埋土＞黒褐色土と地山の明黄褐色土の混合土を主体とした人為堆積である。

＜底面・壁＞底面はIV層中で、ほぼ平坦である。壁は直立気味に立ち上がる。

＜遺物＞底部付近に漆の漆膜片と思われるものが微量に出土しているが、その他の遺物等は出土していない。

＜時期・性格＞人骨や遺物等の出土がないが埋土が人為堆積の様相を呈していることや形状などから墓と思われる。時期は不明だが墓を移設した際に埋め戻されたものと推測される。墓自体の時期については、形状等が他に検出している墓と異なることから時期差があることも考えられる。（本多）

6 竪穴状遺構

RE004竪穴状遺構（第50図、写真図版50）

＜位置・検出状況＞調査区中央付近の1K13qグリッド周辺に位置する。南側を現代の搅乱によって破壊されている。約0.6m東側にRE005竪穴状遺構がある。検出面はⅢ層である。

＜重複関係＞PP258・262・263と重複し、いずれよりも古い。

＜規模・平面形状＞方形で、2.40×2.25mである。

＜埋土＞黒褐色土が主体で3層に細分される。自然堆積と考えられる。

＜床面・掘り方・貼り床＞床面は平坦であるが、硬化面はない。掘り方はない。

＜壁＞外傾～外反気味に立ち上がる。壁高は28cmである。

＜遺物＞（第78図38・155、写真図版63・72）主に埋土上層から232gの土器が出土し、うちトレンチから出土した2点118gを掲載した。38はRA022竪穴住居跡検出面出土の破片と接合したものである。

＜時期・性格＞出土土器、埋土の様相から古代と考えられる。

RE005竪穴状遺構（第50図、写真図版50）

＜位置・検出状況＞調査区中央付近の1K14sグリッド周辺に位置する。南西側を現代の搅乱によって破壊されている。約0.6m西側にRE004竪穴状遺構がある。周辺は搅乱が多くⅣ層直上まで削られている。検出面はⅣ層である。

＜重複関係＞ない。

＜規模・平面形状＞搅乱により全容は不明であるが、楕円形基調と思われる。残存部分の径は2.22mである。

＜埋土＞炭粒とⅣ層起源の褐色土粒を含む黒褐色土の単層である。周囲の古代の遺構に比して粗く、新しいと思われる。

＜床面・掘り方・貼り床＞北側の壁際の一部に壁溝がある。深さは5cmである。壁際と搅乱によって削られた床面に小穴がある。深さは5～6cmである。床面は若干の凹凸があり、縦まっている。掘り方はない。

＜壁＞外傾して立ち上がる。南側は上面が他よりも多く削られており、だらだらと緩やかに立ち上がる。壁高は10cm前後である。

＜遺物＞埋土から12gの土器が出土したが、小片で図化できなかった。

＜時期・性格＞埋土の状況から比較的新しく、近代以降の可能性がある。

RE006竪穴状遺構（第50図、写真図版49）

＜位置・検出状況＞調査区南寄りの1K22kグリッド周辺に位置する。検出面はⅢ層である。

＜重複関係＞RD067土坑に南西隅が切られている

＜規模・平面形状＞長方形で、2.22×1.93mである。

＜埋土＞壁際に堆積する壁崩壊土の5層を除き、埋め戻されている。Ⅳ層起源の褐色土粒を含む黒褐色土で、褐色土粒の多寡で4層に細分した。上層にTo-aテフラ粒と炭粒を含んだ層がある。

＜床面・掘り方・貼り床＞床面は平坦で、しまっている。貼り床はない。

＜壁＞直立～内湾気味に立ち上がる。壁高は25cmである。

＜遺物＞埋土から48gの土器が出土したが、小片で図化に至らなかった。

＜時期・性格＞出土土器と埋土の様相から平安時代と考えられる。

7 燃土遺構

RF003燃土遺構（第51図、写真図版50）

＜位置・検出状況＞調査区東側の1K14yグリッドに位置する。周辺はIV層まで削平されており、本燃土遺構の検出面もIV層である。燃土と灰層として検出した。本燃土遺構の約3m東側にRF004・005燃土遺構、1.7m北にRF006燃土遺構がある。

＜重複関係＞RA027竪穴住居跡の北西コーナーを切っており、本燃土遺構が新しい。なお、本燃土遺構の位置はRB013掘立柱建物跡と重複している。同建物跡の検出した部分は台所と考えられ、本燃土遺構が掘立柱建物跡に伴うとすれば、土間、台所の北側寄りに位置する。

＜規模・平面形状＞円形の燃土と楕円形に形成された灰層である。灰層が燃土にかぶるように形成されている。規模は燃土が径52×45cm、灰層が36×27cmである。

＜埋土・燃土＞燃土は上下2層に細分され、上層は明赤褐色の砂質シルト、下層はにぶい黄褐色のシルトである。どちらも硬くしまる。現地性の燃土である。厚さは最大で8cmである。灰層はにぶい黄橙色で、硬くしまる。厚さは最大で3cm程度である。

＜遺物＞遺物は出土しなかった。土師器の細片が44.7g出土している。

＜時期＞時期を直接示すような遺物もなく不明である。しかし、周辺はRB013掘立柱建物などを建てる際にIV層まで削平して整地したことと考えられ、灰層を伴った本遺構の検出面がIV層であること、RB013掘立柱建物の範囲内にあることから、掘立柱建物跡に伴うカマドあるいはいろりのあとで近世末以降現代に属する可能性がある。

RF004燃土遺構（第51図、写真図版50）

＜位置・検出状況＞調査区東側の1L15aグリッドに位置する。周辺はIV層まで削平されており、本燃土遺構の検出面もIV層である。本燃土遺構の1.2m北にRF005燃土遺構が、約3m西にRF003燃土遺構がある。隅丸方形の燃土として検出した。北東隅を擾乱によって切られている。

＜重複関係＞RA027竪穴住居跡の北東コーナー、PP306柱穴状土坑を切っており、本燃土遺構が新しい。また、本燃土遺構はRB013掘立柱建物跡と重複している。建物を構成する柱穴と直接切りあってはおらず、建物の範囲内である。同建物跡の検出部分は土間か台所と考えられ、もし、建物跡に伴うものとすれば本燃土遺構は台所の北よりで東に隣接する部屋との境の壁に近い。

＜規模・平面形状＞隅丸方形の燃土であり、規模は45×42cmである。北西隅に小窓がある。

＜埋土・燃土＞暗赤褐色のシルトで、しまりがある現地性の燃土である。

＜遺物＞ない。

＜時期＞直接時期を示すものはない。本燃土遺構が、RB013掘立柱建物跡に伴うカマドやいろりなどのあとだとすれば近現代を含めた近世以降と考えられる。

RF005燃土遺構（第51図、写真図版51）

＜位置・検出状況＞調査区東側の1L14bグリッドに位置する。周辺はIV層まで削平されており、本燃土遺構の検出面もIV層である。本燃土遺構の1.2m南にRF004燃土遺構が、約3m西にRF003燃土遺

構がある。梢円形の焼土として検出した。

＜重複関係＞RB013掘立柱建物跡と重複している。建物を構成する柱穴と直接切りあつてはおらず、建物の範囲内である。同建物跡の検出部分は台所部分と考えられ、もし、建物跡に伴うものとすればRF004と同様本焼土遺構は台所の北より東に隣接する部屋との境の壁に近い。

＜規模・平面形状＞焼土が49×48cmの不整形に検出された。

＜埋土・焼土＞暗赤褐色の現地性と思われる焼土で、厚さは約4cmである。周辺に炭片等はない。

＜遺物＞出土遺物はない。

＜時期＞本焼土遺構が、RB013掘立柱建物跡に伴うカマドなどのあとだとすれば近現代を含めた近世以降と考えられる。

RF006焼土遺構（第37・51図、写真図版51）

＜位置・検出状況＞調査区東側の1K13xグリッドに位置する。周辺はIV層まで削平されており、本焼土遺構の検出面もIV層である。本焼土の1.7m南にRF003焼土遺構がある。西側を現代の攪乱に切られている。本焼土遺構は不整形の焼土とその上層に乗る灰層として検出したが、焼土周辺は土間のタタキのように硬化している。硬化範囲は西側と南側のI部を現代の攪乱に、東側をPP197・299、RB013掘立柱建物跡のPP121と接している。硬化部分柱穴より古いか、柱があるから硬化しなかつたのかは不明であるが、少なくともこれら柱穴より新しくはない。

＜重複関係＞RB013掘立柱建物跡と重複している。前述のように焼土周辺の硬化部分が柱穴より新しくはなく、同掘立柱建物跡と同時か、古い。掘立柱建物に伴うと考えた場合、焼土は台所部分の北壁よりに位置する。

＜規模・平面形状＞焼土は梢円形で残存部分が80以上×65cm、灰層が60×30cmである。硬化部分は方形と思われ、残存部分は1.6×1.35mである。

＜埋土・焼土＞赤褐色のしまった焼土の上にぶい黄褐色の灰層と赤褐色の焼土の混合層がのり、最上層に硬くしまった黒褐色土がのっている。焼土の厚さは最大で約6cm程度で、レンズ状に形成されている。灰層は3cm程度である。最上層には長さ約30cmの角柱状の礫が2本東西に長軸を置いて、二の字状に埋えられている。焼土周辺の硬化部分は下層が硬くしまったIV層の褐色土で、上層がやや濁った黒褐色土である。非常に硬くしまっている。

＜遺物＞ない。

＜時期＞本焼土遺構の位置からまずRB013掘立柱建物跡か、あるいは今回構成する柱穴を抽出できなかつた掘立柱建物跡に伴う可能性が高い。カマドなどの痕跡と思われる。近世末～近現代に属すると考えられる。

（金子）

RF007焼土遺構（第51図、写真図版51）

＜位置・検出状況＞調査区南東よりの1L22aグリッド付近に位置する。検出面はV層である。暗赤褐色土の広がりとして検出した。

＜重複関係＞遺構との重複はないが、南側のほぼ半分以上をかく乱により削られている。

＜規模・平面形状＞大部分がかく乱を受けているため全容は不明である。残存している焼土の平面形は半円形を呈する。規模は35×15cm以上を測り、やや窪んだ土坑状の中央付近に位置している。

＜埋土・焼土＞焼成の厚いところは8cm程で下層の礫層上面まで赤色変化が見られる部分もある。極赤褐色で現地性のものと考えられる。

<遺物>出土していない。

<時期・性格>やや窪んだ土坑状のほぼ中央付近と思われる場所に焼土が位置し、焼け方なども良い。また、本遺構付近にも焼成の良い焼土遺構が検出されていることから何らかの焼成土坑の可能性も考えられるがはつきりしない。遺物等が出土していないため時期については不明である。 (本多)

8 堀跡・溝跡

RG012堀跡（第55～57図、写真図版52・53）

<位置・検出状況>RZ018土塁の西側及び土塁コーナーの北側に添って位置する。北側は1J10t～1K8eグリッド、西側は1J9s～2J2xグリッドに位置するが、南端が調査区外に延びている。南北方向の西堀は、1J10uグリッド付近で屈曲し東方向に延び、1K8eグリッド付近で止まる。

西堀は北端が旧河道部分までくい込んで構築されており、湿地帯から水を引き込んでいた可能性も考えられる。堀の南寄りは市の保存木であるエゾエノキの保護のため、東壁を掘り上げていない。堀の外側はIV層及び疊層のVI層まで削平されているため、検出面はIV、VI層であるが、堀の内側は土塁があるために堀と土塁の構築時の土層が保存されており、II層から掘り込まれていることを確認した。本堀跡の西堀は近年まで排水路として使用されており、埋土上面～中位には排水路のU字管敷設のための搅乱やゴミ穴があげられている。

北堀は残存する北側土塁の3分の1弱程度の長さしかないが、堀の東端より東側は市道建設の際に疊層まで削平されており、本来あった堀が削られて無くなつたものか、もともとなかったものか、不明である。当初は調査区北側に位置する旧河道の湿地帯を自然の防御施設として利用していると考え、堀はない想定していたが、断面の観察から堀の存在が明らかになった。上部が現代の排水施設によりかく乱を受けている。

なお、北堀と西堀が同時に掘削されたものか、時期差があるのかどうかは確認できなかった。

<重複関係>西堀北側でRD027土坑に西側壁が切られており、本遺構が古い。また、西堀南側でRA019豎穴住居跡を切っており、本堀跡が新しい。調査区北西を東流する旧河道に西側の堀が重複しており、掘り込んでいる部分を断面で確認することができた（第57図B-B'）。なお、北堀には重複する遺構はない。

<規模・平面形状>西側が長く、北側が短いL字状の堀であるが、西側堀が旧河道まで掘り込んでおり、角のように出っ張る。西堀は幅7.4m、検出部分の長さ37.5m、深さ西側検出面から1.8m、東側II層上面から2.3mである。北堀の規模は幅1.2～2.5m、土塁からの高差は約3mを測る。検出した時点での堀の深さは32cmである。長さは、屈曲した部分から17mを測り、東端は幅が狭くなる。

<断面形・底・壁>西堀の断面形は逆台形で、箱堀と思われる。底面は砂層まで掘り込んでおり、若干の凹凸があるもののおおむね平坦で乱杭や豎穴の痕跡はない。壁は外傾して立ち上がり、西堀の断面A-A'では西壁40度、東壁39度の角度である。北堀は残存状況が悪いが、南壁は40度で立ち上がる。北堀の東端はごく緩やかに立ち上がるところから本来はさらに東側に延びていたものが、市道敷設の際に削平された可能性もある。北堀の断面形は浅い椀型を呈し、底面は疊層中では平坦である。壁は、旧河道側は外傾気味に立ち上がり、北側は土塁に直結している。

<走行方向>西堀はN-14°-Wの方向に直線的に延びる。北堀も直線的に延びN-70°-Eである。

<埋土>西堀は上層～中層に搅乱がみられる。壁際底面にV～VI層の崩壊土である疊、砂を多く含む黒色シルト。中央底面に粘性の強いシルト、下層には粘性に富む黒褐色シルトで、砂を含み、褐鉄が

縦位に入る。中位は両側から流れ込んだとみられる礫を含む黒褐色土である。これらの層相から自然堆積と思われ、底部の薄い粘土質シルトは水の作用で堆積したものと考えられる。

北堀は黒褐色土主体に構成され、レンズ状の自然堆積である。

＜遺物＞（第98・99・101図366～369・414～416、写真図版85）西堀の1J21vグリッドから木札状の木製品が4点出土している。また、西堀の北端、南端、北西隅のいずれも埋土上層から近世陶磁器が3点出土した。

＜時期＞重複関係から古代の堅穴住居跡より新しい遺構であるが、時期を示すような遺物は出土していない。土壠と付随する掘跡のあり方から中世に属する可能性はあるが、曲輪内からも中世と確定できる遺物が少ないため詳細は不明である。
（金子）

RG013堀跡（第56図、写真図版53）

＜位置・検出状況＞1L5d～1L7hグリッドに周辺に位置する。周辺は市道敷設時と近代において大きく削平され、表土及び擾乱層を除去するとVI層の礫層が露出した。その際、RG012堀跡の北堀と類似する粘土質の黒褐色シルトが近代における削平前の段丘崖に添って南東から北西に広がっているのを検出した。なお、市道敷設時に粘土質シルトを除去するためか大きく削平されており、検出できたのは南壁のみ約11mで、北側の壁と西側への延長部分は削平され不明である。

＜重複関係＞ない。

＜規模・形態・方向＞規模は幅については不明であるが、検出した長さは10.8mで、深さは20cmである。土壠との比高差は遺存している土壠の高さから推定して約1.2mと推測される。方向は1L7eグリッド付近から南東方向へ緩やかに屈曲し調査区外に延びる。

＜断面形・底・壁＞底面は礫層のためかやや凹凸がある。壁は外傾気味に立ち上がる。

＜埋土＞黒色土を主体に構成される。上部は構成のかく乱をうけているが下層は自然堆積と思われる。

＜遺物＞出土していない。

＜時期＞中世頃と言われるが、時期を立証するような遺物などが出土しておらずはっきりとした時期等は不明である。
（本多）

RG014溝跡（第52図、写真図版54）

＜位置・検出状況＞曲輪の北端で、RZ018土壠際の1K12d～1K11eグリッドに位置し、東西方向の溝である。検出面は、位置によって異なる。東側は擾乱によりII～III層が削平されており、IV層上で、西側は表土除去後のII層である。ところどころ、擾乱と削平によって破壊されており、東側はさらに延びる可能性があるが、徐々に浅くなり自然に消えている。

＜重複関係＞RA032・022堅穴住居跡の埋土上面を切っており、両者より新しい。

＜規模・平面形状＞東西方向の直線的な溝である。検出された規模は全長23.5m、上面幅は最も広い部分で98cm、断面Aライン付近で62cmである。

＜断面形・底・壁＞断面形は幅の広い部分では壁に若干の段を持つ薙研形、狭い部分では逆台形または蒲鉾形である。底面、壁面ともIV層である。深さは最も残りがよく、幅も広い1K11f付近で35.3～51.2cm、浅い東側では18cmである。底面に工具痕はない。

＜走行方向＞西端からN-82°-Eの方向へ直線的に延びる。

＜埋土＞上層は混入物の少ない黒色シルト、下層はIV層起源の褐色土粒を含む黒色土である。自然堆積の層相を示す。

＜遺物＞埋土中から10gの土器が出土しているが、小片のため図化していない。流れ込みと考えられる。

＜時期＞平安時代の豎穴住居跡より新しいが、時期を示すような遺物もない。層相からは、古代より新しいと思われるが、詳細は不明である。

(金子)

RG015溝跡（第52図、写真図版54）

＜位置・検出状況＞調査区北東よりの1K10x～1K13wグリッド付近に位置する。検出面はIV層である。南北に走る黒褐色のプランとして検出した。

＜重複関係＞重複はない。

＜規模・平面形状＞北端・南端がかく乱を受け削られているため全容は不明だが、残存部は長さ約7.4m、幅18～50cm、深さ5～22cmである。東から西に向かって延び、途中屈曲して南に延びる。

＜断面形・底・壁＞断面形は逆台形を呈し、溝底はやや凹凸が見られるが工具痕等は検出されなかつた。壁は外傾気味に立ち上がるが、一部内傾気味に立ち上がる部分も見られる。

＜方向＞東から西方向はN-108°-W、途中1K10wグリッド付近より屈曲しN-173°-Wで南へ延びる。

＜埋土＞暗褐色～黒褐色土を主体とする自然堆積と思われる。

＜遺物＞出土していない。

＜時期＞遺物等が出土していないため不明である。

(本多)

9 旧河道・遺物集中区

RZ017旧河道遺物集中区（第9図、写真図版55）

＜位置・検出状況＞調査区北側、旧河道の内1J91～1J8qグリッド付近に位置する。遺物が集中する箇所として検出した。丁度、旧河道南側の縁辺部で過年度に当センターで調査した向中野館遺跡第5・6次調査に隣接する部分に当たる。

＜重複関係＞西側掘に1J10tグリッド付近を切られる。

＜規模・形態・方向＞検出した規模は幅4～8m、長さ約12mで、標高120.6m前後である。

＜埋土＞8層に分層した。I層は現況道路を造った際の土で、下層に礫などが多く混入している。II層は黒褐色土で部分的に堆積している。IIIa層から遺物が含まれてくる。黒褐色土主体で構成される。IIIb層は砂質の層で一番多く遺物が混入している層である。下層にはTo-aテフラが堆積している。IIIc層は旧河道西側には堆積しているが、中央～東側部分には堆積が見られない。IIId層はアシ・ヨシの植物や木片などが多量に混入している層で、アシ・ヨシの植生などからかつてこの場所が湿地帯であったと考えられる。IIId層からは遺物の出土が少ない。IV層はグライ化した層で、V層が礫層となっている。場所によっては、V層下にも黒色土が薄く堆積している場所もあるが遺物は出土していない。このような堆積は河の地形が影響していると思われる。

＜遺物＞（第78～84図156～256、写真図版72～77）旧河道からの総出土量は63.17kgで多くの土器が出土している。うち、18,430gの土器を掲載した。大部分が土師器で、壺、甕、他に須恵器、多くの墨書き器が出土している。ほぼIIIb層～IIId層からの出土である。また、KKIIIb層を中心にIIIc層、IIId層までモモと思われる種実が178g出土している。

＜時期＞出土遺物などから平安時代と考えられ、アシ・ヨシが植生する湿地帯であったと考えられる。

また、検出状況などから中世の頃も湿地帯であったと思われる。

(本多)

10 土 墓 跡

RZ018土壙跡（第53～57図、写真図版56～58）

＜位置・検出状況＞調査区西側から北側にかけてL字状に検出された。グリッドは西辺の南端が1K25b、北辺と西辺のコーナーが1K13a付近、北辺の東端が1L8aグリッドである。土壙西辺の南端は住宅建設時に削平され、残存していない。また、盛岡市の保存木であるエゾエノキと八幡宮の社が土壙上にあり、この部分については今回の調査区に含まれていない。北辺の東端は礫層まで削られており、破壊されている。北辺はところどころ、現代の搅乱があり、破壊されている。特に中央は盛り土のほか、礫層まで達する大きなゴミ穴があけられている。

＜重複関係＞西辺南端で、RA036堅穴住居跡（未調査）、西辺中央でRA021堅穴住居跡、RD028土坑、北西コーナーでRB009掘立柱建物跡、RD029土坑、北辺中央でRA031堅穴住居跡、RD053土坑RB010掘立柱建物跡、東端でRA026堅穴住居跡と重複し、いずれよりも新しい。また、北辺中央やや西寄りの北斜面が近世の墓地となっており、RD071～RD079土坑、RD081土坑の10基の墓壙に、東端でRD048土坑に切られ、いずれよりも古い。

＜規模・平面形状＞L字状に残存している。幅は西辺で8～9m、コーナーで12.5m（以上外側は堀の下場から内側は土壙幅を計測）、北辺で4.5～7mで、西辺の方がやや幅が広く、北辺は東にいくほど幅が狭くなる。この形状と土壙北辺北側を通る市道の方向から市道敷設の際、北辺東側は道路に添つて幾分割割した可能性がある。北辺中央の外側斜面に長さ約8m、幅2～2.5mの段を持つが、近世墓の位置と一致しており、近世において削って作られた段である可能性が高い。なお、頂部及び斜面においては、柵列、柱穴などは検出されたなかった。

＜断面形・頂部・斜面＞最も残りの良いと思われる西辺で頂部の広い台形状である。曲輪側の斜面の方が掘削の斜面よりも緩やかでそれぞれ23度、38度である。頂部は断面A-A'で2.5m、高さはII a層直上から95cmである。北辺西寄りの断面B-B'では頂部幅が狭く、約0.6m、外側は近世墓に切られて不明であるが、曲輪側の斜面は30度の角度である。高さはII a層直上から約80cmである。東端では高さは40cm程度しか残っていない。RG012塗跡の西堀の底から土壙頂部までは長さ約5m、高さは3.4mである。

＜方向＞西辺南端からN-14°-Wの方向に延び、コーナーで曲り北辺西半はN-72°-Eである。さらに北辺中央でN-86°-Eに緩やかに方向を転じるが、前述のとおり、この部分は本来の土壙頂部ではない可能性が高い。

＜構築土・埋土＞旧表土と思われる黒～黒褐色土のII a層上にIV層起源の褐色シルトとII層起源の黒褐色シルトが斑に混合した土を盛り、さらに砂質シルト、礫層、砂層を盛って構築している。残りの良い西辺、北辺の西半の最上層は砂礫層である。埋土は頂部に薄く、斜面で厚い。西辺では特に構築土である砂礫層が崩れ、埋土にも砂礫が多く含まれる。特に曲輪側に厚く堆積していた。北辺西半では曲輪側は搅乱の多くのゴミ穴によって削られ、埋土 자체は薄く、北側では厚い。

＜遺物＞（第101・102図417～422、426・429、写真図版88・89）検出面及び被覆する表土から近世～近代の陶磁器が出土している。ほとんどは大橋編年のIV期から19世紀に属する。

＜時期＞時期を示すような遺物はないが、奈良、平安時代の遺構より新しく、遺構の形態から中世以降と考えられる。

11 柱 穴 状 土 坑 (第51・58図・付図、写真図版51・59)

曲輪内部から261個の柱穴状土坑が検出された。当初、中世城館に伴う掘立柱建物跡を構成する柱穴と考え精査したが、柱の並び等考慮しても建物を組むには至らなかった。特徴的な柱穴で、用途が推定されるようなものは以下の2個のみである。また、柱穴状土坑は曲輪の平坦面から検出されており、土壠上、堀の外側からは検出されていない。時期を決定できるような遺物は出土していない。また、埋土の状況からも時期の推定は困難である。

PP6・PP7柱穴状土坑 (第51図、写真図版51)

＜位置・検出状況＞曲輪内部で調査区西側の1K22g、1K23gに位置する。検出面は表土除去後のII層である。

＜平面形状・規模＞いずれも円形を基調としており、PP6が $67 \times 56\text{cm}$ 、深さ35cm、PP7が $51 \times 50\text{cm}$ 、深さ28cmである。

＜埋土＞いずれも柱痕跡があり、周囲をIV層起源の褐色土粒を含む黒褐色土で埋め戻している。

＜特徴＞いずれも底面に角礫及び平坦な礫の集積がある。柱間寸法は185cmで、両者を結んだ線はN-2°-Wである。

＜遺物＞出土していない。

＜時期・性格＞PP6、PP7は共通する特徴、柱間距離から、対の柱がたてられていた可能性が高い。また、両者の位置はRZ018土壠上にある八幡宮の社の8m東正面である。社は市の保存木のエゾエノキの脇に建てられており、当初の位置から動いていないとすれば、両柱穴は鳥居の可能性も考えられる。

(金子)

第5表 柱穴状土坑計測表

PT No	径(cm)	深さ(cm)	備考
1	28×25	27	
2	32×28	32	
3	43×38	27	
4	33×29	34	
5	47×41	41	柱痕
6	67×56	35	柱痕 底面に縦 7対?
7	51×50	28	柱痕 底面に縦 6対?
8	37×29	34	
9	42×34	29	
10	44×42	32	
11	40×?	31	RD005を切る
12	36×32	37	便盆に切られる
13	ギフ		
14	ギフ		
15	ギフ		
16	ギフ		
17	ギフ		
18	44×42	34	RB011
19	48×42	29	RB011
20	46×42	41	RB011
21	40×37	33	RB011
22	38×?	30	RB011
23	72×59	49	柱痕
24	25×?	26	RD062を切る
25	30×26	33	
26	28×24	10	
27	34×30	26	底面に縦
28	30×25	22	
29	39×28	29	RA023を切る
30	36×33	21	
31	32×31	26	
32	50×44	26	RB010 柱アリ
33	60×50	25	RB010 柱アリ
34	ギフ		
35	ギフ		
36	30×28	26	
37	38×25	26	
38	29×29	23	
39	26×26	26	
40	23×23	27	柱痕
41	32×24	28	柱痕
42	32×27	29	
43	28×24	17	
44	32×29	24	柱痕
45	30×29	33	
46	32×30	29	
47	33×26	33	柱痕
48	23×21	21	
49	37×32	25	
50	32×22	20	
51	38×24	24	
52	27×24	37	
53	24×23	19	
54	28×26	26	
55	26×20	21	
56	26×22	18	
57	26×25	30	
58	30×27	33	
59	28×26	31	
60	30×23	21	

PT No	径(cm)	深さ(cm)	備考
61	26×23	35	
62	28×24	32	
63	28×22	25	
64	28×24	33	
65	41×39	28	RB011
66	41×39.0	30	RB011
67	36×30	38	RB011 RD006と切りあい 新旧不明
68	29×30	34	
69	32×25	39	
70	32×27	39	
71	24×22	24	
72	34×32	22	
73	27×22	41	
74	35×35	19	
75	29×29	17	
76	34×30	29	
77	23×22	16	
78	30×24	23	
79	38×32	26	
80	49×49	27	
81	51×49	17	
82	28×27	11	
83	48×44	30	
84	37×34	27	
85	28×25	28	
86	30×26	31	柱痕
87	32×?	30	柱痕
88	26×25	32	柱痕
89	44×33	41	柱痕
90	34×25	26	
91	33×38以 上	42	RB010 柱アリ 横 乱に削平される
92	32×27	6	RB010 柱アリ 横 乱に削平される
93	35×23	8	RB010 柱アリ 横 乱に削平される
94	39×37	32	柱痕
95	47以上	47	RB010 柱アリ 横 乱に削平される
96	36×35	17	柱痕
97	41×40	25	柱痕
98	47×43	25	柱痕
99	35×33	21	
100	30×28	25	
101	31×28	27	
102	32×32	30	
103	31×29	23	
104	24×19	35	
105	31×36	18	
106	34×29	24	
107	38×31	31	
108	72×66	53	柱痕
109	125×90	34	
110	113×67	56	2個? 柱痕
111	85×78	48	柱痕
112	68×65	49	柱痕
113	61×39	50	柱痕
114	62×58	34	柱痕
115	94×75	64	RB013 柱残存
116	114×108	69	RB013 柱残存
117	99×93	67	

PP No.	幅(cm)	深さ(cm)	備考
177	51×40	27	RA025 柱穴4
178	25×23	34	
179	32×29	33	
180	32×26	33	
181	35×26	31	
182	33×26	30	
183	30×25	32	
184	36×30	30	185と重複
185	23×22	29	181と重複
186	30×24	22	RD069を切る
187	32×26	18	RD069を切る
188	49×33	24	
189	31×28	19	
190	37×36	14	
191	28×23	14	
192	44×39	17	
193	40×38	14	
194	20×27	32	
195	49×42	20	
196	41×36	17	
197	24×24	21	
198	40×38	27	
199	29×27	11	
200	34×29	18	
201	34×?	31	
202	30×23	20	
203	33×?	25	
204	36×32	35	
205	55×37	39	
206	42×29	21	
207	33×30	32	
208	35×27	16	
209	30×26	21	
210	48×36	19	
211	29×26	14	
212	26×18	27	
213	32×26	33	
214	27×25	21	
215	28×26	34	
216	24×21	66	
217	32×28	13	
218	37×30	13	
219	47×40	19	
220	50×42	22	
221	46×45	21	
222	26×24	?	
223	36×24	21	
224	41×33	23	
225	28×25	31	
226	29×29	24	
227	34×31	31	
228	27×?	26	
229	48×48	41	
230	46×36	35	
231	30×28	20	
232	44×31	28	
233	32×?	36	
234	41×31	38	
235	37×33	33	
236	49×49	46	
237	50×49	20	

PP No.	幅(cm)	深さ(cm)	備考
238	40×38	27	
239	34×?	20	
240	35×34	20	
241	29×28	14	
242	31×30	17	
243	34×30	9	
244	42×36	18	
245	22×19	19	
246	37×36	12	
247	41×36	20	
248	45×?	36	
249	32×24	34	
250	25×25	26	
251	22×19	23	
252	33×30	35	
253	28×26	28	
254	26×26	23	
255	36×32	24	裡め RA023を切る
256	27×?	30	RA023を切る
257	26×36	26	
258	24×23	26	
259	31×28	27	260と重複
260	36×?	24	239, 261と重複
261	42×34	28	260と重複
262	24×22	8	RE004を切る
263	24×24	33	
264	30×24	17	
265	30×29	36	
266	29×29	17	
267	24×20	30	RA023を切る
268	32×27	13	
269	34×26	18	
270	33×?	14	
271	39×30	18	
272	38×28	16	
273	33×30	20	
274	38×35	30	
275	62×?	17	
276	37×?	20	
277	39×33	32	RA023 柱穴3
278	49×38	18	
279	28×28	13	
280	34×33	9	
281	46×42	23	
282	37×35	13	
283	?	?	166に切られる
284	41×?	6	RA025構造を切る
285	47×42	18	
286	37×37	25	
287	51×42	44	
288	57×52	14	
289	47×38	30	
290	30×29	32	
291	25×?	20	
292	44×43	30	293, 294を切る
293	48×?	39	292に切られる
294	58×?	49	292, 293に切られる
295	44×40	31	
296	46×?	12	
297	66×62	34	
298	47×?	16	

PP No.	幅(cm)	深さ(cm)	備考
299	52×45	31	
300	81×68	49	
301	62×?	18	
302	41×58	27	
303	62×50	29	
304	36×34	10	
305	52×36	29	
306	55×45	53	
307	32×?	22	308と重複
308	24×?	18	307と重複
309	39×?	30	
310	34×30	11	
311	41×25	32	
312	37×37	15	
313	80×60	50	
314	45×34	32	
315	47×38	18	
316	64×52	32	
317	34×26	15	
318	36×27	16	
319	34×29	31	
320	40×38	43	
321	11×?	64	
322	50×35	32	
323	41×40	23	
324	46×39	34	
325	56×33	29	
326	33×?	32	
327	66×46	40	
328	59×45	36	
329	59×?	24	
330	53×?	28	
331	36×?	36	複品に切られる
332	29×?	21	
333	43×33	19	
334	26×23	13	
335	25×21	21	
336	25×24	33	
337	28×23	46	
338	44×35	17	RD043を切る
RA025			
柱穴1	36×45	36	柱側
柱穴2	42×38	21	柱側
柱穴5	42×52	20	
柱穴6	49×44	19	柱側
柱穴7	52×52	29	
柱穴8	54×4447	33	
柱穴9	42×32	23	
柱穴10	45×44	30	
柱穴11	46×44	38	

第6表 穴穴住居跡一覧表

新遺構名	旧遺構名	グリッド	次数	担当者	時期	規模(m)	壁高(cm)	床面積(m ²)	主軸方向	カマド位置	特徴・備考
RA018	9号住	1K14e	10	金子	平安	4.22×4.09	39	13.3	N-96°-W	西1	カマド付近の覆土層にTosaブロック
RA019	1号住	1J22v	10	金子	平安	-	9	-	-	-	遺物既存のみ
RA020	10号住	1K16c	10	金子	平安	4.76×3.41	35	13.5	N-96°-E	東2	墓上層と下層は自然堆積、中位は削め廻し
RA021	46号土坑	1K20b	10	本多	平安	-	24	-	-	-	土壌下未調査区に延びる 墓上自然堆積
RA022	8号住	1K10n	10	金子	平安	2.86×2.75	28	-	N-93°-E	東1	自然堆積か、人為堆積か不明
RA023	6号住	1K14o	10	金子	平安	4.25×?	32	-	N-113°-E	南東1	現代の復元に切られる 自然堆積 カマド付近に崩壊土
RA024	3号住	1K19b	10	金子	平安	3.83×?	17	-	N-73°-W	西1	ほとんど後方に切られる
RA025	12号住	1K16u	10	金子	平安	5.8×?	15	-	N-61°-W	南東1-北西1	1号堅穴状遺構、4号掘立に切られる
RA026	15号住	1K8y	10	本多	平安	4.00×?	34	-	N-142°-W	西南1	土垣東側 刈平される 45号土坑に切られる 自然堆積 地上1.2mにTosaテラ粒強量
RA027	13号住	1K15y	10	金子	平安	4.12×3.80	14	12.1	N-111°-E	東南1	5号掘立に切られる 自然堆積
RA028	16号住	1K25y	10	金子	平安	3.85×?	8	-	N-115°-E	南東1	擾乱に切られる
RA029	17号住	1L24c	10	金子	平安	2.52×2.45	16	-	N-79°-W	西1	擾乱に切られる
RA030	11号住	1L25c	10	金子	平安	-	28	-	N-87°-W	西1	南側に延びる 墓上層、埋隙底下層は自然堆積だが、以外は人為堆積
RA031	14号住	1K9n	11	本多	平安	4.09×?	48	-	N-93°-W	西1	近世墓に切られる 自然堆積
RA032	3号住	1K21i	11	金子	平安	4.02×4.02	43	12.1	N-115°-E	東1	1号堅穴に切られる 北壁際の3箇所のみ人為堆積 他の自然堆積
RA033	4号住	1K20b	11	金子	平安	2.91×2.84	25	61	N-116°-E	南東1	21号土坑に切られる
RA034	2号住	1K21l	11	金子	平安	4.00×3.93	19	13.1	N-82°-W	西1	地上に残たくさん 自然堆積
RA035	1号堅穴状遺構	1K18u	10	金子	中世	3.57×3.10	46	88	N-9°-W	なし	4号掘立に切られ、12号住を跨る 自然堆積か

第7表 土坑一覧表

新遺構名	旧遺構名	グリッド	次数	担当者	時期	規模(m)	深さ(cm)	特徴・備考
RD027	11号土坑	1J19t	10	本多	不明	2.81×1.47	50	-
RD028	47号土坑	1J18y	10	本多	中晩以前	1.21×0.95	23	土壌下から検出
RD029	54号土坑	1K11a	10	本多	平安?	2.57×1.23	42	-
RD030	57号土坑	1K15a	10	本多	平安	1.22×0.70	30	壁上にTosa
RD031	51号土坑	1K16d	10	金子	平安	1.66×1.27	37	10号住東壁を切る
RD032	52号土坑	1K16c	10	金子	平安	1.86×1.75	29	10号住南壁を切る
RD033	23号土坑	1K17d	10	金子	新しい	2.05×?	38	-
RD034	3号堅穴状遺構	1K17e	10	金子	新しく	1.82×?	28	23号土坑と重似
RD035	17号土坑	1K16g	10	金子	古代	1.80×1.36	35	焼成土坑
RD036	5号堅穴状遺構	2K3f	10	金子	古代	2.17×?	47	黒色土堆積
RD037	44号土坑	1K10h	10	本多	不明	1.53×1.26	17	黒色土堆積
RD038	43号土坑	1K16q	10	金子	不明	1.57×1.28	23	廻め廻し
RD039	24号土坑	1K21n	10	金子	不明	1.94×0.47	16	遺物なし
RD040	3号土坑	1K23e	10	金子	不明	2.53×0.98	12	廻め廻し?
RD041	2号土坑	1K24p	10	金子	古代	1.34×1.30	11	燒成土坑
RD042	63号土坑	1K12v	10	本多	貞良	1.63×0.72	20	塗瓦から十数
RD043	48号土坑	1K17w	10	金子	平安?以降	1.04×0.72	12	12号住を切りPPに切られる
RD044	60号土坑	1K22w	10	金子	平安	1.23×1.00	16	埋土から十数、焼土粒
RD045	50号土坑	1K16y	10	金子	近世末~近代	1.05×0.73	33	13号住を切る 砂吹の可能性あり
RD046	61号土坑	2K2s	10	金子	古代?	1.54×0.99	20	-
RD047	40号土坑	2K1v	10	金子	平安	1.76×1.40	25	-
RD048	45号土坑	1K8y	10	金子	近現代	1.34×1.09	46	馬骨 15号住を切る
RD049	32号土坑	1L6b	10	本多	小明	1.65×1.37	17	-
RD050	31号土坑	1L6a	10	本多	近世末~近代	2.28×2.25	39	-
RD051	62号土坑	1L12b	10	本多	古墳時代末	21×0.68以J.	13	埋土から土器
RD052	56号土坑	1L16a	10	金子	近世末~近代	1.54×0.70	44	50土と切りあい、13号住を切る 住穴の可能性あり
RD053	39号土坑	1K8l	11	金子	平安	-	45	焼成土坑

新遺構名	旧遺構名	グリッド	次数	担当者	時期	規模(m)	深さ(cm)	特徴・備考
RD054	22号土坑	IK11k	11	金子	不明(比較的新しい)	1.47×?	43	
RD055	19号土坑	IK14j	11	金子	平安	0.44×?	18	
RD056	7号土坑	IK15e	11	金子	奈良か	1.80×1.16	30	焼成土坑
RD057	15号土坑	IK15g	11	金子	古代?	0.72×0.56	14	木樋?
RD058	14号土坑	IK15k	11	金子	古代?	2.00×1.44	38	
RD059	15号土坑	IK15k	11	金子	古代	1.85×?	20	
RD060	12号土坑	IK17i	11	金子	不明	1.52×0.62	14	
RD061	9号土坑	IK17k	11	金子	平安	1.16×1.34	28	
RD062	10号土坑	IK17j	11	金子	平安	3.10×1.58	24	
RD063	8号土坑	IK18k	11	金子	平安	3.36×2.24	28	焼成土坑か
RD064	21号土坑	IK20g	11	金子	平安	1.61×1.22?	22	焼成土坑
RD065	6号土坑	IK23j	11	金子	平安	2.35×1.07	30	墓觸か 焼め戻し
RD066	16号土坑	IK25e	11	金子	平安	1.93×1.37	33	底に焼土 焼成土坑
RD067	5号土坑	IK23j	11	金子	平安	1.68×1.0	18	RE006を切る 焼成?
RD068	1号土坑	IK23m	11	金子	平安	1.48×1.43	11	壁に土中にTo-a柱
RD069	4号土坑	IK25k	11	金子	平安	1.54×1.94	25	焼成土坑
RD070	20号土坑	IK25g	10	金子	古代	1.30×0.93	28	焼成土坑
RD071	30号土坑	IK9e	10	本多	18c中葉以降	1.26×1.14	80	骨 墓
RD072	25号土坑	IK9e	10	本多	18c中葉以降	1.13×0.62以上	110	骨 墓
RD073	27号土坑	IK8f	10	本多	18c中葉以降	0.80×0.71	51	墓
RD074	26号土坑	IK9f	10	本多	18c中葉以降	0.87×0.76以上	76	墓
RD075	28号土坑	IK8f	11	本多	18c中葉以降	0.92×0.70	61	骨 墓
RD076	38号土坑	IK9f	11	本多	18c中葉以降	1.16×1.10	154	墓
RD077	33号土坑	IK9g	11	本多	18c中葉以降	0.75×1.73以上	95	骨 墓
RD078	29号土坑	IK8g	11	本多	18c中葉以降	1.36×1.14	103	骨 墓
RD079	41号土坑	IK9h	11	本多	18c中葉以降	0.75×0.69以上	90	墓
RD080	59号土坑	IK9h	11	本多	平安以前?	1.98×0.72	26	RD077・079に切られる
RD081	42号土坑	IK9i	11	本多	近世以降	1.20×0.69	65	墓

第8表 穴状遺構一覧表

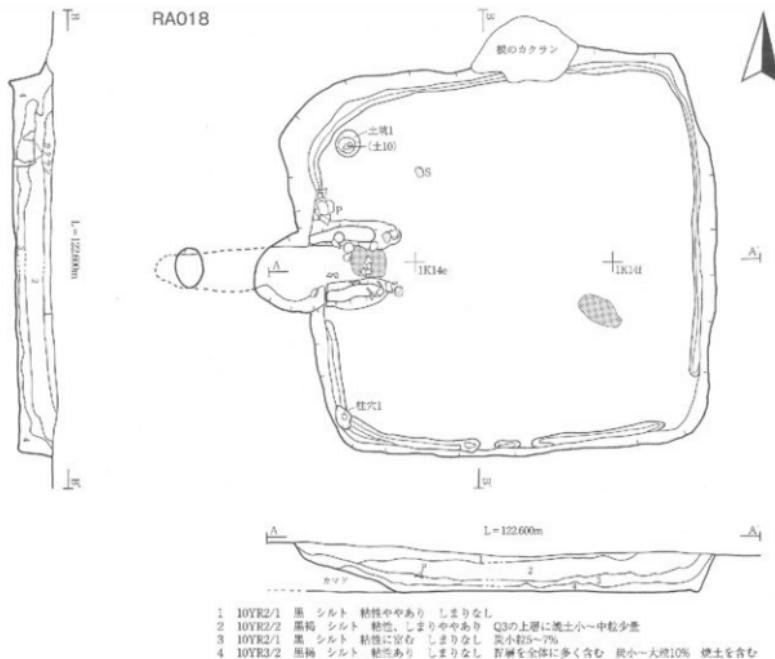
新遺構名	旧遺構名	グリッド	次数	時期	規模(m)	深さ(cm)	備考
RE004	7号住	IK13q	10	奈良?	2.40×2.25	28	カマドなし
RE005	4号穴状遺構	IK13s	10	新しい?	2.22×?	10	
RE006	2号堅穴状遺構	IK22k	11	平安	2.29×1.93	25	RD067に切られる

第9表 焼土遺構一覧表

新遺構名	旧遺構名	グリッド	次数	時期	規模(m)	焼土の厚さ(cm)	備考
RF003	1号焼土遺構	IK14g	10	近世以降	52×45	3	RB013に付属か 底層あり
RF004	2号焼土遺構	IL15a	10	近世以降	45×42		RB013に付属か
RF005	3号焼土遺構	IL14b	10	近世以降	49×48	4	RB013に付属か
RF006	4号焼土遺構	IL13k	10	近世以降	80×65	6	RB013に付属か 西面に十間浜の礎化面あり
RF007	5号焼土遺構	IL22g	10	不明	35×15	8	

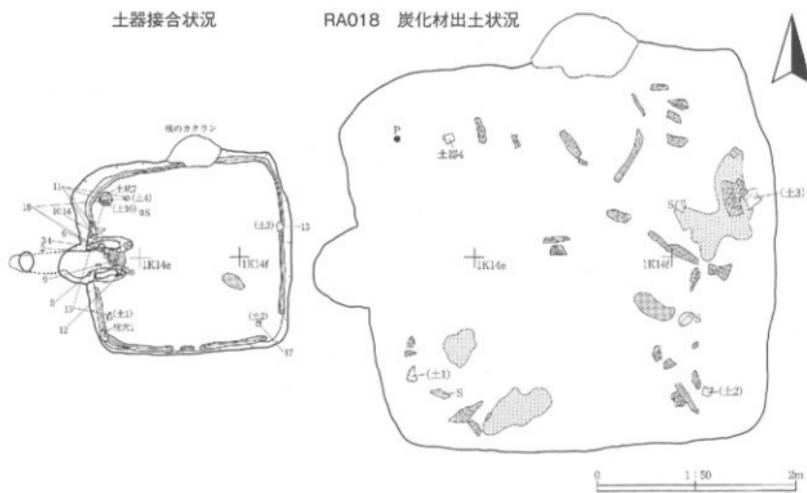
第10表 溝跡一覧表

新遺構名	旧遺構名	グリッド	次数	時期	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	備考
RG012	西・北軸	IJ10a～IJ3y・IK8e	10	中世～近世	西37.5～北17.1	西7.4～北2.5	西1.8～北0.32	北側は沿河面にぶつかる 出輪西と北側の一帯を囲む
RG013	東廻	IL5d～IL7h	10	中世～近世	10.8	不明	0.2	北側の壁と西廻の延長は削平され不明 南廻のみ残存
RG014	1号溝跡	IK12d～IK11o	10	古代以降	23.5	0.98	0.51	西側は土壠を築る?
RG015	2号溝跡	IK30x～IK31w	10	不明	7.4	0.65	0.22	

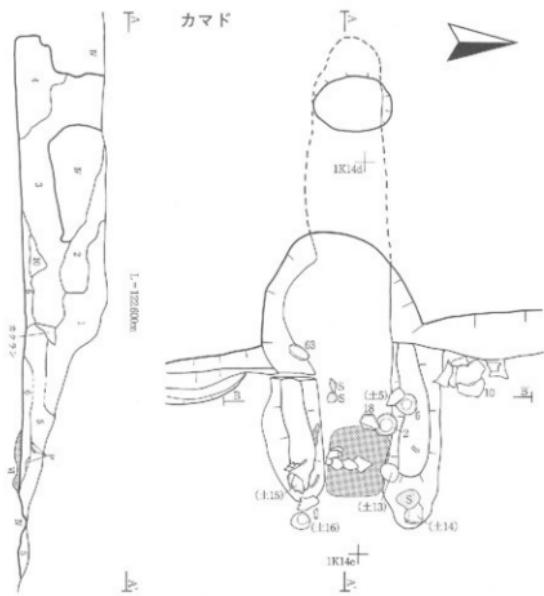


土器接合状况

RA018 炭化材出土状況



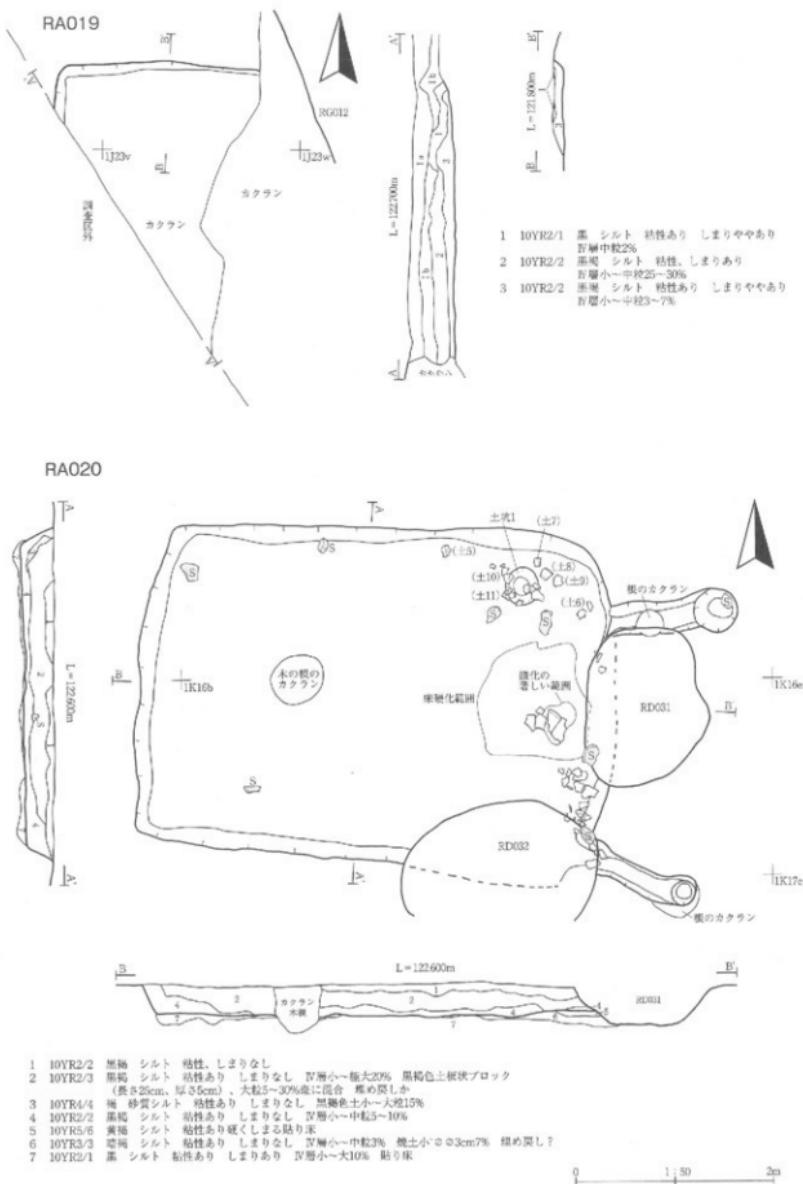
第10図 RAO18豎穴住居跡（1）



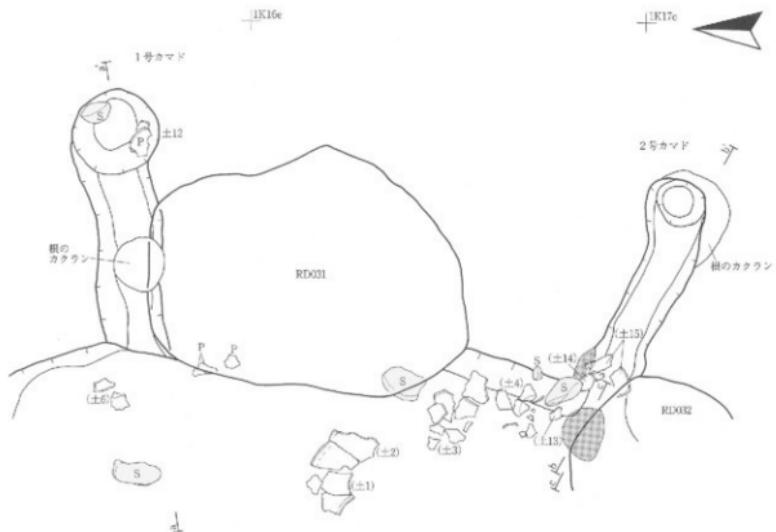
カマド芯材の設置状況



第11図 RA018豎穴住居跡 (2)

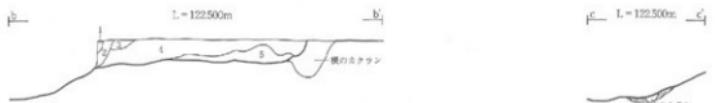


第12図 RA019・RA020竪穴住居跡（1）



1号カマド

- 1 7SYR2/2 黒褐色 シルト 粘性ややあり しまりなし IV層小～中粒20% 深土ブロック◎3cm5%
- 2 5YR2/3 黒褐色 シルト 粘性、しまりややあり IV層小～中粒5～15% 塵土を全体に含む 黑褐色土中粒1%
- 3 7SYR2/2 黒褐色 シルト 粘性ややあり しまりなし IV層小～◎3cm30% 風化含む
- 4 7SYR4/3 棕褐色 シルト 粘性あり しまりややあり 黑褐色土～大粒20%
- 5 7SYR2/2 黒褐色 シルト 粘性あり、しまりなし 深土小～中粒25% 粒粒10%
- 6 7SYR3/3 棕褐色 シルト 粘性、しまりあり 表層ブロック30% 耐水率



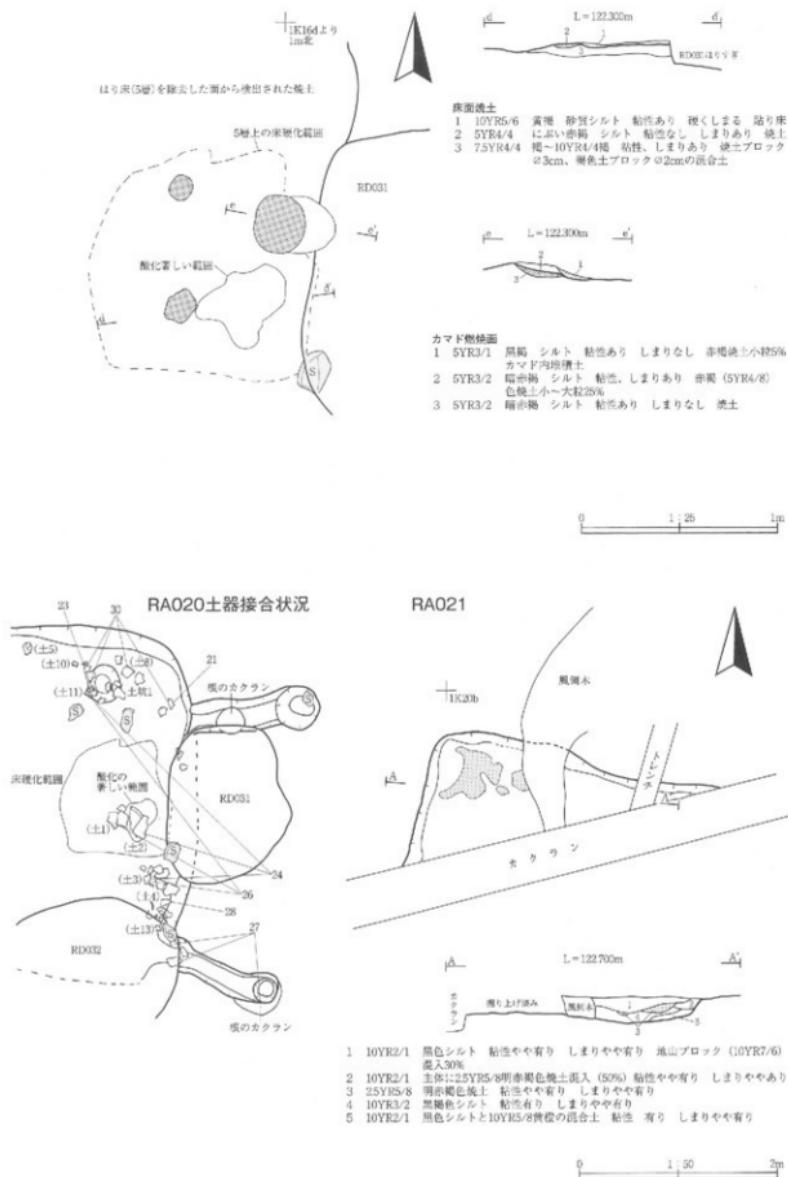
2号カマド

- 1 5YR4/4 にぶい赤褐色 シルト 粘性、しまりなし 烧土
- 2 10YR3/4 黒褐色 シルト 粘性あり しまりなし 黑色土小～大粒5%
- 3 7SYR3/2 黑褐色 シルト 粘性あり しまりなし 全体に焼土を含む
- 4 7SYR2/2 黑褐色 シルト 粘性あり しまりなし 全体に焼土を含む
- 5 10YR3/3 黑褐色 シルト 粘性あり しまりなし 黑褐色土小～大粒20%

2号カマド断面図
1 5YR2/2 黑褐色 シルト 粘性、しまりややあり 焼土

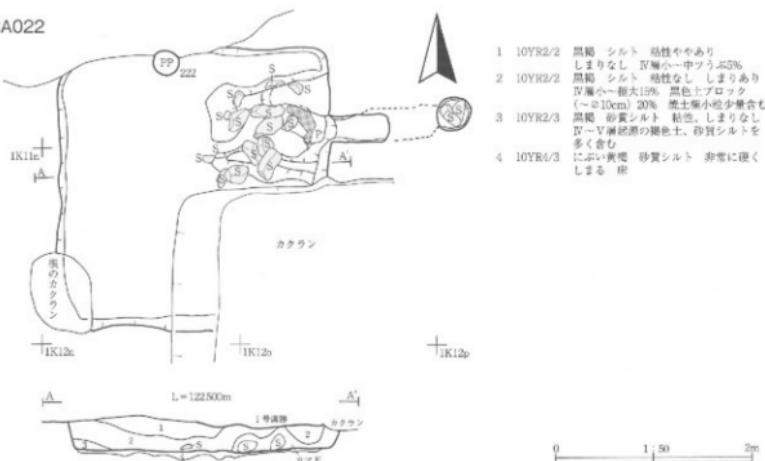
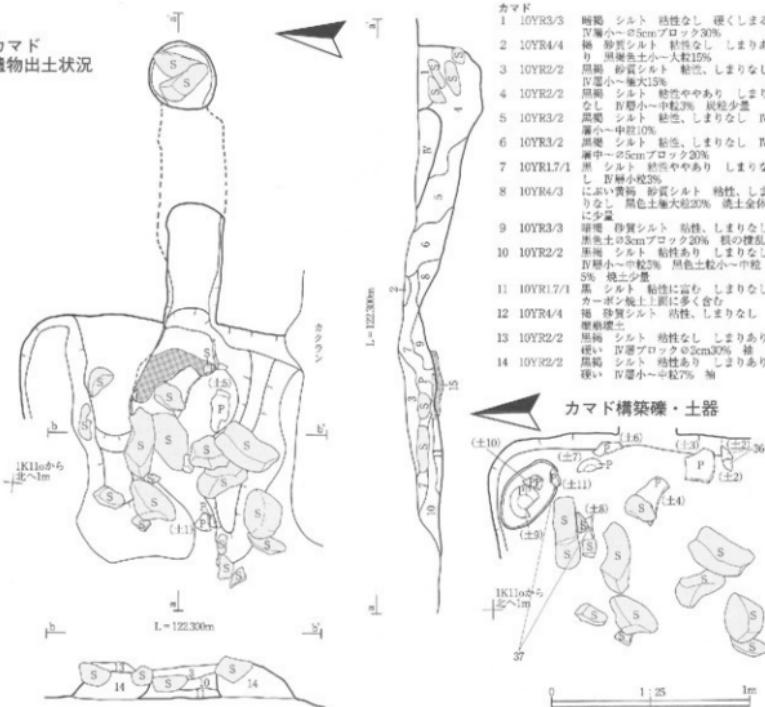
0 1m 1:25

第13図 RA020豎穴住居跡 (2)



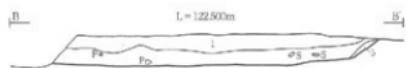
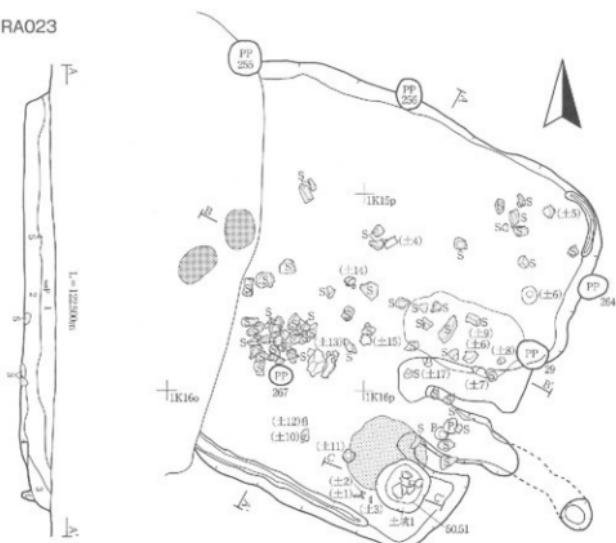
第14図 RA020竪穴住居跡 (3)・021竪穴住居跡

RA022

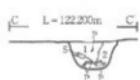
カマド
遺物出土状況

第15図 RA022竪穴住居跡

RA023



- 1 10YR2/1 黒 シルト 粘性ややあり しまりあり
- 2 10YR2/1 黒 シルト 粘性、しまりあり 表層小～中粒3～5% 深土粒少含む
- 3 10YR2/1 黒 シルト 粘性に富む しまりあり 表層小～中粒10%
- 4 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性に富む しまりやや弱
- 5 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性あり しまりややあり N層小粒～10cmブロック25%



カマド構築跡



土坑1

- 1 10YR1/1 黒 シルト 粘性、しまりなし
- 2 10YR2/2 黑褐色 シルト 粘性ややあり しまりなし
D層小～中粒10%

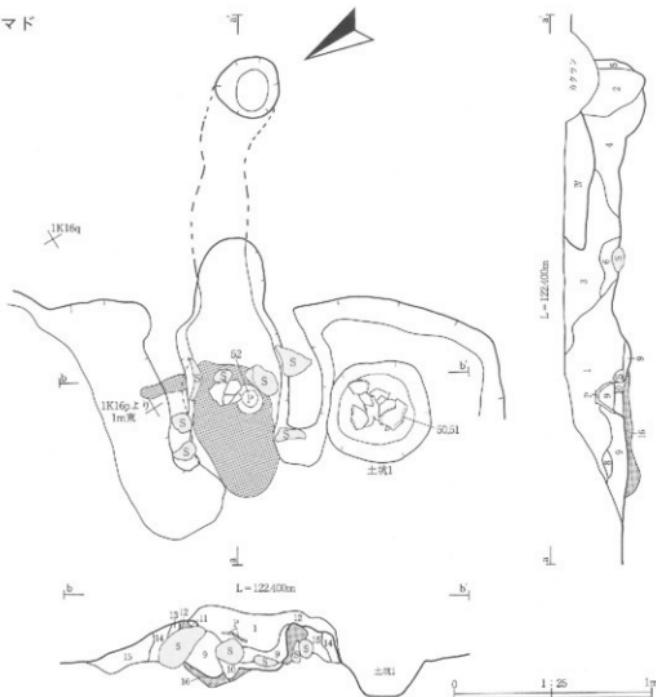


0 1:50 2m

0 1:25 1m

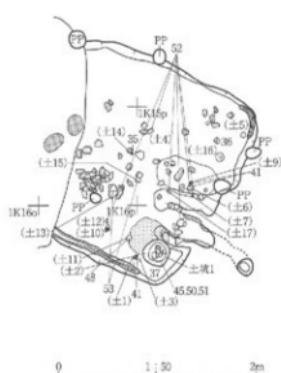
第16図 RA023竪穴住居跡 (1)

カマド



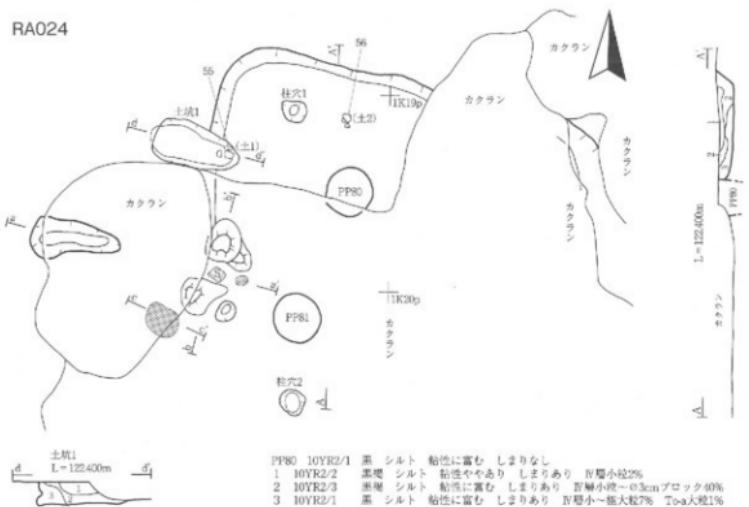
土器接合状况

カマド				
9 75YR3/2	黒褐色	シルト	粘性なし	しまりなし カマド南端地
1 75YR2/2	黒褐色	シルト	粘性なし	硬くしまる 腐層小粒3% 焙土小~大粒2%
2 10YH2/2	黒褐色	シルト	粘性なし	しまりあり硬い 土層小~中粒7%
3 10YR2/2	黒褐色	シルト	粘性なし	しまりややあり 剥離小層~2cm5~10cm
4 10YR2/3	黒褐色	シルト	粘性ややあり	しまりなし 土層小~大粒10%
5 10YR2/2	黒褐色	シルト	粘性なし	しまりややあり 土層小~中粒3cm50%
6 75YR3/2	黒褐色	シルト	粘性あり	しまりなし 黏土を含む多く含む
7 5YR2/2	暗褐色	シルト	粘性なし	しまりあり 焙土
8 75YR4/3	暗褐色	シルト	粘性なし	しまりなし 土層下が硬土化
9 5YR2/3	暗褐色	シルト	粘性ややあり	しまりなし 淡褐色
10 75YR4/3	暗褐色	シルト	粘性なし	(70%R)R~Hg ハグセナスを含む
11 10YR3/4	黒褐色	シルト	粘性なし	しまりなし 全体に焙土含む
12 5YR4/4	暗褐色	シルト	粘性なし	硬くしまる 腐土10% 焙
13 10YR4/4	暗褐色	シルト	粘性なし	硬くしまる 油
14 10YUR4/4	暗褐色	シルト	粘性なし	しまりなし 黑褐色土小~大粒10%
15 75YR2/2	暗褐色	シルト	粘性ややあり	硬くしまる 地下鉄柱少無
16 75YR4/4	暗褐色	シルト	粘性なし	硬くしまる 地土
17				

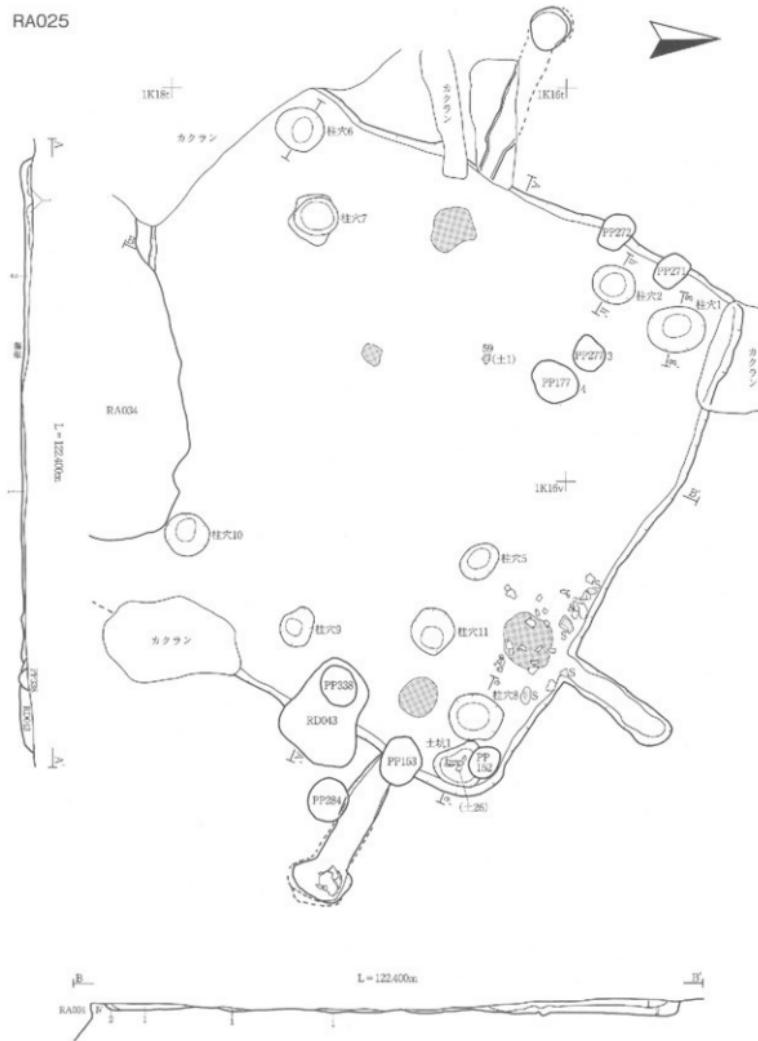


第17図 BA023竪穴住居跡 (2)

RA024



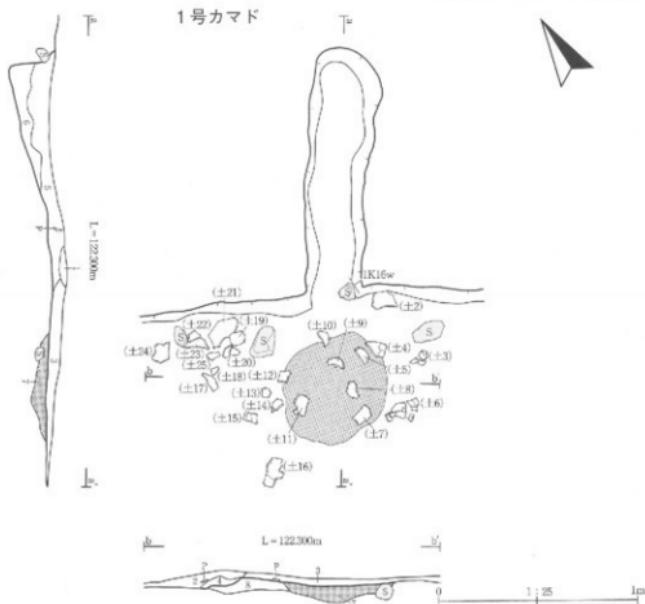
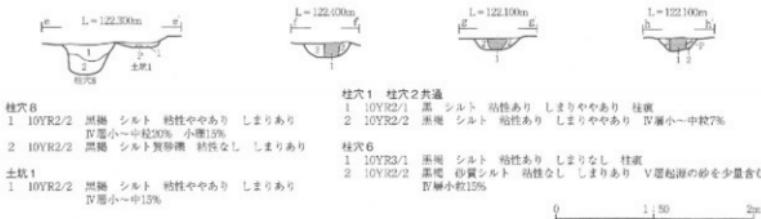
RA025



1 10YR2/1 黒 シルト 粘性なし しまりあり 褐層中粒2%
 2 10YR2/2 黒褐 シルト 粘性なし しまりあり IV層小~大粒15%

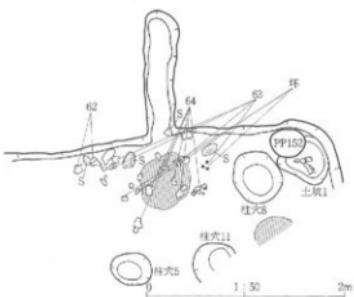
0 1 : 50 2m

第19図 RA025竪穴住居跡（1）

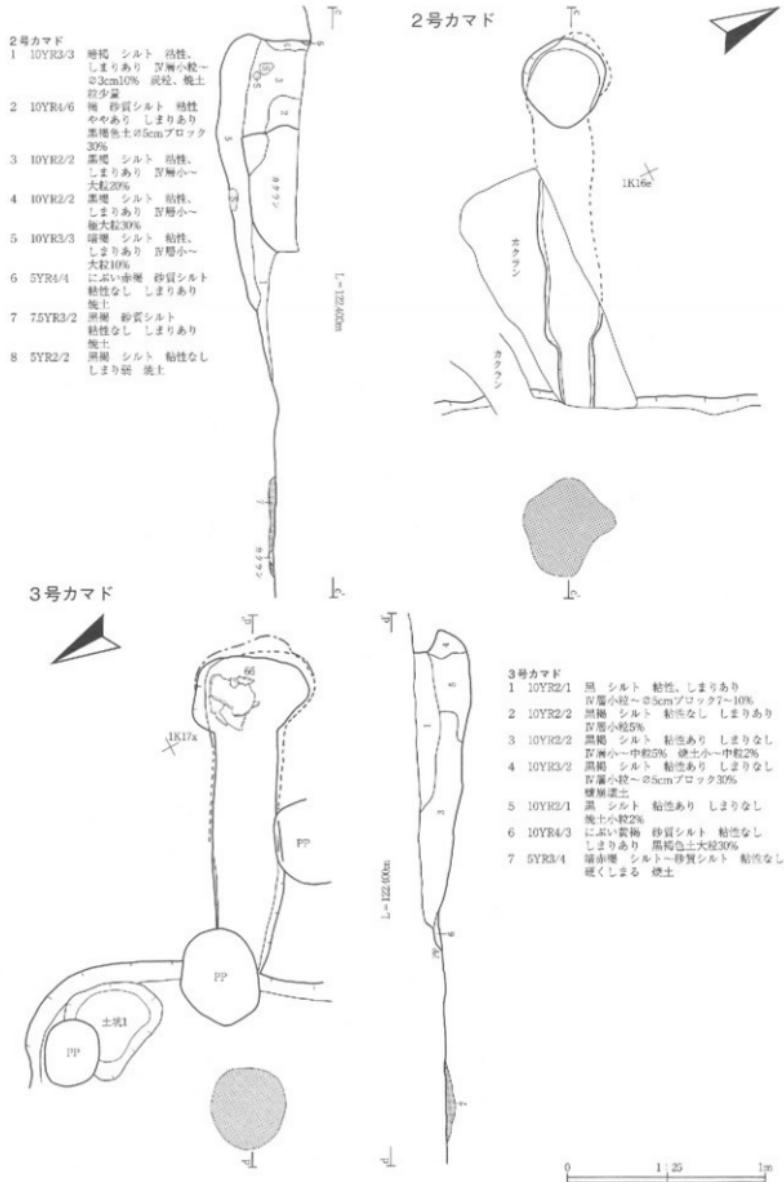


土器接合状況

- 1号カマド**
- 10YR2/1 黒褐色 シルト 粘性なし 硬くしまる
 - 10YR3/1 黒褐色 サブ質シルト 粘性なし しまりあり
V型小～中粒15% 前板埋土
 - 10YR2/2 黒褐色 サブ質シルト 粘性ややあり しまりあり
V型小～中粒20%
 - 10YR3/2 黒褐色 サブ質シルト 粘性なし 硬くしまる
前板埋土上
 - 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性に富む しまりややあり
V型小～中粒5～10%
 - 10YR3/2 黒褐色 サブ質シルト 粘性あり しまりなし
縦幅約2～7cm30%
 - 7.5YR3/3 硅酸 サブ質シルト 粘性なし しまりあり範囲
5YR4/6灰褐色の焼小口～中粒10% 焼土
 - 10YR3/4 硅酸 シルト 粘性なし 硬くしまる
前板埋土か

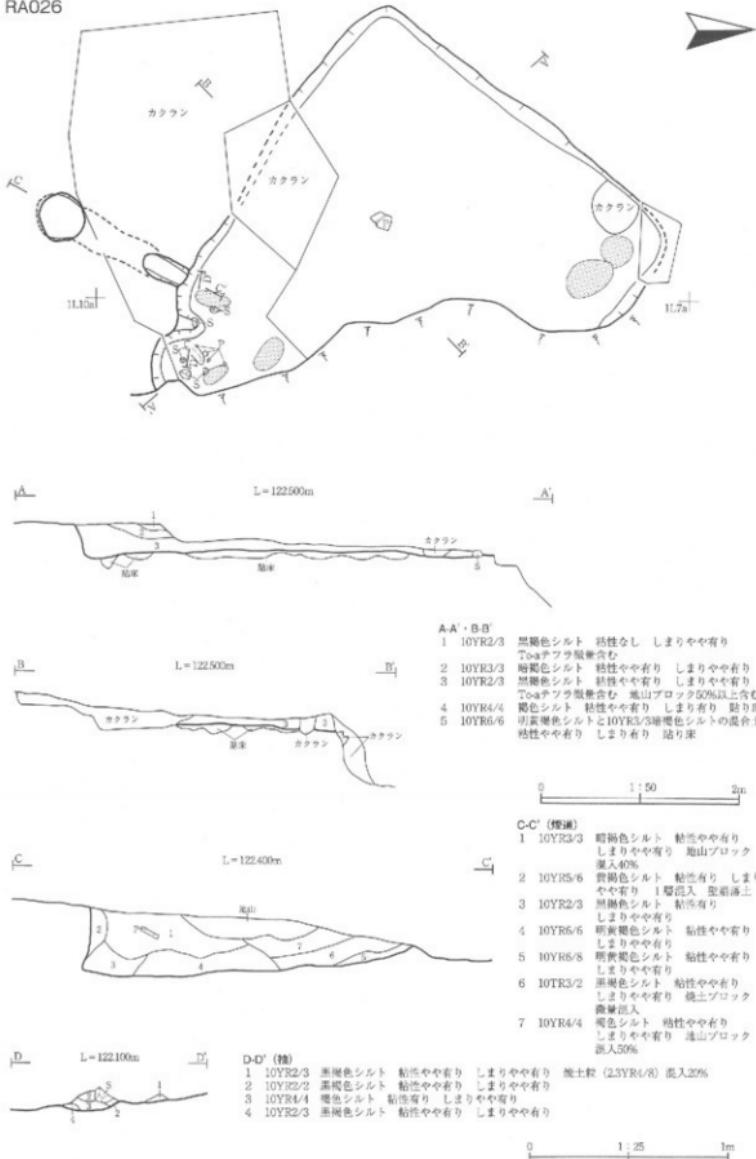


第20図 RA025堅穴住居跡 (2)

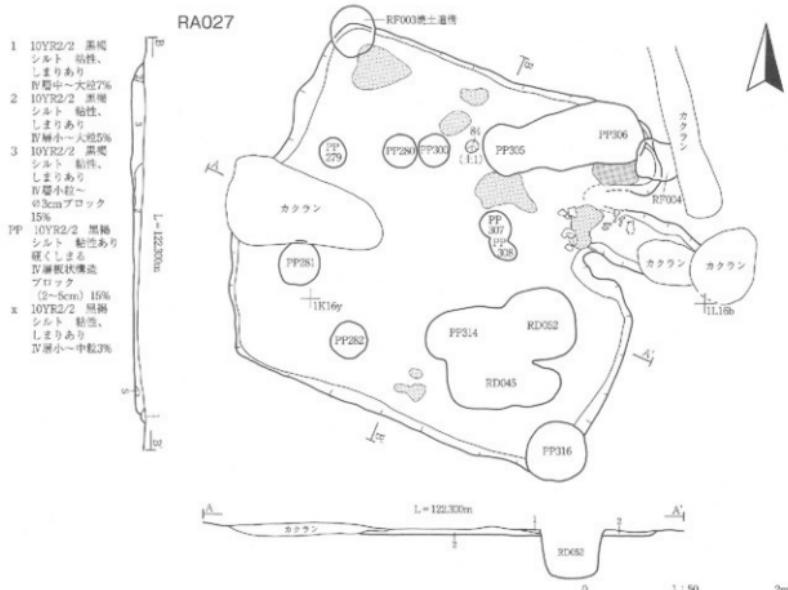


第21図 RA025堅穴住居跡 (3)

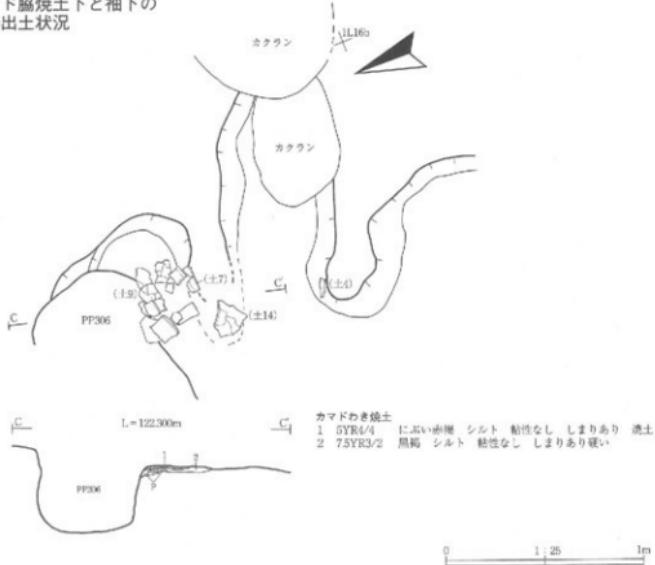
RA026



第22図 RA026竪穴住居跡

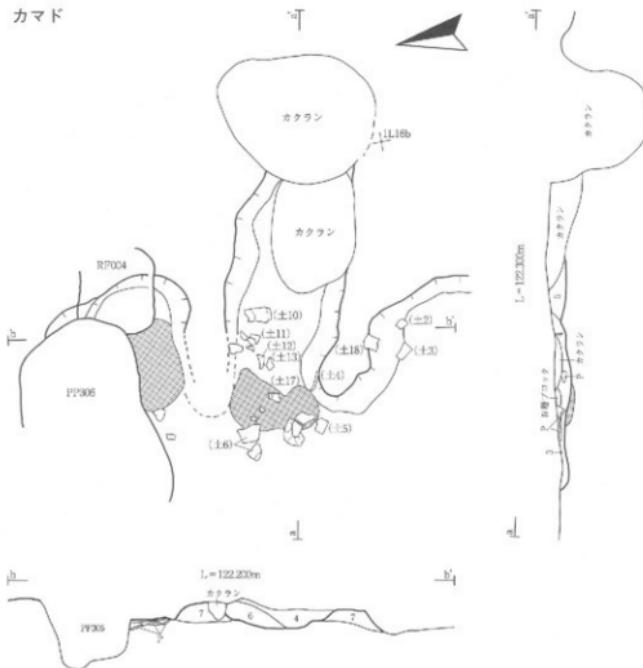


カマド脇焼土下と袖下の
土器出土状況



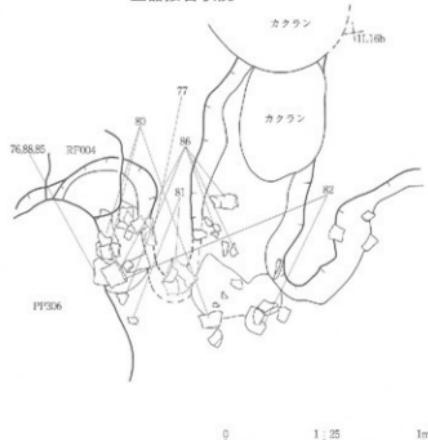
第23図 RA027竪穴住居跡 (1)

カマド



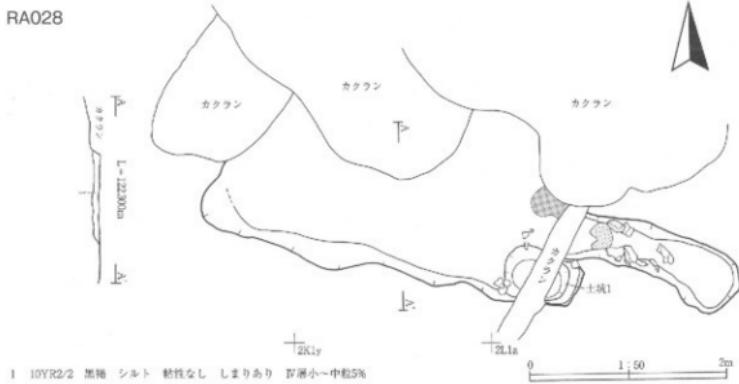
土器接合状況

- カマド
3 10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性に富む しまり弱
燒土小~中粒7%
4 10YR3/1 黑褐色 シルト 粘性、しまりあり
燒土中~大粒5% 脱着の5~7cmブロックを
一部に含む 燃土多く含む
5 7.5YR3/2 黑褐色 シルト 粘性なし 硬くしまる
燒土を全く多く含む
6 7.5YR2/2 黑褐色 シルト 粘性あり 硬くしまる
3層小~中粒10% 黒色土&5cmブロック20%
燒土粒含む
7 10YR4/4 黑褐色 シルト 粘性あり しまりあり硬い
焼土粒上

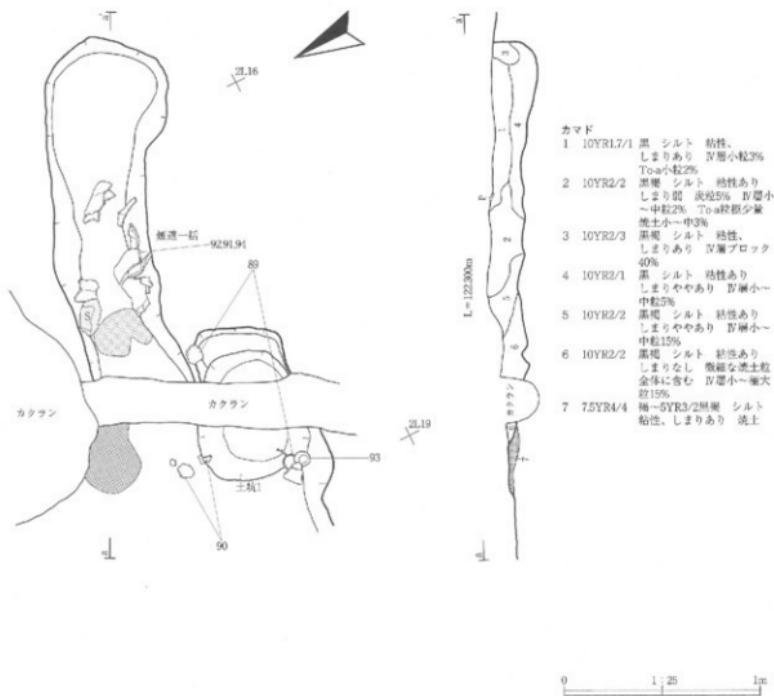


第24図 RA027竪穴住居跡 (2)

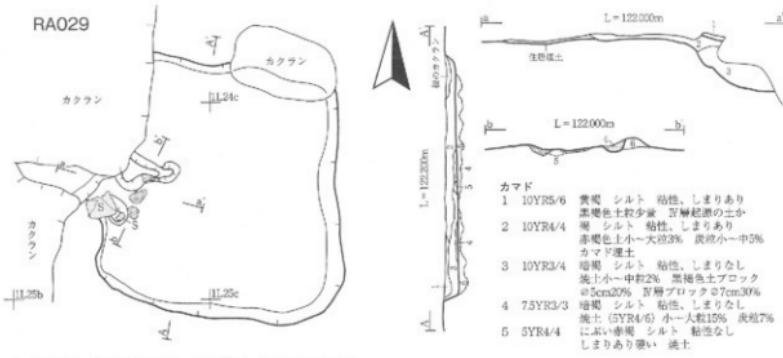
RA028

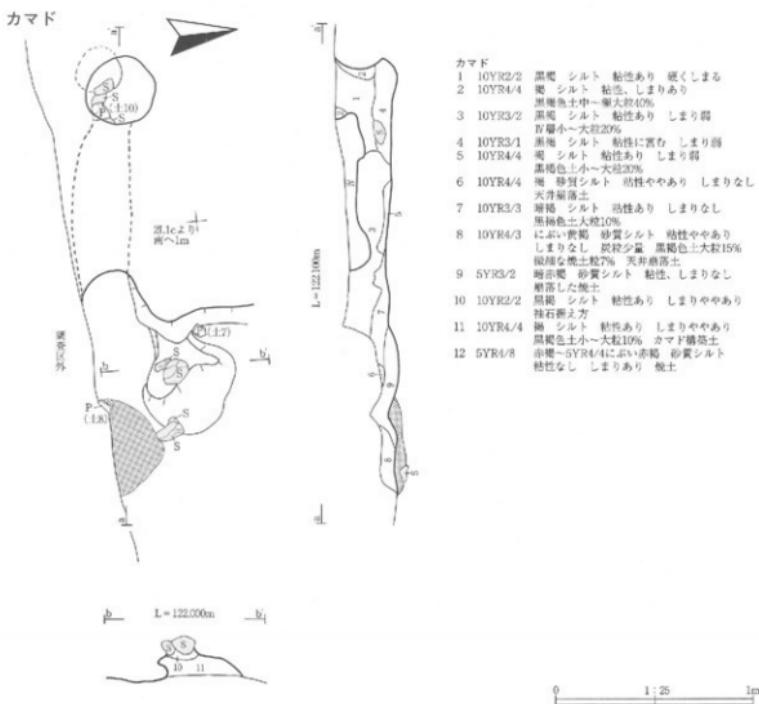
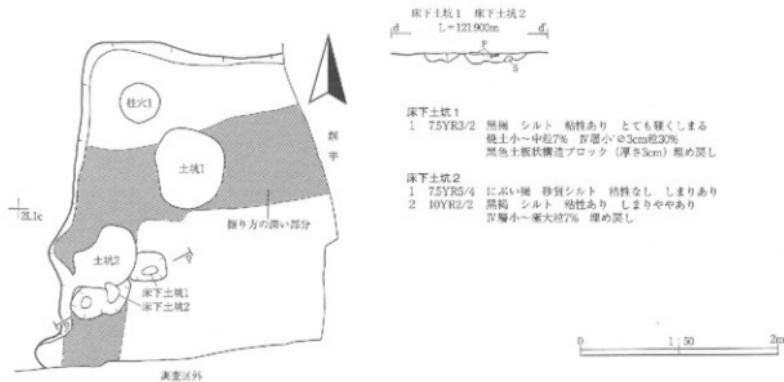


カマド



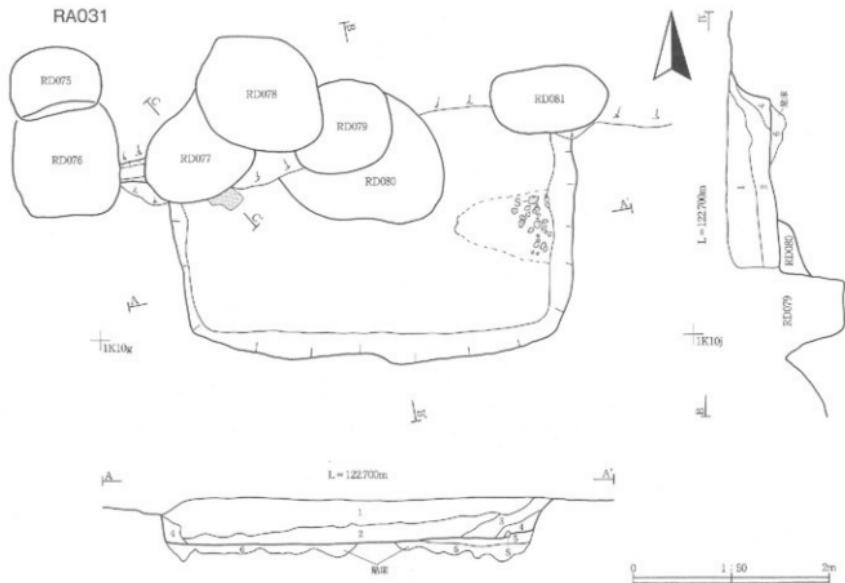
第25図 RA028竪穴住居跡



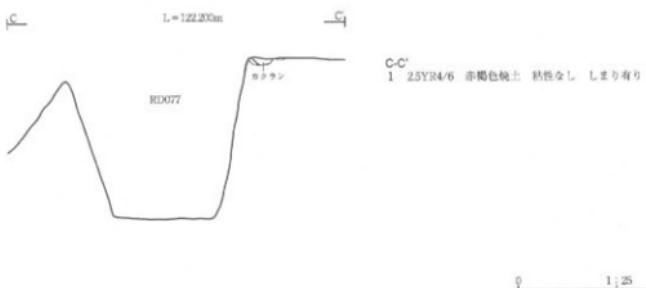


第27図 RA030堅穴住居跡 (2)

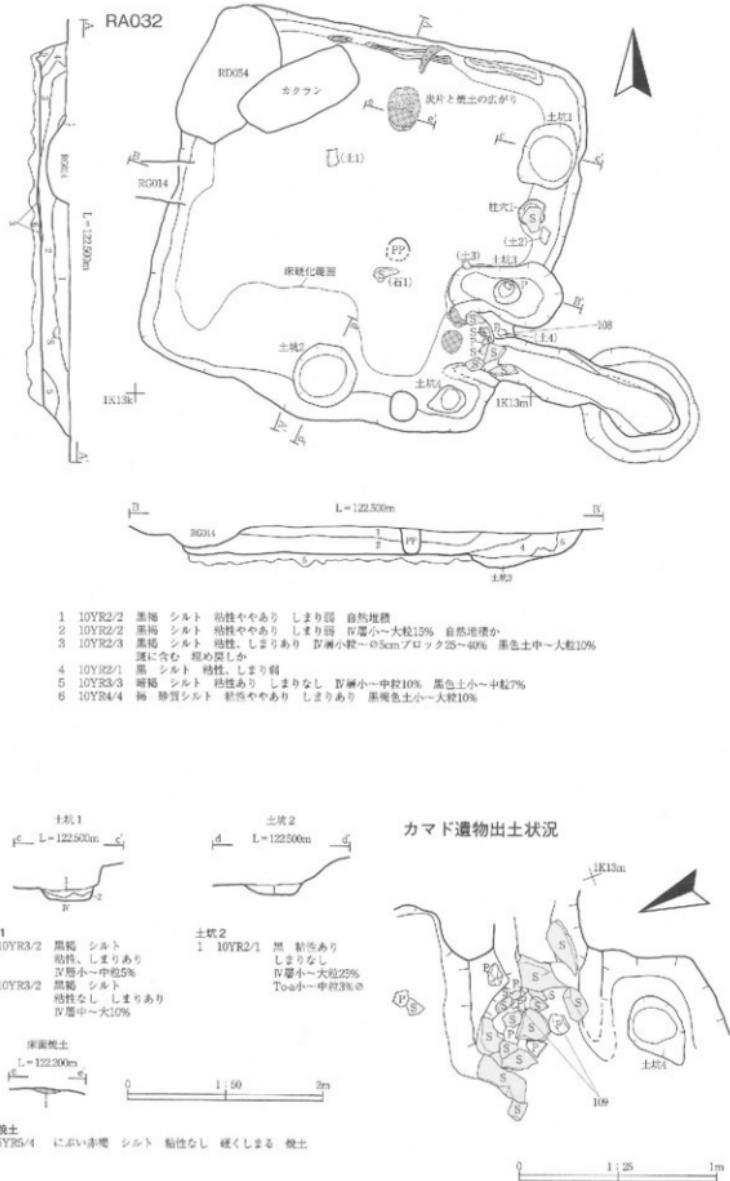
RA031



- A-A'・B-B'
- 1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや有り しまりやや有り
 - 2 10YR3/3 赤褐色シルト 粘性やや有り しまりやや有り
 - 3 10T3/3 黄褐色シルト 粘性やや有り しまりやや有り 地山ブロック混入40%
 - 4 10YR2/2 黒色シルト 粘性やや有り しまりやや有り 地山ブロック混入50%
 - 5 10YR2/6 明黄色シルト 粘性有り しまり有り ステップ状の構造土
 - 6 10YR3/1 黒褐色シルト 10YR6/8明黄色シルト10YR8/8黄緑シルトの混合土 粘性有り しまり有り 黏り床

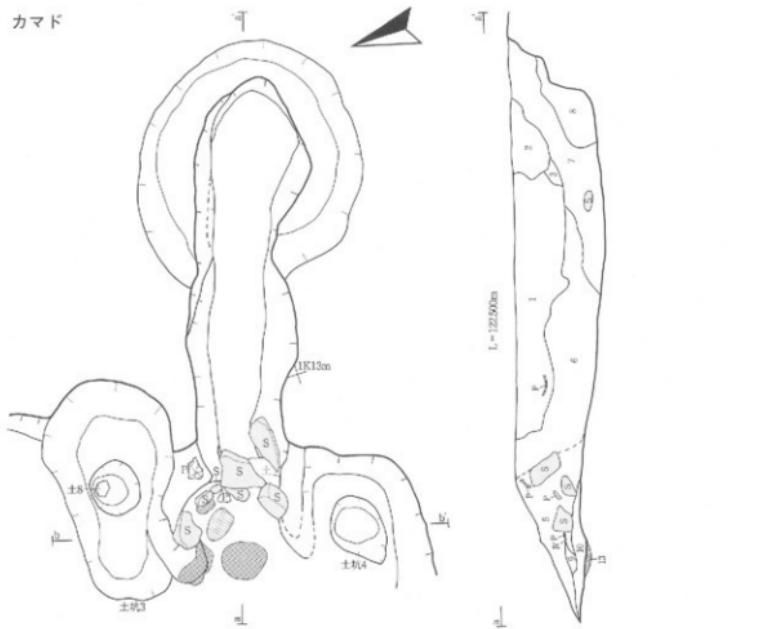


第28図 RA031整穴住居跡

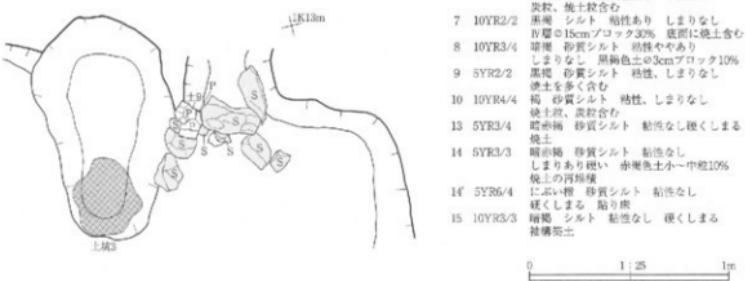


第29図 RA032竪穴住居跡 (1)

カマド

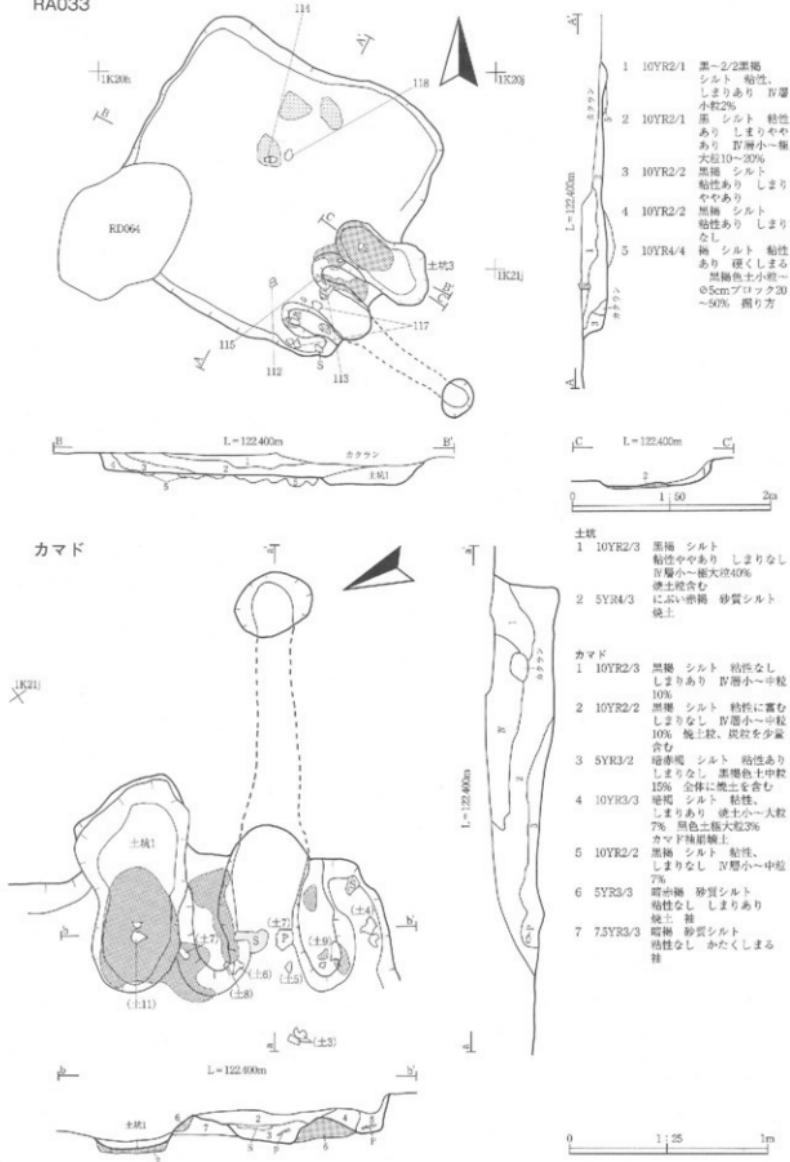


カマド構築礫・土器

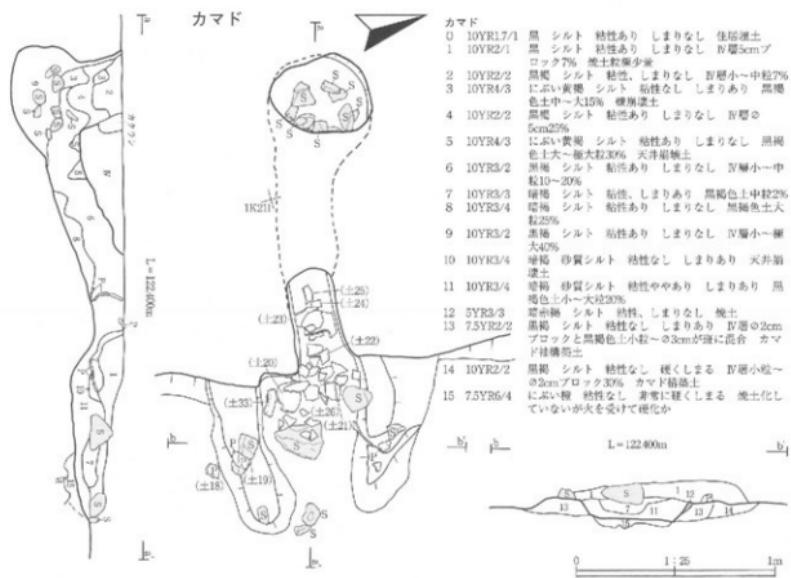
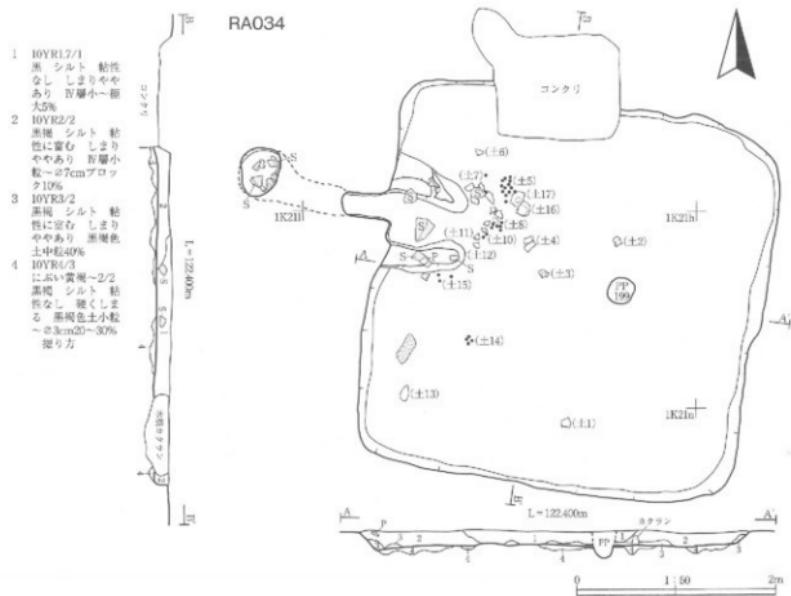


第30図 RA032竪穴住居跡 (2)

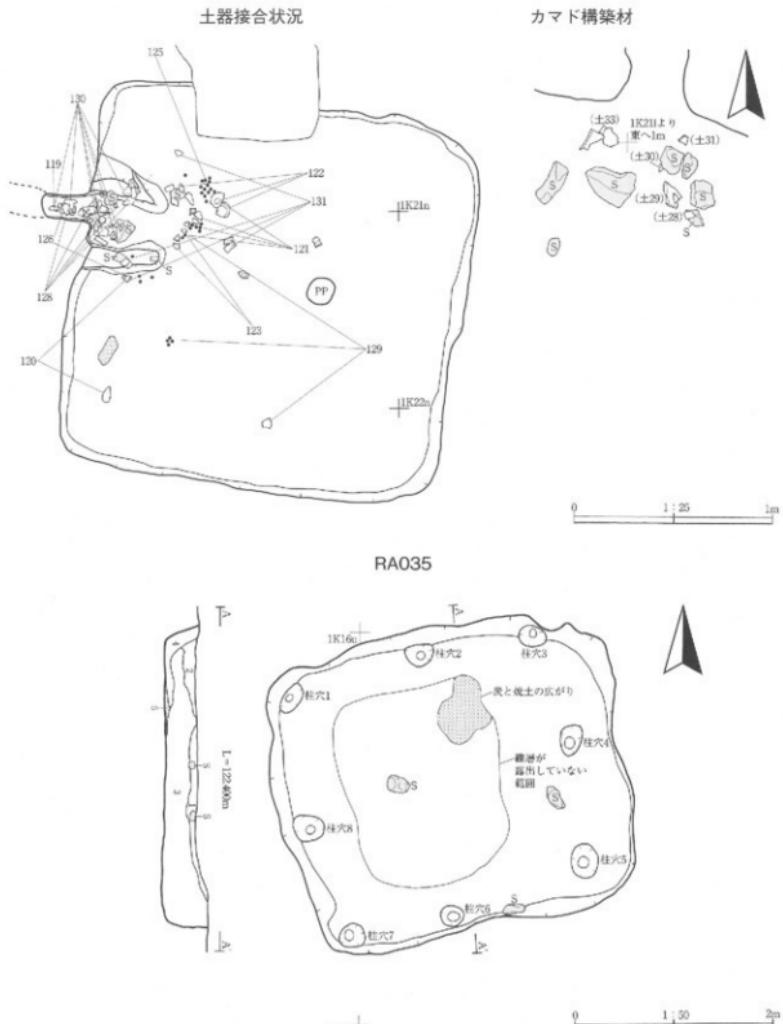
RA033



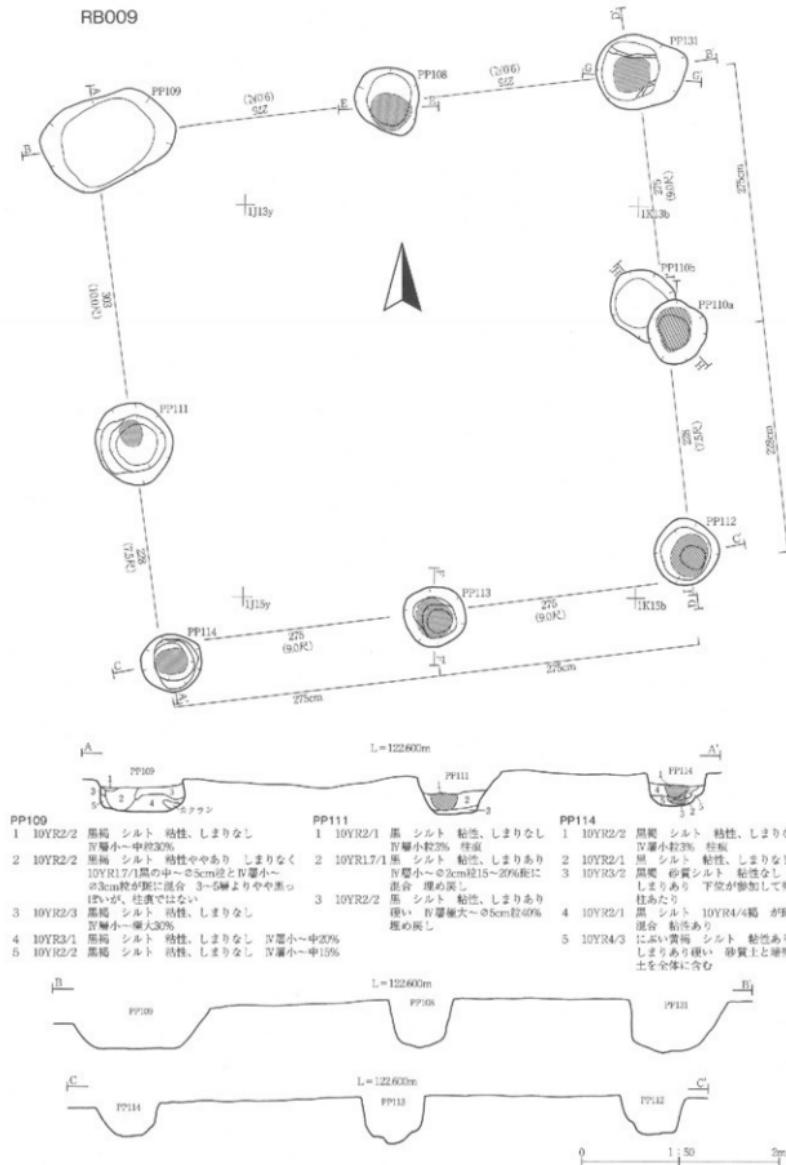
第31図 RA033豎穴住居跡



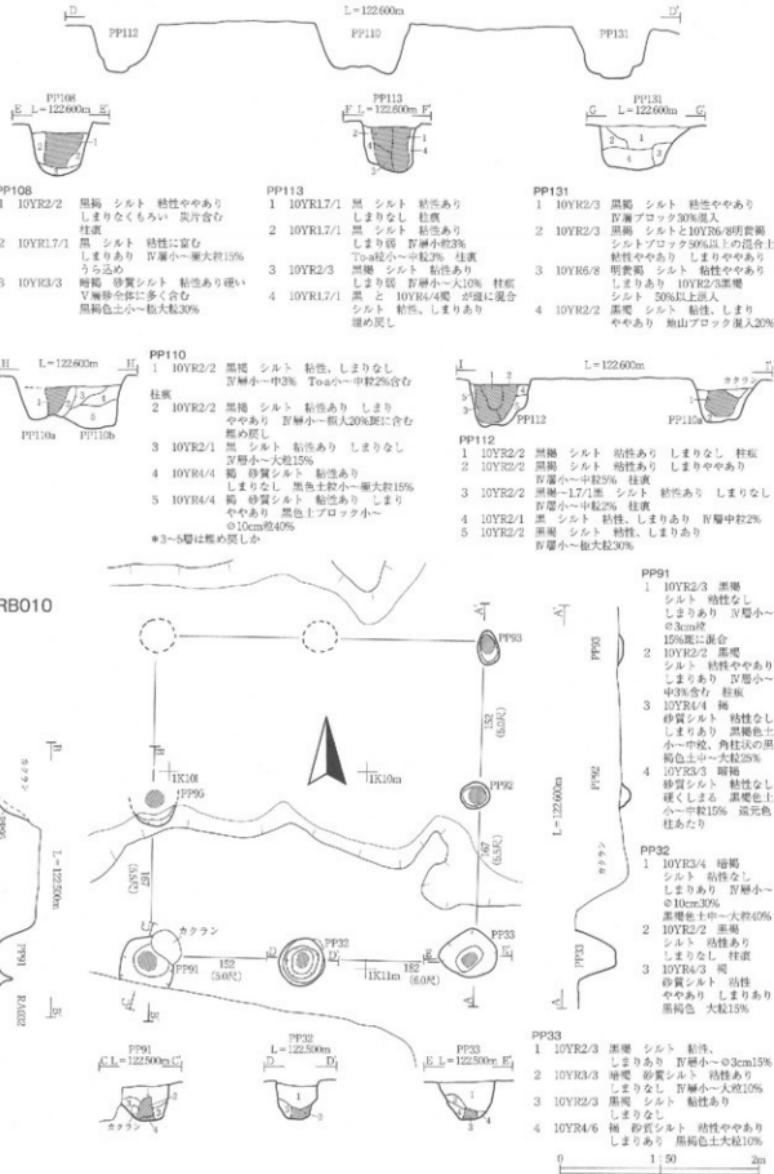
第32図 RA034竪穴住居跡（1）

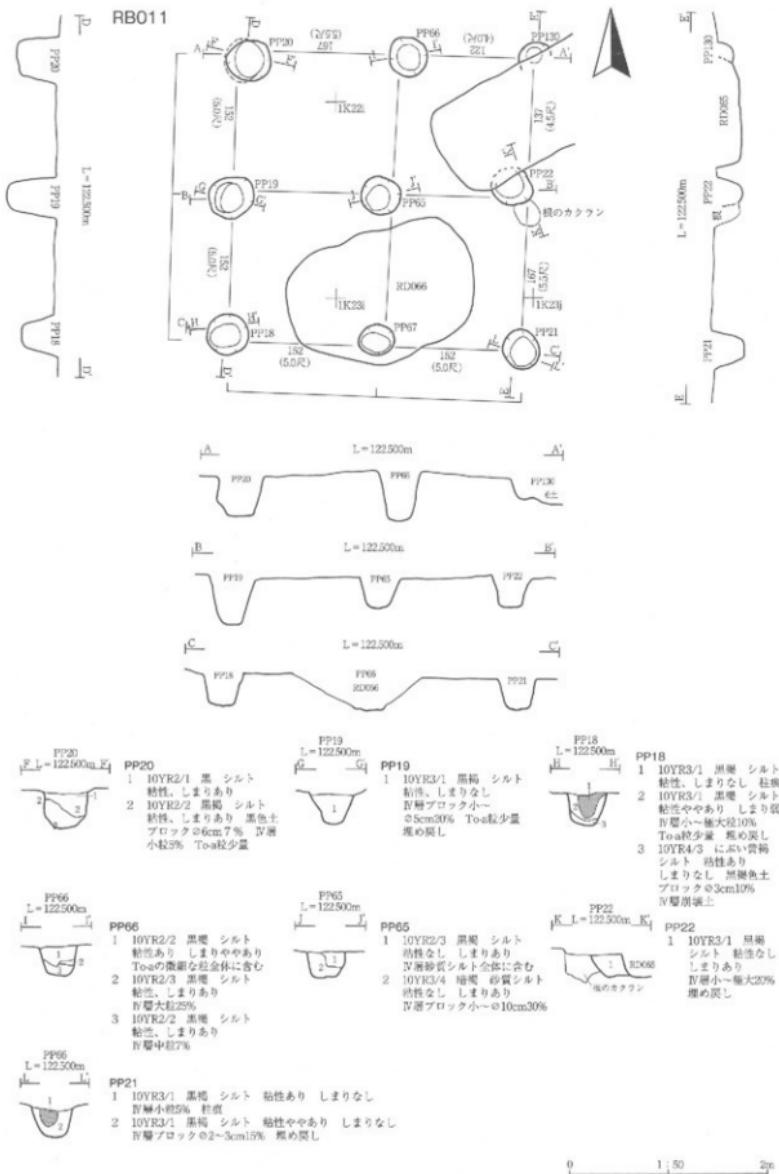


第33図 RA034・035竪穴住居跡

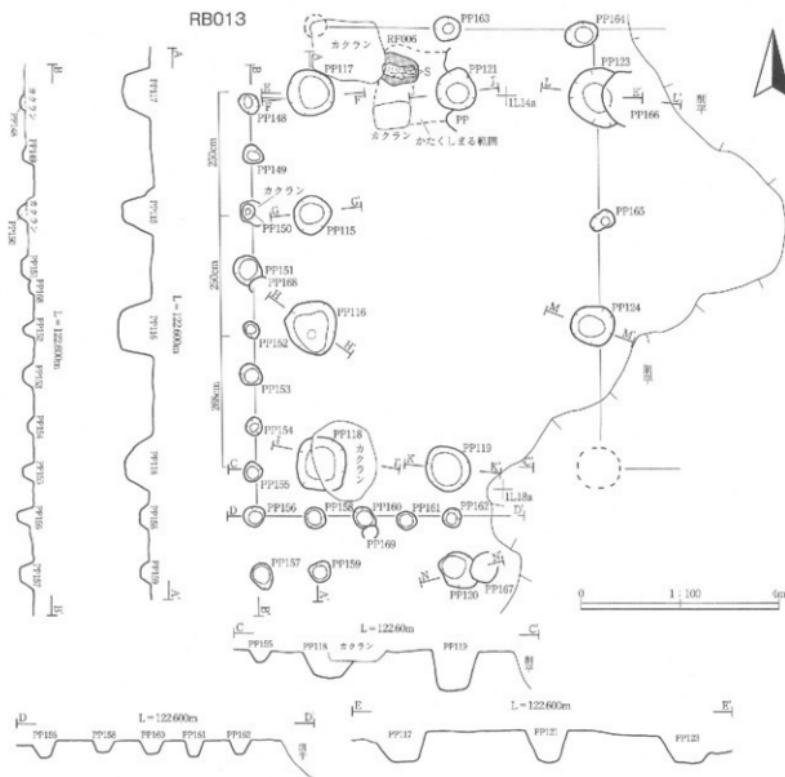
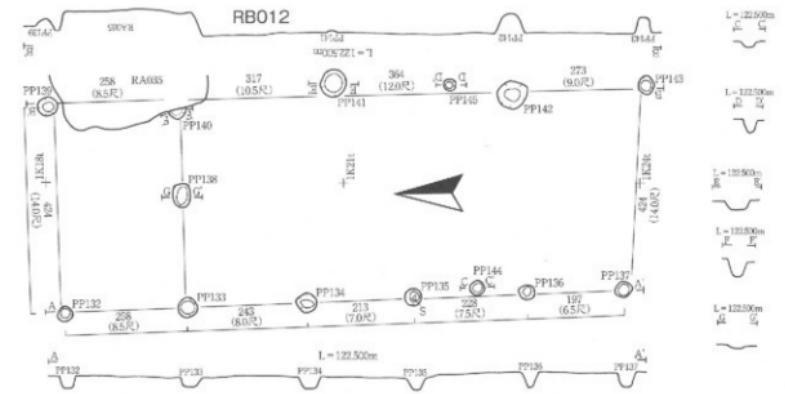


第34図 RB009振立柱建物跡 (1)



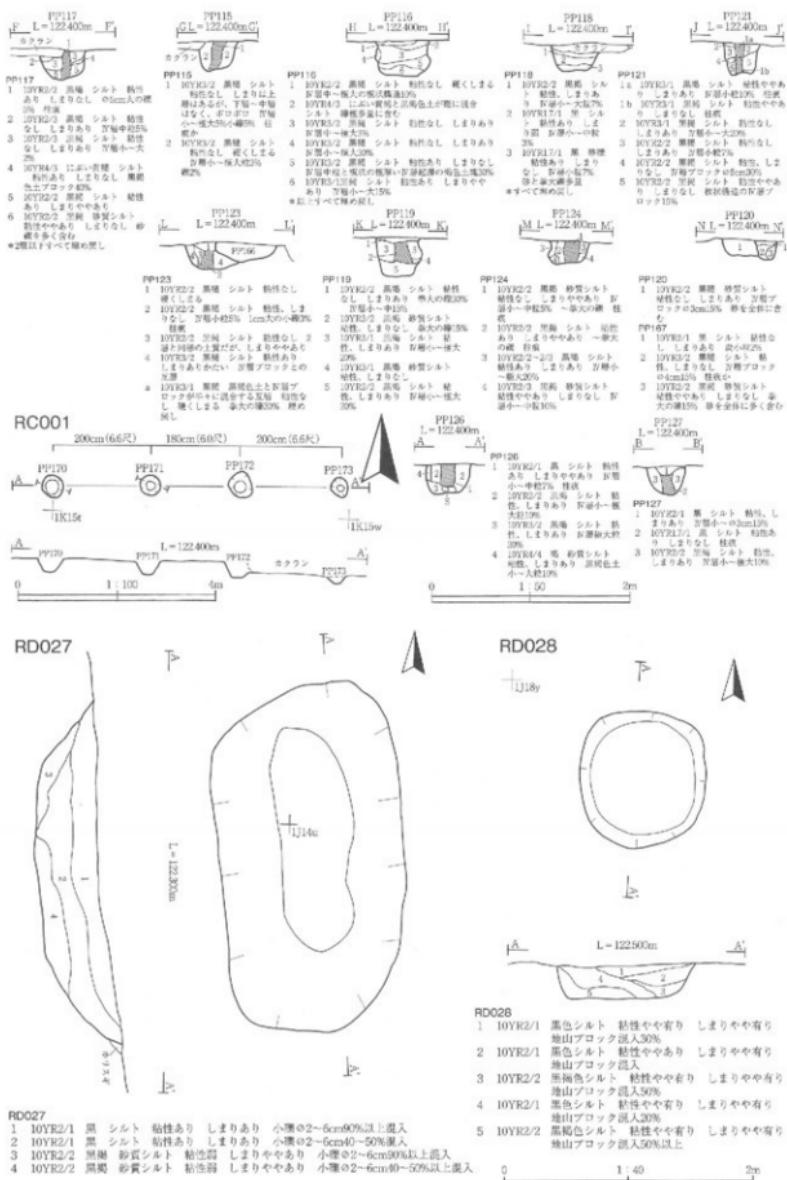


第36図 RB011掘立柱建物跡



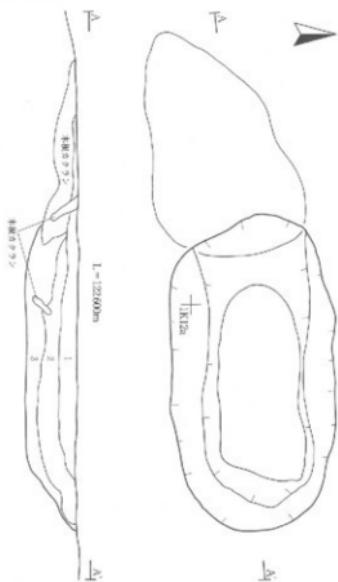
第37図 RB012・013掘立柱建物跡 (1)

四 檢出された遺傳



第38図 BB013掘立柱建物跡(2)・BC001柱穴列・BD027・028土坑

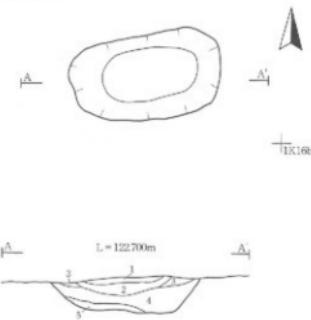
RD029



RD029

- 1 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性やや有り しまりやや有り
- 2 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性やや有り しまりやや有り
に10YR8/1灰白色Toaテフラ 粘性なし しまりやや有り
黑褐色土混入50%
- 3 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性やや有り しまりやや有り
地山ブロック混入50%

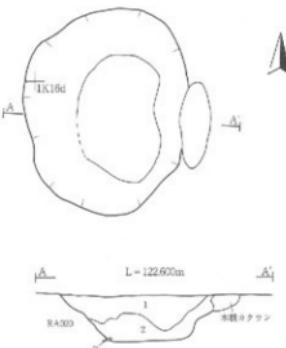
RD030



RD030

- 1 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや有り しまりやや有り
- 2 10YR8/1 灰白色Toaテフラ 粘性なし しまりやや有り
黑褐色土混入50%
- 3 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや有り しまりやや有り
地山ブロック30%混入
- 4 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性やや有り しまり有り
- 5 10YR6/8 明黄色シルト 粘性やや有り しまり有り
4層混入20%

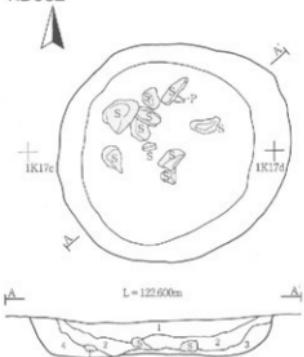
RD031



RD031

- 1 10YR2/1 黒 シルト 粘性、しまりあり 小粒3%
- 2 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性あり しまりややあり
N層小～3cm粒40%

RD032



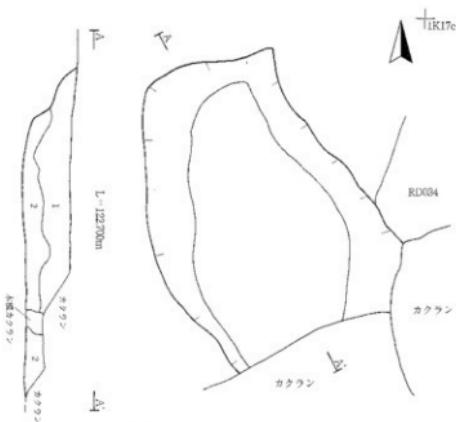
RD032

- 1 10YR2/1 黒 シルト 粘性ややあり しまりなし 土粒少々
- 2 10YR17/1 黒 シルト 粘性、しまりややあり
- 3 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性あり しまり弱 N層小粒3%
- 4 10YR17/1 黑 シルト 粘性ややあり しまりなし N層小～大粒20%

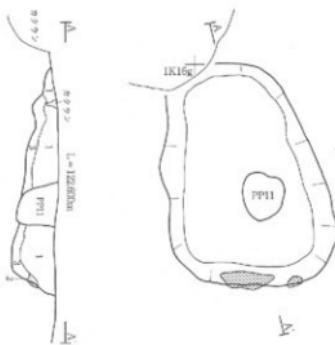
0 1:40 2m

第39図 RD029～032土坑

RD033



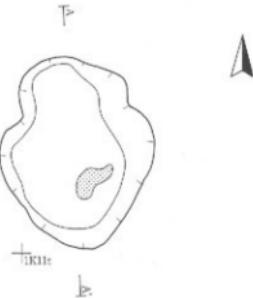
RD035



RD035
PP11 10YR2/2 黒褐 シルト 粘性なし しまりあり IV層小～中粒15%

- | 草本状はげごこ | |
|---------|---|
| 1 | 10YR2/2 黒褐 シルト 粘性ややあり しまり弱 IV層小~極大粒3~7% |
| 2 | 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルト 粘性、しまりなし IV~V層砂礫壤土 |
| 3 | 10YR2/2 黑褐 シルト 粘性に富む しまり強 IV層小~大粒10% |

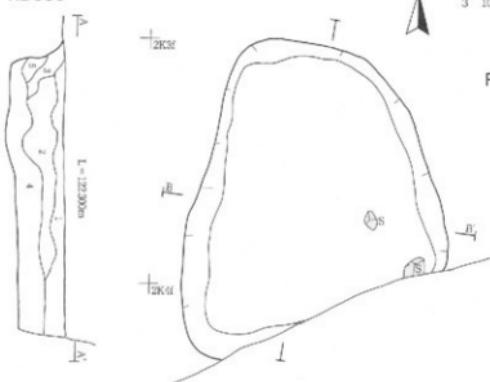
RD037



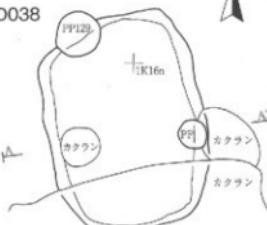
L = 122.300m

- | | 2 | 1 | 3 |
|------------|--------|-----------------------------|----------------------------------|
| RD037 | | | |
| 1 10YRL7/1 | 黒色シルト | 粘性やや有り
山並ブロック流入40% | しまりやや有り |
| 2 10YRK2/2 | 黒褐色シルト | 10YR7/2(黄橙色シルト)の混合土
粘性有り | しまりやや有り |
| 3 10YRK3/2 | 黒褐色シルト | 粘性やや有り
山並ブロック流入40% | しまりややあら
土砂 (5YR6/6)小粒
混合量入 |

BD036



RD038

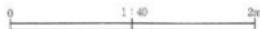


Geological cross-section diagram showing a stratigraphic column from bottom to top. The layers are labeled: I, PP, and カララン (Karan). A scale bar indicates a length of $L = 122.400 \text{ km}$.

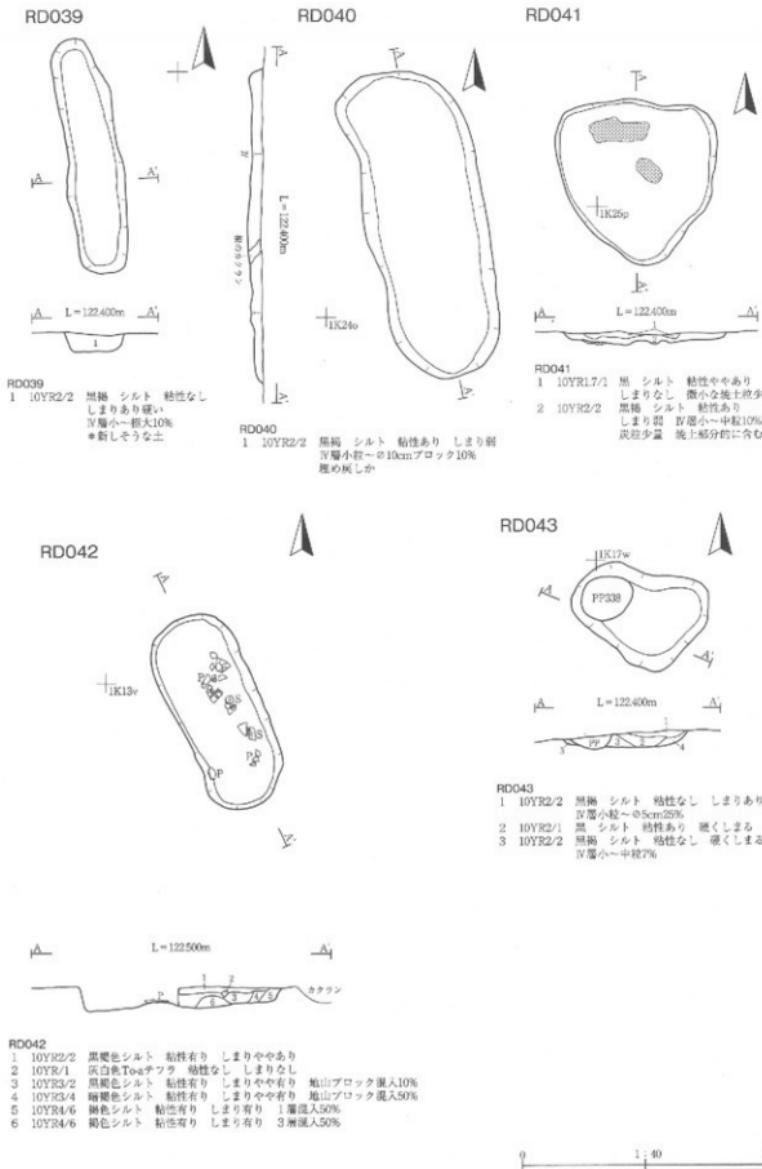
8802

- | | | | | |
|---|----------|-----|-----|---|
| 1 | 10YR17/1 | 黒 | シルト | 粘性、しまりあり |
| 2 | 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 粘性、しまりあり <small>N層小～中粒10%</small> |
| 3 | 10YR2/2 | 褐色 | シルト | 粘性、しまりあり <small>N層小～中粒15%</small> |
| 4 | 10YR17/1 | 黒 | シルト | 粘性に富む、しまりあり <small>被膜を含む N層小～中粒7%</small> |
| 5 | 10YR3/2 | 黒褐色 | シルト | 粘性、しまりあり <small>N層大～深層壤土</small> |

すべて自然増殖

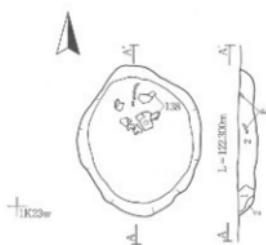


第41図 BD035~038土坑



第42図 RD039~043土坑

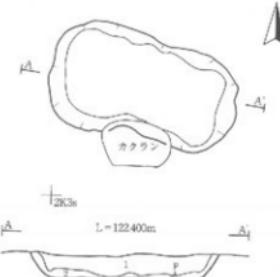
RD044



RD044

- 1 10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性なし かたくしまる
Ⅳ層小粒5~7%
- 2 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性なし 硬くしまる
特に北側全体に硬土を含む
硬土 (5YR6/6混) 小~中2%

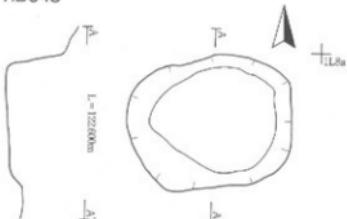
RD046



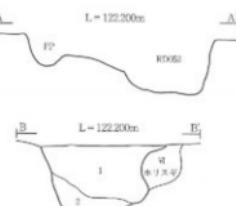
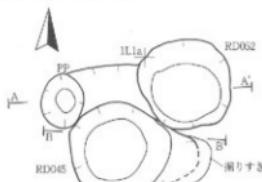
RD046

- 1 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性あり しまりなし
Ⅴ層小~中粒10%
- 2 10YR4/2 灰青褐色 シルト 粘性あり しまりなし
黒褐色小~中粒2% 百層小~中粒20%

RD048



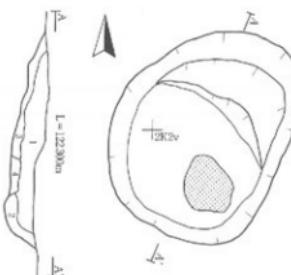
RD045・RD052



RD045

- 1 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性、しまりあり 硬小~大5%
- 2 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性、しまりあり 硬大強60%

RD047



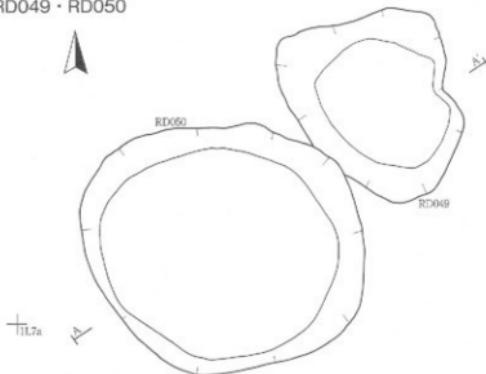
RD047

- 1 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性あり しまりなし 硬少強
- 2 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性あり しまりなし Ⅳ層小~中15%
- 3 10YR1.7/1 黑褐色 シルト 粘性あり しまりなし
- 4 10YR3/3 黑褐色 シルト 粘性あり しまりなし 良小~中粒2%

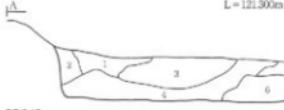
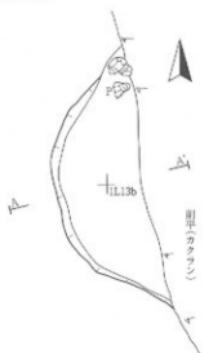
0 1:40 2m

第43図 RD044~048・052土坑

RD049・RD050

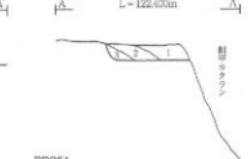


RD051



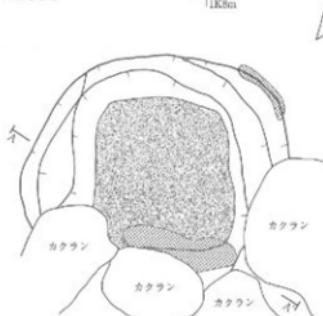
RD049
1 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや有り しまり有り 小標混入50%

- RD050**
- 1 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性有り しまり有り
 - 2 10YR4/4 黄褐色シルト 粘性有り しまり有り 標崩土か
 - 3 10YR2/1 黑褐色シルト 粘性有り しまり有り
 - 4 10YR2/1 黑褐色砂質シルト 粘性有り しまり有り
 - 5 10YR3/1 黑褐色砂質シルト 粘性なし しまりやや有り
 - 6 10YR2/2 黑褐色シルト 粘性なし しまりやや有り 地山ブロック混入50%



RD051
1 10YR3/4 黑褐色シルト 粘性やや有り しまり有り
地山ブロック混入10%
2 10YR3/2 黑褐色シルト 粘性やや有り しまりやや有り
地山ブロック混入30%
3 10YR3/2 黑褐色シルト 粘性やや有り しまりやや有り
地山ブロック混入50%崩壊土

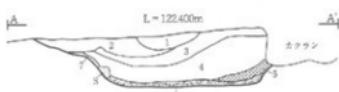
RD053



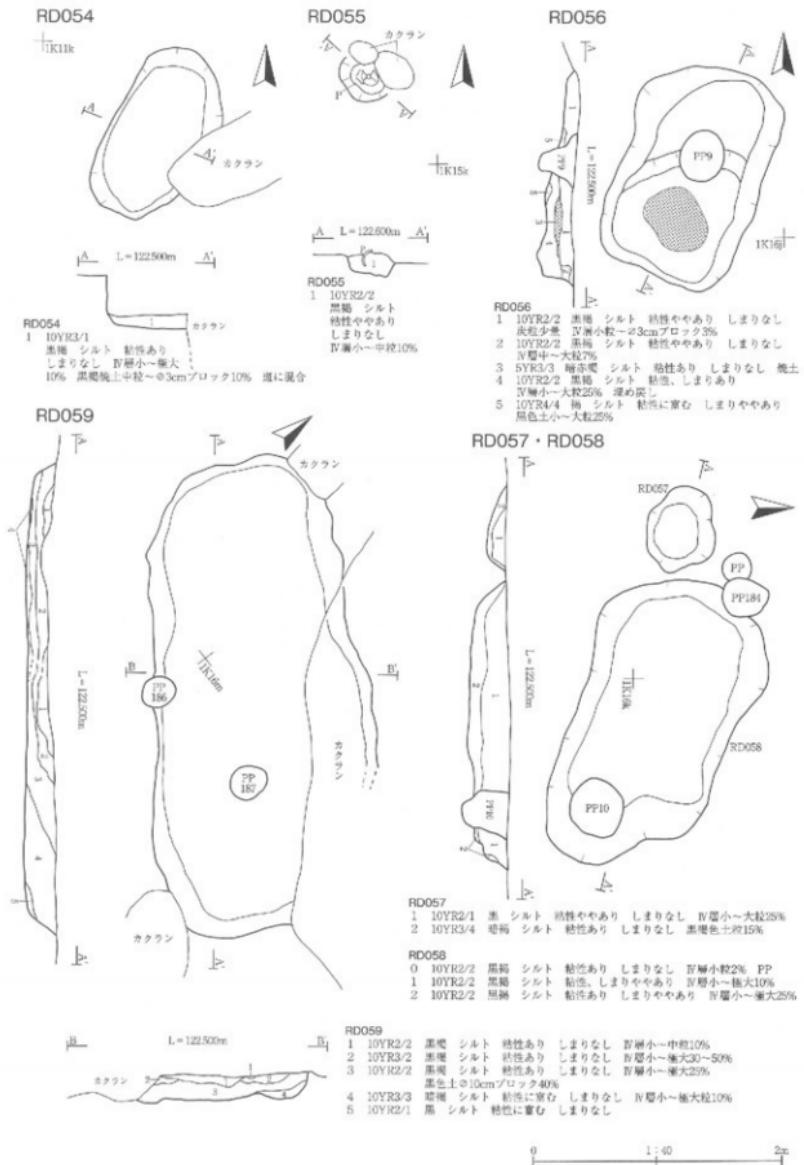
RD053

- 1 10YR2/3 黑褐 シルト 粘性、しまりなし IV層小～大粒10%
- 2 10YR2/2 黑褐 シルト 粘性あり しまりなし
- 3 10YR2/2 黑土土ブロック 2.3～7cm40%
- 4 10YR2/2 黑褐 シルト 粘性、しまりなし IV層小～大粒3%
- 5 7.5YR4/4 黑 色シルト 粘性なし しまりなし IV層小～0.5cm25%
- 6 10YR17/1 黑 シルト 粘性なし しまりなし 岩片、カーボン都層
Ⅳ層小～大粒25%
- 7 10YR4/4 黑 色シルト 粘性、しまりなし 崩壊土

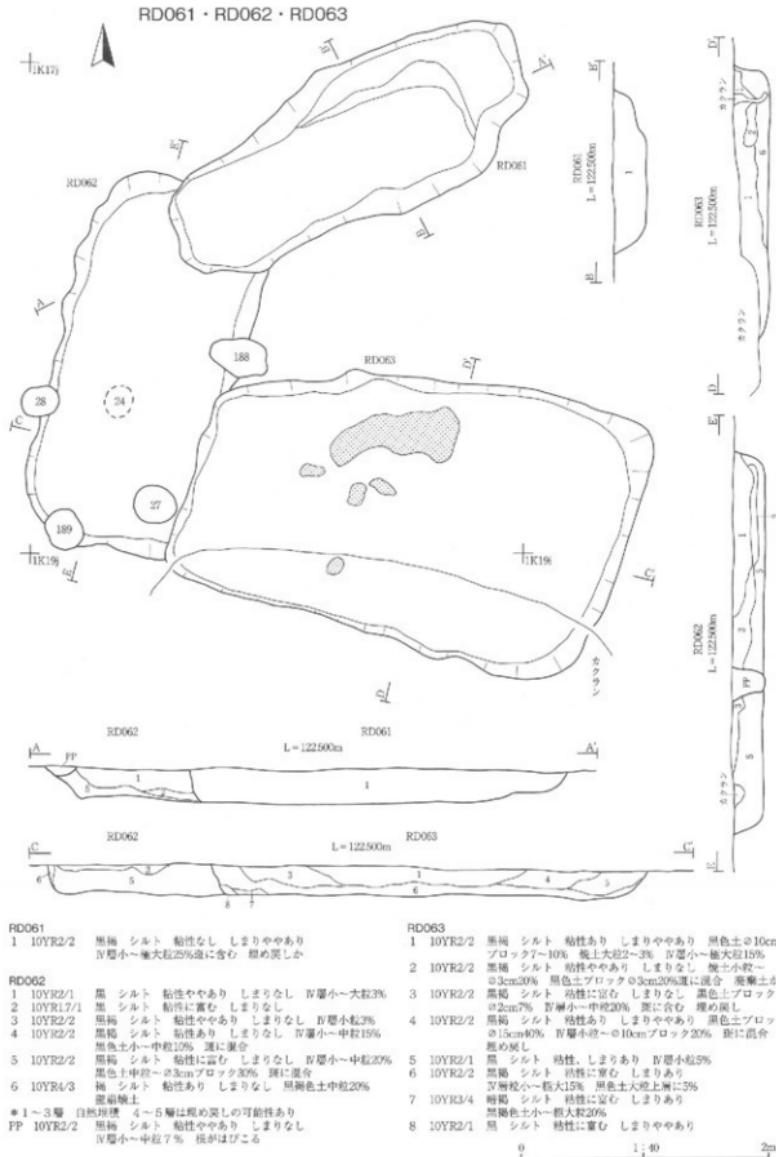
*23層は自然地盤



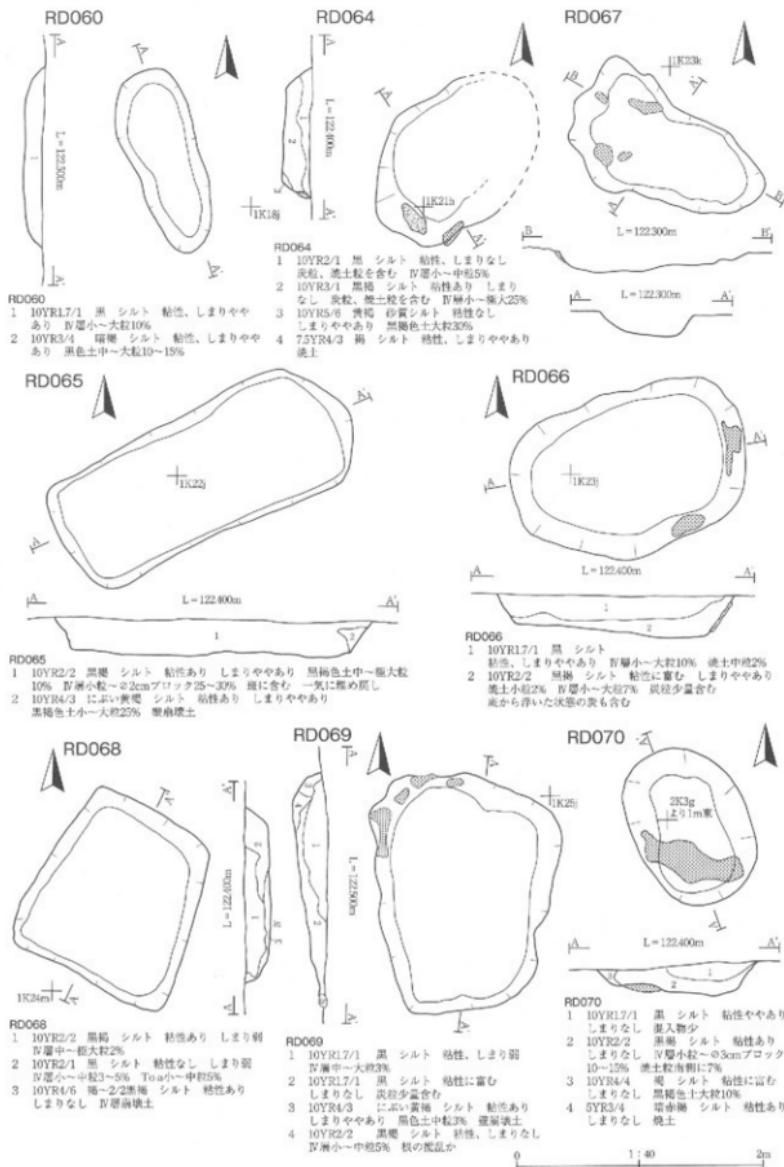
第44図 RD049～051・053土坑



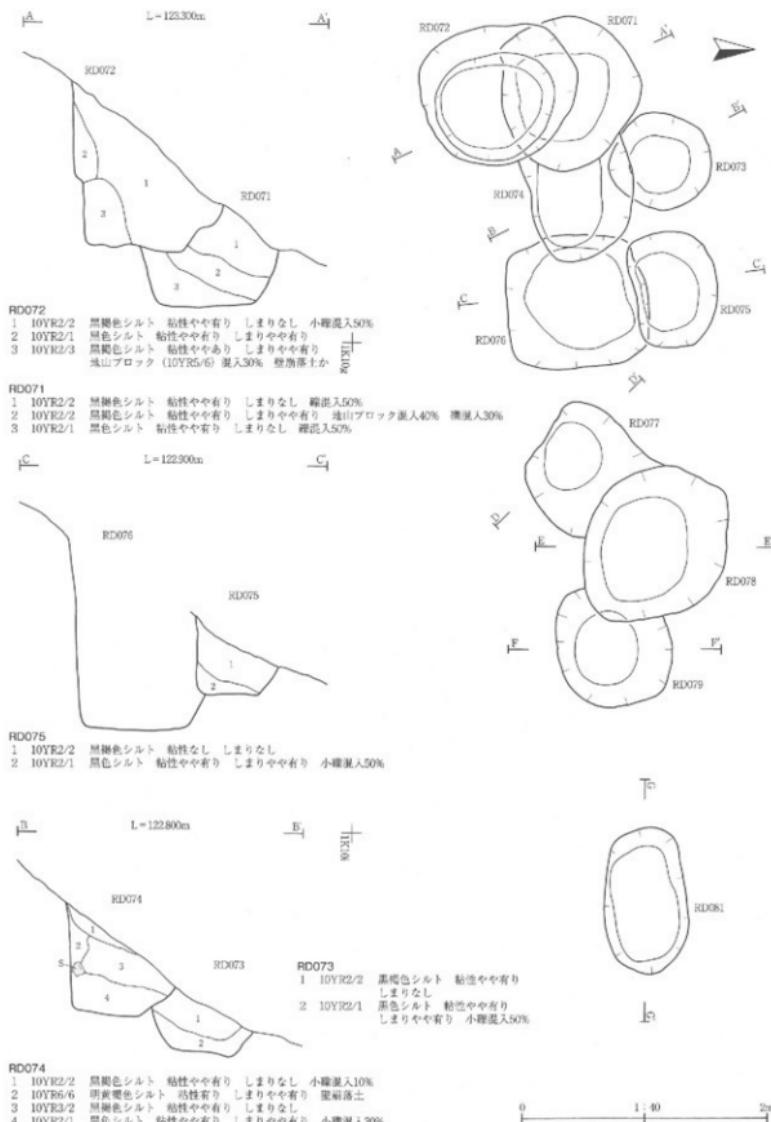
第45図 RD054～059土坑



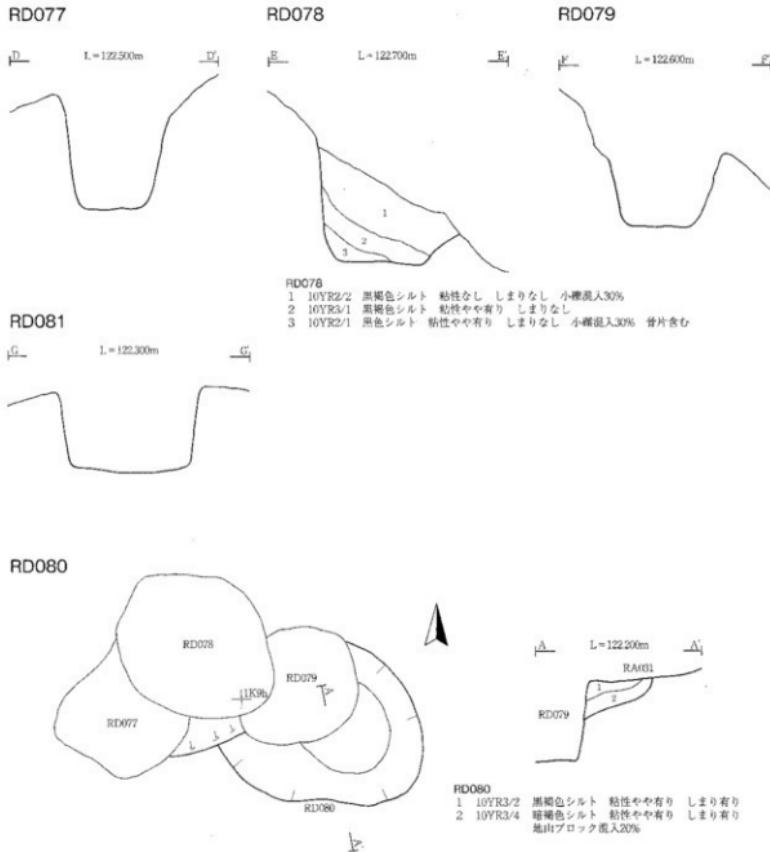
第46図 RD061～063土坑



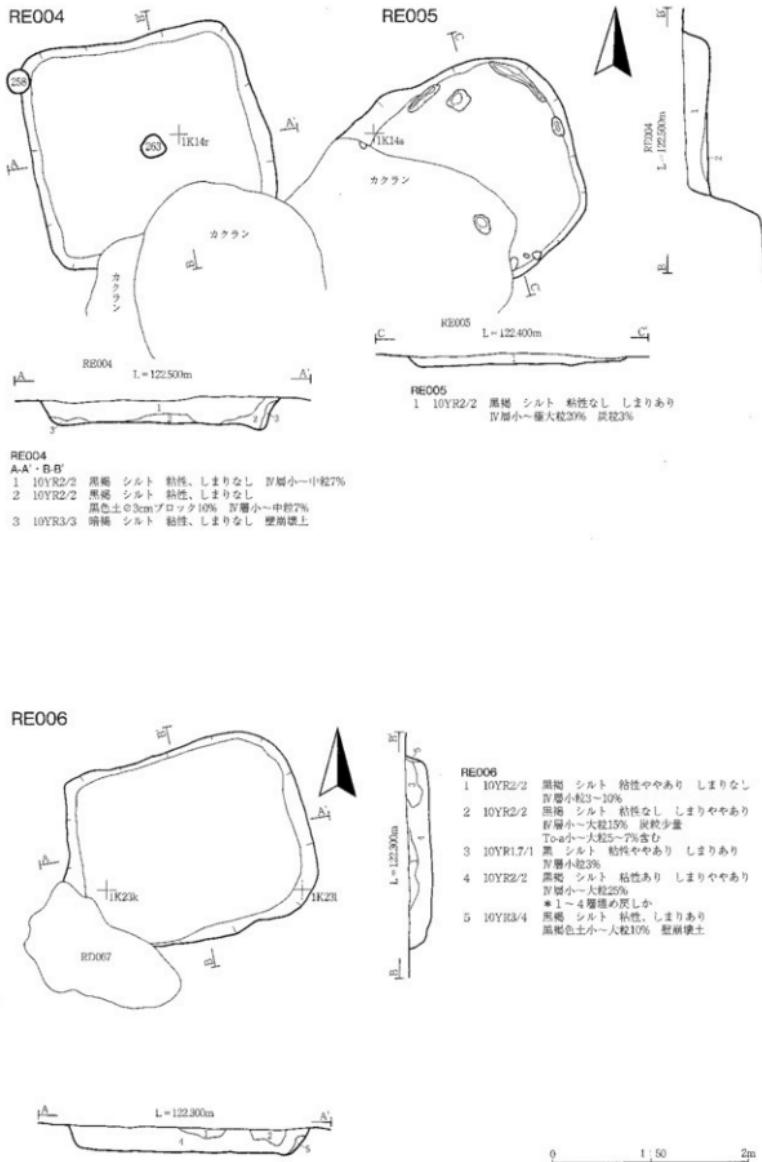
第47図 RD060・064~070土坑



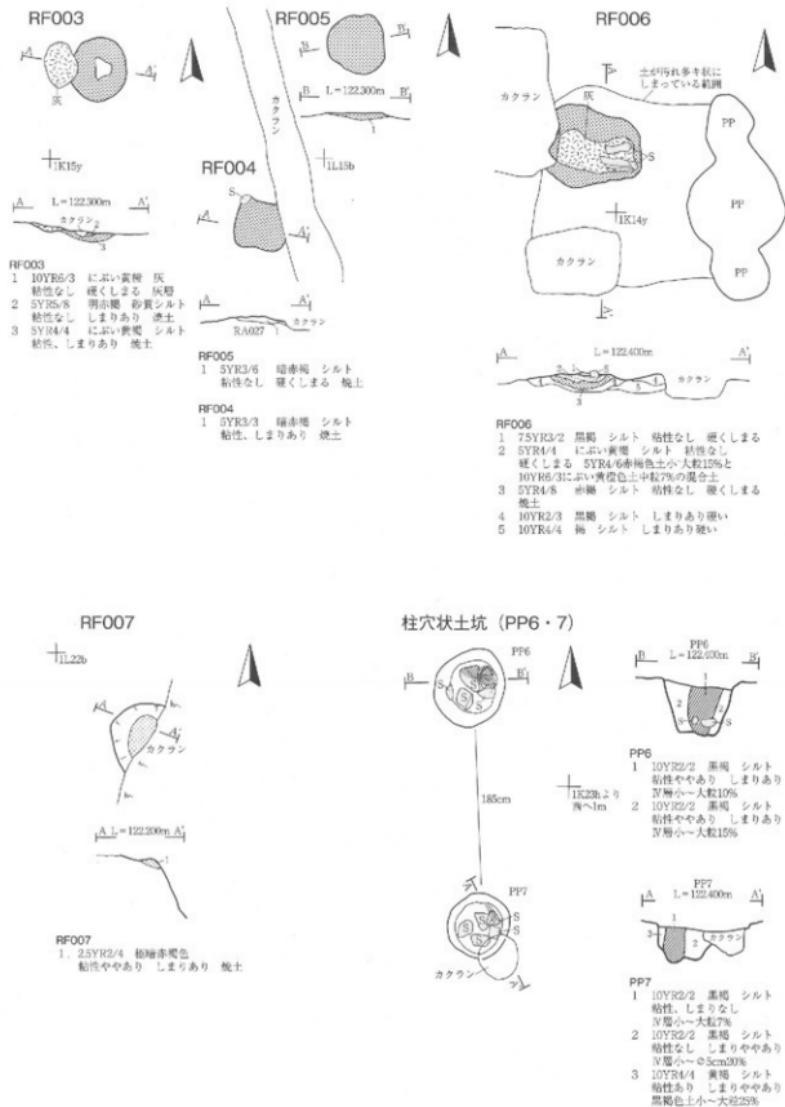
第48図 RD071~079・081土坑



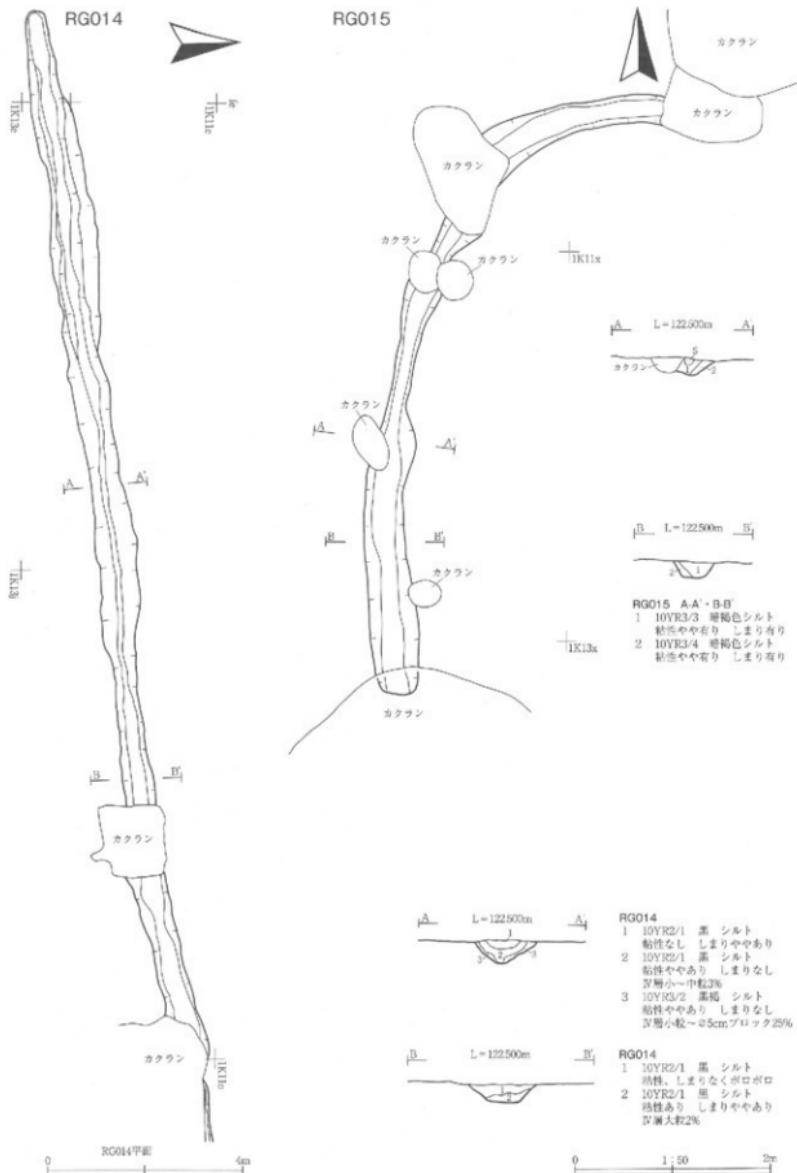
第49図 RD078～081土坑



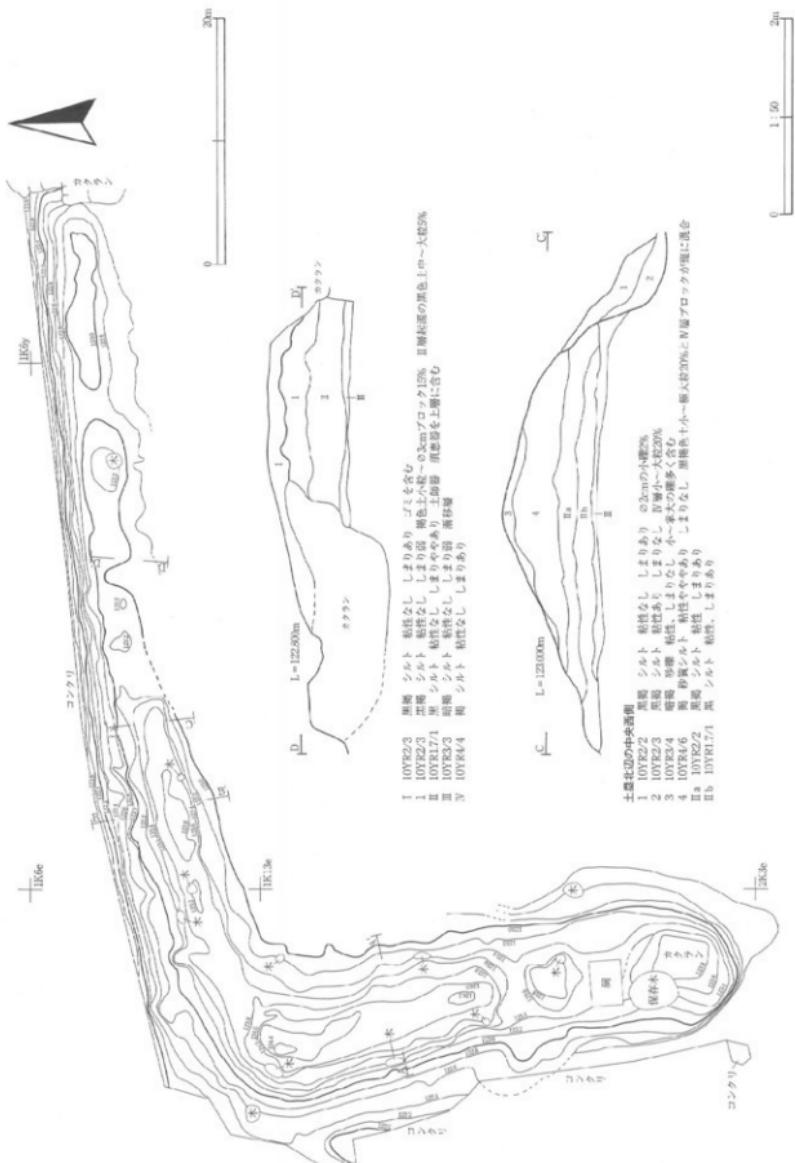
第50図 RE004~006竪穴状遺構



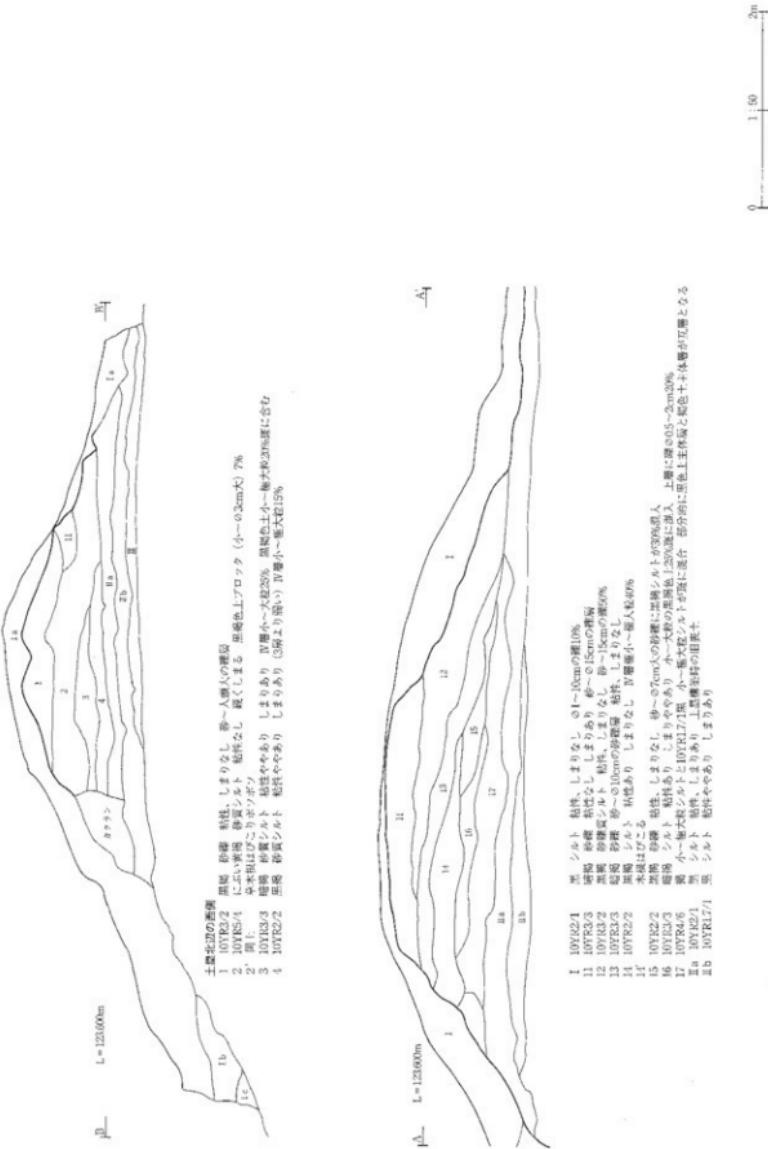
第51図 燐土遭撲・柱穴状土坑(1)



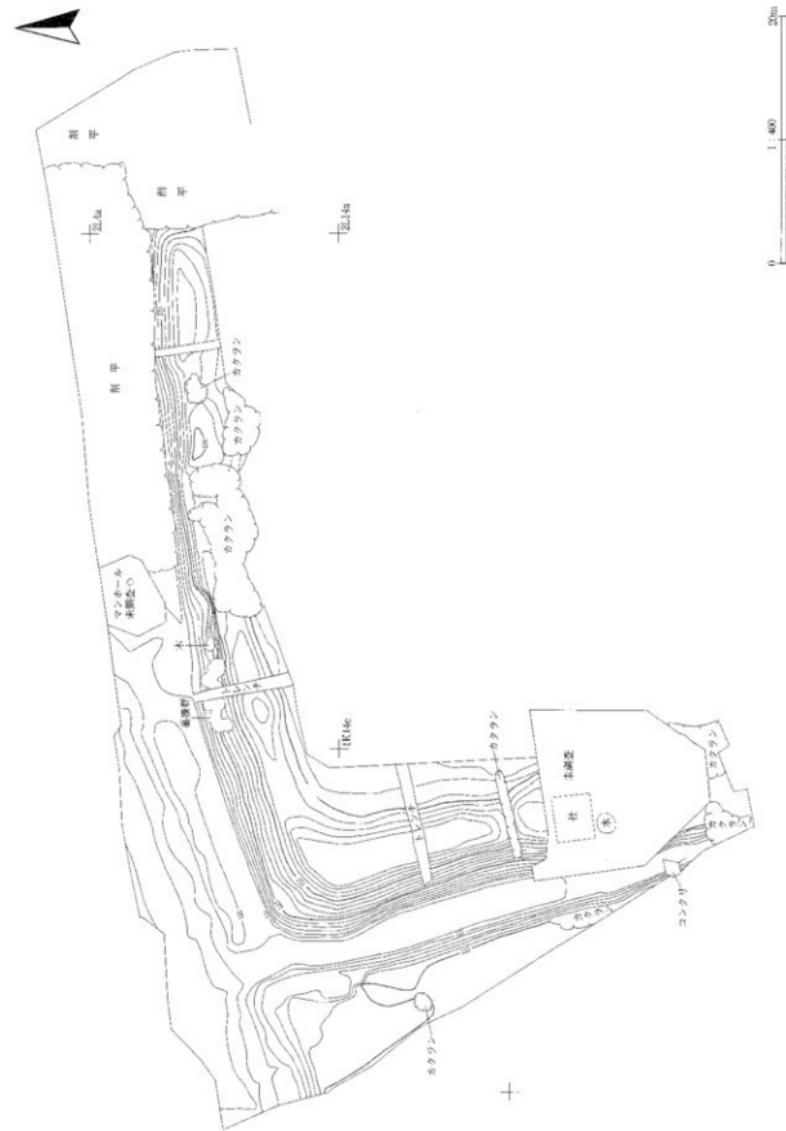
第52図 RG014・015溝跡



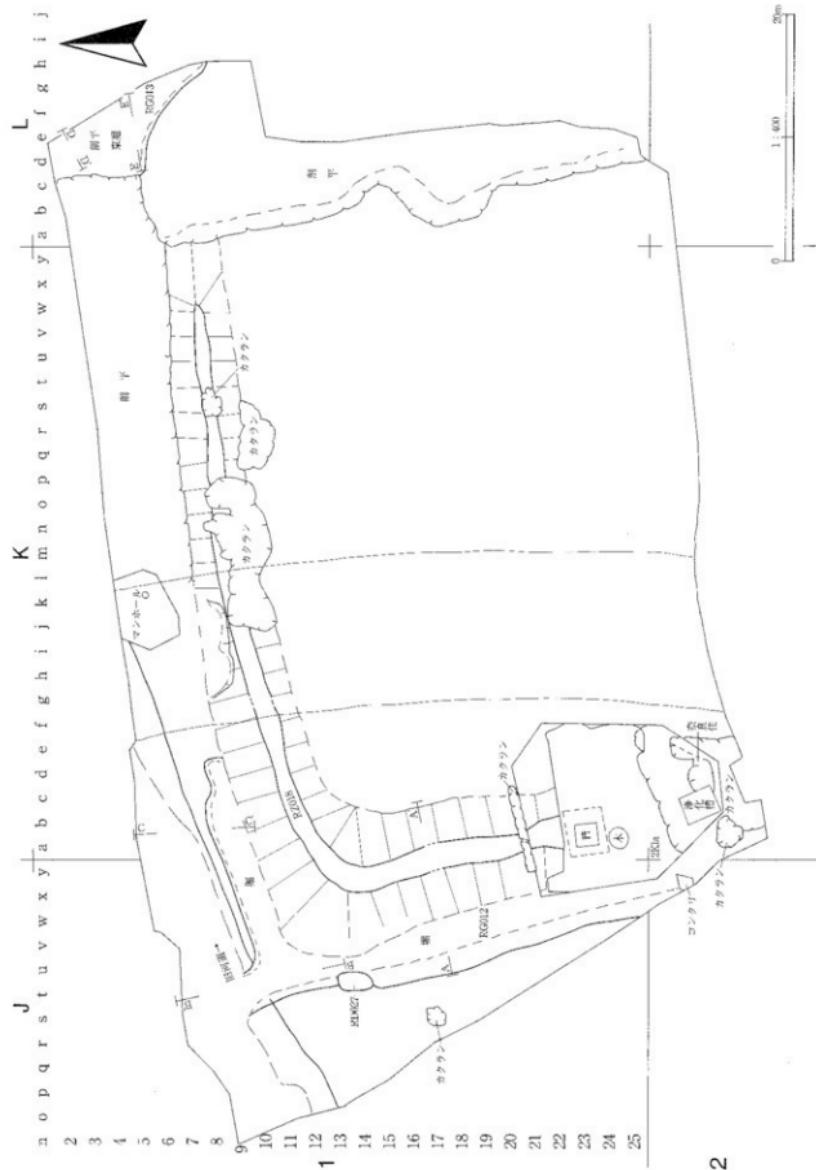
第53回 RZ018土壌跡現況図・断面図(1)



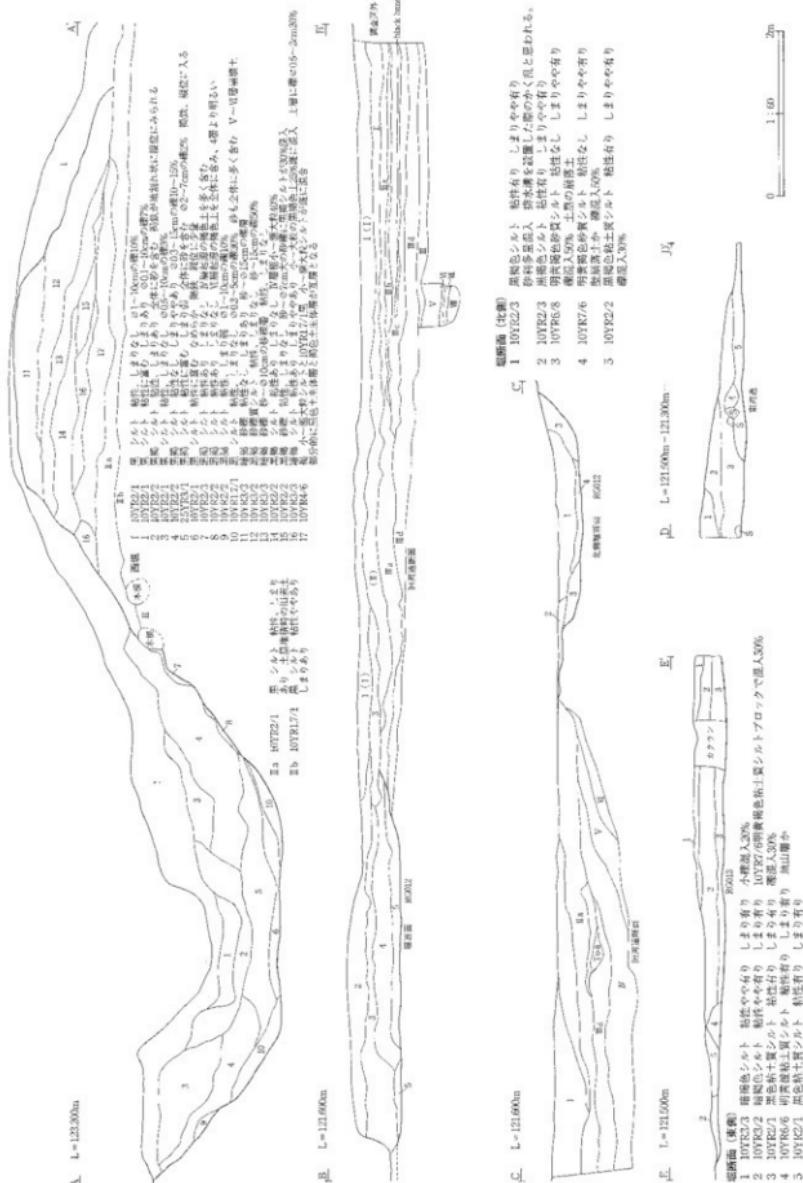
第54図 RZ018土壤跡断面図 (2)



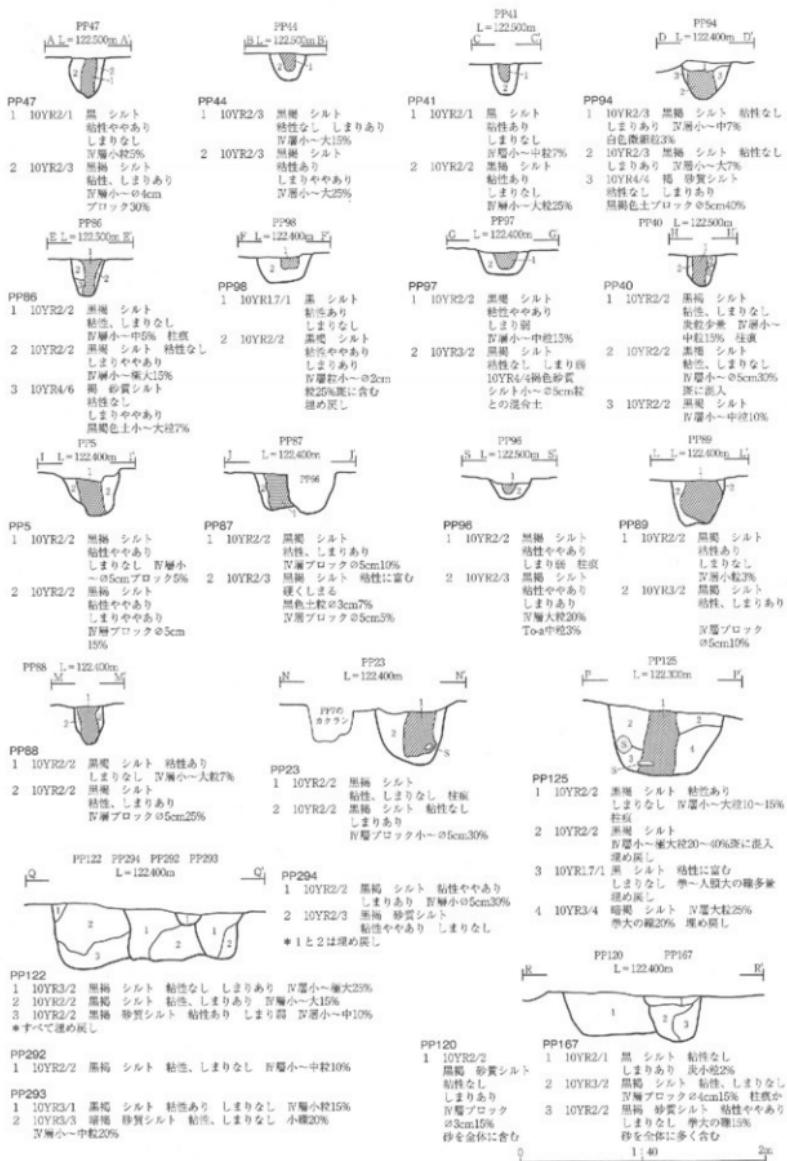
第55図 RZ018土壠跡、RG012堀跡、旧河道地形測量図



第56図 RZ018土壠跡、RG012・013堀跡、旧河道



第57図 RZ018土壠跡、RZ012・013堀跡、旧河道断面図



第58図 柱穴状土坑断面図

V 出 土 遺 物

今回の調査で出土した遺物は 土師器・須恵器129kg、石器・石製品31.1kg、木製品5.0kg、土製品343g、陶磁器23kg、時期不明の土器小1袋、金属製品50.4g、古銭24点、縄文土器片14片がある。

1 土師器・須恵器（第59～91図、写真図版60～81）

口縁部から底部まで器形の復元できるものを掲載したが、遺構内遺物はこの限りではない。また、墨書き土器、刻書き土器は小片であっても掲載した。器種は壺、高台付壺、高壺、碗、鉢、（長胴）甕（大小）、球頭甕、瓶、壺、大甕がある。壺と高台付壺、鉢は黒色処理されているものと、黒色処理のないものとがある。

土師器の壺、高台付壺、高壺、鉢には内面を黒色処理して、磨いたもの（所謂内黒の土師器）と、黒色処理、磨きのないものがある。今回は観察表及び本文中では黒色処理したものと内黒土師器、黒色処理のないものを土師器と表記した。また、壺、碗、高台付壺には内外面とも黒色処理して、磨いたものもあり、これらは表及び本文中には便宜的に両黒土師器と表記している。

出土位置は、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝跡といった遺構から出土したものが51.4kg、旧河道及び旧河道内の遺物集中区から出土したものが63.4kgである。遺構外からは14.2kg出土した。

（1）壺

内黒土師器102点、両黒土師器5点、土師器71点、須恵器33点を掲載した。

ア 土師器（内黒）

ロクロを使用していないもの・・・①

ロクロを使用しているもの・・・②

再調整のあるもの

・回転ヘラケズリ

体部下端～底部周縁

体部下端～底部全体

・手持ちヘラケズリ

体部下端のみ

体部下端～底部周縁

体部下端～底部全体

再調整のないもの

① ロクロを使用していないもの

RA018竪穴住居跡の1～4、RA031竪穴住居跡の103、RD051土坑の140、RD056土坑の147の7点である。1・2は体部内外面に段があり、底部は丸底である。3は外面に段があるが、内面は明確な段ではなく、屈曲程度に残っている。4は段、屈曲ともにない。3・4とともに丸底風。140は丸底で外面にハケメが残る。内外面ともに体部の段が明瞭で、口縁部は外反している。103と147ともに口径、器高が大きい。103は体部のみの破片である。内外面ともにミガキで、底部下半に緩い

屈曲が残る。口縁部は外傾する。147は口径が大きく、内外面ともにミガキが施される。丸底風で底部から体部の境が不明瞭である。

② ロクロを使用したもの

切り離しは、底部が再調整もしくは摩耗のため確認できないものを除き、すべて回転糸切りである。糸切り後再調整するものとしないものがある。再調整には、回転ヘラケズリと手持ちヘラケズリがあり、調整を施している場所は体部下端～底部周縁、体部下端～底部全体である。

全体の器形が復元できる土器のうち、回転ヘラケズリは量が少なく、5点のみである。手持ちヘラケズリと再調整のない土器はほぼ同数で、それぞれ25点、24点である。

器形は底部からやや内湾気味に立ち上がるものが多いため、再調整のないものについては若干底部が突出するものがある（166・279・289・290）。

イ 両黒土師器

すべて、ロクロを使用しているとみられる。内外面ともに黒色処理をして、丁寧なミガキが施されるため、切り離し技法は不明である。器形は底部からやや内湾気味に立ち上がり、口唇部で直線的になるもの（197）、口唇部で若干外反気味になるもの（126・199）がある。磨きは内外面とも横方向の197・198、外面及び内面口縁部横方向、内面部縦方向の126がある。底部の磨きは直線的に一方向に磨く197・198のほか、ロクロの回転を利用した？ような126がある。また、199には外面に植物の葉脈状の刻線が刻まれている。焼成前に刻まれたとみられる。

ウ 土師器

切り離し後再調整のみられるものはない。多く出土しており、器形が復元できたものは54点で、内黒の土師器に匹敵する量である。

- a 器形は底部から口唇部に至るまで直線的に立ち上がる（222・224・301・335など）、
- b やや内湾して立ち上がり、口唇部は直線的なもの（125・210・298など）、
- c 内湾して立ち上がり、口唇部はやや外反するもの（269・270など）、
- d 底部がやや突出気味で、内湾しながら立ち上がる（112・113・211・231・235など）がある。

a～cは器高がやや高く4.7～5.7cm前後、dは坏身が浅くなり、4.7cm以下のものが多い。口径はあまり変化がないが、dでは口径も小さく、坏身が浅い一群（112～115）が加わる。

エ 須恵器

復元できた点数は30点である。

静止糸切り後、再調整を施しているものが1点（6）ある。口径1に対し、底径の比率は0.56、器高3.8cmと浅い。底部から直線的に立ち上がる。切り離し後、体部下端～底部周縁に手持ちのヘラケズリ調整を行っている。内面は底部と体部の境に当て具痕とみられる浅い沈線が一周している。外面には底部全体と口唇部の極一部を除き体部全体に自然釉がかかり光沢のあるオリーブ黒色（5Y3/1）を呈している。釉のかかっていない個所は灰色（5Y6/1）である。胎土には黒色及び白色の小粒が混入する。

上記6のほかはすべて回転糸切り無調整である。

- a 底部から直線的に外傾して立ち上がる（42・314・315など）、
 - b 全体にやや丸みを帯びて口唇部も内湾気味に収まるもの（208・316）
 - c 内湾気味に立ち上がるが、口唇部で直線的に延びるもの（97・331など）
 - d 内湾気味に立ち上がり、口唇部でやや外反するもの（96・200・201など）
- がある。

(2) 高 台 付 坏

内黒土師器11点、両黒土師器5点、土師器8点を掲載した。

ア 内黒土師器

全体の器形のわかるものは55点である。部分的に復元できるものも加え、2種に大別できる。

a 坏身が深く、高台も高いもの

内湾して立ち上がり、口唇部で外反するもの（242・322）と直線的に立ち上がるるもの（243）がある。高台はハの字状に開く。

b 坏身が浅く、高台が低いもの

口唇部が外反、外反気味のもの（283・304・312）と口唇部が直線的なもの（338・273）がある。高台はハの字状に開くが、aに比すれば直立気味である。

イ 両黒土師器

全体の器形のわかるものが3点であるが、坏身のみ復元できるものを加えても、器形は共通している。坏身はかなり丸みを帯びて内湾して立ち上がり、口唇部で外反する。高台はハの字状に開く。

ウ 土師器

6点掲載したが、全体の器形のわかるものは4点である。以下の2種に大別できる。

a 坏身が深く、高台が低いもの（274・275）

内黒土師器、両黒土師器に比して、体部が直立気味に立ち上がる。口唇部は直立または外反する。

b 坏身が比較的浅く、高台が高いもの（23・247）

口縁部は外反もしくは外反気味。高台はハの字状に強く開く。

(3) 高 坏

1点のみ出土している（5）。ロクロは使用されていない。内面は黒色処理とミガキが施されている。脚は失われている。坏部は外面に明瞭な段があるが、内面には認められない。外面はミガキが施され、脚部はケズリで成形している。内面の器面には敲打したような剥離がみられる。特に中央部分が激しい。

(4) 碗

1点のみ出土している（117）。両面黒色処理され、内外面ともに磨かれている。底部外面には糸切り痕が残る。

(5) 鉢

器形の復元できるものは4点出土している。ロクロを使用していないもの（9）と、使用しているもの（71・323・339）があるが、器形はそれぞれ異なる。

9は小型で、体部は直立して立ち上がり、口縁部も直立するものである。頸部外面に沈線がある。体部外面はミガキが施される。

ロクロ使用の3点はそれぞれ器形が異なるが、すべて内面は黒色処理とミガキが施される。71は器形的には壺とすべきもので、口径に対し、器高が高い。頸部は屈曲し、口唇は上方に引き出されている。外面体部下半は手持ちのヘラケズリが施される。323は頸部で屈曲し、口縁部が開く器形である。339

は壺を大型にしたような器形で、口唇部は直線的に立ち上がる。体部下端に回転ヘラケズリが施される。

(6) 壺

3点掲載している。器形がわかるものは1点(141)のみである。底径より小さい單孔で、体部は口唇部まで直立気味に立ち上がる。104は底部が欠けているものの、同様の器形であろう。47は体部下端のみの破片で、底部がないものである。

(7) 長 胴 瓢

65点を図化したが、全体の器形がわかるものは10点で、すべて土師器である。須恵器は破片があるかもしれないが、確認できていない。ロクロを使用していないものとロクロ使用のものがある。

ア ロクロを使用していないもの

器高20cm未満の小型、大型の3種に分類できる。

a 小型 器高20cm未満のもの

最大径が口縁部にあるもの

口縁部が長い。10は口縁部に複数の段を持つ。頸部の段が明瞭なもの(10・11)と不明瞭なもの(60)がある。

最大径が体部にあるもの

全体的に口縁部がやや短めで、外側に短く引き出したもの(74・50・51・61・276)直立気味のもの(80)がある。頸部に明瞭な段を持たない。

b 大型 器高20cmを超えるもの

最大径が口縁部にあるもの

口縁部が長く、外側に外反又は外傾するもの(12・135・347)。12と135は頸部の段が明瞭である。12は口縁部に数条の段、135は1条の段が認められる。135は口唇部が若干内湾する。

最大径が胴部にあるもの

口縁部がやや短かく、外反又は外傾するもの(53・130・131・128)。

口縁部が短く、外側に若干引き出したような形状のもの(63・277)がある。

イ ロクロを使用しているもの

全体の器形が復元できるものは1点のみ(24)であるが、口径から15~18cm程度の小型、20cm以上の大型の2種に細分される。

a 小型 口縁部に最大径がある。口唇部は上方に引き出されるもの(55・107)と、短く外反するもの(25)がある。

b 大型

体部下半にナヂ、ケズリの器面調整がある。

口縁部に最大径があるものは、口唇部が上方に引き出される(26・29)。

胴部に最大径があるものは、口唇部が上方に引き出されるもの(86)と、口縁部が短く外傾するもの(24・30・37)がある。

(8) 球 腫 薦

破片を含め3点掲載している。すべて土師器で、RA018竪穴住居跡からの出土である。18は口縁部～体部までの破片で、頸部に段を持つ。19は頸部～体部の小破片で、頸部に段を持つ。外面に朱が残存している。部分的に認められるが、文様となるかは不明である。21は体部下端～底部破片。

(9) 壺・瓶類

土師器と須恵器がある。

土師器は3点掲載した。ロクロを使用していない155は口縁部の長いもので、内外面ともに磨かれている。口縁部のみの破片。133と252はロクロ使用の小型の短頸壺である。底部に回転糸切り痕を残している。

須恵器は全体の器形がわかるものはない。17点掲載した。

明らかに長頸瓶と思われる頸部が残る破片（100・145・307・341）のほか、頸部の径が体部最大径の2分の1以下で、長頸瓶と思われるもの（253）がある。頸部と体部の境界に凸帯が張り付けられるもの（145・307）がある。

広口壺と思われる口縁部破片が1点ある（344）。

他は、部分的な破片である。体部はロクロナデ後、下半に手持ちヘラケズリが施されるもの（64・66・88・255・343）と再調整のないもの（31・54・65・343・348）がある。また、底部に高台を持つもの（54・343・348）がある。

(10) 大 壺・甕類

壺より大型とおもわれるものを大壺とし、計13点掲載した。すべて須恵器破片で全体の器形が復元できるものではなく、小破片は器厚で壺と推定している。そのため、広口壺の破片が混入している可能性もある。

口縁部破片が3点（110・254・384）である。内外面ともにロクロナデが施される。底部破片が1点（256）で、丸底である。内面は当て具痕、外面は叩き目がある。体部上半の破片（91）は内面がロクロナデ、外面は叩き目である。94と340は内面の叩き目に平行文様がある。また、73・111の内面には当て具痕のほか、大きなハケメ状の工具痕が認められる。なお、73・110・111は胎土がよく似通っており、酸化色で同一個体の可能性がある。

そのほか、酸化色を呈するものに94・143、内面のみ酸化色のものに38・91がある。94は同一個体と思われる破片が多く出土しており、その中で最も大きい破片を図化したものである。38の外面は自然釉がかかっており、光沢のある黒褐色を呈する。(金子)

2 石器・石製品（第92～97図、写真図版82～84）

石器類は遺構内14点、遺構外3点合計17点を掲載した。出土量が少ないため遺構内外を一括して取り扱う。349・350は砾石である。2点とも平安時代の住居跡から出土した。どちらも複数面に砥痕がみられる。石材はディサイトである。352～359は白石である。353以外は欠損している。使用痕は概ね1面のみである。356のみ削痕が縱方向に2箇所確認できる。360は磨石で平面と側面の2箇所に磨痕がある。361は石臼である。不規則な目（溝）が切られている。下臼部分と思われる。362・363は凹

石である。362は1箇所、363は3箇所に凹痕が見られる。362は凹痕を中心に鋸のようなものが付着しているが使用によるものかどうかは不明である。363は中央部分の大部分がきれいに整形されている。364・365は石鎚である。364は無茎、365は有茎となっている。アスファルトなどの付着はないが365については茎部分が欠損しているため、はっきりとしたところは不明である。

3 木製品（第98・99図、写真図版85・86）

全て遺構外からの出土である。ほとんどが印河道からの出土で、366～369はRG012西堀埋土からの出土である。欠損部が多く用途不明なものが大半である。杭については何れも刺さった状態で出土し、また上部が欠損しているものが多く時期等不明なものが多い。

（1）杭

一端もしくは両端が尖るものを杭とした。11点出土し、3点を図化、8点を写真掲載とした。先端部の加工には鉛筆状のもの（374・372・380・371）、片面を切断したもの（375・381）、片面を数回削ったもの（376～379）、その他（373）がある。374と381は先端部分のみでそれ以外は欠損している。何れも刺さった状態で出土した。どの時期に杭を打ち込んだのかは不明である。371～373の3点についてC14年代測定を実施したところ近世～現代の測定結果であった。全体として時期等は不明瞭である。

（2）挽物

ロクロを使用して整形した容器である。370の漆器挽が1点出土している。体部にかすかにロクロ目と思われる痕跡が確認できる。横位の状態で出土した。内外面とも黒色の渋下地という下地処理を施していると思われる。上塗りは、内面が赤漆、外面は黒漆が塗られている。漆の大部分は剥離しているが、内面は中央付近に、外面は体部の一部と高台付近にのみ残っている。木取りは木目が平行に現れているので横木取り極目であると考えられる。口縁部は欠損しているが、残存部から体部を厚く口縁部付近を薄く挽く整形がされていると思われる。形状などから低い口縁部がつくと考えられる。

（3）木札状木製品

短冊形の木製品である。8点出土し、366～369の4点を図化、382～385の4点を写真掲載した。両端が折れているものが多い。全点赤外線を通したが墨痕は確認されなかった。何れも木目が平行に見える極目板を使用している。一端が残っているものは方頭となっている。また、366は2箇所、367は3箇所の貫通孔が確認できる。また、366は何か金属製品が接していたため円形上に鋸びと思われる痕跡が確認できる。両面ともケズリによる整形で平滑になっている。383～385は厚さが薄く大きさも小さいため何らかの木製品の一部分が剥がれたもの可能性もある。何れも両面とともに丁寧に整形され平滑になっている。382は木札状木製品の中で一番厚みがある。何らかの板材の一部の可能性も考えられる。

（4）板状木製品

薄い板状の木製品のうち、木札状以外のものを一括した。386～388の3点出土し、3点写真掲載した。386は両端が欠損しているが両面は丁寧に削りにより整形されやや内側に反っている。全て木札状のものに比べ整形が荒く何らかの板材の一部と思われる。

(5) 不明木製品

上記以外のものを全て一括した。部分的に加工痕跡が認められるものの、形状が特定できず使用用途が明瞭ではないため不明木製品とした。遺構外から389～392の4点出土し写真掲載のみとした。389は角材状となっている。両面が削りによる整形がされている。側面に割れ口が認められる。何らかの製品または板材の一部だった可能性が考えられる。390～392は細長い棒状を呈している。両面ともに丁寧に整形されている。何れも割れ口が認められる。390は両端が欠損している。391は一端が欠損しているがもう一端は方頭となっている。392は両端とも遺存し丁寧に整形され方頭となっている。何れも何らかの製品の一部と推測される。全点赤外線を通したが墨痕等は確認されなかった。(本多)

4 土製品(第99・100図、写真図版87)

明らかに極新しいと思われるもの、板小片で図化できないものを除き、10点掲載した。すべて、I層あるいは調査区東端の近代において客土を行った搅乱層から出土している。用途の不明なものが多い。

393は瓦である。内面に布目があり、両面とも黒色を呈する。394は酸化色で、成形ははっきりしない。湾曲していることや製品の厚さから瓦に類似している。

395～397は用途、形状の不明な土製品である。胎土に金雲母を含む点が共通しているが、形状は三様である。395は表面に墨書きが施される板状の製品。396は立方体で、両端が欠落している。395と396は胎土、焼成の質感が類似する。

398～400、402は曲輪西側のI層及び西側土壘I層から集中的に出土したもので、土人形の一部と思われる。近世末以降の陶磁器辺とともに出土した。周辺には同様の破片が多く出土しているが、図化できたものだけ掲載した。402に顔料の一部かと思われる白色土が付着している。

401は泥面子である。一部欠損している。型抜きで作られていると見られ、背面は平滑である。周縁に格子状の文様が見られ、2か所切り込みが入っていることから、魚のようにも思えるが、何を描いているか不明。

(金子)

5 陶磁器(第100～103図、写真図版87～89)

陶磁器はかく乱などから出土したものを除いた遺構内22点、遺構外19点の合計41点を掲載した。すべて近世以降の遺物である。点数が少ないため遺構内外を一括して掲載した。また、遺構内出土439～443の5点は墓壙から出土したもので既に地権者に返却しているため参考資料として掲載している。

(1) 碗・小碗・碗蓋

403・409・410は外面に草花文、407・414は風景文が描かれる。403・414は胎土の様子などから18世紀後半頃と思われるが、407・409・410は19世紀以降と思われる。全て製作地は不明である。419・425～435は肥前産のものである。419は外面に青磁釉薬がかかり、高台裏に銘が入る。425・426は見込に文様がはいる。427～430・433は口縁内側に雷文があり、同一個体の可能性もある。431・432・434は草花文が染付で描かれる。425～434の製作地等は不明だが、概ね1810～1860年代の国内産とのご教示を受けた。435は高台裏に文様が入るが製作地・時期等は不明である。419は肥前産と思われ大

橋Ⅳ期に入ると考えられる。440・442は墓壙検出面～埋土上位にかけて出土している。灰釉が見られるが製作地等は不明である。時期は器形や胎土の様子などから18世紀後半に入るとと思われる。411・420・422は小碗である。411は外面に壽青春万歳の文字が描かれる。19世紀以降～近代の頃と思われる。420・422は文様が全く同じものをモチーフに描かれているものの微妙に異なる部分が見られることから、異なる人物によって染付されたと考えられる。全体として破片での出土が多く法量が分かるもののが少ない。439蓋と思われる。外面青磁釉で見込みに五弁花が見られる。外面にはほとんど文様が見られないが「福」の銘のみが入る簡素なものとなっている。肥前窯のもので大橋Ⅳ期と思われる。

(2) 捣 鉢

405・418・437 438撗鉢である。大部分が在地産と思われるがはっきりとした製作地の判断はつかない。全て鉄釉が施される。内面には細かい目が掘られている。時期等ははっきりしないが概ね近世～近代の時期に収まるものと思われる。破片で出土しているため詳細は不明である。

(3) 瓢

406・412・415・417・436は瓢である。大きさは小型のものが大半を占める。406・417は褐色の鉄釉に薬灰釉の一種、海鼠釉が浸し掛けられることから白岩焼と思われるが、在地産の可能性もある。白岩焼については、秋田県角館白岩村において松本巡七により1771年に開窯された陶器である。時期は江戸後期と推測される。412は無釉で、底部に文字のような記号が確認できる。製作地、時期ともに不明である。415は白色釉の流し掛けで、所々に青みがかった釉がみられることから堤焼と思われるが、在地産の可能性もある。堤焼については、仙台藩4代藩主伊達綱村公の時に当時の杉山台(現堤町)に今戸焼の陶工を招いたのが始まりとされている陶器である。時期は江戸後期と推測される。436は無釉で、製作地、時期ともに不明である。

(4) 壺

416・424は壺と思われる。小破片のため全体の形状は不明である。416・424は東北在地産と思われるが詳細ははっきりしない。424は白色釉が確認できる。時期は胎土の様子などから19世紀以降と考えられる。

(5) 皿・小皿

421・423・441の3点出土している。421は小皿で見込みに風景文が染付される。423は皿で、同じく見込みに風景文?が染付されている。441紅皿である。墓壙からの出土で副葬品と思われる。菊文が外面に押印されている。全て肥前窯である。時期については421・441が大橋Ⅳ期、423については大橋Ⅱ・Ⅲ期に入ると思われる。

(6) 不明器種

404は小破片のため器種は不明である。外面にオリーブ色の釉が施されている。また何らかの浮き彫り?文様が施されているが何の文様かは分からぬ。製作地・時期ともに不明である。(本多)

6 時期不明の土器（第67・102図79・438、写真図版66・89）

2点出土している。

79はRA027堅穴住居跡の擾乱中から出土した上器で、破片の資料である。壺のような形状と思われ、推定の底径は9.4cmと大きい。ロクロを使用していると思われるが、内外面ともナデで、ロクロ痕、糸切り痕は確認できない。見込みに油煙状の炭化物、黄褐色の付着物がある。内面はところどころ欠けており、灯明皿などとして使用した可能性がある。古代の他の土器と形状や付着物の様相が異なるため、ここに載せた。近世以降のカワラケか。

438も全体の器形不明で、口縁部～体部の破片である。ロクロで成形されている。胎土には金雲母が多く含まれる。近世以降の焰烙、土鍋か。
(金子)

7 金 属 製 品（第103・104図、写真図版90・92）

鉄製品、墓壙内から出土した煙管、銅鏡の銅製品がある。

(1) 鉄 製 品（第104図）

9点出土し、9点とも図化した。欠損部が多く用途不明瞭なものが多い。478・480・483・484は釘と思われる。478は上部の頭部分が潰された形をしている。480は先端が、484は上部が欠損している。483はRD071墓壙から出土しており棺桶の蓋を固定する際に使用されたと思われる棺桶の板材が付着している。479は形状から鉄鍔としたが厚さがなく刀子の一部の可能性もある。485は棒状鉄製品としたが用途など不明である。481は楔形鉄製品、477は板状鉄製品としたが、形状や厚さなどから刀子の可能性も考えられる。482は板状鉄製品と思われる。いずれも遺存状態が悪くはつきりとした種類については不明な部分が多い。

(2) 煙 管（第103図）

遺構内から6点出土した。遺構内は何れも墓壙から出土しており全て副葬品と考えられる。尚、これらの中には地権者に返却しているため参考資料として掲載している。448・449・451a・453aは煙管雁首（計4点）、450・452・451b・453bは煙管吸口（計4点）である。検出した10基中RD071・076・077・078土坑の4基から出土している。また、453a・453b・451a・451bはそれぞれ出土状況などから同一個体を構成するものと思われる。

近世の煙管の一般的な形は、銅製の雁首、吸口を竹製の羅字で接続するタイプ（羅字煙管）であったと見られるが、出土品の大部分は羅字部分が腐食して失われておらず、完形で残存していたものは無い。

煙管は16世紀後葉に葡萄牙人によって伝えられたと言われる。喫煙の風習は急速に広がり、慶長10年（1605年）頃には庶民の間に広く流行するようになった。その後数度の禁煙令の公布にもかかわらず、喫煙の風習は広く日本人の間に広まっていた。羅字煙管の形態については、古泉氏（古泉1987）の分類法に準じて形態分類を行なった。古泉氏によると、I類：16世紀末～17世紀初頭、II類17世紀前半、III類17世紀後半、IV類18世紀前半、V類18世紀後半、VI類19世紀以降となっている。これに当てはめると全てV類に分類される。451のみ肩口がついているが、全体の形態などからV類にあてはまり、

デザイン上の相違と思われる。同じ墓壙から出土している寛永通寶の年代と比べても概ね同じ年代を示している。

(3) 鏡 (第103図)

遺構内から4点出土した。遺構内は何れも墓壙から出土しており全て副葬品と考えられる。検出した墓壙10基中RD071・077・078土坑の3基から出土している。種類は円鏡と柄鏡で、447が円形鏡で、444・445・446が柄鏡となっている。444・446は柄の部分が欠損していると思われる。447は柄鏡の可能性もあるが、柄の痕跡がなく、厚みもあることから円形鏡とした。447の鏡背には縦を通すための鉢(ちゅう)がついている。444の鏡背には鉢のようなものが見受けられるが、鉢の名残と思われる。

鏡の形態は近世になると円鏡に変わって柄鏡が主流となった。初期の頃は円鏡に柄をそのままつけたような格好だったが、鉢がなくなり鏡背全体に文様が描かれていくようになる。柄は長いものから短いものへと変化し、江戸時代後期には鏡台に取り付ける大型柄鏡が登場するが、本遺跡から出土した鏡は全て小型のものとなっている。

鏡背の文様は、植物図と家紋図である。446には水草図と「丸に抱桙」の紋が入る。447は不鮮明だが、亀甲鉢を中心に上部に双鶴図と菊花の文様が描かれる。亀甲鉢に双鶴の嘴が接する接嘴図は室町から描かれ始める。444は水仙図で、445は岩と柳樹の景色が描かれている。

444・446の鏡背にみられる鉢は製作者を示すものとみられる。444は村田藤原定次、446は藤原光長の銘が確認できる。両者とも製作年代は江戸中期とされている。なお、本遺跡から南へ50mほどに位置する細谷地遺跡13・14次調査では松図と「丸に抱き茗荷」の紋が入る柄鏡が出土し、「天下…藤原重義」の銘がはいる。こちらも製作年代が江戸中期とされている。

時期については、一緒に埋納されていた寛永通宝も江戸時代中葉以降頃を示している。447については鏡背の亀鉢双鶴接嘴式と界図が二重圓となっている形態などから室町～安土桃山の時期の可能性もあるが、鏡が出土している墓壙は検出状況などから江戸時代と思われ、埋納時期等を鑑みて江戸初期～中期の頃も考えられる。

なお、RD078墓壙から2枚の柄鏡が出土しているが、墓壙1基から1点の埋納が一般的であるため墓壙の切り合いなどから埋葬を繰り返すことによりかく乱を受け入り込んだ可能性が高いと思われる。

8 錢 貨 (第104図、写真図版91)

遺構内から17点、遺構外から7点出土した。遺構内は何れも墓壙からの出土で、全て寛永通寶である。遺構外からは洪武通寶1点、永樂通寶1点出土しそれ以外は寛永通寶となっている。14・15は2枚が接着しており写真掲載のみとした。

国内銭の殆どは寛永通寶である。寛永通寶は、寛永13年(1636年)に幕府が銭貨の公鑄を決定し1636年～1659年まで江戸と近江坂本で铸造される。この初期のものは古寛永と呼ばれ、遺構外から1点出土している。その後1686年から江戸亀戸において、背面に「文」の字を鏤出している新たな寛永通寶が铸造され「文」の字から文銭と呼ばれる。これ以降に铸造された寛永通寶は新寛永と呼ばれる。さらに新寛永は1697～1747年、1767年～1781年と2時期にわたって铸造される。この時期の新寛永からは背面の「文」の文字が消える。この新寛永は国内の複数の箇所で铸造されており、铸造所によつて微妙に字体が異なるものや背面に文字を持つものがある。遺構内から17点、遺構外から6点出土し

ている。今回の調査では背面に文字を持つ新寛永は「文」以外出土していない。

墓壙内からは銅錢のほかに鉄錢が出土している。いずれも新寛永であり鉄一文錢と呼ばれる。1739～1747年、1765～1779年、1835～1867年の3時期にわたって鋳造されている。遺構内から5点出土している。この他、背面に「波」が描かれている四文錢と呼ばれる寛永通寶がある。鉄製と真鍮製があり、本遺跡では真鍮四文錢と思われるものが遺構外から1点出土している。

錢貨は、近世墓における副葬品の中で最も出土する頻度が高いが、本遺跡においては10基中、RD075・078・077・079土坑の4基からのみ出土している。これらの錢貨は、いわゆる六道銭と呼ばれる性格のものと考えられる。しかし、今回の調査において各墓壙からの出土枚数が6枚ずつとは限らず、1～4枚、7枚など6枚埋納された墓は検出されなかった。一番多く埋納されていたのはRD077土坑の7枚、一番少なかったのはRD075土坑の一枚である。江戸時代において六道銭の習俗がかなり広まっていたこと考えると、6枚セットで埋納された墓壙が無かったのは寛保二年（1742年）に幕府から出された六道銭禁令の影響や、遺構どうしの切り合いが多いことなどから埋葬を繰り返す中で他の墓壙に入り込んだ可能性が考えられる。これらの錢貨は製造年代（初鋳年代）が判明している唯一の資料であり、年代決定の有効な手がかりとなる。

本書では、各墓壙出土の錢貨のうち、最も初鋳年代の新しいものに着目しそれによって墓壙の埋葬年代を考える根拠としている。古寛永の初鋳以来、約30年～40年おきに新しい錢貨が発行されている。それに基づくと、次のようにおおまかに四期に分けることができる。

I期 17世紀前葉 古寛永

II期 17世紀中葉 新寛永 背面に「文」の文字があるもの（無背銭は含まない）

III期 18世紀前葉 新寛永 背面に「文」の文字がないもの（鉄一文銭以降含まない）

IV期 18世紀中葉 新寛永 鉄一文銭（真鍮四文銭含む）

全墓壙10基中、錢貨が出土している墓壙は4基である。I期の古寛永が出土した墓壙はなく、II期が1基、III期が2基、IV期が1基となっている。

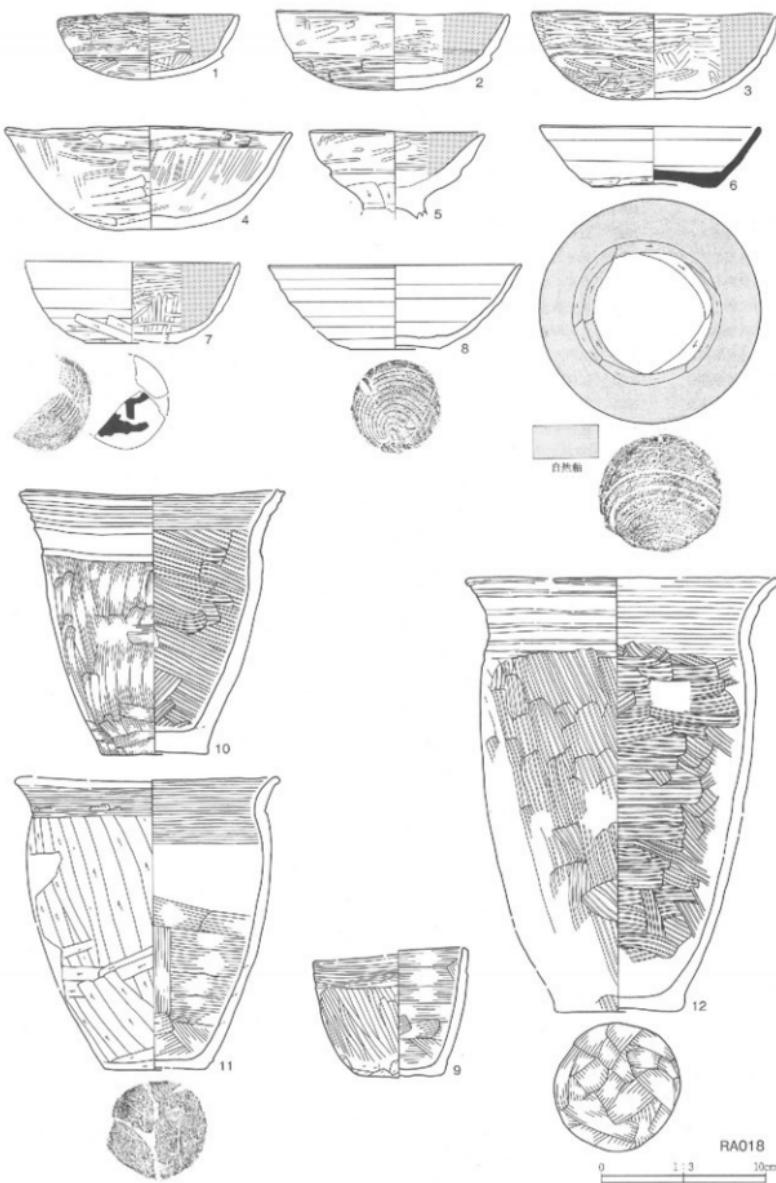
上記以外の錢貨として遺構外から出土している473洪武通寶と474永楽通寶がある。洪武通寶本銭は初鋳年度1368年とする明銭であるが、本遺跡から出土しているのは模鋳銭と呼ばれるものである。かなり摩滅しており銘文も不明である。永楽通寶本銭については初鋳年度1408年とする明銭である。前述した洪武通寶同様に模鋳銭と考えられる。銘文も摩滅しており不明である。これらは通称「ビタ銭」と呼ばれるものと考えられる。中世末から近世において多く出土している錢貨であるが、共に遺構外からの出土であるため詳細については不明である。
(本多)

9 繩文土器（第104図486～491、写真図版92）

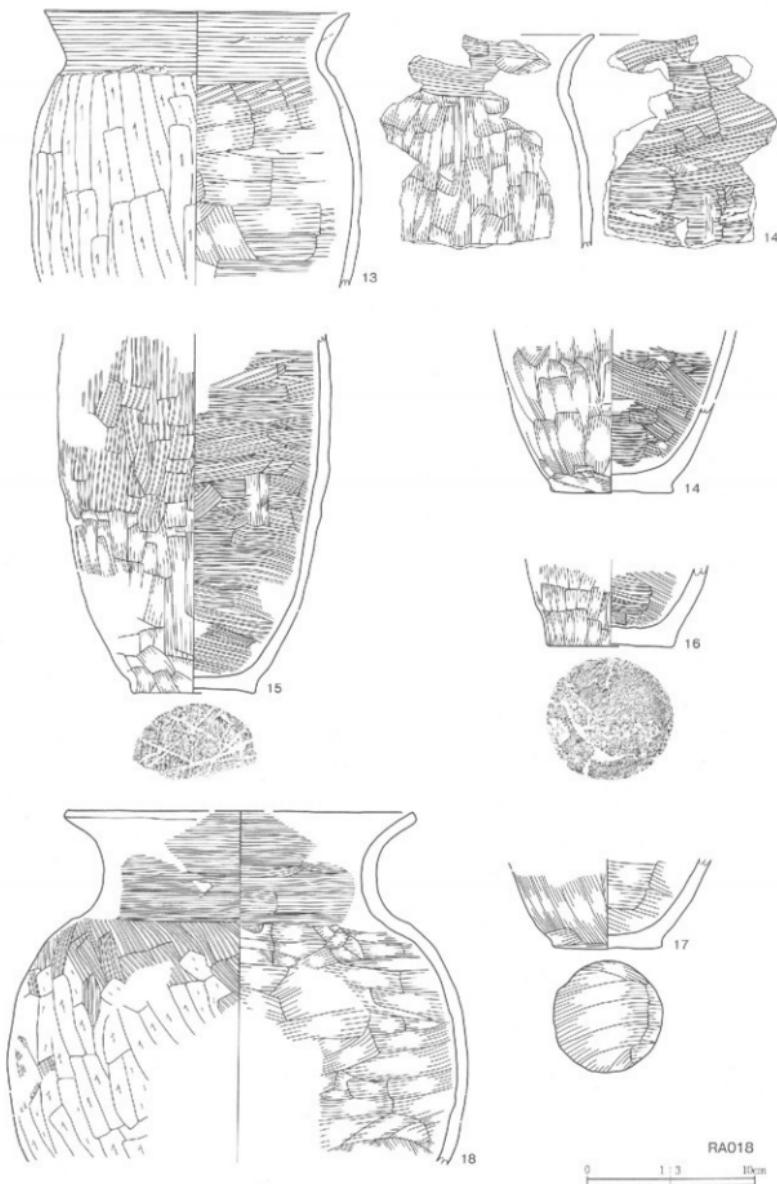
旧河道を中心に小片のみ14片出土した。それらのうちある程度器種が類推できるもの、文様があるものの6点を掲載した。旧河道出土の土器は486～490の5点で、縄文晩期に属すると思われる。486は口縁部に沈線が数条めぐる深鉢と思われる。内面に沈線がないが、大洞C 2～A ぐらいか。487、489は頸部に沈線のある粗製の鉢、488、490は同様に粗製の鉢の胴部である。491は調査区東側の搅乱層の客土中から出土した破片で、他所から運ばれた可能性もある。中期の浅鉢の破片か。
(金子)

参考文献

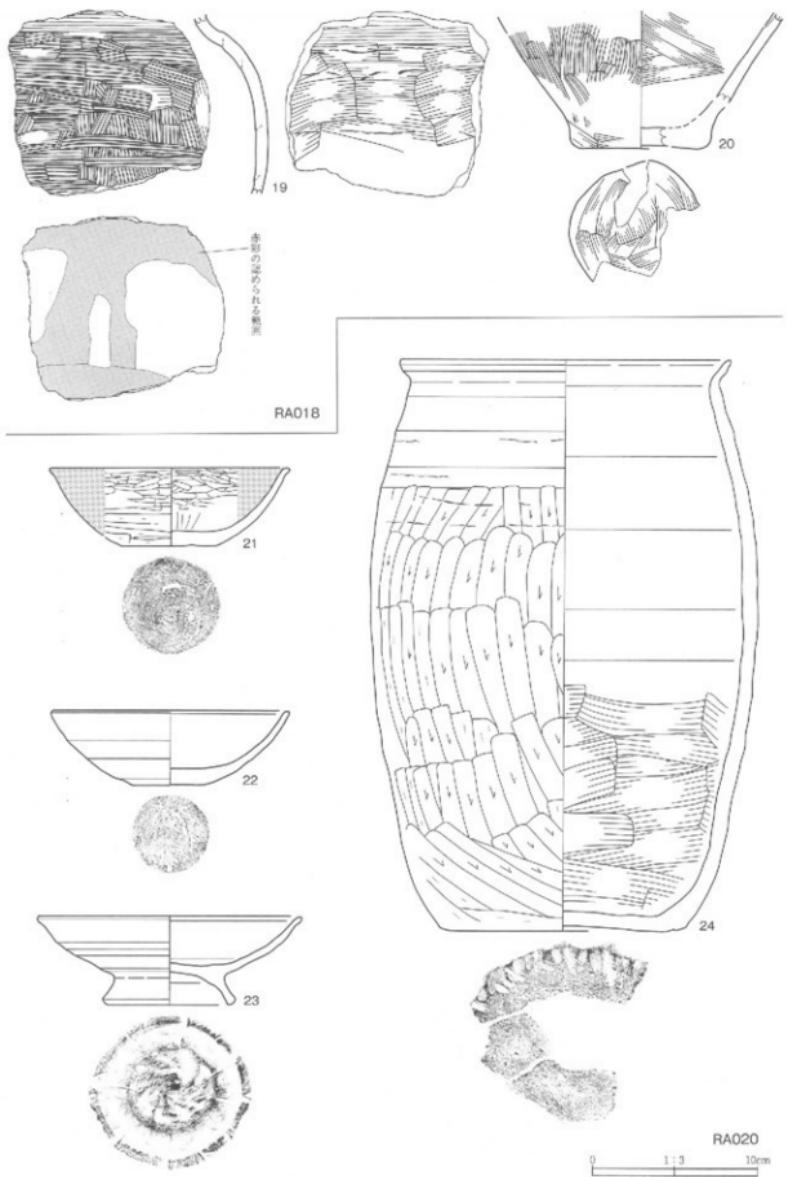
- 中野政樹 1969 「日本の美術42」至文堂
- 古泉弘 1987 「江戸の考古学 考古学ライブライー48」ニューサイエンス社
- 大橋康二 1989 「肥前陶磁 考古学ライブライー55」ニューサイエンス社
- 堤信久 1992 「江戸時代の柄鏡とその鑑賞」
- 小林達雄監修 青木豊・内川隆志編著
1994 「柄鏡大観」刀水書房
- 水井久美男 1996 「日本出土銭鑑撰」兵庫県蔵銭調査会
- 水井久美男 1997 「近世の出土銭 I -論考編-」兵庫県蔵銭調査会
- 水井久美男 1998 「近世の出土銭 II -分類図版篇-」兵庫県蔵銭調査会
- 久保智康 1999 「日本の美術394」至文堂
- 鈴木公雄 1999 「出土銭貨の研究」東京大学出版会
- 九州近世陶磁器学会 2000 「九州陶磁の編年」
- 九州近世陶磁器学会 2001 「国内出土の肥前陶磁」
- 江戸遺跡研究会 2000 「江戸文化の考古学」
- 江戸遺跡研究会 2001 「関説 江戸考古学研究辞典」柏書房
- 鈴木公雄 2002 「銭の考古学」吉川弘文館
- 財团法人岩手県文化振興事業団蔵文化財センター
2002 岩手県文化振興事業団蔵文化財調査報告書第400集「仁昌寺遺跡発掘調査報告書」
- 2004 岩手県文化振興事業団蔵文化財調査報告書第446集「下情遺跡第2次発掘調査報告書」
- 2005 岩手県文化振興事業団蔵文化財調査報告書第464集「西河日・環向II遺跡発掘調査報告書」
- 2006 岩手県文化振興事業団蔵文化財調査報告書第474集「河崎の横継定地発掘調査報告書」
- 2007 岩手県文化振興事業団蔵文化財調査報告書第503集「向中野館遺跡第5次・6次発掘調査報告書」
- 両角まり 1996 「内耳鍋から始める」『考古学研究』第42巻第4号
- 高橋静歩 2007 「東北地方北部の赤彩土師器から蝦夷集団の動向を探る」『岩手考古学』第19号



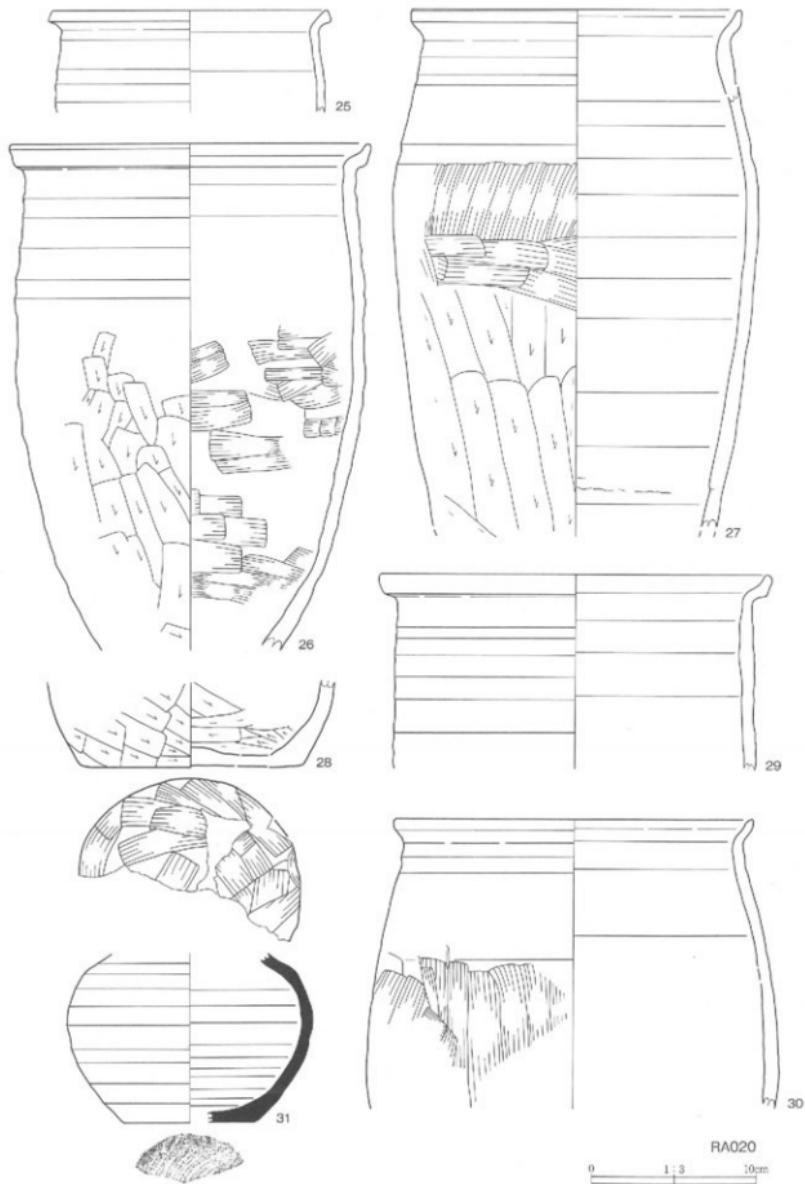
第59図 遺構内出土土器 (1)



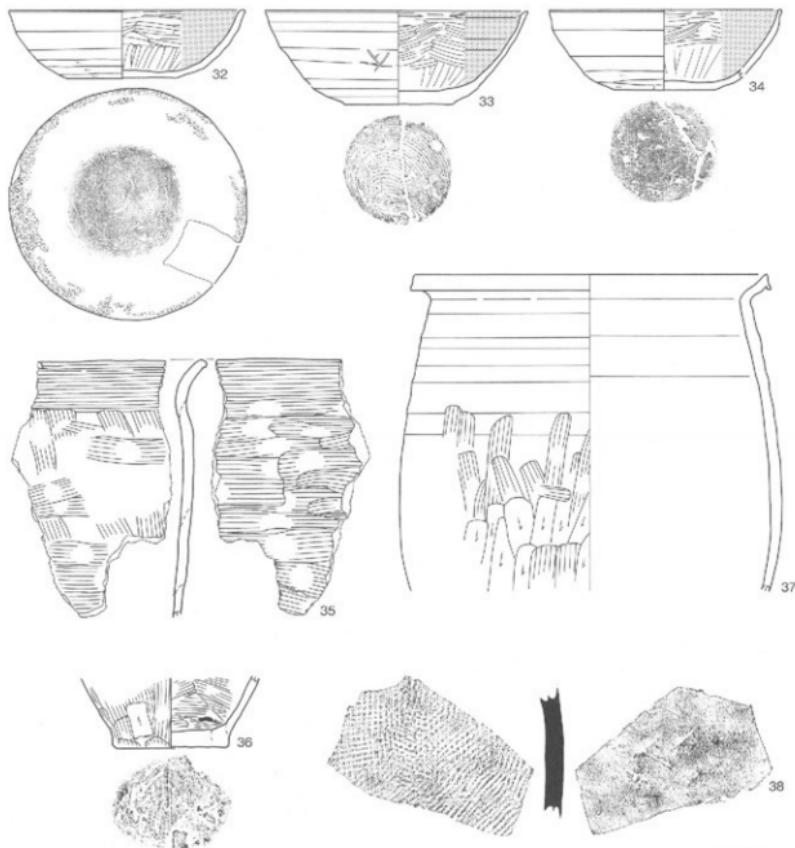
第60図 遺構内出土土器 (2)



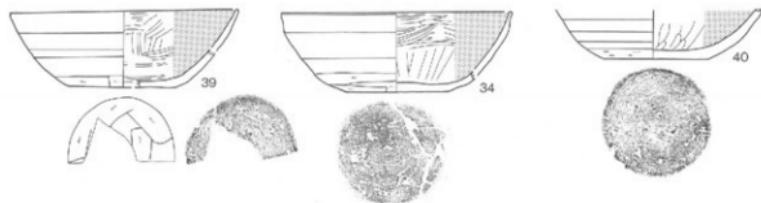
第61図 遺構内出土土器 (3)



第62図 遺構内出土土器 (4)



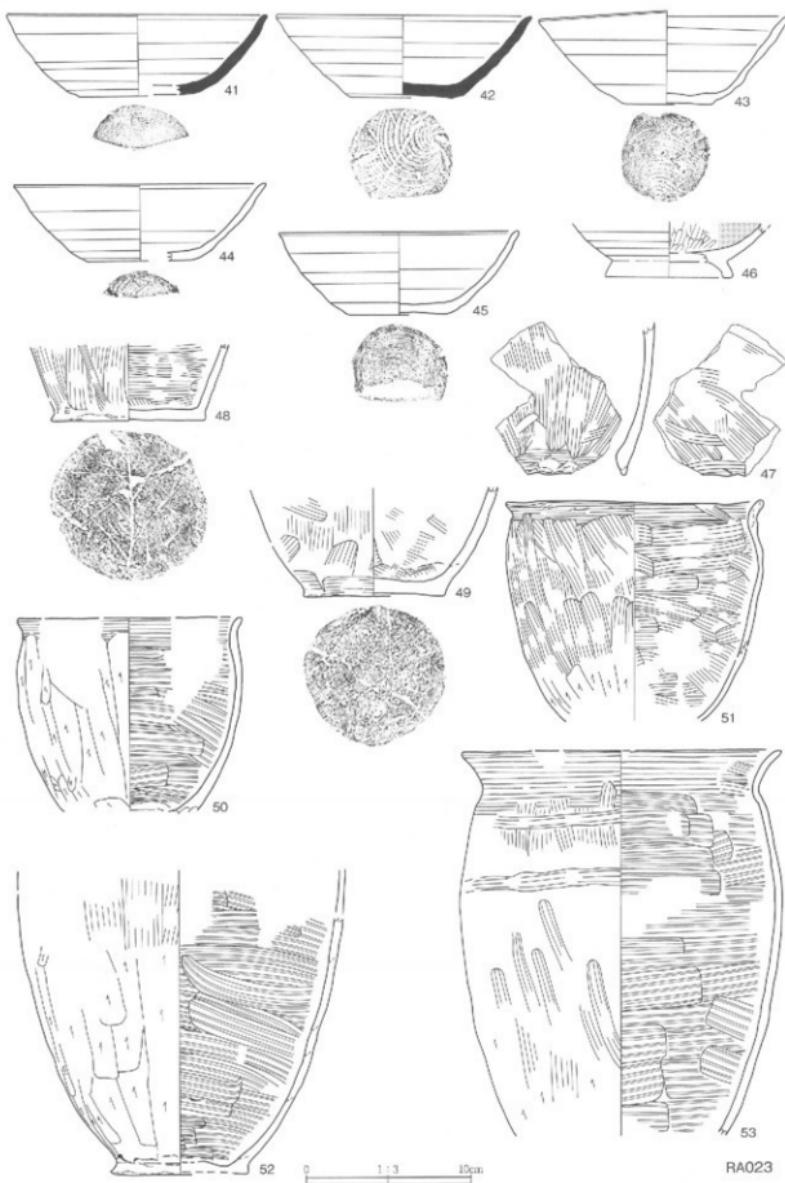
RA022



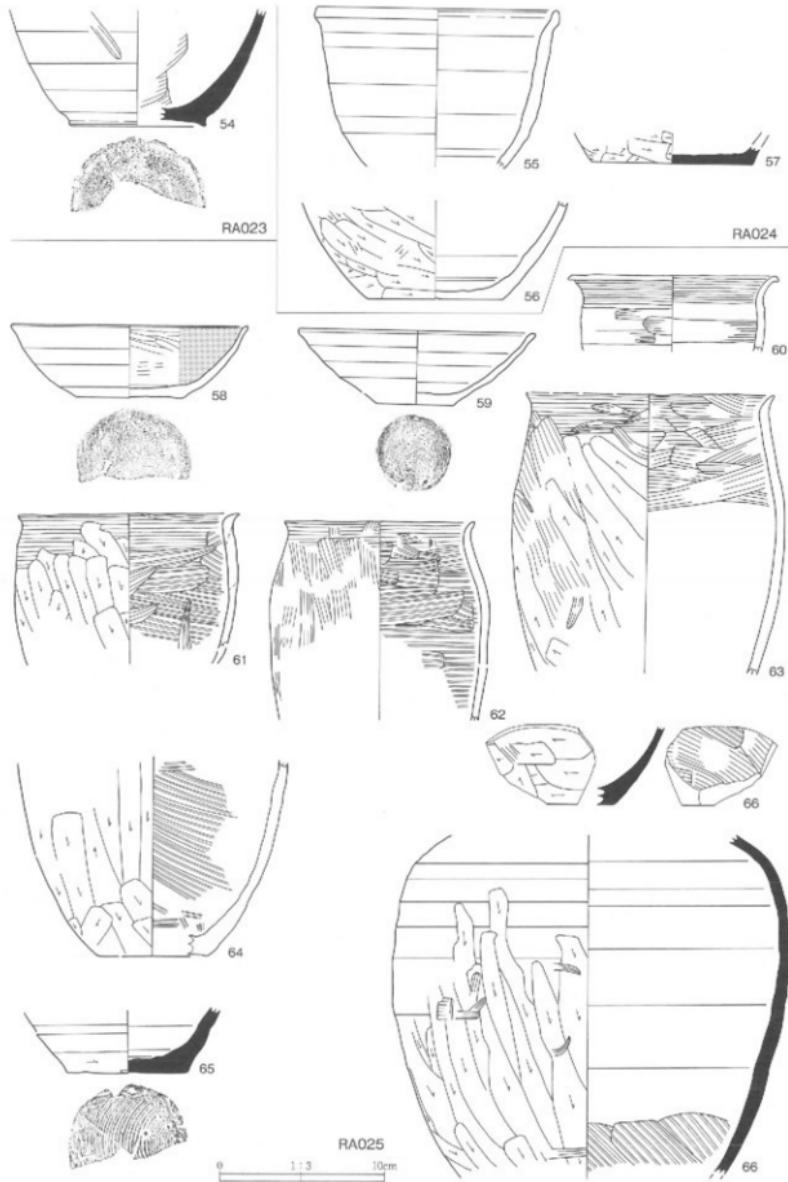
RA023

0 1 : 3 10cm

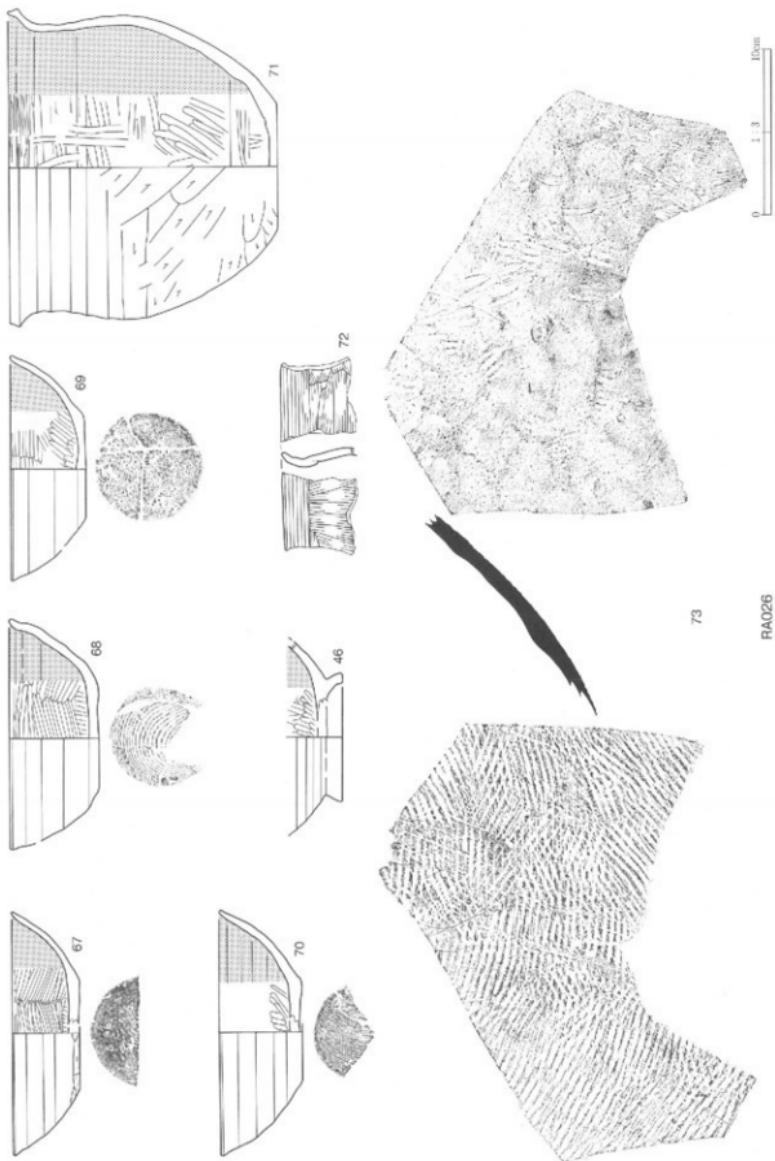
第63図 遺構内出土土器 (5)



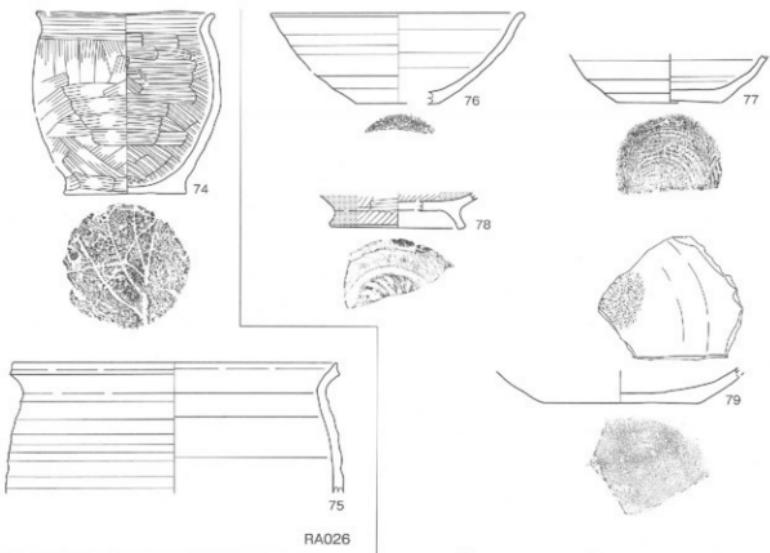
第64図 遺構内出土土器（6）



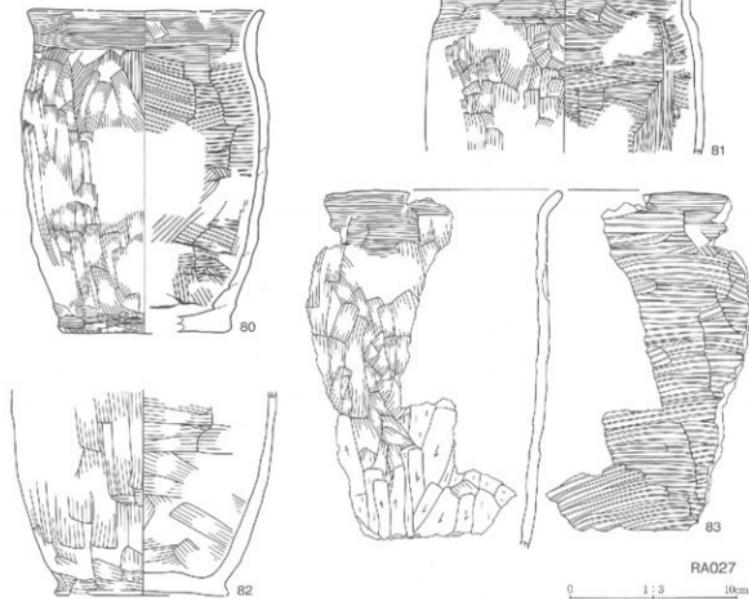
第65図 遺構内出土土器 (7)



第66図 遺構内出土土器 (8)



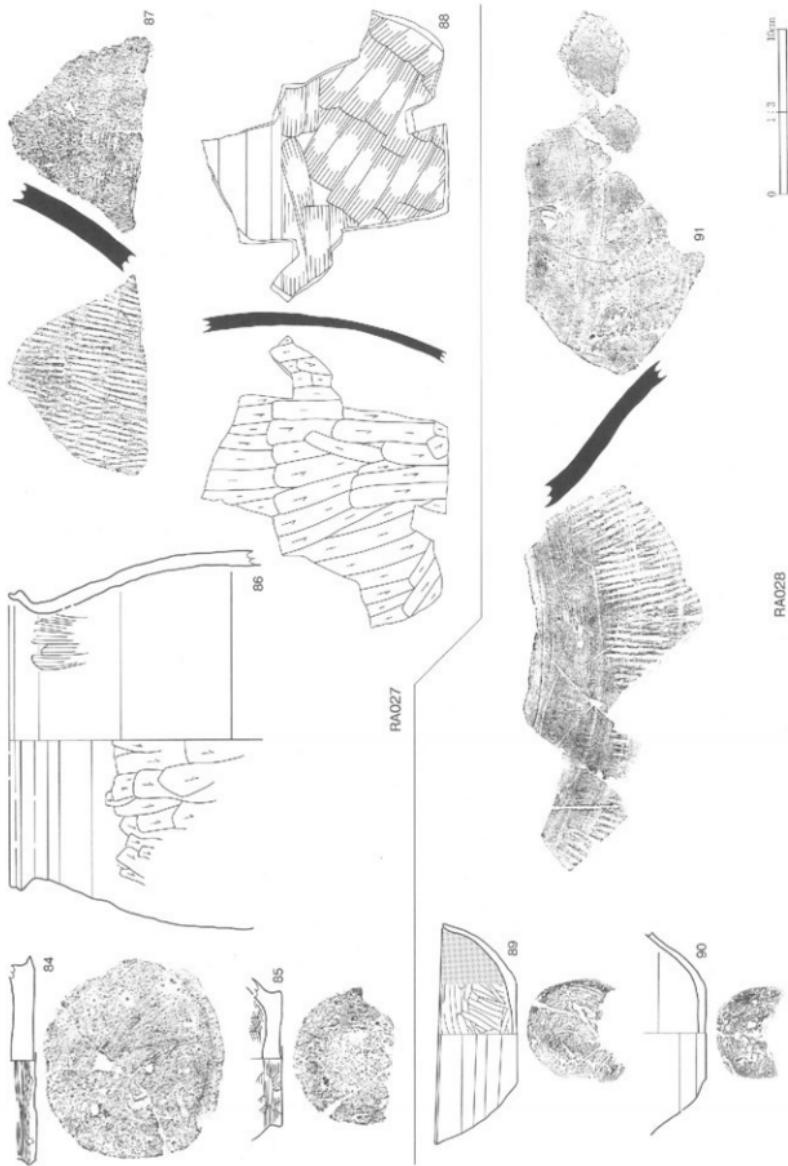
RA026



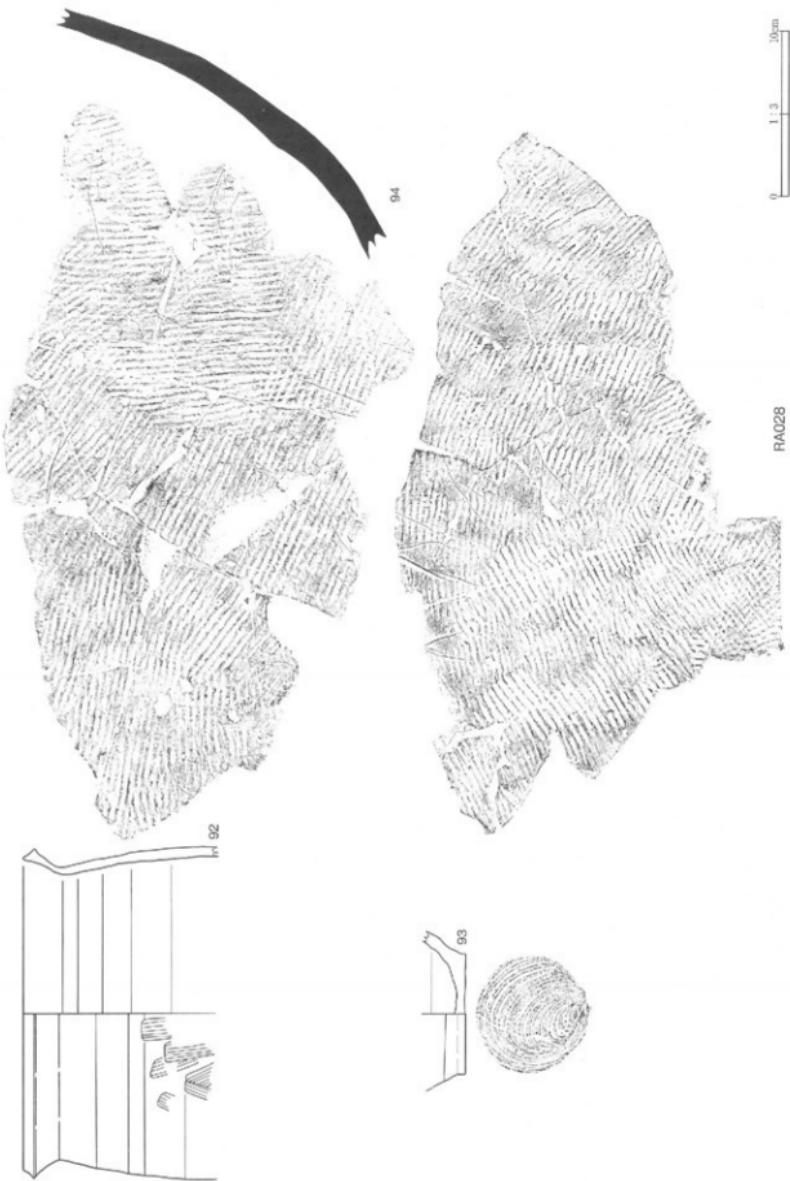
RA027

0 1:3 10m

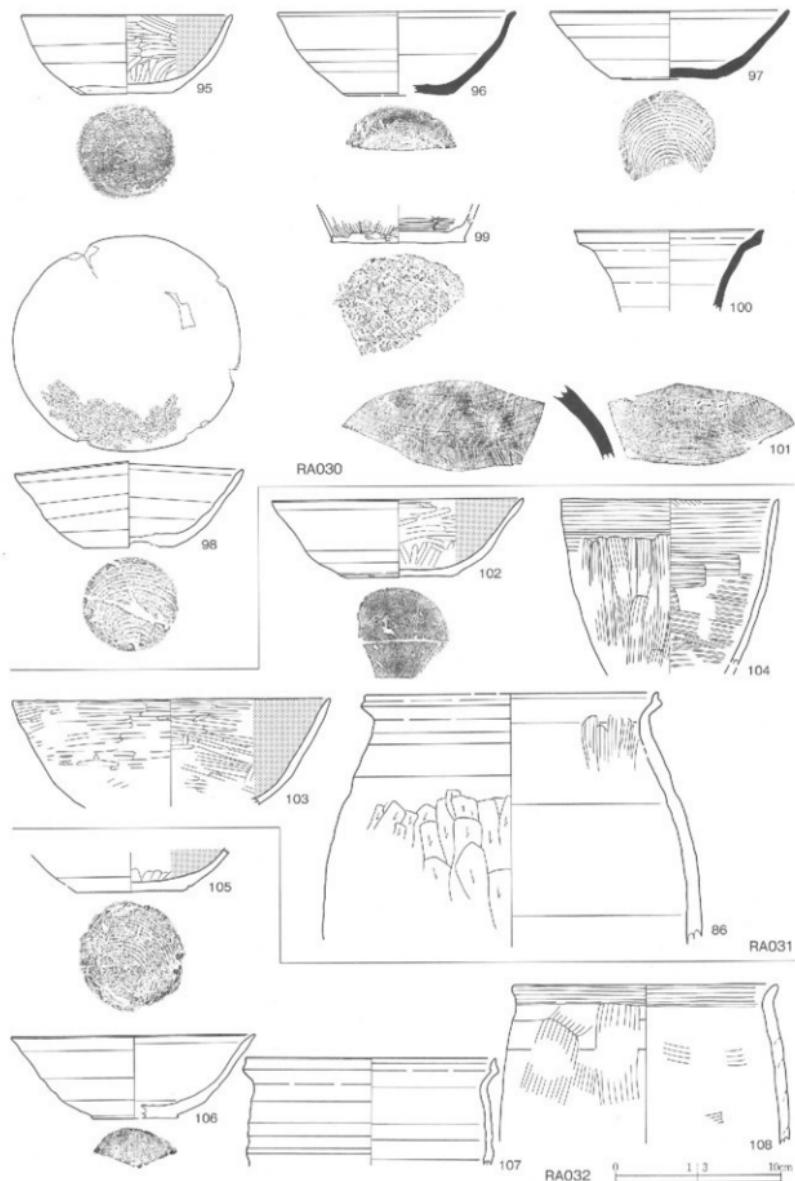
第67図 遺構内出土土器 (9)



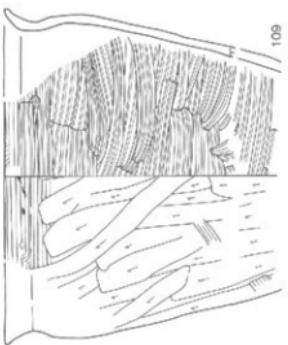
第68図 遺構内出土土器 (10)



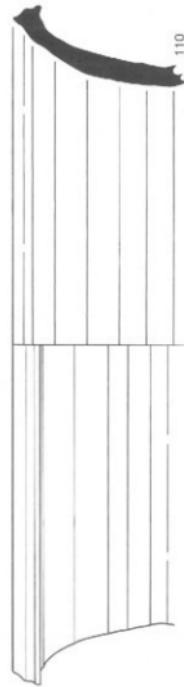
第69図 遷構内出土土器 (11)



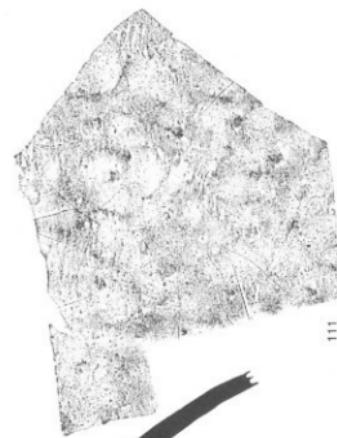
第70図 遷構内出土土器 (12)



第71図 遺構内出土土器 (13)



110

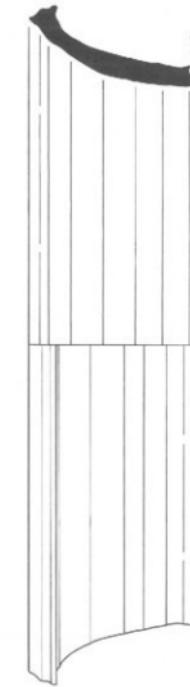


111

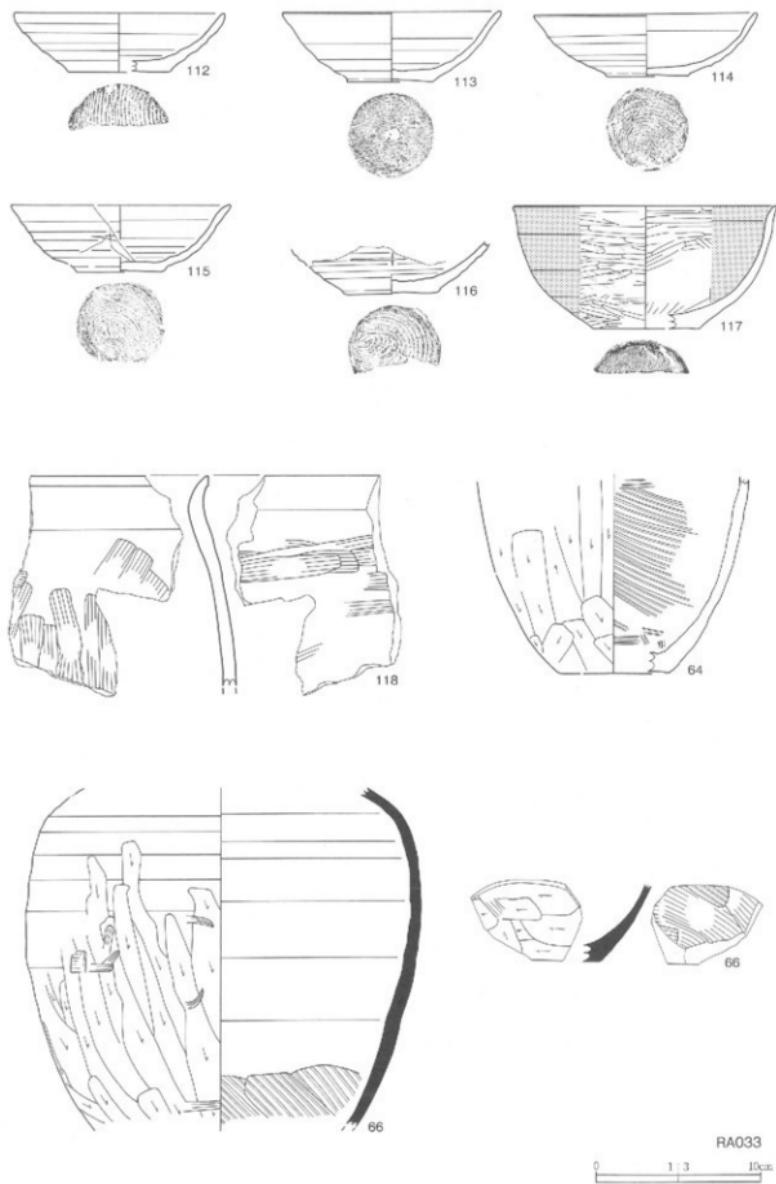
RA032



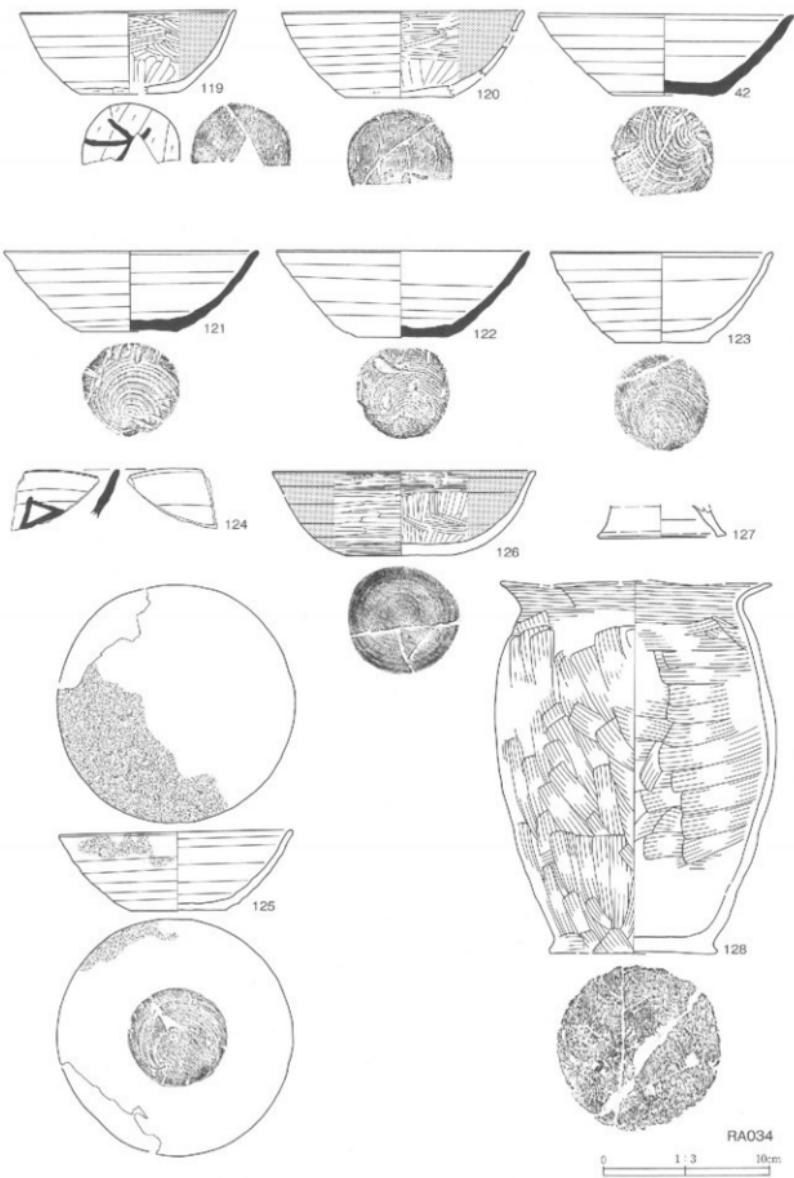
112
RA031



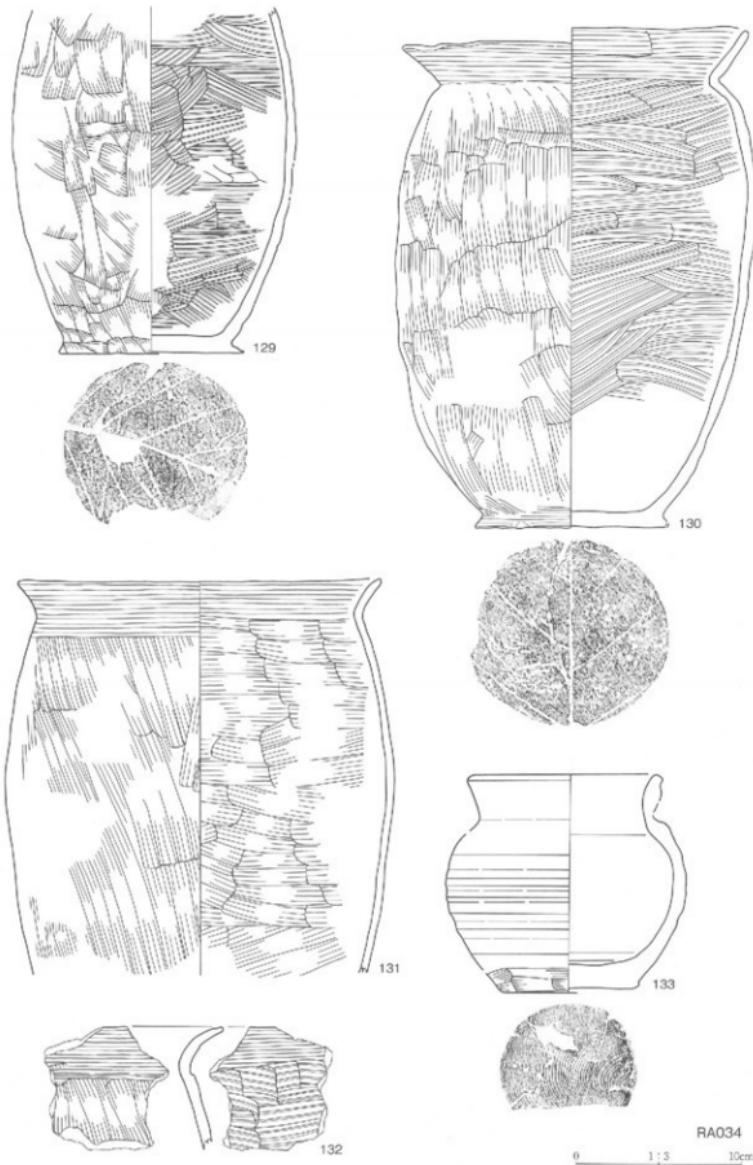
110



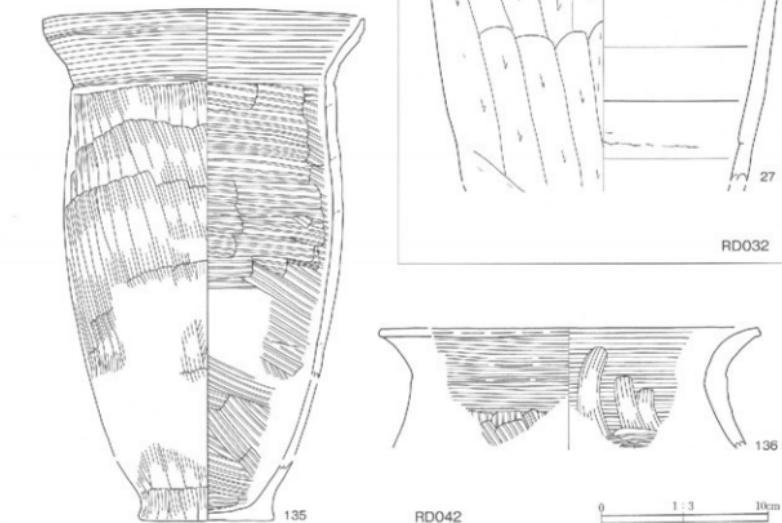
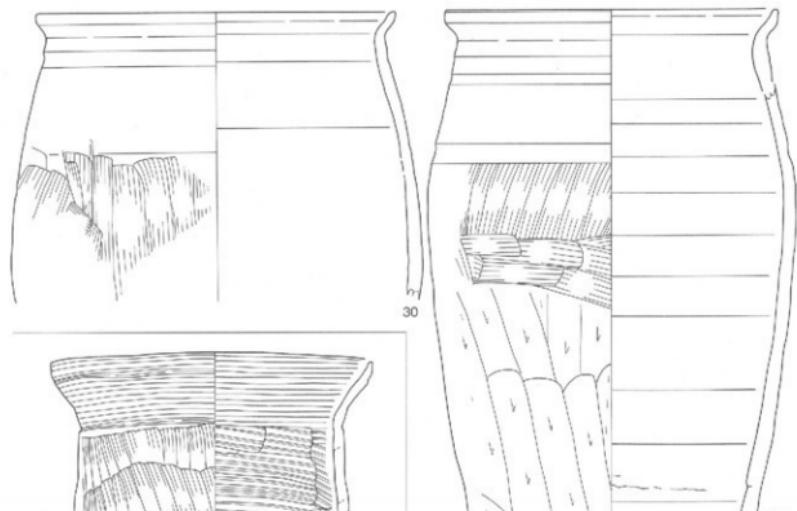
第72図 遺構内出土土器 (14)



第73図 遺構内出土土器 (15)

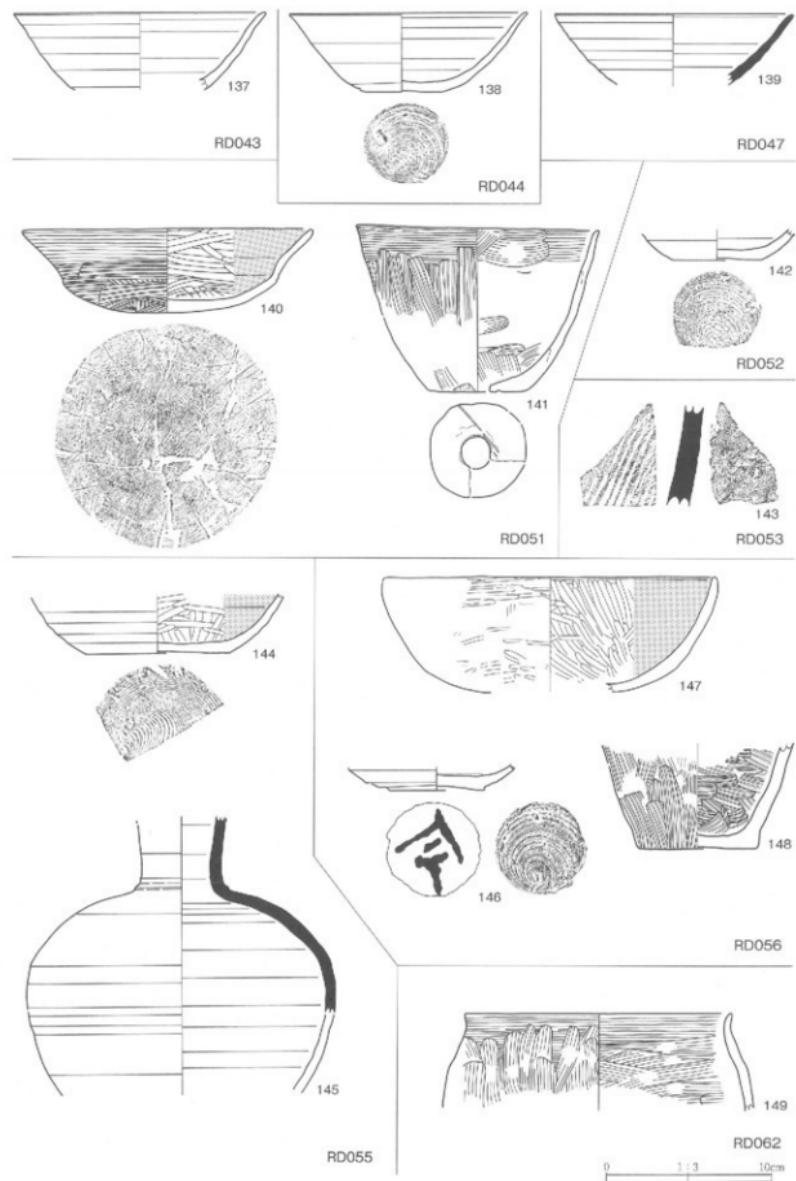


第74図 造構内出土土器 (16)



0 1 : 3 10cm

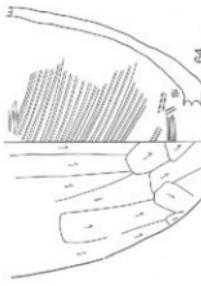
第75図 遺構内出土土器 (17)



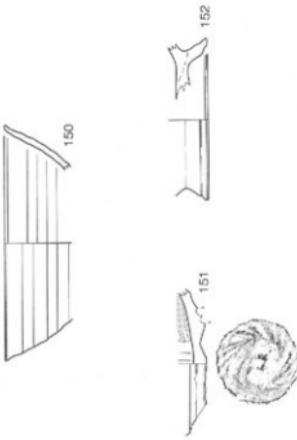
第76図 遺構内出土土器 (18)



RD062

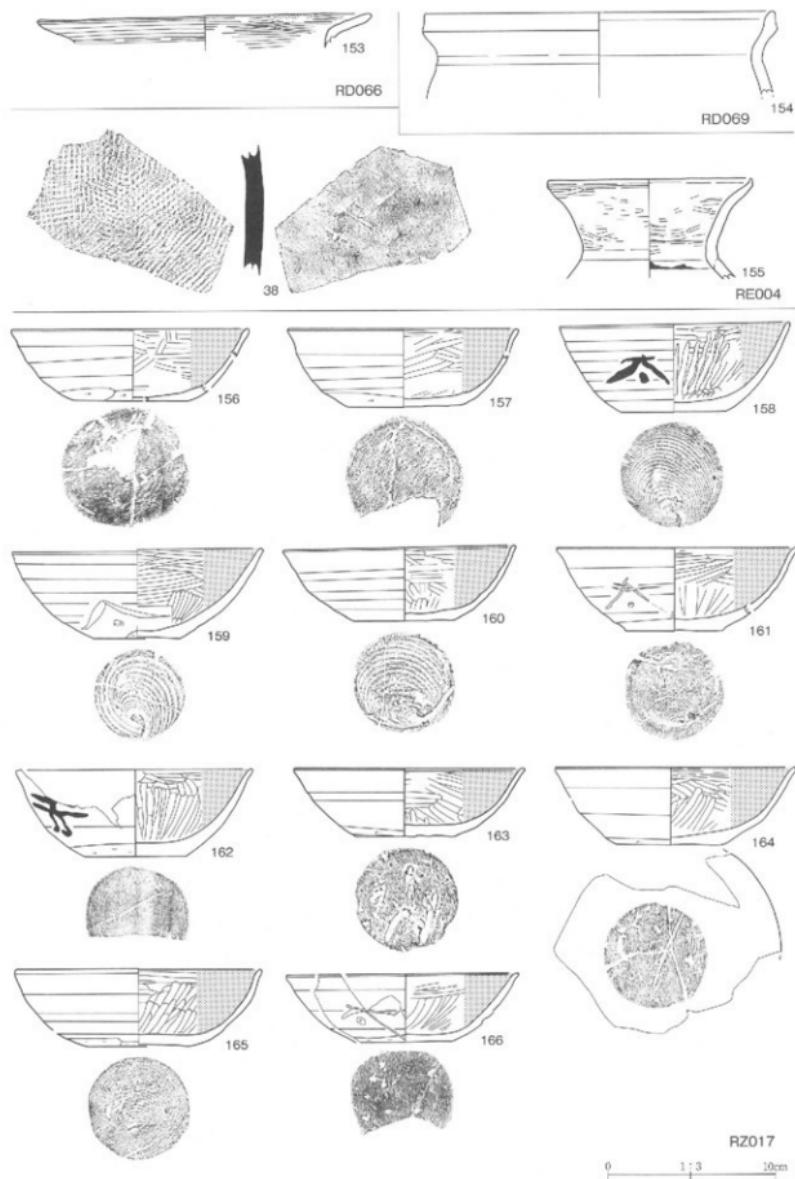


RD064

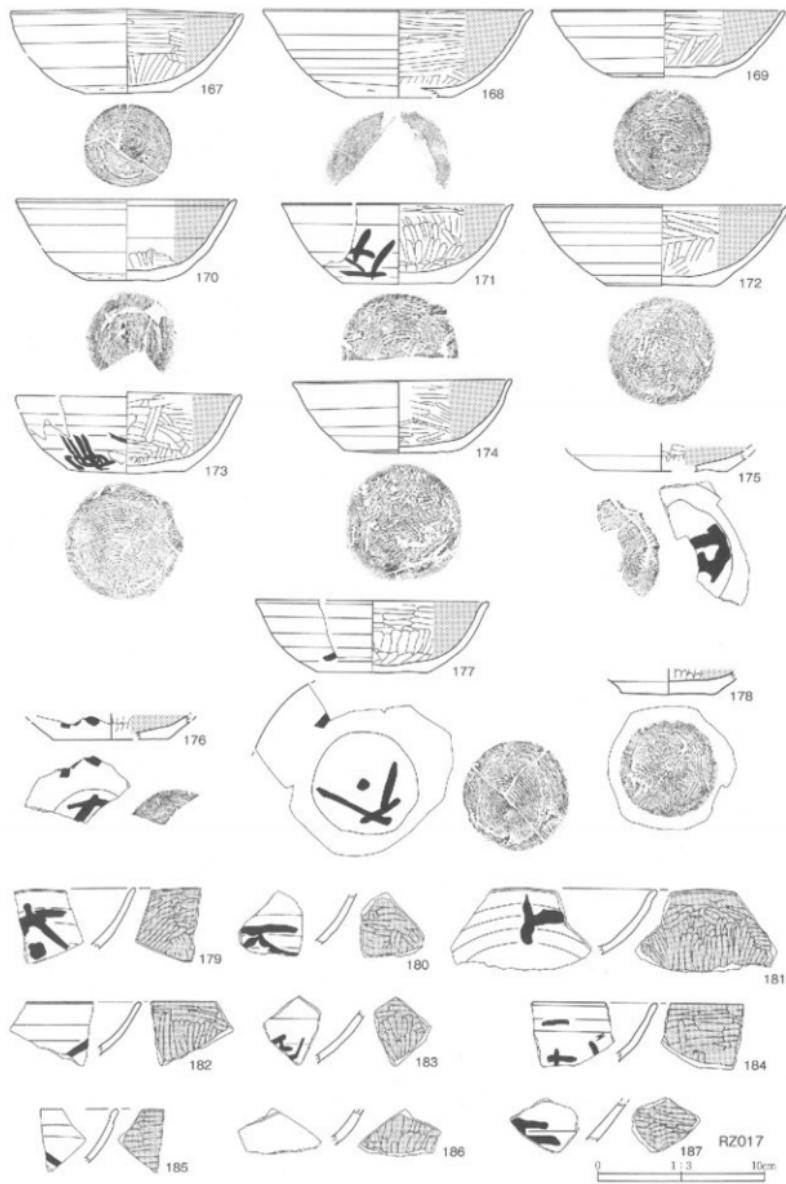


RD063

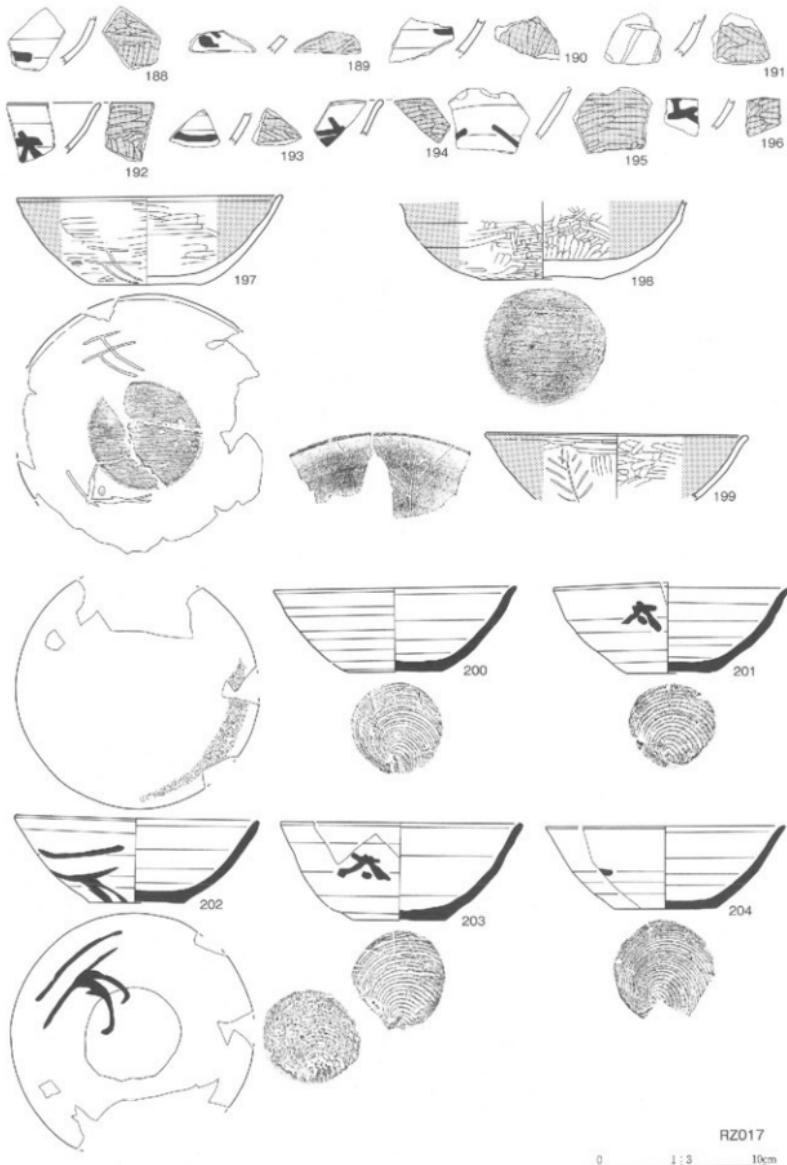
第77図 遺構内出土土器（19）



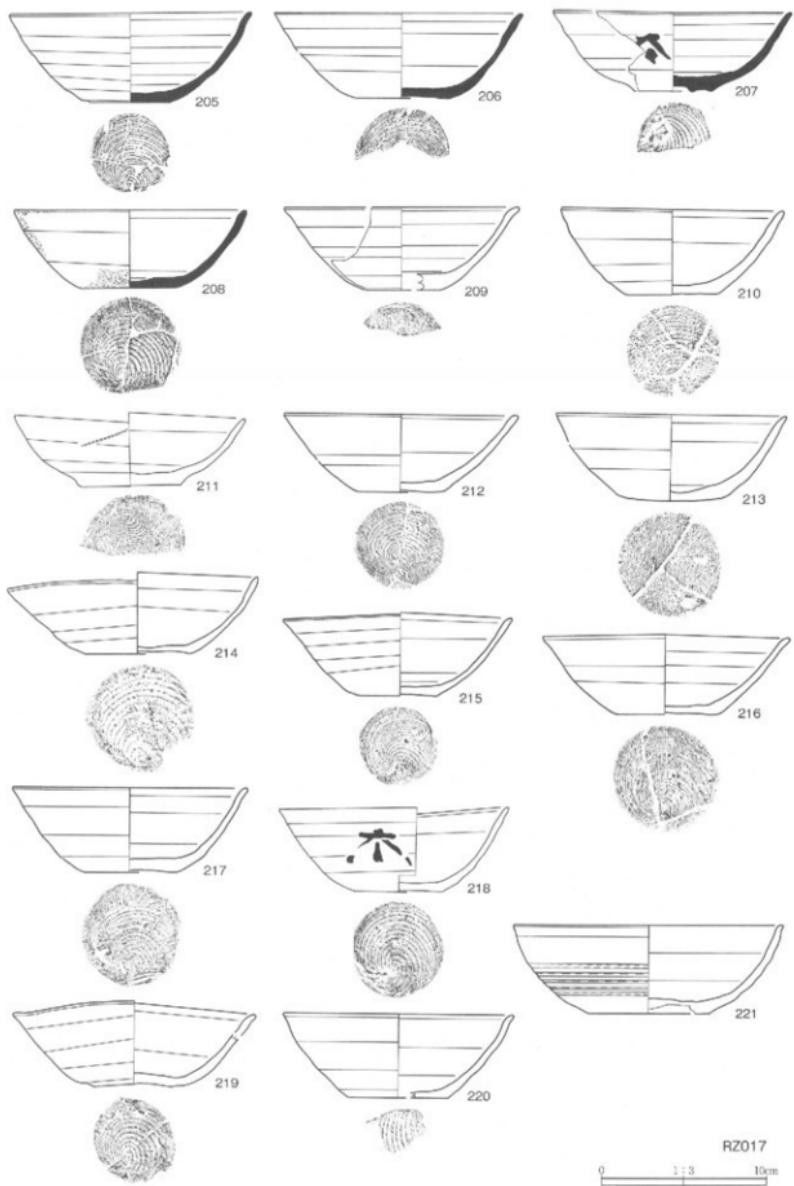
第78図 遺構内出土土器 (20)、遺構外出土土器 (1)



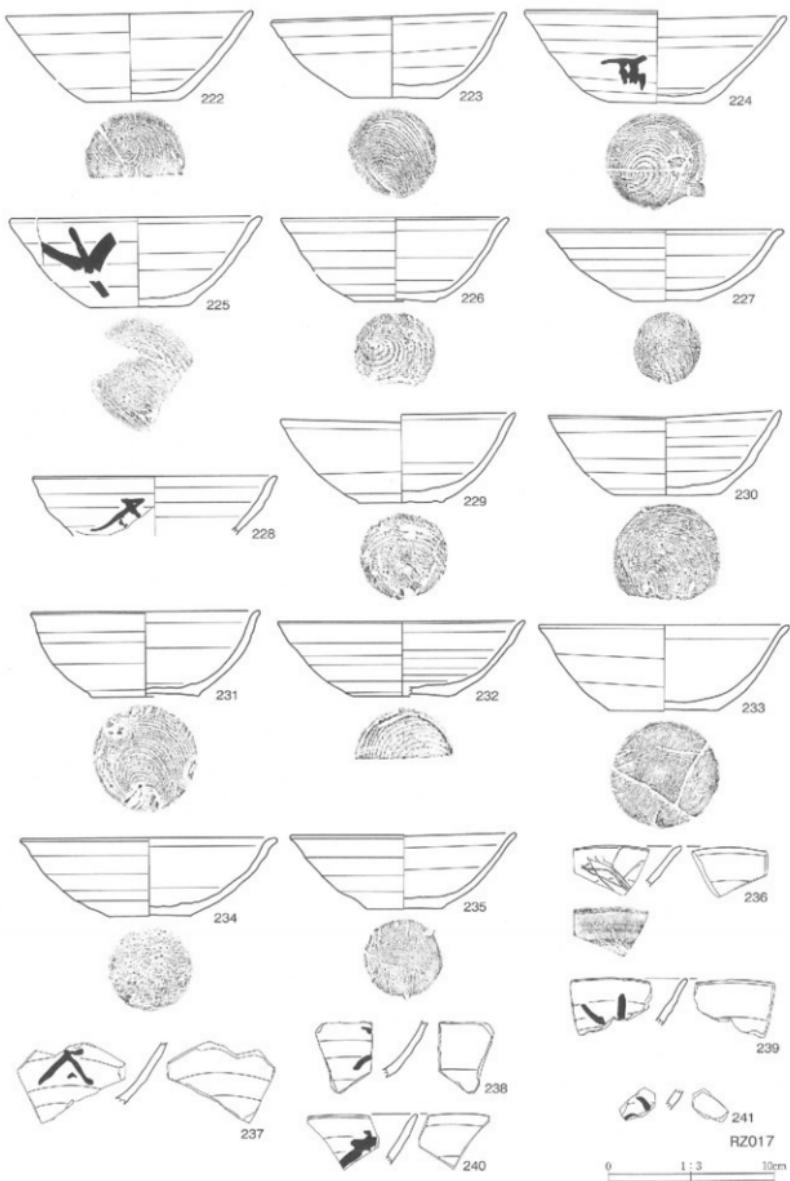
第79図 遺構外出土土器 (2)



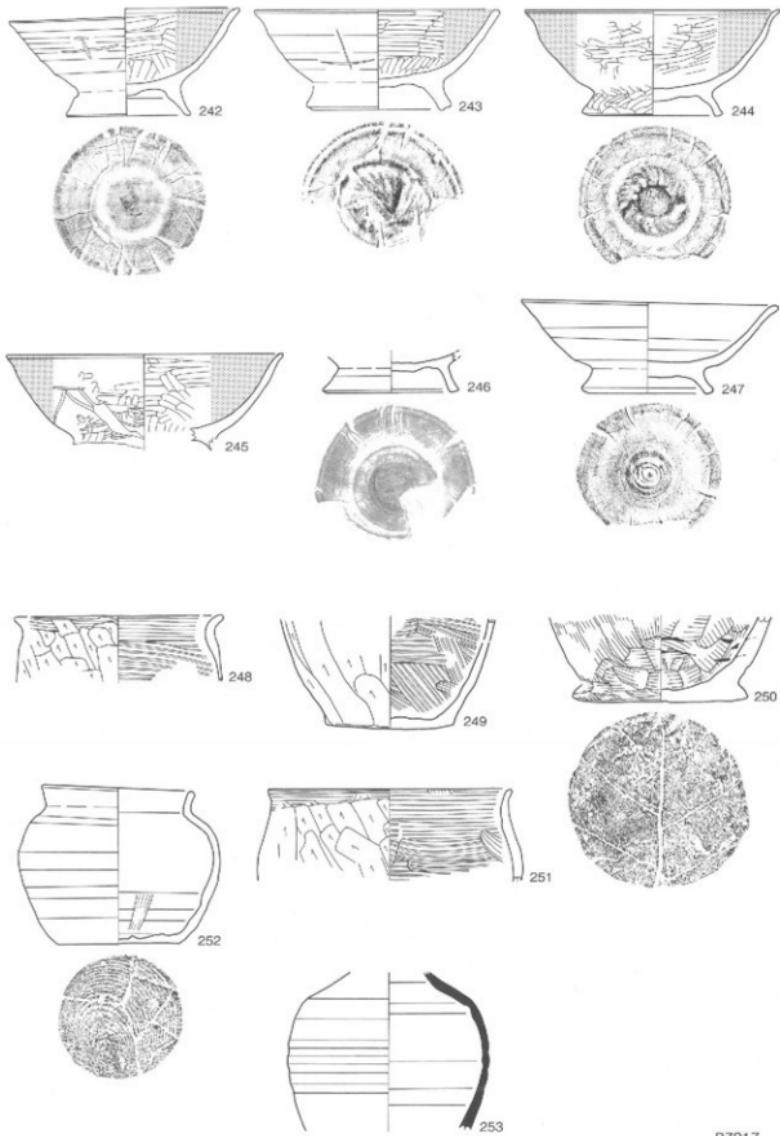
第80図 遺構外出土土器 (3)



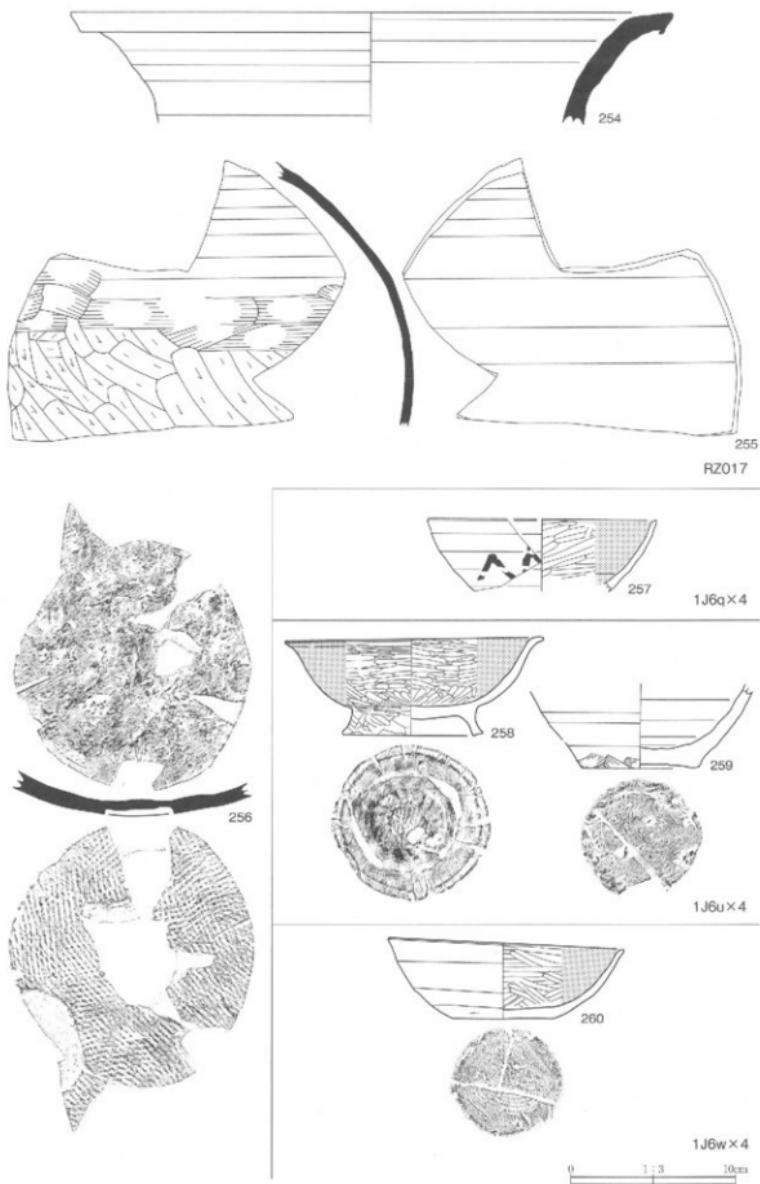
第81図 遺構外出土土器 (4)



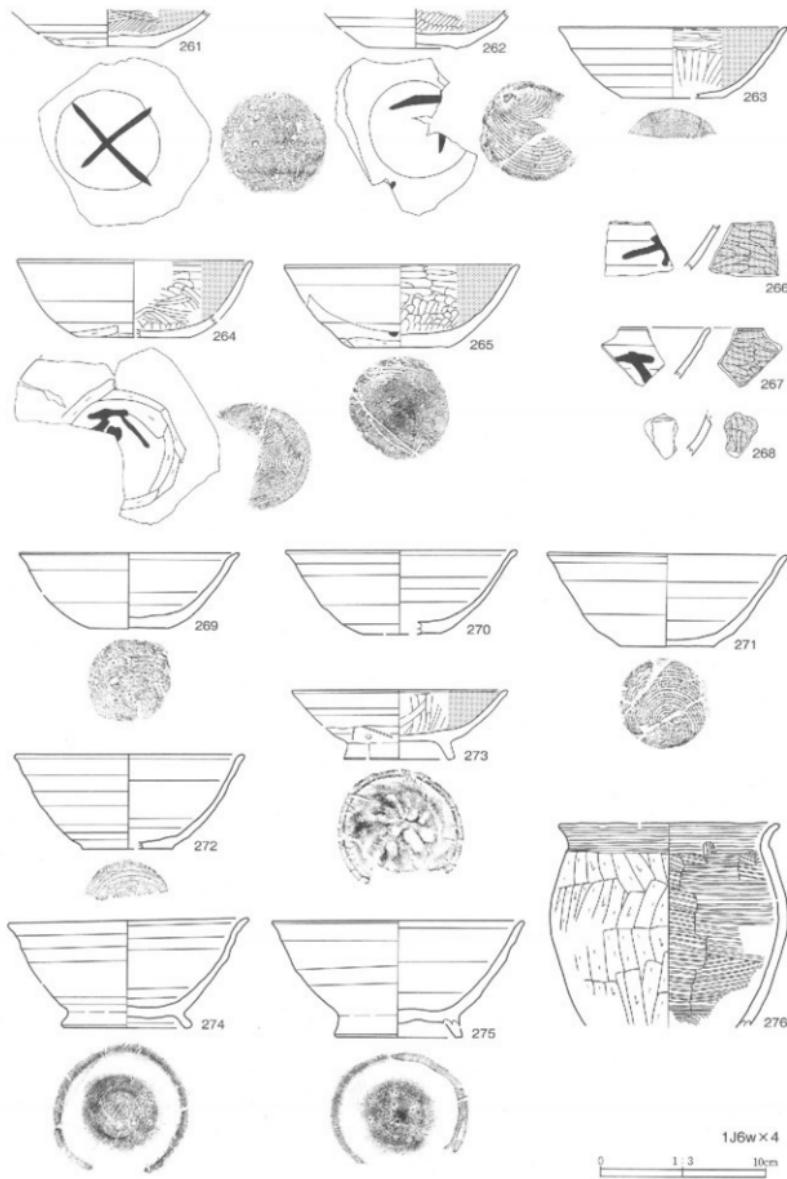
第82図 遺構外出土土器 (5)



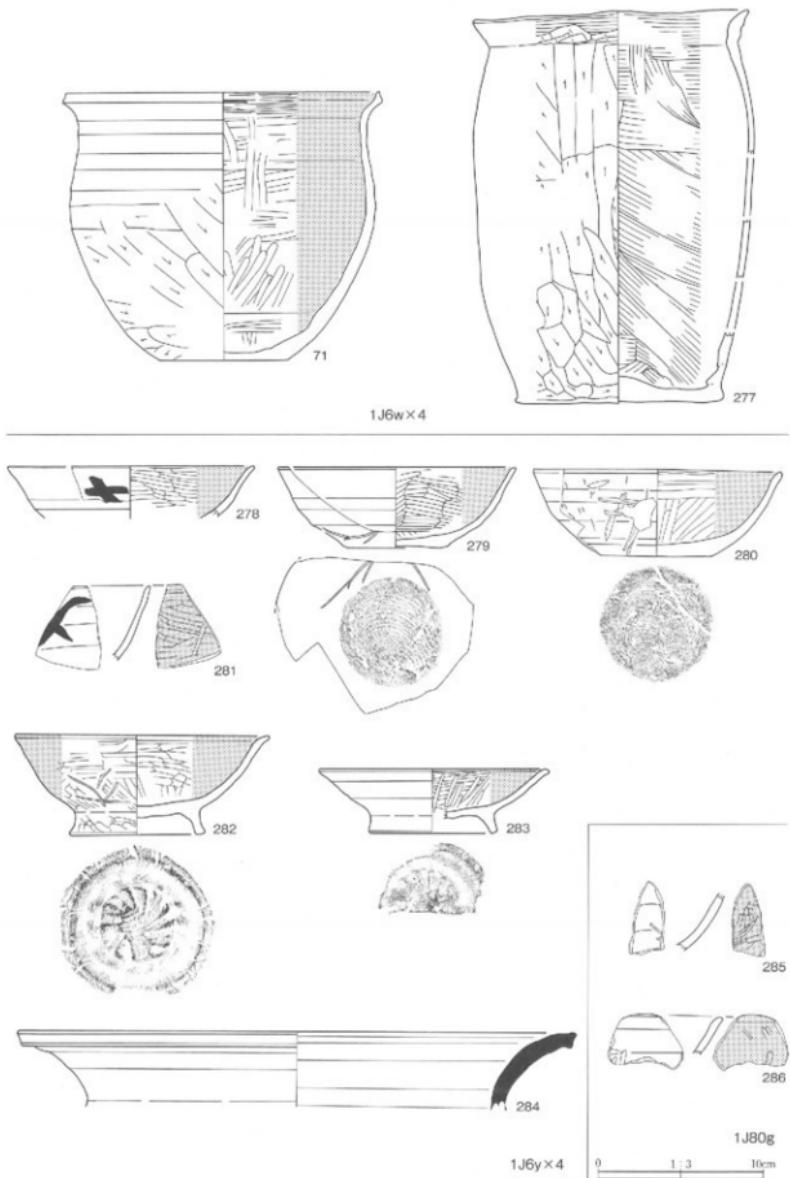
第83図 遺構外出土土器 (6)



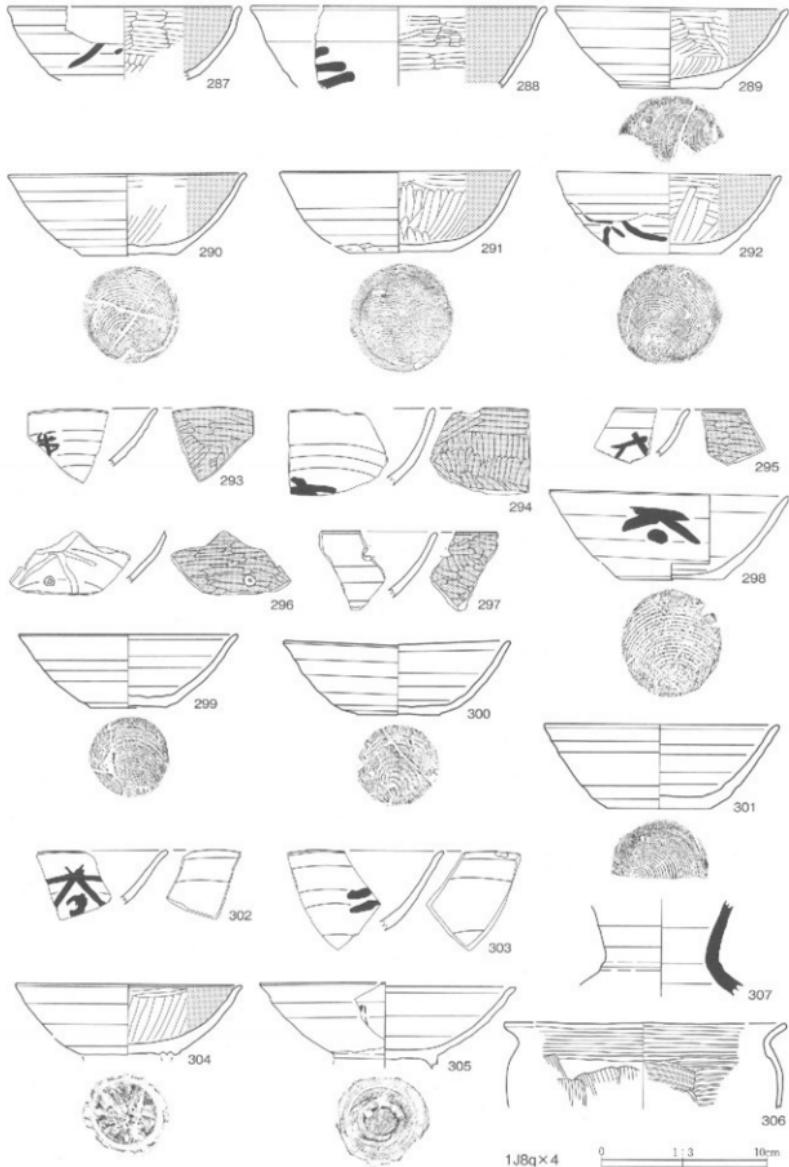
第84図 遺構外出土土器 (7)



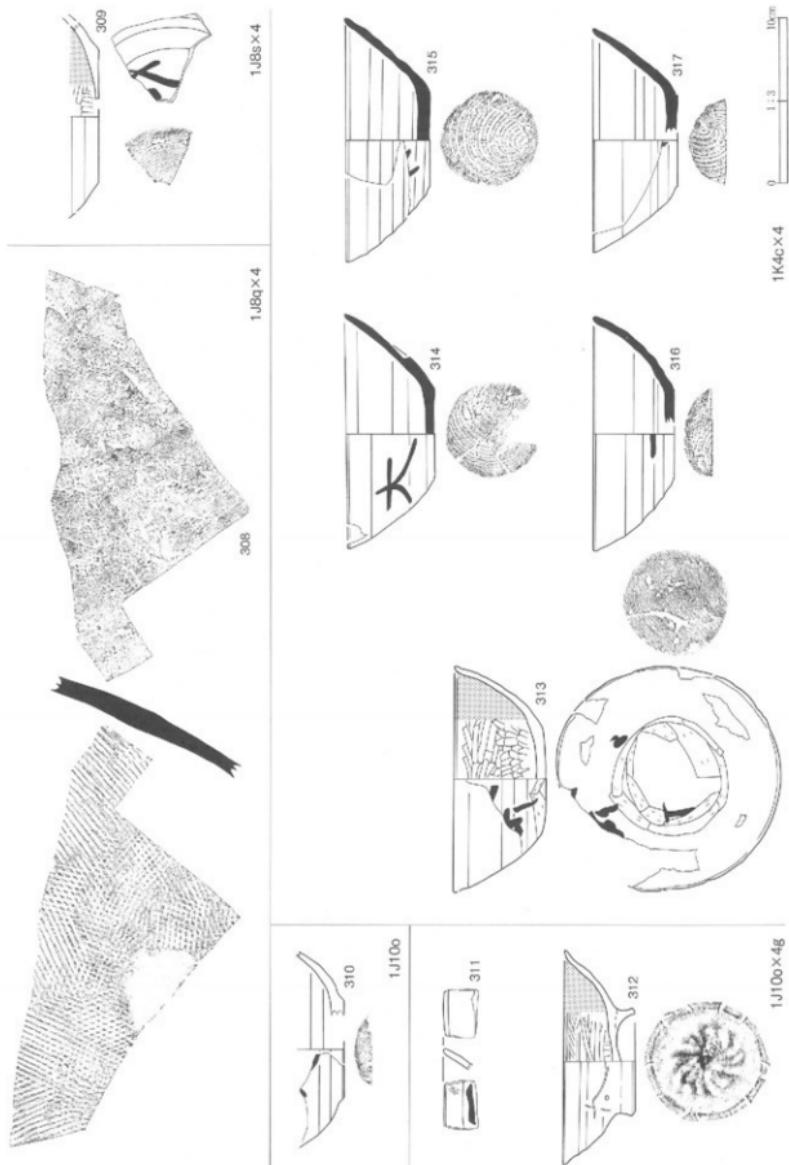
第85図 邊構外出土土器 (8)



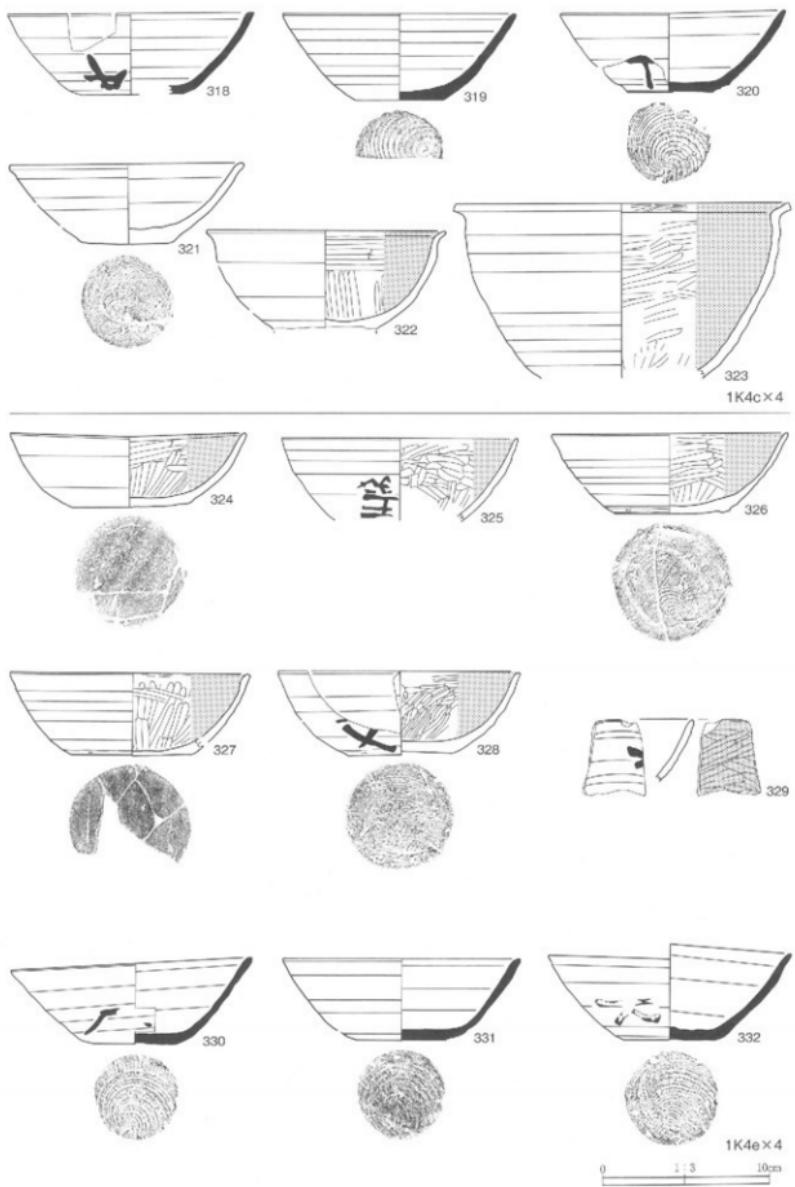
第86図 遺構外出土土器 (9)



第87図 遺構外出土土器 (10)



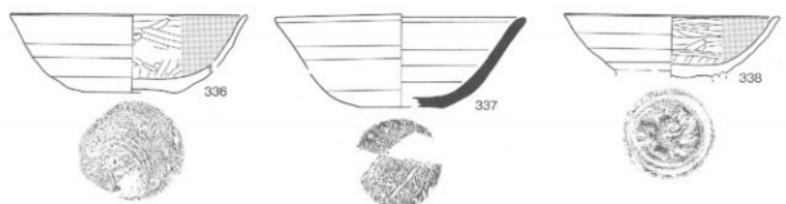
第88図 遺構外出土土器 (11)



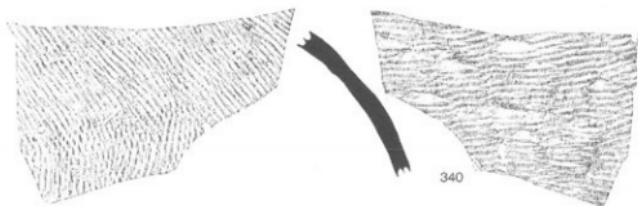
第89図 遺構外出土土器 (12)



1K4e×4



1K4g×4

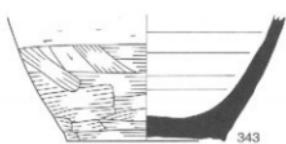


1K6c×4
0 1:3 10cm

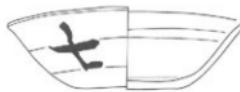
第90図 遺構外出土土器 (13)



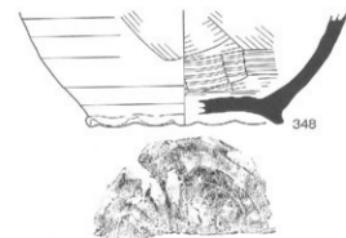
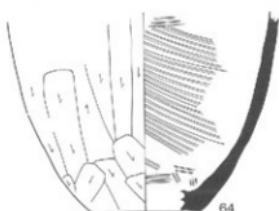
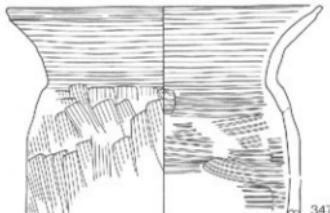
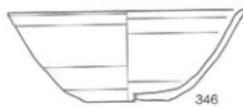
1K14v



1K23a付近



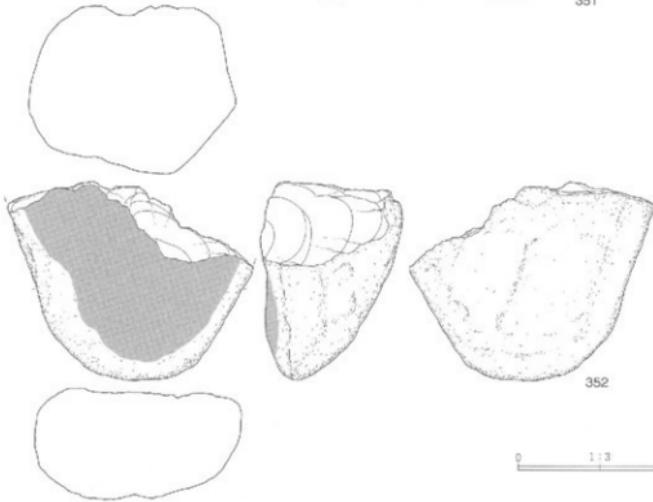
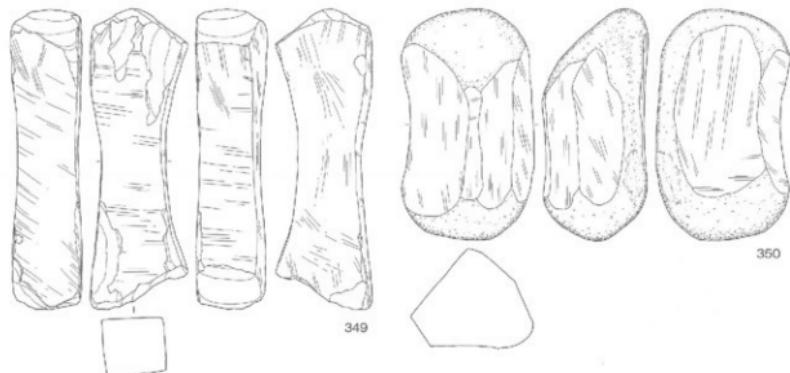
1K16o~1K21iまで広がるカクラン



その他遺構外

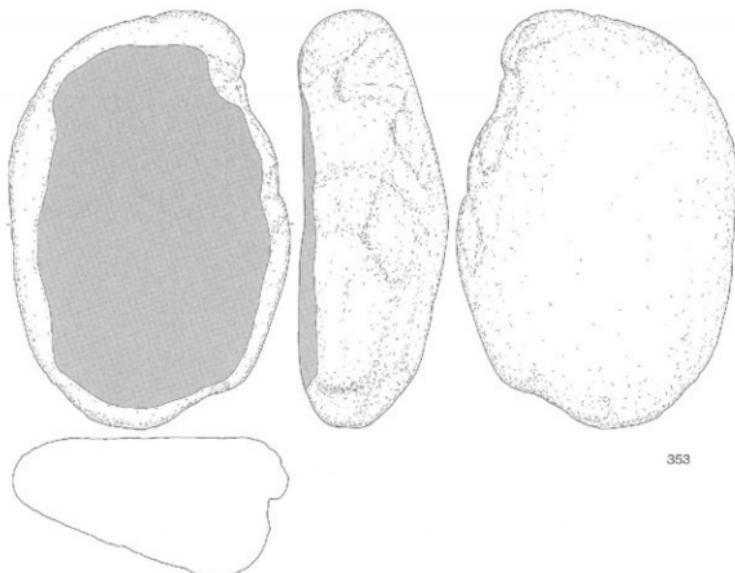
0 1:3 10cm

第91図 遺構外出土土器 (14)

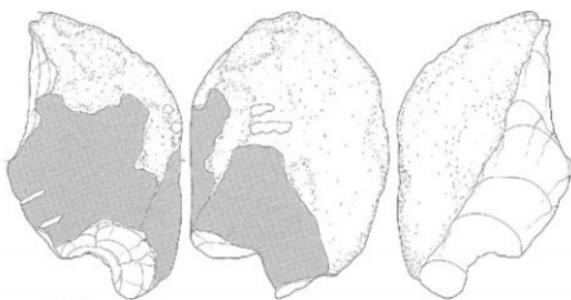


0 1 : 3 10cm

第92図 石器 (1)



353

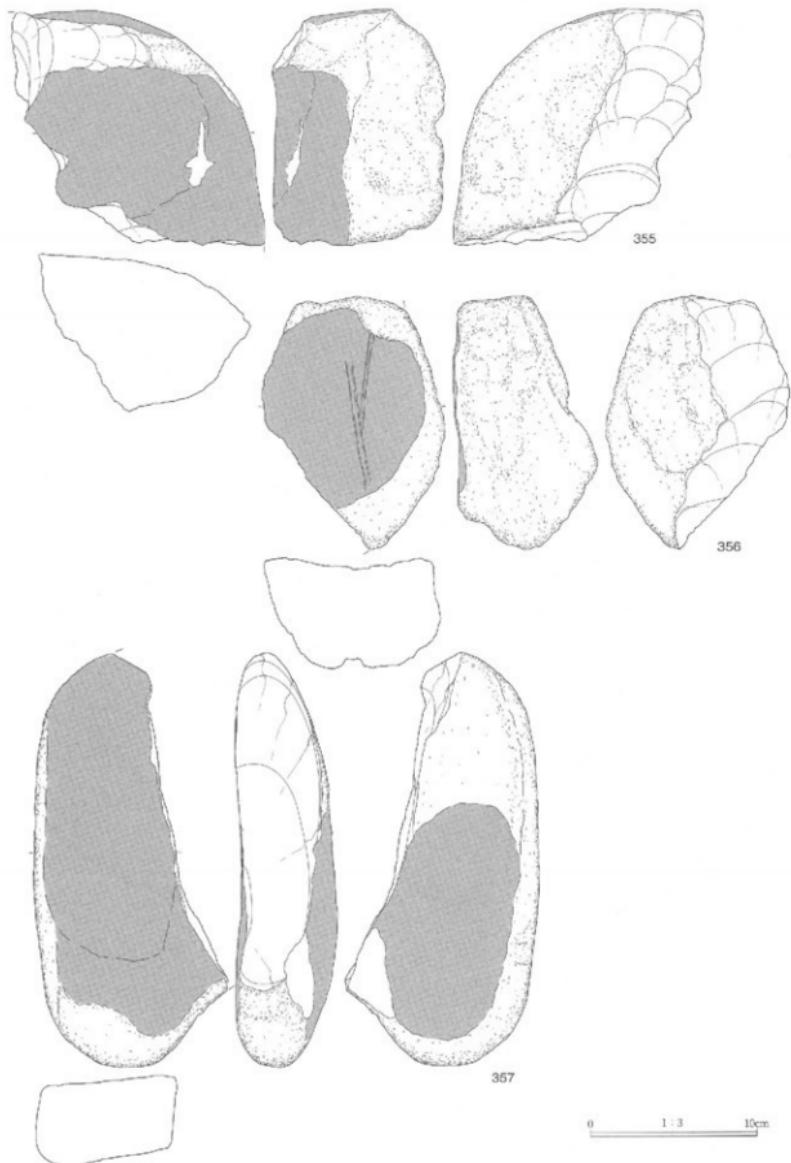


354

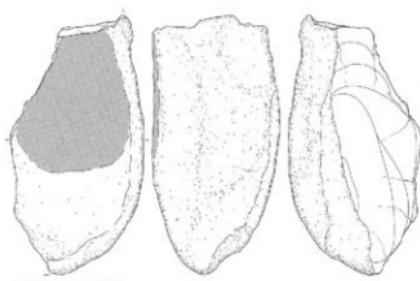


0 1:3 10cm

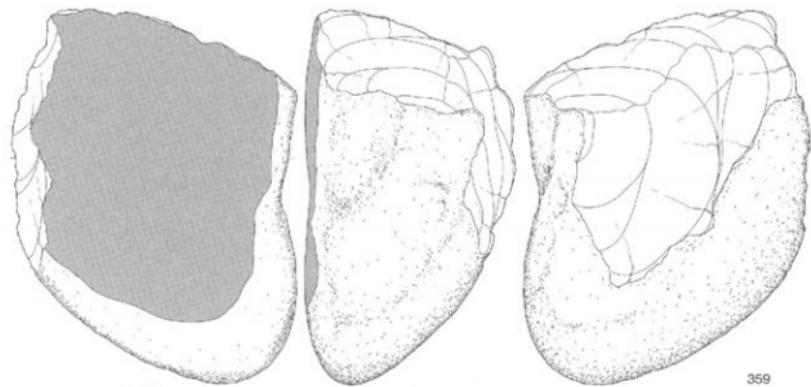
第93図 石器 (2)



第94図 石器 (3)



358

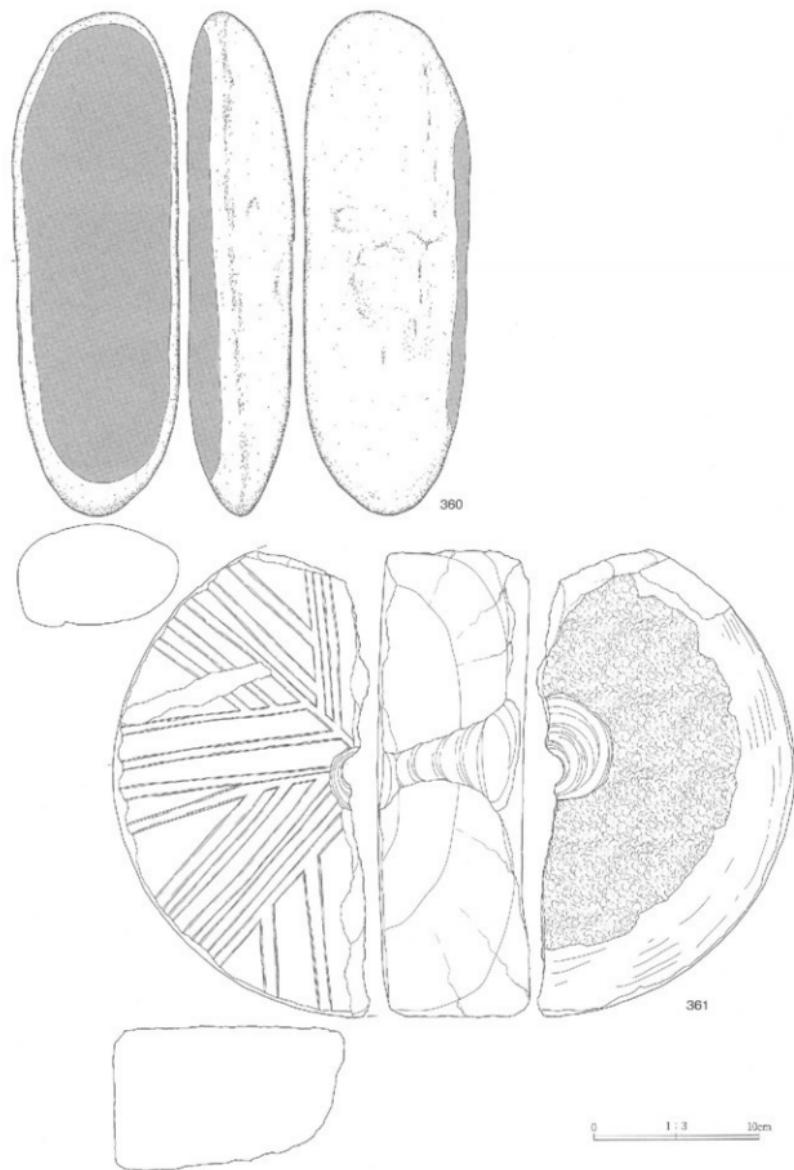


359

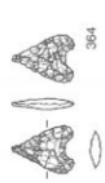


0 1:3 10cm

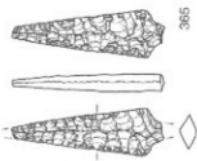
第95図 石器 (4)



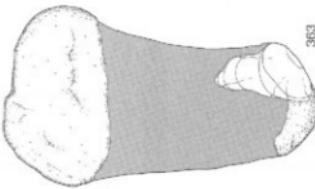
第96図 石器(5)



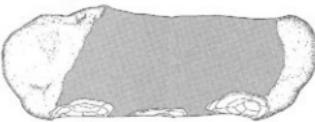
364



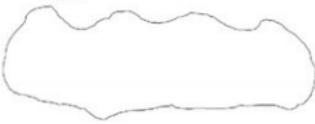
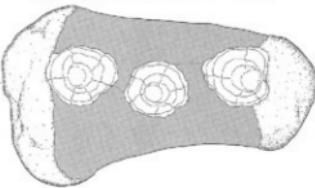
365



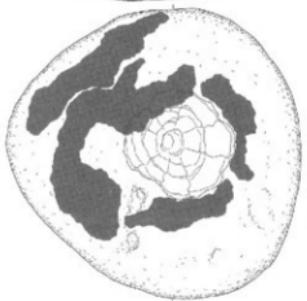
363



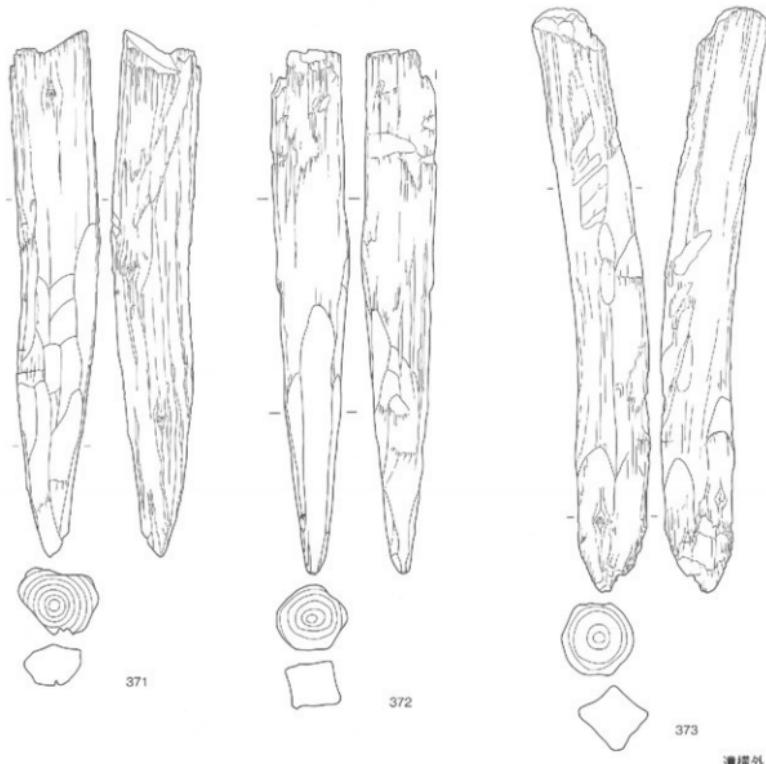
362



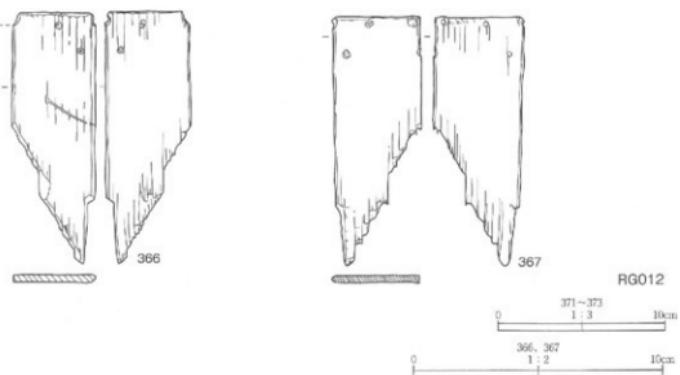
364. 365. 363
1 : 3
0 10mm



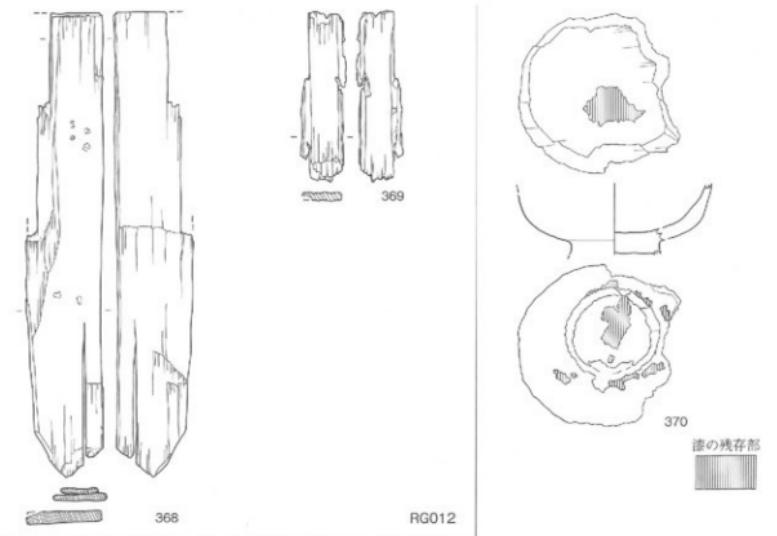
第97図 石器 (6)



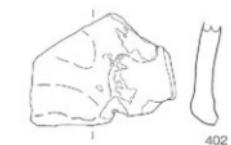
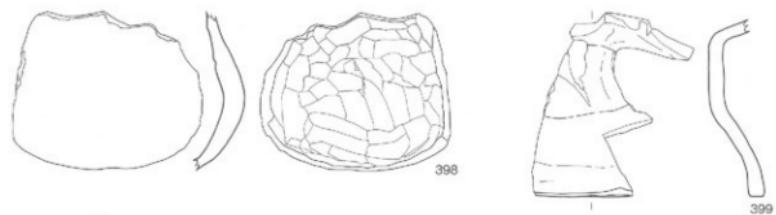
遺構外



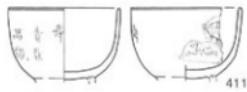
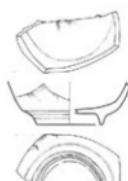
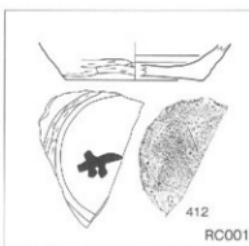
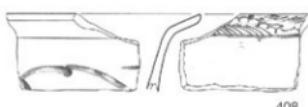
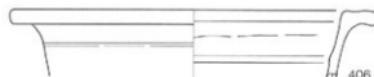
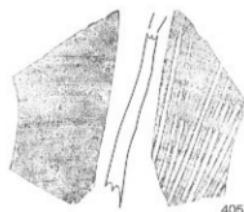
第98図 木製品 (1)



第99図 木製品（2）、土製品（1）



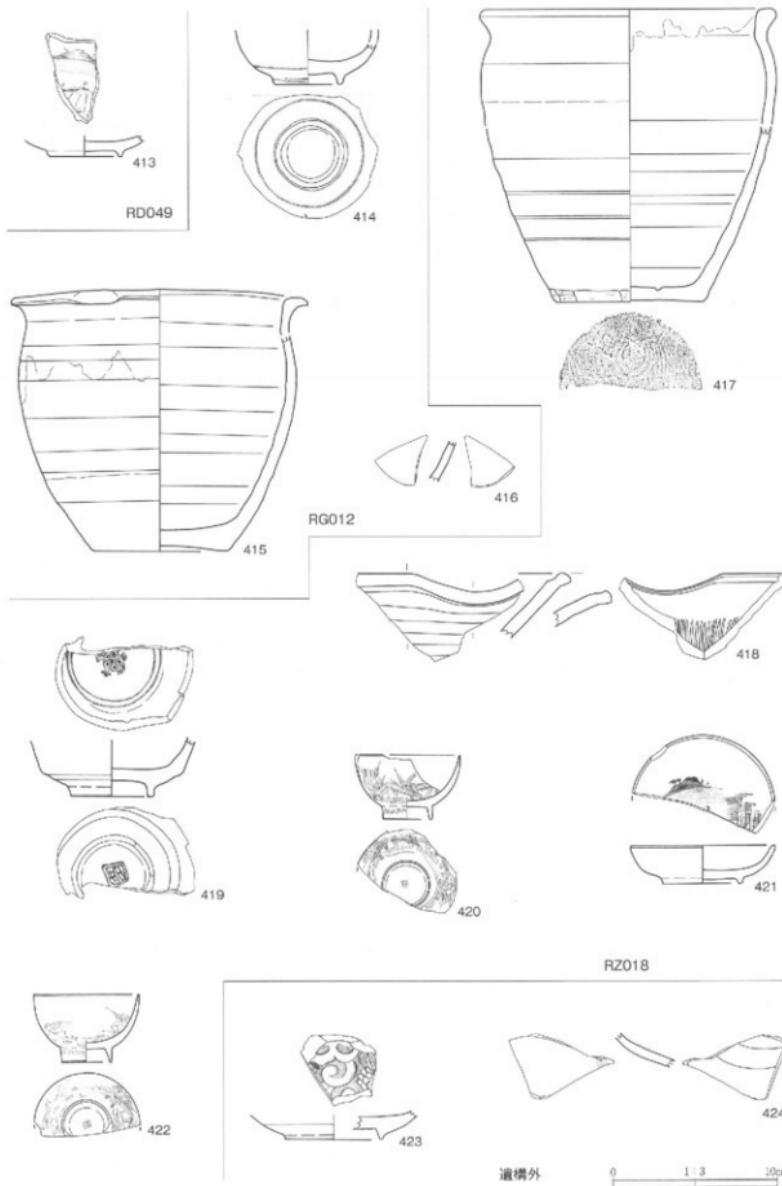
遺構外



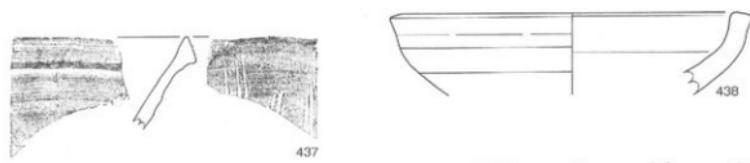
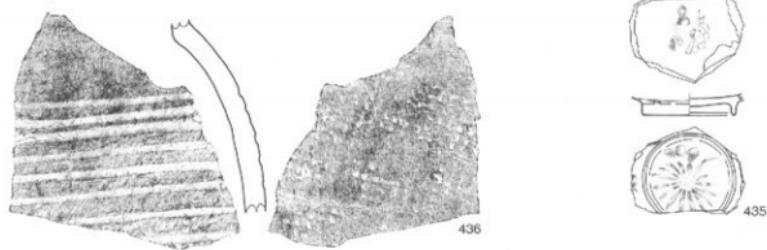
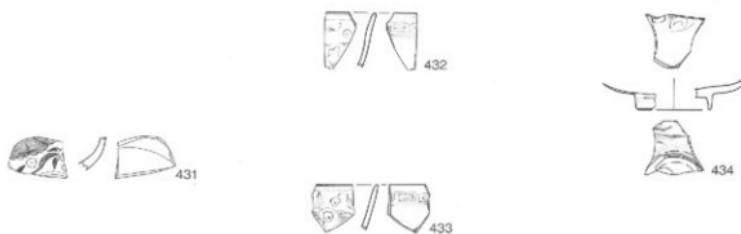
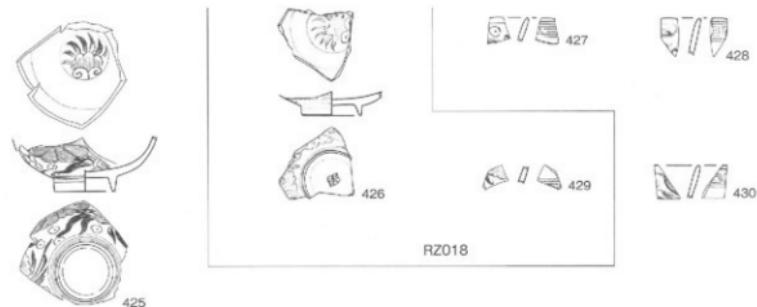
RB013



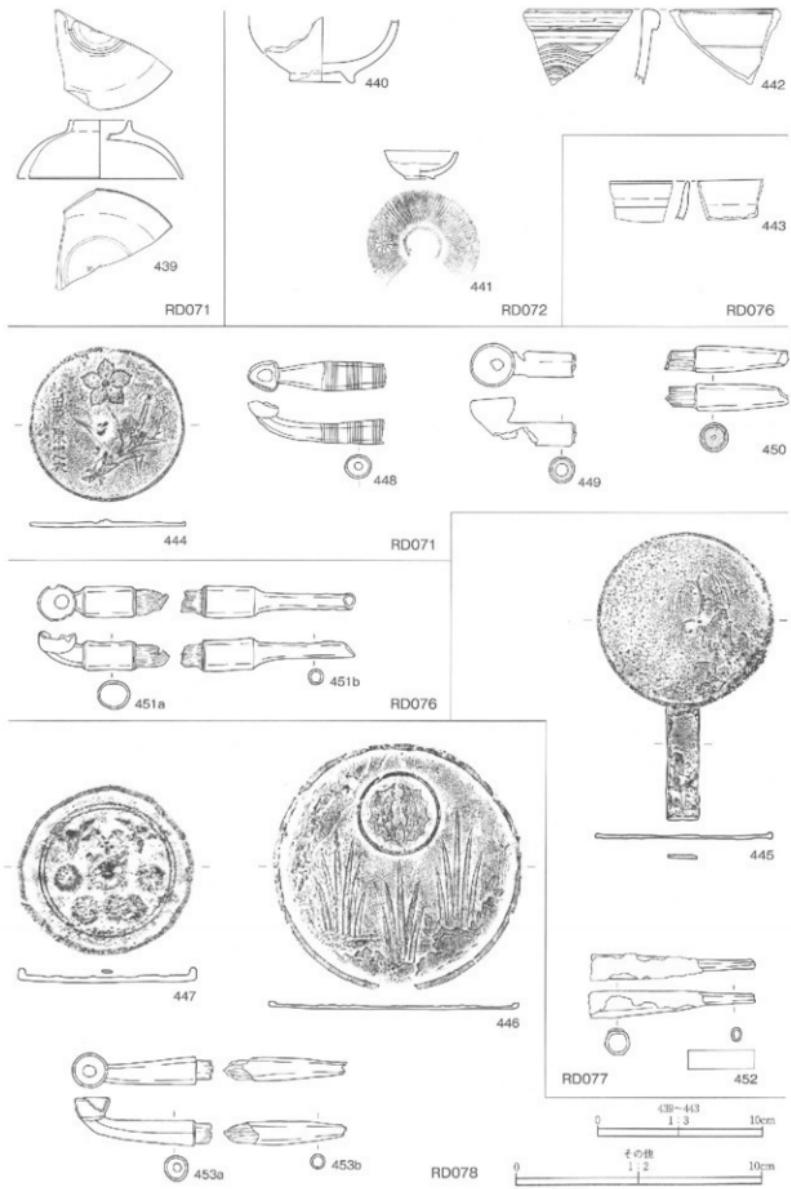
第100図 土製品 (2)



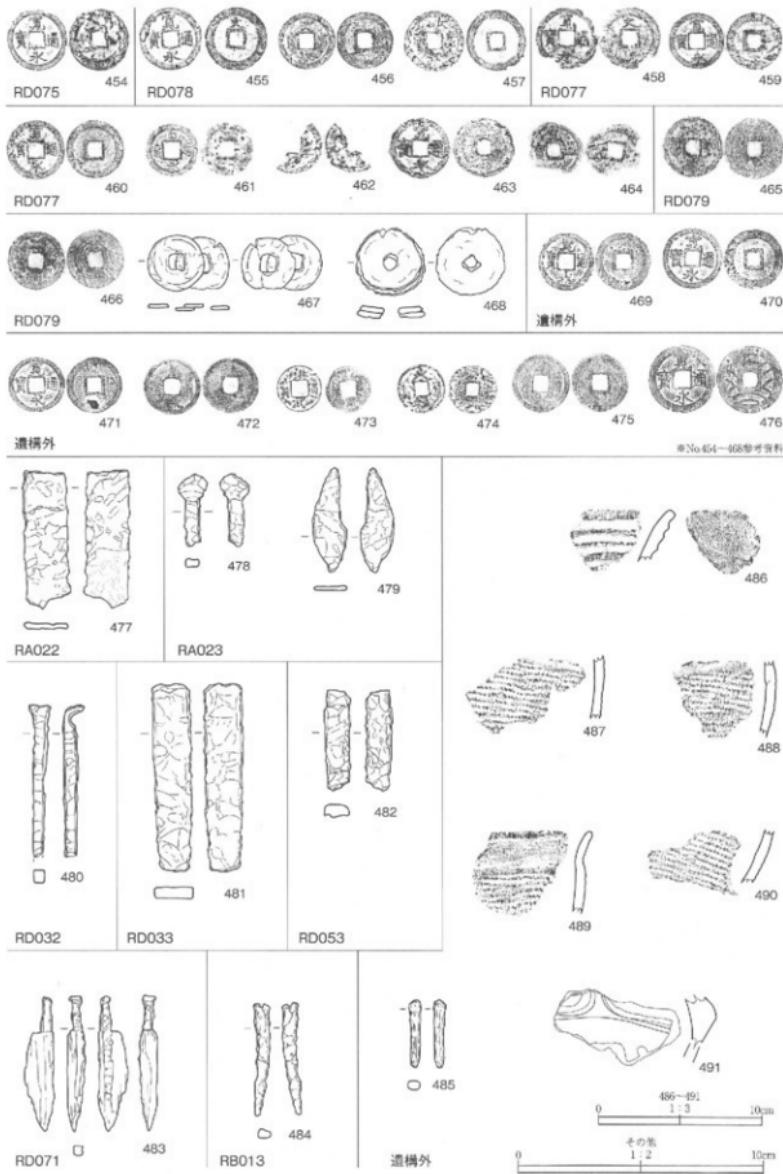
第101図 陶磁器 (1)



第102図 陶磁器(2)、土器



第103図 参考資料1（陶磁器、煙管、銅鏡）



第104図 參考資料2（錢貨）、錢貨、鐵製品、繩文土器

第11表 土器器・須恵器調査表

発掘番号	直管名	直付名	内里、輪部	外縁	内面調査	墨書き	焼付状況	その他の
			内里、輪部 环	外縁	内面調査	墨書き	焼付状況	
1 61 RA018	Q27直付 Q27下環十中位(底より上)	直付	内里、輪部 环	11.1 九郎	ミガキ 「火加」 キ・体解 キ・ミガキ	ミガキ ミガキ	4.5	
2 60 RA018	カマドの脚十下環		内里、輪部 环	14.3 九郎	4.9 5.8(底) 「火加」 キ・体解 キ・ミガキ	ミガキ ミガキ	4.5	
3 59 RA018	カマド芯		内里、輪部 环	15.1 九郎	5.4 「火加」 キ・体解 キ・ミガキ	ミガキ ミガキ	完形	内面墨色 焼付?
4 64 RA018	カマド芯		十脚鉢	14. 九郎	5.4 「火加」 キ・体解 キ・ミガキ	ミガキ ミガキ	完形	
5 63 RA018	便器腹土		内里十脚鉢	11.2 九郎	5.2> 「火加」 キ・体解 キ・ミガキ	ミガキ ミガキ	未燃	内面墨色 焼付?
6 66 RA018	カマドアヒ土		直付器	13.5 九郎	3.8 「火加」 キ・体解 キ・ミガキ	ミガキ ミガキ	未燃	
7 62 RA018	Q1ペラシ・西ベトナイト環・直ベトナイト環十中位		内里土器	13.2 九郎	4.9 「火加」 キ・体解 キ・ミガキ	ミガキ ミガキ	1.2	
8 65 RA018	Q1ペラシ・西ベトナイト環・北ベトナイト環十中位		直付器	15.4 九郎	5.2 「火加」 キ・体解 キ・ミガキ	ミガキ ミガキ	1.2	
9 73 RA018	カマド芯		直付器	9.5 九郎	5.2 「火加」 キ・体解 キ・ミガキ	ミガキ ミガキ	1.14変形	直付
10 68 RA018	(底なし) 西ベトナイト環		土陶器	16.2 九郎	6.6 「火加」 キ・体解 キ・ミガキ	ハケヌ ハケヌ	4.5	底部ナガリ直付解 底部ナガリにシダ型の焼付解
11 75 RA018	盤土中位(記載なし)・西ベトナイト環十中位	F2-	土陶器	16.2 九郎	6.2 「火加」 キ・体解 キ・ミガキ	ハナナ ハナナ	2.3	底墨水無 底部墨色濃 底部墨色有り伴 底部内面にリフクガタの墨付量
12 67 RA018	カマド芯		十脚器	19.0 九郎	7.4 「火加」 キ・体解 キ・ミガキ	ハナナ ハナナ	1.12変形	
13 69 RA018	東盤腰		上脚器	18.6 九郎	6.8 「火加」 キ・体解 キ・ミガキ	ハナナ ハナナ	1.18(全体の) 1.3	口部墨色の ①直付・全体解 ②直付下一部 直付
14 76 RA018	(記載なし)		上脚器	— 九郎	7.4 「火加」 キ・体解 キ・ミガキ	ハナナ ハナナ	1.2	口部墨色有り ①直付・全体解 ②直付下一部 直付
15 77 RA018	盤土中位(記載なし)・Q31レシナード/Q31 トレンチ・Q11環・西ベトナイト環十中位		上脚器	— 九郎	7.5 「火加」 キ・体解 キ・ミガキ	ハナナ ハナナ	1.2	口部墨色有り ①直付・全体解 ②直付下一部 直付
16 375 RA018	上脚16 カマド芯		土脚器	— 九郎	5.3 「火加」 キ・体解 キ・ミガキ	ハナナ ハナナ	1.2	口部墨色有り ①直付・全体解 ②直付下一部 直付
17 72 RA018	盤土中位(記載なし)・Q31レシナード/Q31 トレンチ・Q11環・西ベトナイト環十中位	I)	カマドアヒ土・上脚土小位 カマドアヒ土 Q1トレンチ・Q11環・上脚 Q11環・上脚 西ベトナイト環十中位	— 九郎	6.7 「火加」 キ・体解 キ・ミガキ	ハナナ ハナナ	1.2	口部墨色有り ①直付・全体解 ②直付下一部 直付
18 70 RA018	カマドアヒ土・上脚土小位 カマドアヒ土 Q1トレンチ・Q11環・上脚 Q11環・上脚 西ベトナイト環十中位		上脚器	— 九郎	— 「火加」 キ・体解 キ・ミガキ	ハナナ ハナナ	1.2	口部墨色有り ①直付・全体解 ②直付下一部 直付
19 71 RA018	カマド芯		上脚器	— 九郎	— 「火加」 キ・体解 キ・ミガキ	ハナナ ハナナ	1.4	無手持ちヘタケギ
20 74 RA018	Q27直付 Q27下環十中位(底より上)		土脚器	— 九郎	8.4 「火加」 キ・体解 キ・ミガキ	ハナナ ハナナ	1.4	無手持ちヘタケギ
21 88 RA020	脚十下環 Q27トレンチ		門脚・上脚器	14.2 九郎	4.8 「火加」 キ・体解 キ・ミガキ	ミガキ ミガキ	1.4	無手持ちヘタケギ

剖面番号	名前	土壤名	剖面位置・層位	種類	特徴	上径(cm)	径深(cm)	外表面面積	内表面面積	蓄量* 斜面	蓄量* 斜面	その他の
22	85 RA020	カマド窯出灰層上	土壌層	灰	(14.0)	4.2	4.6	R+ア	R+ア	1.2	1.2	粘土に含浸した粘土質灰
23	96 RA020	東直門北側土壌層下/Q3 2層+Q3泥炭層	土壌層	灰+粘土質灰	(15.7)	5.5	5.5	R+ナ	R+ア	1.3	1.3	粘土に含浸した粘土質灰
24	87 RA020	門上丁寧地土壌層下/土壌層	土壌層	灰	(21.0)	(15.0)	31.9	R+ナ+ト+ナガリ	R+ナ+ト+ナガリ	1.3	1.3	粘土ナガリ
25	85 RA020	木橋底泥炭層の粘土灰	土壌層	灰	(16.5)	-	<6.1>	R+ナ	R+ナ+ト+ナガリ	1.4	1.4	土壌泥炭
26	86 RA020	門上丁寧地土壌層下/土壌層	土壌層	灰	(21.8)	-	<30.7>	R+ナ+ト+ナガリ	R+ナ+ト+ナガリ	1.4	1.4	土壌+体積蓄量
27	86 RA020	門上丁寧地土壌層外灰のクランQ1	土壌層	灰	(20.1)	-	32.0	半ナガリナガリ	R+ナ+ト+ナガリ	0.1/3	0.1/3	土壌+体積蓄量
28	81 RA020	廻路	土壌層	灰	-	(12.8)	<5.2>	R+ナ+ト+ナガリ	R+ナ+ト+ナガリ	0.1/2	0.1/2	無機灰2
29	84 RA020	検出層	土壌層	灰	(23.3)	-	<11.9>	R+ナ	R+ナ+ト+ナガリ	0.1/2	0.1/2	口渴部成片
30	85 RA020+ RD022	門上丁寧地土壌層下/土壌層	土壌層	灰	(21.4)	-	<37.7>	R+ナ+ト+ナガリ	R+ナ+ト+ナガリ	1.3	1.3	口渴+体積蓄量
31	40 RA020+ RA020	検出層+RD009 TPL13	風化層	小酸性	-	(8.0)	<10.3>	R+ナ	R+ナ+ト+ナガリ	1.4	1.4	「口渴、無机化」
32	51 RA022	左ソードギル/カマド灰ソダ	内黒土粘土	灰	14.2	6.3	4.2	R+ナ+ト+ナガリ	R+ナ+ト+ナガリ	13.7光沢	13.7光沢	外因による堆積
33	52 RA022	カマド灰ソダ風化カマド灰左ソダ	内黒土粘土	灰	15.8	6.5	5.7	R+ナ+ト+ナガリ	R+ナ+ト+ナガリ	4.9	4.9	「口渴」「無机化」
34	53 RA022+ RA023	Q1 「唐+RA022カマド壁上」	内黒土粘土	灰	13.9	6.0	4.9	R+ナ+ト+ナガリ	R+ナ+ト+ナガリ	3.5	3.5	「口渴+体積蓄量」
35	54 RA022	カマド灰+	土壌層	灰	-	<15.7>	R+ナ+ト+ナガリ	R+ナ+ト+ナガリ	R+ナ+ト+ナガリ	1.3	1.3	無機灰
36	58 RA022	タマゴソノ壁下/カマド灰ソダ風化カマド灰	土壌層	灰	(6.9)	<4.3>	R+ナ+ト+ナガリ	R+ナ+ト+ナガリ	R+ナ+ト+ナガリ	1.2	1.2	口渴+体積蓄量
37	57 RA022	タマゴソノ壁下/カマド灰ソダ風化カマド灰	土壌層	灰	(21.2)	-	<19.1>	R+ナ+ト+ナガリ	R+ナ+ト+ナガリ	1.3	1.3	体積蓄量
38	40 RA022	検面層+RE004 トレンド	風化層	大豊?	-	-	明日日	ナガリ	ナガリ	1.4	1.4	断面、内面微化
39	26 RA023	未直	内黒土粘土	灰	(13.8)	6.2	<1.9>	R+ナ+ト+ナガリ	R+ナ+ト+ナガリ	1.2	1.2	外因による堆積
40	34 RA023	未直	内黒土粘土	灰	-	6.5	<3.2>	R+ナ+ト+ナガリ	R+ナ+ト+ナガリ	1.2	1.2	体积+底面のみ
41	40 RA023	壁+土壁/2層上/Q1+2層	内黒土粘土	灰	(15.5)	(6.9)	5.1	R+ナ	R+ナ	2.5	2.5	体積下屈
42	34 RA023+ RA034	手カマド壁+	内黒土粘土	灰	(15.4)	6.0	6.0	R+ナ	R+ナ	1.4	1.4	体積下屈
43	36 RA023	下灰	土壌層	灰	(15.1)	5.8	6.7	R+ナ	R+ナ	1.4	1.4	ほぼ完形
44	37 RA023	3層上	土壌層	灰	(15.1)	4.7	4.7	R+ナ	R+ナ	1.4	1.4	無機灰
45	38 RA023	+手カマド壁	土壌層	灰	(14.3)	(5.9)	5.0	R+ナ	R+ナ	1.4	1.4	「かみ込みあり」
46	28 RA023+ Q1+2層+Q2	Q1+2層+Q2風化土	内黒土粘土	灰	(7.8)	<3.3>	R+ナ	R+ナ+ト+ナガリ	R+ナ+ト+ナガリ	1.3	1.3	体積下屈
47	45 RA023	Q1+1層	土壌層	灰?	-	-	<9.4>	R+ナ	R+ナ	1.4	1.4	体積下屈
48	47 RA023	未カマド下灰	土壌層	灰	-	9.6	<16.0>	R+ナ	R+ナ	1.4	1.4	体積下屈
												透視

探査番号	底名	底棲生物	種類	層位	口徑(m)	底高(m)	外側面深さ(cm)	内側面深さ(cm)	垂管	斜管	混合状況	その他
70	131 RA026	(Q3層+上層) (泥質砂質) NO.5, Q3層上 中(砂質砂層)	内黒土堆積 内黒土堆積	坏	(15.0)	(6.0)	5.1	Rナード→ミキサ Rナード→ミキサ	1/2			
71	380 RA026	Rナード 内黒土堆積 +105cm K3層+下層 K3層+下層	内黒土堆積 内黒土堆積	坏	(19.0)	(7.8)	16.2	Rナード→生地下 Rナード→ミキサ ヘラナード	3/4			底部ヘラケダリ
72	130 RA026	(Q3層+上層) (Q3層+下層) (Q3層+下層) 内黒土堆積	内黒土堆積 内黒土堆積	坏	-	-	<1.6>					1段部断片
73	388 RA026	(Q3層+上層) NO.4, R0262 / 開 口(露観察なし) NO.4/Q3層+下層/内黒土堆積 内黒土堆積	内黒土堆積 内黒土堆積	坏	-	-	明けH ハナード	苗床底層→土H ハナード	体部断片	110~111上層の一地上		
74	132 RA026	(Q3層+上層) NO.4/Q3層+下層/内黒土堆積 内黒土堆積	内黒土堆積 内黒土堆積	坏	10.8	7.5	11.3	Rナード Rナード	3/4			底部水塊質
75	129 RA026	カマド堆積物+砂石のトロトロ 内黒土堆積	内黒土堆積	坏	(19.6)	-	<8.0>	Rナード Rナード		1段~多頭断片		
76	111 RA027	カマド堆積物+土・木質物下 内黒土堆積	内黒土堆積	坏	15.0	(5.0)	5.5	Rナード Rナード		4/5		
77	110 RA027	カマド堆 内	内黒土堆積物 内黒土堆積物	坏	-	6.4	<3.0> <2.2>	Rナード Rナード→ミキサ Rナード	体部断片	体部~底層断片		
78	113 RA027	北側斜面 切るカラン	内黒土堆積物 内黒土堆積物	坏?	-	(6.3)	(6.3)	Rナード Rナード	底部断片	内外混濁状態(内面に細胞 化合物、紫色色付植物		
79	119 RA027	カラン	内黒土堆積物 内黒土堆積物	坏?	-	(9.4)	<2.2>	Rナード Rナード	底部断片	底部断片		
80	120 RA027	カマド堆積物+底面構成土中に底面地十下 内黒土堆積物	内黒土堆積物	坏	(14.4)	(10.0)	19.5	Rナード Rナード	1/4	底部ケダリ		
81	115 RA027	Q3層上(未確認) 地内	内黒土堆積物 内黒土堆積物	坏	(16.0)	-	<10.9>	Rナード Rナード		口縁~底層断片 の1/3		
82	114 RA027	Q3層土+カマド堆積物+カマド堆積物 内黒土堆積物 内黒土堆積物	内黒土堆積物 内黒土堆積物	坏	-	10.2	<12.6>	Rナード Rナード	体部下半~底部 底部ケダリ			
83	121 RA027	金瓦質物引るカマド堆積物 内黒土堆積物+10年位の露出を引むカマド 内黒土堆積物	内黒土堆積物 内黒土堆積物	坏?	-	-	<31.2>	Rナード Rナード	口縁~体部断片			
84	117 RA027	黑土+中 底面地十下	内黒土堆積物 内黒土堆積物	坏	-	12.6	<1.4>	Rナード Rナード	底部のみ	底部のみ		
85	116 RA027	底面地十下 内黒土堆積物	内黒土堆積物	坏	-	(7.9)	<2.2>	Rナード Rナード	底部断片	断片(遠端中央)		
86	118 RA031	RA027 カマド堆積物+カマド堆積物 内黒土堆積物 内黒土堆積物	内黒土堆積物 内黒土堆積物	坏?	-	(17.6)	-	Rナード Rナード	口縁~体部断片			
87	415 RA027	カマド堆 上	内黒土堆積物 内黒土堆積物	坏?	-	-	<15.3>	Rナード Rナード	体部断片			
88	112 RA027	カマド堆積物+Q3層上中+堆積物下 内黒土堆積物	内黒土堆積物 内黒土堆積物	坏?	-	-	<15.0>	Rナード Rナード	体部断片			
89	133 RA028	カマド堆積物上1層+上中層間隙層上 内黒土堆積物 内黒土堆積物	内黒土堆積物 内黒土堆積物	坏	13.4	6.4	5.0	Rナード Rナード	4/5			
90	134 RA028	カマド堆積物下マド同辺土及土灰土 上	内黒土堆積物 内黒土堆積物	坏	-	5.6	<3.3>	Rナード Rナード	体部~底部断片			
91	137 RA028	堆積物+近カマド堆積物上+カマド 内黒土堆積物	内黒土堆積物 内黒土堆積物	坏?	-	-	<7.0>	Rナード Rナード	底部断片	底部から体部断片		
92	126 RA028	堆積物+カマド堆積物上+生垣土 内黒土堆積物	内黒土堆積物 内黒土堆積物	坏?	(18.6)	-	<11.9>	Rナード Rナード	4/5			
93	135 RA028	1m奥16年位を引るカマド 内黒土堆積物	内黒土堆積物	坏?	-	7.3	<2.5>	Rナード Rナード	底部断片			
94	138 RA028	堆積物 黑土+中	内黒土堆積物 内黒土堆積物	坏?	-	-	<23.8>	Rナード Rナード	完形	底部断片		
95	91 RA030	Q3層+中 Q3層+西+ベニ層+北+ベニ層	内黒土堆積物 内黒土堆積物	坏?	12.7	5.5	4.9	Rナード Rナード	2/5			
96	95 RA030	Q3層+東+ベニ層+北+ベニ層	内黒土堆積物 内黒土堆積物	坏?	(14.3)	(6.1)	5.2	Rナード Rナード				

測量箇所	測量名	出上位置・層位	標高	基積	面積(cm)	延長(cm)	断面(cm)	外断面積	内断面積	出資・用繩	内断面積	その他
97	94 RA030	Q4+7十端土上層	原野群	坪	(13.5)	5.8	4.2	R+テ	R+テ	1.4	1.4	前面付箇所
98	93 RA030	尾半中	土脚群	坪	13.8	5.6	5.3	R+テ	R+テ	1.4	1.4	前面付箇所
99	96 RA030	カマド焼上	土脚群	坪	—	(8.3)	—	R+テ	R+テ	1.4	1.4	前面付箇所
100	392 RA030	尾上巾	頂脚群	坪	11.4	—	<2.4>	ヘタツテ	ヘタツテ	1.4	1.4	底部2/3
101	413 RA030	Q2上層	供出器	坪	—	—	<0.0>	R+テ	R+テ	1.4	1.4	底部2/3
102	122 RA031	尾上巾地盤上下段	内里土地群	坪	(15.2)	4.8	—	明き目+合口テ	明き目+合口テ	1.6	1.6	前面付箇所
103	123 RA031	Q3+7十端土上層下位	内里十端群	坪	(19.2)	—	<6.5>	横子持+合口テ	横子持+合口テ	1.3	1.3	前面付箇所
104	124 RA031	裡土引7端(心端)土上層	上脚群	坪	(13.2)	—	<0.0>	ヘタツテ	ヘタツテ	1.4	1.4	前面付箇所
105	30 RA032	カマド焼(石+テ等)下端(6の7位)	内里十端群	坪	—	6.5	<2.4>	R+テ	R+テ	1.4	1.4	前面付箇所
106	28 RA032	カマド焼7上	土脚群	坪	(14.8)	5.1	—	横子持+合口テ	横子持+合口テ	1.4	1.4	前面付箇所
107	31 RA032	壁1層	土脚群	坪	(15.2)	—	<6.6>	R+テ	R+テ	1.4	1.4	前面付箇所
108	31 RA032	Q4+7十端(壁+3層)支間下7カマド7	土脚群	坪	(16.0)	—	<6.6>	ヘタツテ	ヘタツテ	1.4	1.4	前面付箇所
109	32 RA032	カマド焼上(カマド7の1)	上脚群	坪	(20.3)	—	<16.7>	ヘタツテ	ヘタツテ	1.4	1.4	前面付箇所
110	386 RA032	床底/カマド焼	供出器	人妻	(38.8)	<0.0>	R+テ	R+テ	R+テ	1.4	1.4	前面付箇所
111	387 RA032	カマド焼7上(カマド7の1)	頂脚群	大差	—	—	丸目	丸目	丸目	1.4	1.4	前面付箇所
112	22 RA033	Q2+7端(壁+7中位)	十脚群	坪	(12.8)	3.6	R+テ	R+テ	R+テ	1.2	1.2	前面付箇所
113	23 RA033	Q4+7端(カマド7の1)	土脚群	坪	(13.2)	4.3	R+テ	R+テ	R+テ	1.6	1.6	前面付箇所
114	25 RA033	柱端/東壁カクラン	上脚群	坪	(13.5)	3.6	R+テ	R+テ	R+テ	1.4	1.4	前面付箇所
115	26 RA033	カマド焼7上	土脚群	坪	(13.3)	5.2	4.1	R+テ	R+テ	1.4	1.4	前面付箇所
116	24 RA033	Q4+1層(Q4端+7位)(カマド7の1)	十脚群	坪	(5.7)	<2.9>	R+テ	R+テ	R+テ	1.2	1.2	前面付箇所
117	20 RA033	Q2+7端(壁+7中位)(カマド7の1)	内里上脚群	坪	(16.0)	7.5	R+テ	R+テ	R+テ	1.4	1.4	前面付箇所
118	27 RA033	Q4+7端+7位	土脚群	坪	—	<13.3>	R+テ	R+テ	R+テ	1.4	1.4	前面付箇所
119	6 RA034	カマド焼7Q4端+7位(7位+7)	内里十端群	坪	(12.9)	5.1	—	横子持+合口テ	横子持+合口テ	1.4	1.4	前面付箇所
120	4 RA034	尾7+7端(7位+7)	内里上脚群	坪	14.6	6.3	5.4	R+テ	R+テ	1.2	1.2	前面付箇所
121	10 RA034	Q4端(7位+7位+7)	内里上脚群	坪	15.3	5.2	4.9	R+テ	R+テ	1.4	1.4	前面付箇所
122	11 RA034	尾7+7端(7位+7)	内里上脚群	坪	15.1	5.3	5.6	R+テ	R+テ	1.2	1.2	前面付箇所
123	8 RA034	家留7下段	土脚群	坪	(13.4)	5.6	R+テ	R+テ	R+テ	1.4	1.4	前面付箇所
124	348 RA034	Q4端(7位+7)	供出器	坪	—	<3.0>	R+テ	R+テ	R+テ	1.4	1.4	前面付箇所

地質番号	底面名	地質名	施工位置・層位	種類	断面	L1厚(㎝)	断面(㎝)	断面(㎝)	内面調整	断面削除	断面削除	断面削除	断面削除	その他の
125	7	R-A034	床底・土	土槽	环	14.2	5.8	4.9	Rナダ	Rナダ	Rナダ	Rナダ	Rナダ	内面に溝の深い性状
126	1	R-A034	底盤・導通路下/カマド壁上/Q44~Q45ト下端基盤・カマド排水渠上	内底土脚渠	环	(15.8)	6.3	5.2	Rナダ→ミガキ	Rナダ→ミガキ	Rナダ	Rナダ	Rナダ	3.5
127	9	R-A034	カマド壁・土	内底土脚渠	環	-	7.8	<2.0>	Rナダ	Rナダ	Rナダ	Rナダ	Rナダ	高台のみの削片
128	13	R-A034	底土・導通渠下/床底・カマド壁上	土槽	丸	16.4	10.0	2.7	ヘラナダ	ヘラナダ	ヘラナダ	ヘラナダ	ヘラナダ	3.4
129	14	R-A034	Q45土下+Q45壁下/Q45壁上	土槽	丸	-	11.2	<20.9>	ヘラナダ	ヘラナダ	ヘラナダ	ヘラナダ	ヘラナダ	内底整備
130	12	R-A034	底盤・導通渠下/カマド排水渠上	土槽	丸	20.7	11.8	3.05	ヘラナダ	ヘラナダ	ヘラナダ	ヘラナダ	ヘラナダ	底盤不要板
131	15	R-A034	Q46上+Q46壁下/Q46壁上	土槽	丸	22.2	-	<24.2>	ヘラナダ	ヘラナダ	ヘラナダ	ヘラナダ	ヘラナダ	底盤下端を欠く 1/2
132	16	R-A034	Q47壁土下+Q47壁上	土槽	丸	-	-	<7.5>	Rナダ→底盤下	Rナダ	Rナダ	Rナダ	Rナダ	内底水抜渠
133	289	R-A034	Q48上+Q48壁下/Q48壁上+Q48壁上+Q48壁上+Q48壁上	筋板渠	丸	11.8	8.4	13.3	ヘラナダ	ヘラナダ	ヘラナダ	ヘラナダ	ヘラナダ	内底水抜渠
134	419	R-D069	FP131 壁土下	筋板渠	丸	-	-	<4.3>	Rナダ	Rナダ	Rナダ	Rナダ	Rナダ	内底水抜渠
135	365	R-D062	壁土中	土槽	丸	(19.6)	8.3	3.0	ヘラナダ	ヘラナダ	ヘラナダ	ヘラナダ	ヘラナダ	内底・底盤にあり
136	365	R-D062	裏面	土槽	丸	(23.0)	-	<7.2>	ヘラナダ	ヘラナダ	ヘラナダ	ヘラナダ	ヘラナダ	内底・底盤にあり
137	150	R-D063	壁土	土槽	环	(15.2)	-	<4.7>	Rナダ	Rナダ	Rナダ	Rナダ	Rナダ	内底水抜渠
138	152	R-D064	壁土	土槽	环	(14.3)	5.0	4.8	Rナダ	Rナダ	Rナダ	Rナダ	Rナダ	内底水抜渠
139	148	R-D067	壁土	土槽	环	(14.4)	-	<4.3>	Rナダ	Rナダ	Rナダ	Rナダ	Rナダ	内底水抜渠
140	150	R-D061	(壁位記載なし)	内底土脚渠	环	17.5	丸底	5.1	上端落帶 ナカケル ミガキ	上端落帶 ナカケル ミガキ	上端落帶 ナカケル ミガキ	上端落帶 ナカケル ミガキ	上端落帶 ナカケル ミガキ	外見もほとんど無色
141	154	R-D061	(壁位記載なし)	土槽	环	(14.6)	5.8	10.3	ヘラナダ	ヘラナダ	ヘラナダ	ヘラナダ	ヘラナダ	内底水抜渠
142	151	R-D062	壁上	土槽	环	-	(5.4)	<1.6>	Rナダ	Rナダ	Rナダ	Rナダ	Rナダ	内底水抜渠
143	418	R-D063	底土中	土槽	丸	-	-	<6.1>	叩き目	叩き目	叩き目	叩き目	叩き目	内底水抜渠
144	148	R-D065	壁上中	内底十筋渠	环	-	(8.6)	<3.5>	Rナダ	Rナダ	Rナダ	Rナダ	Rナダ	内底・底盤削片
145	388	R-D064	R-D065 壁上+R-D064 上回	筋板渠	環	-	-	<16.9>	Rナダ	Rナダ	Rナダ	Rナダ	Rナダ	内底と底盤との合縫
146	131	R-D066	底土上+導通渠	内底土脚渠	环	-	5.7	<4.7>	Rナダ	Rナダ	Rナダ	Rナダ	Rナダ	底盤「今」
147	140	R-D066	底土上+導通渠	内底土脚渠	环	(20.0)	-	<7.0>	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	底盤
148	142	R-D066	Q49壁下/Q49壁上	土槽	丸	-	7.3	<6.5>	ヘラナダ	ヘラナダ	ヘラナダ	ヘラナダ	ヘラナダ	底盤アフ
149	146	R-D062	底板土	土槽	丸	(16.2)	-	<5.2>	Rナダ	Rナダ	Rナダ	Rナダ	Rナダ	底盤部底片
150	144	R-D063	Q49壁土+Q49壁上	土槽	丸	(14.4)	-	<4.1>	Rナダ	Rナダ	Rナダ	Rナダ	Rナダ	1/8~1/4底盤片
151	143	R-D063	Q49壁土+Q49壁上	内底土脚渠	环	-	-	<1.7>	Rナダ	Rナダ	Rナダ	Rナダ	Rナダ	底盤板片
152	145	R-D063	Q49壁土+Q49壁上	土槽	环	(9.8)	-	<2.4>	Rナダ	Rナダ	Rナダ	Rナダ	Rナダ	底盤・底台片

地質番号	層番	通称名	地土位置・局位	種類	口径(m)	高さ(m)	外周面積	断面	横断面積	内外状況	その他
153	147	RD066	原土・表土	上部砂	(20.2)	<21>	Rナード	Rナード	Rナード	口被削成片	口被削成片
154	159	ED069	墨土	下部砂	(21.6)	<21>	Rナード	Rナード	Rナード	口被削成片	口被削成片
155	50	RE064	トシナシ	土質砂	(12.3)	<6.6>	Rナード	Rナード	Rナード	口被削成片	口被削成片
156	231	RZ017	JKKb層 - JKKB層 + JKKBb層 JKKB層 + JKKBb層 (火山灰) - 内層 JKKB層 + JKKBb層 (火山灰) - 内層	内層土層	14.3	7.2	4.5	4.5m²	4.5m²	口被削成片	口被削成片
157	245	RZ017	(折) / JKKB層 + JKKBb層 (火山灰) - 内層	内層土層	(13.9)	6.8	4.8	Rナード→手持下 Rナード→手持下	Rナード→手持下 Rナード→手持下	3/4	3/4
158	222	RZ017- 山灰層	JKKB層 + JKKBb層 (火 山灰) - 内層	内層土層	(13.9)	6.2	5.4	Rナード	Rナード→手持下	断面「T」型	断面「T」型
159	269	RZ017- 山灰層	JKKB層 + JKKBb層 + JKQg4 JKKB層 + JKKBb層 (火山灰) - 内層	内層土層	15.2	5.2	Rナード	Rナード→手持下 Rナード→手持下	Rナード→手持下 Rナード→手持下	断面「T」型	断面「T」型
160	228	RZ017- 山灰層	JKKB層 + JKKBb層 JKKB層 + JKKBb層 (火山灰) - 内層	内層土層	14.1	6.0	4.6	Rナード	Rナード→手持下 Rナード→手持下	断面「T」型	断面「T」型
161	215	RZ017- 山灰層	*1JKQg4 JKKB層 + JKKBb層 + JKQg4 JKKB層 + JKKBb層 (火山灰) - 内層 + 内層 JKKB層 + JKKBb層 (火山灰) + JKQg4 JKKB層 JKKB層 + JKKBb層 (火山灰) + JKQg4 JKKB層	内層 + 内層	(14.0)	5.9	5.1	Rナード	Rナード→手持下 Rナード→手持下	断面「T」型	断面「T」型
162	218	RZ017- (-折)	1JKQg4 JKKB層 + JKKBb層 + JKQg4 JKKB層 JKKB層 + JKKBb層 (火山灰) - 内層	内層土層	(14.0)	6.2	5.3	Rナード→手持下 Rナード→手持下	Rナード→手持下 Rナード→手持下	断面「T」型	断面「T」型
163	226	RZ017	JKB層	内層土層	(14.0)	6.2	4.2	Rナード→手持下 Rナード→手持下	Rナード→手持下 Rナード→手持下	断面「T」型	断面「T」型
164	242	RZ017- (-折)	1JKQg4 JKKB層 + JKKBb層 + JKQg4 JKKB層 JKKB層 + JKKBb層 (火山灰) - 内層	内層土層	(14.5)	6.2	4.7	Rナード→手持下 Rナード→手持下	Rナード→手持下 Rナード→手持下	断面「T」型	断面「T」型
165	241	RZ017	JKB層	内層土層	(14.9)	6.2	4.7	Rナード→手持下 Rナード→手持下	Rナード→手持下 Rナード→手持下	断面「T」型	断面「T」型
166	212	RZ017	1JKQg4 JKKB層 + JKKBb層 + JKQg4 JKKB層 JKKB層 + JKKBb層 (火山灰) - 内層	内層土層	14.1	5.8	4.2	Rナード→手持下 Rナード→手持下	Rナード→手持下 Rナード→手持下	断面「T」型	断面「T」型
167	223	RZ017- (-折)	1JKQg4 JKKB層 + JKKBb層 + JKQg4 JKKB層 JKKB層 + JKKBb層 (火山灰) - 内層	内層土層	(14.0)	5.2	5.1	Rナード→手持下 Rナード→手持下	Rナード→手持下 Rナード→手持下	断面「T」型	断面「T」型
168	248	RZ017	1JKQg4 JKKB層 + JKKBb層 + JKQg4 JKKB層 JKKB層 + JKKBb層 (火山灰) - 内層	内層土層	(16.3)	6.3	5.3	Rナード→手持下 Rナード→手持下	Rナード→手持下 Rナード→手持下	断面「T」型	断面「T」型
169	256	RZ017	JKB層	内層土層	14.1	6.0	4.1	Rナード→手持下 Rナード→手持下	Rナード→手持下 Rナード→手持下	断面「T」型	断面「T」型
170	284	RZ017	JKB層 JKKB層 + JKKBb層 + JKQg4 JKKB層 + カバ・壳 所点点なし	内層土層	(13.4)	4.8	5.0	Rナード→手持下 Rナード→手持下	Rナード→手持下 Rナード→手持下	断面「T」型	断面「T」型
171	216	RZ017	JKB層	内層土層	(14.0)	6.6	4.8	Rナード	Rナード→手持下 Rナード→手持下	断面「T」型	断面「T」型
172	233	RZ017	JKB層	内層土層	(15.5)	6.6	4.9	Rナード	Rナード→手持下 Rナード→手持下	断面「T」型	断面「T」型
173	219	RZ017	JKB層	内層土層	13.5	7.2	4.9	Rナード	Rナード→手持下 Rナード→手持下	断面「T」型	断面「T」型
174	250	RZ017	JKB層	内層土層	12.3	6.6	4.5	Rナード	Rナード→手持下 Rナード→手持下	断面「T」型	断面「T」型

試験番号	底名	通称名	出土位置・層位	種類	基盤	口径(cm)	底径(cm)	断面測定	内面測定	断面・周辺	内面測定	底名・周辺	状況
175 198	R/2017	11/Box4 KK壁層(一括)	内壁上階層	坪	-	<8.0	<1.6>	Rナード	Rナード→+ガキ	引抜 留置 錆び 錆び	Rナード→+ガキ	その他の 底部下端・起 錆び	
176 197	R/2017	11/Box4 KK壁層	内壁土層面	坪	-	(7.0)	<1.6>	Rナード	Rナード→+ガキ	留置 錆び 錆び	Rナード→+ガキ	その他の 底部下端・起 錆び	
177 221	R/2017	11/Box4 KK壁層(1) KK壁層(2) KK壁層(3) KK壁層(4) (残)	内壁上階層	坪	(14.0)	6.5	4.4	Rナード	Rナード→+ガキ	留置 錆び 錆び	Rナード→+ガキ	その他の 底部下端・起 錆び	
178 312	R/2017	11/Box4 KK壁層~III層	内壁土層面	坪	-	5.7	<4.4>	Rナード	Rナード→+ガキ	留置 錆び 錆び	Rナード→+ガキ	底部のみ 錆び	
179 164	升河遺	11/Box4 KK壁層	内壁土層面	坪	-	<3.2>	Rナード	Rナード→+ガキ	墨書 人(元)	墨書 人(元)	Rナード→+ガキ	その他の 錆び	
180 174	R/2017	11/Box4 KK壁層	内壁土層面	坪	-	<3.2>	Rナード	Rナード→+ガキ	墨書 人(元)	墨書 人(元)	Rナード→+ガキ	その他の 錆び	
181 178	R/2017	11/Box4 KK壁層	内壁土層面	坪	-	-	-	Rナード	Rナード→+ガキ	墨書 人(元)	Rナード→+ガキ	その他の 錆び	
182 180	R/2017	11/Box4 KK壁層	内壁土層面	坪	-	<3.4>	Rナード	Rナード→+ガキ	墨書 人(元)	墨書 人(元)	Rナード→+ガキ	その他の 錆び	
183 182	R/2017	11/Box4 KK壁層	内壁土層面	坪	-	<3.0>	Rナード	Rナード→+ガキ	墨書 人(元)	墨書 人(元)	Rナード→+ガキ	その他の 錆び	
184 183	R/2017	11/Box4 KK壁層	内壁土層面	坪	-	<3.6>	Rナード	Rナード→+ガキ	墨書 人(元)	墨書 人(元)	Rナード→+ガキ	その他の 錆び	
185 173	R/2017	11/Box4 KK壁層	内壁土層面	坪	-	<3.4>	Rナード	Rナード→+ガキ	墨書 人(元)	墨書 人(元)	Rナード→+ガキ	その他の 錆び	
186 204	R/2017	11/Box4 KK壁層	内壁土層面	坪	-	<2.2>	Rナード	Rナード→+ガキ	墨書 人(元)	墨書 人(元)	Rナード→+ガキ	その他の 錆び	
187 186	R/2017	11/Box4 KK壁層(一括)	内壁土層面	坪	-	<2.2>	Rナード	Rナード→+ガキ	墨書 人(元)	墨書 人(元)	Rナード→+ガキ	その他の 錆び	
188 187	R/2017	11/Box4 KK壁層(一括)	内壁土層面	坪	-	<4.9>	Rナード	Rナード→+ガキ	墨書 人(元)	墨書 人(元)	Rナード→+ガキ	その他の 錆び	
189 188	R/2017	11/Box4 KK壁層(一括)	内壁土層面	坪	-	<3.9>	Rナード	Rナード→+ガキ	墨書 人(元)	墨書 人(元)	Rナード→+ガキ	その他の 錆び	
190 184	R/2017	11/Box4 KK壁層	内壁土層面	坪	-	<2.1>	Rナード	Rナード→+ガキ	墨書 人(元)	墨書 人(元)	Rナード→+ガキ	その他の 錆び	
191 201	R/2017	11/Box4 KK壁層	内壁土層面	坪	-	<4.6>	Rナード	Rナード→+ガキ	墨書 人(元)	墨書 人(元)	Rナード→+ガキ	その他の 錆び	
192 186	R/2017	11/Box4 KK壁層	内壁土層面	坪	-	<3.1>	Rナード	Rナード→+ガキ	墨書 人(元)	墨書 人(元)	Rナード→+ガキ	その他の 錆び	
193 187	R/2017	11/Box4 KK壁層	内壁土層面	坪	-	<2.1>	Rナード	Rナード→+ガキ	墨書 人(元)	墨書 人(元)	Rナード→+ガキ	その他の 錆び	
194 179	R/2017	11/Box4 KK壁層	内壁土層面	坪	-	<2.2>	Rナード	Rナード→+ガキ	墨書 人(元)	墨書 人(元)	Rナード→+ガキ	その他の 錆び	
195 171	R/2017	11/Box4 KK壁層	内壁土層面	坪	-	<3.1>	Rナード	Rナード→+ガキ	墨書 人(元)	墨書 人(元)	Rナード→+ガキ	その他の 錆び	
196 170	R/2017	11/Box4 KK壁層	内壁土層面	坪	-	<2.7>	Rナード	Rナード→+ガキ	墨書 人(元)	墨書 人(元)	Rナード→+ガキ	その他の 錆び	
197 157	R/2017	11/Box4 KK壁層 KK壁層(2)(3)(4) ~	内壁土層面	坪	(16.0)	6.6	5.5	Rナード→+ガキ	墨書 大(記号) (力) (強)	墨書 大(記号) (力) (強)	Rナード→+ガキ	地盤調査文	
198 156	R/2017	11/Box4 KK壁層(1) KK壁層(2) KK壁層(3) KK壁層(4) (残)	内壁土層面	坪	-	7.9	<4.8>	ミガキ	ミガキ	ミガキ	Rナード	1/2	
199 161	R/2017	11/Box4 KK壁層	内壁土層面	坪	-	-	-	Rナード→+ガキ	Rナード→+ガキ	木柵板	Rナード	体筋膜片	
200 311	R/2017	11/Box4 KK壁層 KK壁層(1) KK壁層(2) KK壁層(3) KK壁層(4) (残)	内壁土層面	坪	(14.7)	5.6	5.1	Rナード	Rナード	露頭人(記号)	Rナード	1/3	
201 335	R/2017	11/Box4 KK壁層 KK壁層(1) KK壁層(2) KK壁層(3) KK壁層(4) (残)	内壁土層面	坪	14.3	5.3	5.5	Rナード	Rナード	露頭人(記号)	Rナード	1/2	
202 327	R/2017	11/Box4 KK壁層 KK壁層(1) KK壁層(2) KK壁層(3) KK壁層(4) (残)	内壁土層面	坪	14.8	5.7	5.3	Rナード	Rナード	露頭人(記号)	Rナード	1/4	
												内面に張	

構築物番号	位置名	構造名	所+位番	高さ	幅員	寸法(m)	底面(m)	外形側面	内側側面	門檻	扇門	異常状況	その他
203	326	R2017	1380x4 KK III型+110cm KK III型 KK III型	脚部	4f	(14.2)	5.5	R+P	R+P	1/2			
204	345	R2017	1380x4 KK III型+110cm KK III型 KK III型	脚部	4f	(14.5)	6.0	R+P	R+P	2/3	扇みあり		
205	333	R2017	1380x4 KK III型+110cm KK III型 KK III型	脚部	4f	(14.7)	5.5	R+P	R+P	3/5	扇みあり		
206	342	R2017	1380x4 KK III型+110cm KK III型 KK III型	脚部	4f	(15.0)	5.7	R+P	R+P	2/5			
207	325	R2017-	1380x4 KK III型+110cm KK III型 KK III型	脚部	4f	(14.5)	4.9	R+P	R+P	1/6			
208	334	R2017	1380x4 KK III型+110cm KK III型 KK III型	脚部	4f	(14.1)	4.8	R+P	R+P	1/4	外観一概に異常		
209	309	R2017	1380x4 KK III型+110cm KK III型 KK III型	脚部	4f	(14.2)	5.0	R+P	R+P	1/4			
210	321	R2017	1380x4 KK III型+110cm KK III型 KK III型	脚部	4f	(13.5)	5.5	R+P	R+P	3/4			
211	302	R2017	1380x4 KK III型+110cm KK III型 KK III型	脚部	4f	(14.6)	6.1	R+P	R+P	2/5			
212	306	R2017-	1380x4 KK III型+110cm KK III型 KK III型	脚部	4f	(14.2)	5.2	R+P	R+P	1/2			
213	297	R2017-	1380x4 KK III型+110cm KK III型 KK III型	脚部	4f	(14.0)	5.4	R+P	R+P	1/3			
214	278	R2017	1380x4 KK III型+110cm KK III型 KK III型	脚部	4f	(15.3)	6.4	R+P	R+P	1/4	外観小ぶり (口座幅小34cm)		
215	276	R2017	1380x4 KK III型+110cm KK III型 KK III型	脚部	4f	(14.0)	4.9	R+P	R+P	4/5	扇みあり (口座幅小34cm)		
216	283	R2017	1380x4 KK III型+110cm KK III型 KK III型	脚部	4f	(14.9)	6.9	R+P	R+P	2/3			
217	281	R2017	1380x4 KK III型+110cm KK III型 KK III型	脚部	4f	(14.3)	5.8	R+P	R+P	1/4			
218	268	R2017	1380x4 KK III型+110cm KK III型 KK III型	脚部	4f	(15.1)	5.3	R+P	R+P	1/4	外観小ぶり (口座幅小34cm)		
219	275	R2017-	1380x4 KK III型+110cm KK III型 KK III型	脚部	4f	(14.8)	5.2	R+P	R+P	3/4	扇みあり (口座幅小34cm)		
220	286	R2017	1380x4 KK III型+110cm KK III型 KK III型	脚部	4f	(14.0)	(6.1)	R+P	R+P	1/4			
221	279	R2017	1380x4 KK III型+110cm KK III型 KK III型	脚部	4f	(16.4)	5.4	R+P	R+P	3/4			
222	291	R2017	1380x4 KK III型+110cm KK III型 KK III型	脚部	4f	(15.0)	5.6	R+P	R+P	1/4			

地図番号	地図名	出土地面	透視	断面	口径(cm)	底径(cm)	断面(左)	外輪断面	内輪断面	蓋・底面	残存状況	その他
223	320	E2017	118x4 KKIIIb層	土師器	坏	14.2	5.5	Rナード	Rナード	34		
224	271	E2017	118x4 KKIIIb層+110x6 KKIIIb層+	土師器	坏	15.8	5.5	Rナード	Rナード	4.5		
225	265	E2017	118x4 KKIIIb層+110x4 KKIIIb層+	土師器	坏	(15.3)	5.4	Rナード	Rナード	1.4		
			KKIIIb層(-絶)									
226	301	E2017	118x4 KKIIIb層+110x4 KKIIIb層+	土師器	坏	(13.8)	5.0	Rナード	Rナード	1.4		
227	293	E2017	118x4 KKIIIb層+110x4 KKIIIb層(+絶)	土師器	坏	(14.4)	4.4	Rナード	Rナード	1.4		
228	272	E2017	118x4 KKIIIb層+110x4 KKIIIb層	土师器	坏	(14.8)	-	Rナード	Rナード	1.4		
229	274	E2017	118x4 KKIIIb層	土师器	坏	14.3	5.3	Rナード	Rナード	4.5		
230	319	E2017	118x4 KKIIIb層+110x4 KKIIIb層	土师器	坏	(14.1)	6.4	Rナード	Rナード	3.5		
231	277	E2017	118x4 KKIIIb層+110x4 KKIIIb層	土师器	坏	(14.0)	6.5	Rナード	Rナード	3.5		
232	280	E2017	118x4 KKIIIb層+110x4 KKIIIb層	土师器	坏	(15.0)	5.8	Rナード	Rナード	1.4		
233	287	E2017	118x4 KKIIIb層+110x4 KKIIIb層	土师器	坏	15.1	5.6	Rナード	Rナード	3.4		
234	316	E2017	118x4 KKIIIb層+110x4 KKIIIb層	土师器	坏	(15.7)	5.0	Rナード	Rナード	1.3		
235	280	E2017	118x4 KKIIIb層+110x4 KKIIIb層	土师器	坏	13.8	4.7	Rナード	Rナード	3.4		
236	273	E2017	118x4 KKIIIb層	土师器	坏	-	-	Rナード	Rナード	口輪破片	丁矢(矢矢)の痕跡	
237	258	E2017	118x4 KKIIIb層	土师器	坏	-	-	Rナード	Rナード	4.5		
238	261	E2017	118x4 KKIIIb層	土师器	坏	-	-	Rナード	Rナード	4.5		
239	259	E2017	118x4 KKIIIb層+110x4 KKIIIb層	土师器	坏	-	-	Rナード	Rナード	4.5		
240	262	E2017	118x4 KKIIIb層	土师器	坏	-	-	Rナード	Rナード	4.5		
241	265	E2017	118x4 KKIIIb層	土师器	坏	-	-	Rナード	Rナード	4.5		
242	211	E2017	118x4 KKIIIb層	高台付	13.9	7.5	Rナード	Rナード	4.5			
243	267	E2017	118x4 KKIIIb層+110x4 KKIIIb層	高台付	14.9	(8.8)	Rナード	Rナード	3.5			
			(絶)									
244	160	E2017	118x4 KKIIIb層+110x4 KKIIIb層	高台付	(15.7)	8.5	Rナード	Rナード	1.4			
245	159	E2017	118x4 KKIIIb層+110x4 KKIIIb層	高台付	(16.4)	-	Rナード	Rナード	1.4			
246	310	E2017	118x4 KKIIIb層+110x4 KKIIIb層	高台付?	-	8.3	Rナード	Rナード	1.4			
247	322	E2017	118x4 KKIIIb層+110x4 KKIIIb層	土师器	坏	15.6	8.0	Rナード	Rナード	3.5		
248	308	E2017	118x4 KKIIIb層(-絶)	土师器	(裏)(小)	(12.6)	-	Rナード	Rナード	1.4		

種類番号	部番	品種名	苗上位置・育成	種類	基盤	口径(cm)	深さ(cm)	外周周長	内面周長	葉舌	葉巻	持草状況	その他の
249	374	R2017	18w4 KK三葉b 品種名	土壠苗	~	78	<6>	ヘラタケリ	ハサミ	体部下端・葉端 体部下端・葉端	体部下端・葉端 体部下端・葉端	~	~
250	375	R2017	18w4 KK三葉b 品種名	土壠苗	~	106	<5>	ヘラナダ	ヘラナダ	体部下端・葉端 体部下端・葉端	体部下端・葉端 体部下端・葉端	~	~
251	366	R2017	18w4 KK三葉b+110w4 KK三葉b 品種名	土壠苗	~	(14.8)	~	ヘラタケリ	ハサミ、ナダ	~	~	~	~
252	378	R2017	18w4 KK三葉b+110w4 KK三葉b 品種名	土壠苗	小型盤	93	74	9.8	Rナダ→一端ナダ	~	~	4.5	~
253	397	R2017	18w4 KK三葉b+110w4 KK三葉b 品種名	土壠苗	蓋(?)	~	~	~	~	~	~	~	~
254	396	R2017	18w4 KK三葉b 品種名	無心苗	大型	(36.2)	<6>	Rナダ	Rナダ	~	~	~	~
255	404	R2017	18w4 KK三葉b+110w4 KK三葉b 品種名	無心苗	蓋	~	~	Rナダ→体部下 スリ、ナダ	Rナダ	~	~	~	~
256	407	R2017	18w4 KK三葉b+110w4 KK三葉b 品種名	無心苗	大型	~	<2>	明丸H	当子具備	~	~	~	~
257	465	苗上清	18w4 KK三葉b 品種名	内葉上部苗	杯	(13.8)	<4>	Rナダ→ミガキ	直管【□】	L18~体部被覆	~	~	~
258	458	苗下清	18w4 KK三葉b(火)火(火苗) / 110d KK三葉b(火)火(火苗)	内葉上部苗	内葉上部苗	(15.7)	8.5	6.0	Rナダ→ミガキ	直管【□】	高台粘付	抱きナダ→ミガキ	~
259	423	苗下清	18w4 KK三葉b(火)火(火苗) / 110w4 KK三葉b(火)火(火苗)	内葉上部苗	内葉上部苗	~	7.2	<2>	Rナダ	~	~	内葉に自然植	~
260	227	苗下清	18w4 KK三葉b+110w4 KK三葉b 品種名	内葉上部苗	杯	14.3	6.2	5.1	Rナダ→内葉下 スリ	Rナダ→ミガキ	~	~	~
261	194	苗下清	18w4 KK三葉b 品種名	内葉上部苗	杯	~	6.2	<2>	Rナダ→ミガキ	直管【□】	直管【□】	直管【□】	~
262	195	苗下清	18w4 KK三葉b(火)火(火苗) / 110w4 KK三葉b(火)火(火苗)	内葉上部苗	杯	~	6.1	<2>	Rナダ→ミガキ	直管【□】	直管【□】	直管【□】	~
263	232	苗下清	18w4 KK三葉b+110w4 KK三葉b 品種名	内葉上部苗	杯	(13.8)	(6.2)	4.4	Rナダ→ミガキ	直管【□】	直管【□】	直管【□】	~
264	247	苗下清	18w4 KK三葉b 品種名	内葉上部苗	杯	(14.0)	4.7	藻物持カツナギ	直管【□】	直管【□】	直管【□】	直管【□】	~
265	252	苗下清	18w4 KK三葉b+110w4 KK三葉b 品種名	内葉上部苗	杯	(14.2)	5.8	5.0	Rナダ→体部下 スリ	Rナダ→ミガキ	直管【□】	直管【□】	~
266	166	苗下清	18w4 KK三葉b 品種名	内葉上部苗	杯	~	<6>	Rナダ	Rナダ→ミガキ	直管【□】	直管【□】	直管【□】	~
267	168	苗下清	18w4 KK三葉b 品種名	内葉上部苗	杯	~	<3>	Rナダ	Rナダ→ミガキ	直管【□】	直管【□】	直管【□】	~
268	206	苗下清	18w4 KK三葉b 品種名	内葉上部苗	杯	~	<1.9>	Rナダ	~	~	~	~	~
269	305	苗下清	18w4 KK三葉b 品種名	内葉上部苗	杯	(13.3)	4.6	4.6	Rナダ	~	~	3.5	~
270	307	苗下清	18w4 KK三葉b 品種名	内葉上部苗	杯	(4.7)	5.2	5.7	Rナダ	~	~	1.2	~
271	368	苗下清	18w4 KK三葉b 品種名	土壠苗	杯	(14.7)	5.7	5.8	Rナダ	~	~	1.4	~

種名	学名	出羽山・喜多方		仙台・郡山		内山・酒田		庄内・新庄		阿武隈		西磐梯・磐梯		その他	
		標高	位置	標高	位置	標高(m)	位置	標高(m)	位置	標高(m)	位置	標高(m)	位置	標高(m)	位置
277	314	田河町	Japonica KK sb	内里山	内里山	1,050	内里山	554	R+D	1,4	荒川村	1,250	荒川村	1,4	
273	213	田河町	Japonica KK sb	内里山	内里山	680	内里山	1,2	R+D	2,5	荒川村	1,250	荒川村	1,4	
313	188	田河町	Japonica KK sb	内里山	内里山	790	内里山	64	R+D	1,2	荒川村	1,250	荒川村	1,4	
275	318	田河町	Uvaria KK sb	KK sb	KK sb	1,050	田河町	72	R+D	3,5	荒川村	1,250	荒川村	1,4	
276	368	田河町	Uvaria KK sb	KK sb	KK sb	1,050	田河町	—	R+D	1,3	荒川村	1,250	荒川村	1,4	
277	356	田河町	Uvaria KK sb	KK sb	KK sb	1,050	田河町	—	R+D	1,2	荒川村	1,250	荒川村	1,4	
278	192	田河町	桃	内里山	内里山	1,050	内里山	—	R+D	1,2	荒川村	1,250	荒川村	1,4	
279	265	田河町	Japonica KK sb	内里山	内里山	1,050	内里山	—	R+D	2,5	荒川村	1,250	荒川村	1,4	
280	210	田河町	Japonica KK sb	内里山	内里山	1,050	内里山	—	R+D	3,4	荒川村	1,250	荒川村	1,4	
281	167	田河町	Japonica KK sb	内里山	内里山	1,050	内里山	—	R+D	3,4	荒川村	1,250	荒川村	1,4	
282	156	田河町	Japonica KK sb	内里山	内里山	1,050	内里山	—	R+D	3,4	荒川村	1,250	荒川村	1,4	
283	263	田河町	Japonica KK sb	内里山	内里山	1,050	内里山	—	R+D	3,4	荒川村	1,250	荒川村	1,4	
284	365	田河町	Japonica KK sb	内里山	内里山	1,050	内里山	—	R+D	3,4	荒川村	1,250	荒川村	1,4	
285	169	R2017	Japonica KK sb	内里山	内里山	1,050	内里山	—	R+D	3,4	荒川村	1,250	荒川村	1,4	
286	290	田河町	Japonica KK sb	内里山	内里山	1,050	内里山	—	R+D	3,4	荒川村	1,250	荒川村	1,4	
287	176	田河町	Japonica KK sb	内里山	内里山	1,050	内里山	—	R+D	3,4	荒川村	1,250	荒川村	1,4	
288	150	田河町	Japonica KK sb	内里山	内里山	1,050	内里山	—	R+D	3,4	荒川村	1,250	荒川村	1,4	
289	234	田河町	Japonica KK sb	内里山	内里山	1,050	内里山	—	R+D	3,4	荒川村	1,250	荒川村	1,4	
290	255	田河町	Japonica KK sb	内里山	内里山	1,050	内里山	—	R+D	3,4	荒川村	1,250	荒川村	1,4	
291	244	田河町	Japonica KK sb	内里山	内里山	1,050	内里山	—	R+D	3,4	荒川村	1,250	荒川村	1,4	
292	175	田河町	Japonica KK sb	内里山	内里山	1,050	内里山	—	R+D	3,4	荒川村	1,250	荒川村	1,4	
293	177	田河町	Japonica KK sb	内里山	内里山	1,050	内里山	—	R+D	3,4	荒川村	1,250	荒川村	1,4	
294	189	田河町	Japonica KK sb	内里山	内里山	1,050	内里山	—	R+D	3,4	荒川村	1,250	荒川村	1,4	
295	202	田河町	Japonica KK sb	内里山	内里山	1,050	内里山	—	R+D	3,4	荒川村	1,250	荒川村	1,4	
296	203	田河町	Japonica KK sb	内里山	内里山	1,050	内里山	—	R+D	3,4	荒川村	1,250	荒川村	1,4	
297	184	田河町	Japonica KK sb	内里山	内里山	1,050	内里山	—	R+D	3,4	荒川村	1,250	荒川村	1,4	
298	210	田河町	Japonica KK sb	内里山	内里山	1,050	内里山	—	R+D	3,4	荒川村	1,250	荒川村	1,4	
299	196	田河町	Japonica KK sb	内里山	内里山	1,050	内里山	—	R+D	3,4	荒川村	1,250	荒川村	1,4	
300	217	田河町	Japonica KK sb	内里山	内里山	1,050	内里山	—	R+D	3,4	荒川村	1,250	荒川村	1,4	

相電番号	通路名	通路名	導電部	導電部	L寸法(m)	幅W(m)	外周調整	内周調整	沿岸・湖岸	港湾状況	その他
301	Z2017- 田川河床	1)Spx4 KKⅢ- 2)Spx4 KKⅢ- 3)Kx4 KKⅢ- 4)Kx4 田川河	魚礁部 十施設	魚礁部 十施設	4.6 (14.2) - - -	5.2 - - -	Rナード Rナード Rナード Rナード	Rナード Rナード Rナード Rナード	黒苦(水)記号 黒苦(水)記号 黒苦(水)記号 黒苦(水)記号	口輪-一部鉛片 高台をくぐる 高台をくぐる 高台をくぐる	
302	260 田川河	1)Spx4 田川河	-	-	-<3>	-<3>	Rナード	Rナード	-	-	
303	264 田川河	1)Spx4 田川河	-	-	-<1.9>	-<1.9>	Rナード	Rナード	口輪-一部鉛片 高台をくぐる	高台をくぐる	
304	249 田川河	1)Spx4 KKⅢ- 2)Spx4 KKⅢ- 3)Kx4 KKⅢ- 4)Kx4 田川河	内底十施設 内底十施設	内底十施設 内底十施設	(5.6) (4.3) - - -	- - - -	Rナード Rナード Rナード Rナード	Rナード Rナード Rナード Rナード	黒苦(水)記号 黒苦(水)記号 黒苦(水)記号 黒苦(水)記号	高台をくぐる 高台をくぐる 高台をくぐる 高台をくぐる	
305	266 田川河	1)Spx4 KKⅢ- 2)Spx4 KKⅢ- 3)Kx4 KKⅢ- 4)Kx4 田川河	上施設 上施設	上施設 上施設	-<2>	-<2>	Rナード	Rナード	黒苦(水)記号 黒苦(水)記号	1.2	
306	361 田川河	1)Spx4 KKⅢ- 2)Spx4 KKⅢ- 3)Kx4 KKⅢ- 4)Kx4 田川河	土岸沿 土岸沿	土岸沿 土岸沿	-<2.2>	-<2.2>	ハラナード ハラナード	ハラナード ハラナード	黒苦(水)記号 黒苦(水)記号	口輪部航行	
307	390 田川河	1)Spx4 KKⅢ- 2)Spx4 KKⅢ- 3)Kx4 KKⅢ- 4)Kx4 田川河	魚礁部 魚礁部	魚礁部 魚礁部	-<5.8>	-<5.8>	Rナード Rナード	Rナード Rナード	黒苦(水)記号 黒苦(水)記号	黒苦(水)記号	
308	402 Z2017	1)Spx4 KKⅢ- 2)Spx4 KKⅢ- 3)Kx4 KKⅢ- 4)Kx4 田川河	魚礁部 魚礁部	魚礁部 魚礁部	-<6.0>	-<6.0>	Rナード Rナード	Rナード Rナード	黒苦(水)記号 黒苦(水)記号	407に2にて月断面図	
309	196 田川河	1)Spx4 KKⅢ- 2)Spx4 KKⅢ- 3)Kx4 KKⅢ- 4)Kx4 田川河	内底上施設 内底上施設	内底上施設 内底上施設	-<8.0>	-<8.0>	Rナード Rナード	Rナード Rナード	黒苦(水)記号 黒苦(水)記号	体部航行	
310	283 Z2017	1)Kx4 KKⅢ- 2)Z2017 1)Kx4 KKⅢ- 3)Kx4 KKⅢ- 4)Kx4 田川河	十施設 十施設	十施設 十施設	-<8.8>	-<8.8>	Rナード Rナード	Rナード Rナード	黒苦(水)記号 黒苦(水)記号	体部航行	
311	257 Z2017	1)Kx4 KKⅢ- 2)Z2017 1)Kx4 KKⅢ- 3)Kx4 KKⅢ- 4)Kx4 田川河	内底上施設 内底上施設	内底上施設 内底上施設	-<13.1>	-<13.1>	Rナード Rナード	Rナード Rナード	黒苦(水)記号 黒苦(水)記号	407に2にて月断面図	
312	214 田川河	1)Kx4 KKⅢ- 2)Kx4 KKⅢ- 3)Kx4 KKⅢ- 4)Kx4 田川河	内底上施設 内底上施設	内底上施設 内底上施設	-<13.7>	-<13.7>	Rナード Rナード	Rナード Rナード	黒苦(水)記号 黒苦(水)記号	407に2にて月断面図	
313	217 田川河	1)Kx4 KKⅢ- 2)Kx4 KKⅢ- 3)Kx4 KKⅢ- 4)Kx4 田川河	内底上施設 内底上施設	内底上施設 内底上施設	-<13.7>	-<13.7>	Rナード Rナード	Rナード Rナード	黒苦(水)記号 黒苦(水)記号	407に2にて月断面図	
314	324 田川河	1)Kx4 KKⅢ- 2)Kx4 KKⅢ- 3)Kx4 KKⅢ- 4)Kx4 田川河	魚礁部 魚礁部	魚礁部 魚礁部	-<14.2>	-<14.2>	Rナード Rナード	Rナード Rナード	黒苦(水)記号 黒苦(水)記号	407に2にて月断面図	
315	326 田川河	1)Kx4 KKⅢ- 2)Kx4 KKⅢ- 3)Kx4 KKⅢ- 4)Kx4 田川河	魚礁部 魚礁部	魚礁部 魚礁部	-<14.8>	-<14.8>	Rナード Rナード	Rナード Rナード	黒苦(水)記号 黒苦(水)記号	407に2にて月断面図	
316	333 田川河	1)Kx4 KKⅢ- 2)Kx4 KKⅢ- 3)Kx4 KKⅢ- 4)Kx4 田川河	魚礁部 魚礁部	魚礁部 魚礁部	-<14.2>	-<14.2>	Rナード Rナード	Rナード Rナード	黒苦(水)記号 黒苦(水)記号	407に2にて月断面図	
317	339 田川河	1)Kx4 KKⅢ- 2)Kx4 KKⅢ- 3)Kx4 KKⅢ- 4)Kx4 田川河	魚礁部 魚礁部	魚礁部 魚礁部	-<13.6>	-<13.6>	Rナード Rナード	Rナード Rナード	黒苦(水)記号 黒苦(水)記号	407に2にて月断面図	
318	340 田川河	1)Kx4 KKⅢ- 2)Kx4 KKⅢ- 3)Kx4 KKⅢ- 4)Kx4 田川河	魚礁部 魚礁部	魚礁部 魚礁部	-<14.0>	-<14.0>	Rナード Rナード	Rナード Rナード	黒苦(水)記号 黒苦(水)記号	407に2にて月断面図	
319	344 田川河	1)Kx4 KKⅢ- 2)Kx4 KKⅢ- 3)Kx4 KKⅢ- 4)Kx4 田川河	魚礁部 魚礁部	魚礁部 魚礁部	-<14.0>	-<14.0>	Rナード Rナード	Rナード Rナード	黒苦(水)記号 黒苦(水)記号	407に2にて月断面図	
320	341 田川河	1)Kx4 KKⅢ- 2)Kx4 KKⅢ- 3)Kx4 KKⅢ- 4)Kx4 田川河	魚礁部 魚礁部	魚礁部 魚礁部	-<13.6>	-<13.6>	Rナード Rナード	Rナード Rナード	黒苦(水)記号 黒苦(水)記号	407に2にて月断面図	
321	290 田川河	1)Kx4 KKⅢ- 2)Kx4 KKⅢ- 3)Kx4 KKⅢ- 4)Kx4 田川河	上施設 上施設	上施設 上施設	-<14.2>	-<14.2>	Rナード Rナード	Rナード Rナード	黒苦(水)記号 黒苦(水)記号	407に2にて月断面図	
322	224 田川河	1)Kx4 KKⅢ- 2)Kx4 KKⅢ- 3)Kx4 KKⅢ- 4)Kx4 田川河	内底上施設 内底上施設	内底上施設 内底上施設	-<14.5>	-<14.5>	Rナード Rナード	Rナード Rナード	黒苦(水)記号 黒苦(水)記号	407に2にて月断面図	
323	379 田川河	1)Kx4 KKⅢ- 2)Kx4 KKⅢ- 3)Kx4 KKⅢ- 4)Kx4 田川河	内底上施設 内底上施設	内底上施設 内底上施設	-<20.2>	-<20.2>	Rナード Rナード	Rナード Rナード	黒苦(水)記号 黒苦(水)記号	407に2にて月断面図	
324	230 田川河	1)Kx4 KKⅢ- 2)Kx4 KKⅢ- 3)Kx4 KKⅢ- 4)Kx4 田川河	内底上施設 内底上施設	内底上施設 内底上施設	-<14.2>	-<14.2>	Rナード Rナード	Rナード Rナード	黒苦(水)記号 黒苦(水)記号	407に2にて月断面図	
325	220 田川河	1)Kx4 KKⅢ- 2)Kx4 KKⅢ- 3)Kx4 KKⅢ- 4)Kx4 田川河	内底上施設 内底上施設	内底上施設 内底上施設	-<14.1>	-<14.1>	Rナード Rナード	Rナード Rナード	黒苦(水)記号 黒苦(水)記号	407に2にて月断面図	

出水位置		種名		巣箱		口径(cm)		巣箱		内面調査		巣箱・巣管	
巣番	種類	巣番	種類	内面	外側	内面	外側	内面	外側	内面	外側	内面	外側
S36	240	田河東	IK4ed4 KKlb~黒蟹	内巣十脚蟹	坪	(14.2)	71	-	14.9	R+テ+ミガキ	R+テ+ミガキ	1/3	巣箱開口手前もヘタケアリ
327	246	田河東	IK4ed4 KKlb~黒蟹	内巣十脚蟹	坪	(14.5)	73	5.6	R+テ+ミガキ	R+テ+ミガキ	1/4	巣箱手前もヘタケアリ	
328	251	田河東	IK4ed4 KKlb~黒蟹	内巣土留蟹	坪	(14.6)	6.2	5.2	R+テ+ミガキ	R+テ+ミガキ	1/4	巣箱開口手前もヘタケアリ	
329	162	田河東	IK4ed4 KKlb~黒蟹	内巣土留蟹	坪	-	-	<3.8>	R+テ+ミガキ	R+テ+ミガキ	1/4	巣箱開口手前もヘタケアリ	
330	330	田河東	IK4ed4 KKlb~黒蟹	内巣土留蟹	坪	14.6	5.0	5.3	R+テ	R+テ	3.4	巣箱開口手前もヘタケアリ	
331	342	田河東	IK4ed4 KKlb~黒蟹	内巣土留蟹	坪	(14.6)	5.4	5.0	R+テ	R+テ	1/4	巣箱開口手前もヘタケアリ	
332	329	田河東	IK4ed4 KKlb~黒蟹	内巣土留蟹	坪	14.7	5.4	5.0	R+テ	R+テ	1/4	巣箱開口手前もヘタケアリ	
333	328	田河東	IK4ed4 KKlb~黒蟹	内巣土留蟹	坪	14.5	5.6	5.6	R+テ	R+テ	1/4	巣箱開口手前もヘタケアリ	
334	323	田河東	IK4ed4 KKlb~黒蟹	内巣土留蟹	坪	14.0	5.4	5.3	R+テ	R+テ	1/4	巣箱開口手前もヘタケアリ	
335	289	田河東	IK4ed4 KKlb~黒蟹	内巣土留蟹	坪	(14.5)	4.9	R+テ	R+テ	R+テ	1/2	内面に薄く糞便物	
336	243	田河東	IK4ed4 (一) KKlb~黒蟹	内巣土留蟹	坪	(14.4)	6.0	4.7	R+テ	R+テ	1/3	無	
337	332	田河東	IK4ed4 KKlb~黒蟹	内巣土留蟹	坪	(15.2)	5.2	5.7	R+テ	R+テ	1/3	無	
338	229	田河東	IK4ed4 (一) KKlb~黒蟹	内巣土留蟹	坪	-	<3.8>	R+テ	R+テ+ミガキ	R+テ+ミガキ	3.4	巣箱手前	
339	381	田河東	IK4ed4 KKlb~黒蟹	内巣土留蟹	坪	24.2	(9.6)	9.4	R+テ+ミガキ	R+テ+ミガキ	3.4	無	
340	406	田河東	IK4ed4 KKlb~黒蟹	内巣土留蟹	坪	(11.2)	-	<6.6>	R+テ	R+テ	1/2	内面にアズキ色 糞便物アズキ色	
341	391	田河東	IK4ed4 KKlb~黒蟹	内巣土留蟹	坪	-	-	R+テ	R+テ+ミガキ	R+テ+ミガキ	1/2	内面にアズキ色 糞便物アズキ色	
342	545	163	通水外	IK4ed4 KKlb~黒蟹	内巣土留蟹	坪	-	<2.3>	R+テ	R+テ	1/2	内面にアズキ色 糞便物アズキ色	
343	324	通水外	IK4ed4 KKlb~黒蟹	内巣土留蟹	坪	-	<2.3>	R+テ	R+テ	1/2	内面にアズキ色 糞便物アズキ色		
344	394	通水外	IK4ed4 KKlb~黒蟹	内巣土留蟹	坪	-	<1.8>	R+テ	R+テ	1/2	内面にアズキ色 糞便物アズキ色		
345	369	通水外	IK4ed4 KKlb~黒蟹	内巣土留蟹	坪	14.3	6.0	5.0	R+テ	R+テ	1/4	手前少少アズキ色 糞便物アズキ色	
346	311	通水外	IK4ed4 KKlb~黒蟹	内巣土留蟹	坪	(14.4)	(5.1)	5.5	R+テ	R+テ	1/4	手前少少アズキ色 糞便物アズキ色	
347	369	RA016	木崎底生(カツラク生)土壤土	土壤蟹	壳	-	<2.3>	ハサメ	ハサメ	ハサメ	1/3	手前少少アズキ色 糞便物アズキ色	
348	626	通水外	北河東	保育器	壳	(12.0)	<1.0>	タコメ	タコメ	タコメ	1/4	手前少少アズキ色 糞便物アズキ色	

第12表 石器觀察表

編番	整頓No	遺物名	出土点	部位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
349	1167	RA018	JK14e	Q2無鉛	砥石	18.5	4.9	3.6	5828	ダイヤモンド	
350	1168	RA018	JK14e	京谷差池土下	砥石	14.3	8.2	6.0	9173	ダイヤモンド	
351	1164	RA018	JK14e	土上中	凹刃	17.4	12.6	10.3	2073.7	安山岩	
352	1163	RA022	JK10e	土中	台石	<12.1>	<14.9>	16.7	903.8	安山岩	
353	1162	RA922	JK10e	カマド構築材	合石	25.7	16.8	8.7	2950.0	安山岩	
354	1159	RA023	JK14e	堆土中	台石	<18.1>	<16.6>	12.1	11525	安山岩	
355	1160	RA023	JK14e	堆土上	台石	<14.5>	<15.2>	<9.9>	1294.1	安山岩	
356	1161	RA023	JK14e	堆土中	台石	<15.6>	<11.1>	17.2	669.0	安山岩	
357	1155	RA032	JK211	床底	台石	<23.5>	<11.6>	3.1	12905	安山岩	
358	1156	RA032	JK211	焼成土	台石	<15.9>	<13.1>	7.7	610.7	安山岩	
359	1172	PP10	JK15e	堆土下位	台石	<23.1>	<17.2>	<12.5>	3916.0	安山岩	
360	1173	PP10	JK15k	堆土下位	磨石	31.1	9.8	6.3	3080.0	安山岩	
361	1174	PP292	LJ14a	堆土上	研石	<28.7>	<13.7>	8.9	6200.0	安山岩	
362	1171	遭構外	JK	複数	凹刃	18.0	17.8	13.7	3970.0	安山岩	
363	1177	遭構外	JK	1層	門石	19.1	11.1	7.0	1547.3	安山岩	
364	1148	遭構外	JK16e	複数	石砾	<4.6>	1.5	0.5	0.7	メノワ	
365	1167	RA002	JK211	C3b4b4c4d4e4f4g4h4i4j4l4m4n4o4p4q4r4s4t4u4v4w4x4y4z4	石塊	1.9	1.5	0.3	3.3	白雲石	

第13表 本製品相容性

第1章 第二節 木工遺物								備考		
施設番号	発掘区分	遺物名	出土地点	層位	断面	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
366	14	RG012	II-21y	5層上段	木札状	10.2	34	0.3	66	保存処理
367	15	RG012	II-21y	5層上段	木札状	10.0	36	0.3	50	保存処理
368	12	RG012	II-21y	3層上段	木札状	18.8	31	0.5	20.7	保存処理
369	13	RG012	II-21y	3層上段	木札状	6.8	17	0.3	19	保存処理
370	32	田西遺	II-6y	II-2層	漆塗輪				49.1	保存処理
371	39	田河遺	II-10y	II-2層	杭	31.2	45	37	306.1	C14年代測定
372	28	田河遺	II-7x	II-2層	杭	32.2	43	32	337.8	C14年代測定
373	17	田河遺	II-3d	V層	杭	35.5	42	43	440.8	C14年代測定
374	18	田河遺	II-3d	V層	杭	14.0	39	37	110.4	
375	19	田河遺	II-2d	V層	杭	39.8	34	40	630.1	
376	29	田河遺	II-2d	V層	杭	20.6	35	38	132.6	
377	21	田河遺	II-3d	V層	杭	36.7	50	45	506.2	
378	22	田河遺	II-3d	V層	杭	42.7	50	46	678.9	
379	23	田河遺	II-3d	V層	杭	31.8	50	51	528.4	
380	29	田河遺	II-10y	II-2層	杭	39.8	39	41	342.0	
381	31	田河遺	II-10y	II-2層	杭	30.6	50	57	670.7	
382	2	遺構外	II-6W	II-2層	木札状	9.2	45	0.4	143	
383	3	遺構外	II-6W	II-2層	木札状	4.4	22	0.1	20	
384	19	遺構外	II-6y	II-2層～II-3層	木札状	7.0	14	0.1	19	製品の一部?
385	11	遺構外	II-6y	II-2層～II-3層	木札状	3.2	15	0.1	0.5	製品の一部?
386	1	遺構外	II-6W	II-2層	板状	13.2	29	0.6	28.7	
387	4	遺構外	II-8S	II-2層～II-3層	板状	8.9	90	0.9	71.0	
388	5	遺構外	II-8S	II-2層～II-3層	板状	10.2	79	1.0	74.5	
389	16	遺構外	II-6W	II-2層	内丸状	14.5	22	1.3	53.4	
390	7	遺構外	II-6y	II-2層～II-3層	不明	7.0	0.9	0.6	3.3	製品の一部?
391	8	遺構外	II-6y	II-2層～II-3層	不明	10.6	0.6	0.6	5.4	製品の一部?
392	9	遺構外	II-6y	II-2層～II-3層	不明	13.7	1.0	0.5	7.6	製品の一部?

第14表 十製品觀察表

拘禁番号	種別	出土地点	層位	計測値(cm)			備考
				全長	幅	厚さ	
393 瓦	堅瓦	堅永区東波	複乱層下部	(5.4)	(7.3)	1.6	76.5 内面に布石。内外面黒色。
394 瓦?	堅瓦	堅永区東波	複乱層	(7.7)	(5.7)	1.4	73.2 ごく歩くも曲曲した板状。両面ともナデ?。駆化色。
395 不規 板状	堅永区輪芭西	複乱層	(5.1)	(5.8)	1.4	51.0 近代鉄道と併せ出土。表面にコガキ、墨書き、表面に江戸時代の銘文書。堅子に金具を含む。366と質感類似。	
396 不規 角状状	堅永北西面~北側	I層	(4.0)	2.1	1.1	13.1 堅子に金具を含む。堅子に比喩的の銘文書。366と質感類似。	
397 小舟	1K14e	I層	(3.0)	(2.9)	0.6	3.2 油土に金具を含む。一部削りしている。	
398 土人形?	堅永北西面~北側	I層	(6.6)	(7.6)	0.8	44.2 内底ナメ。外側細かいケメグの腹巻。底深。人形の一部?	
399 土人形?	1K20e	I層	(7.6)	(6.6)	0.7	31.5 複数に複数。内底の一部にナデ底。人形の一部か。400と同一?	
400 土人形?	1K20e+西側土壁	I層	(7.3)	(6.4)	0.7	25.2 複数に複数。内底の一部にナデ底。人形の一部か。401と同一?	
401 沈金子?	1K21e	I層	(2.0)	(2.0)	0.7	24 一頭少。	
402 土人形?	1K14e	I層	(4.7)	(5.9)	1.0	22.5 内底複数底。外底?に凹陷?。人形の一部?	

第15表 陶磁器觀察表

通或No.	整理No.	遺物名	出土地點	層位	層種	考古部位	法量(cm)		特徴		製作地	製作年代	備考	
							上径	底径	高さ	幅	厚さ(cm)			
403	460	RH013	PP121	津土中	泥	口沿・底部	104	(43)	50	当明輪	-	不明	18C後半~	
404	477	RD014	PP116	津土中	不明	底部	-	-	<1.7	鐵輪	-	不明	不明	浮き輪り文様
405	479	RH013	PP123	津土中	泥跡	底部	-	-	<1.8	鐵輪	-	不明	不明	
406	478	RH013	PP123	津土中	變	口沿部	(22.2)	-	<1.2	鐵輪	-	白晝?	江戸後期	
407	480	RH013	PP124	津土中	變	口沿部	-	-	<1.0	鐵輪	-	風葉文	不明	
408	481	RD013	PP124	津土中	鉢	口沿部	-	-	<1.9	透明輪	草花文	不明	V期	
409	482	RH013	PP124	津土中	鉢	底部+一部	(10.0)	3.4	4.9	透明輪	草花文	不明	19C~	型紙模?
410	483	RH013	PP124	津土中	変	底部	-	(4.0)	<2.6	透明輪	草花文?	不明	19C~	
411	484	RH013	PP124	津土中	小碗	口縁+一部	5.7	-	<1.4	透明輪	風葉文?	不明	19C~	青苔鳥夷の文字 底部に文字?
412	489	FC001	PP126	津土中	變	底部	-	(3.3)	<2.3	無輪	-	不明	不明	
413	485	RD050	116b	津土上位	變	底部	-	(4.4)	<1.2	透明輪	風葉文	把首	V期	
414	499	RD012	北側	津土上位	鉢	底部付近	-	4.2	<3.3	透明輪	-	足?	江戸後期	
415	490	RG012	北側	津土上位	變	底部	17.9	8.2	16.0	透明輪	-	足?	江戸後期	
416	432	RD012	北側	津土上位	鉢	底部	-	-	<2.2	-	-	足北に差し?	19C~	
417	438	追跡外	北側+北東土丘	追出面	変	底部	-	-	<2.2	-	-	足北に差し?	18C後半	
418	447	重複外	北側+北東土丘	追出面	変	底部	-	-	<2.3	無輪	-	不明	近世~現代	
419	436	追跡外	西木+岩船	追出面	鉢	底部	-	5.0	<1.6	外因秀輪缺	-	足尖	万朝	真跡有
420	449	追跡外	北側土丘	追出面	小鉢	底部+一部	6.4	3.0	3.9	透明輪	萬代文	不明	19C~	
421	452	追跡外	北側土丘	追出面	小鉢	底部+底部	8.8	4.9	2.4	透明輪	萬葉文	足?	万朝	
422	457	追跡外	西木+土丘	追出面	小鉢	口縁+一部	7.4	3.0	4.1	透明輪	萬葉文	不明	19C~	449とセットか
423	465	追跡外	116a	-	鉢	底部	-	(6.0)	<5.5	透明輪	萬葉文	足?	18C~	中腹に入るか
424	469	追跡外	112b	-	鉢	底部	-	-	<3.3	-	-	足北に差し?	19C~	
425	434	追跡外	南側	柱上土著	鉢	底部+底部	3.8	<3.3	-	透明輪	萬葉文	不明	18C~1860	枕に丈文様有
426	444	追跡外	北東土丘	鉢	底部	-	(3.6)	<1.2	透明輪	草花文	不明	18C~1860	見出しに丈文様有	
427	433	追跡外	-	津土中	鉢	口縁部	-	<1.4	-	透明輪	草花文	不明	18C~1860	丸頭山?に草花?
428	466	追跡外	112b	-	鉢	口縁部	-	-	<2.2	透明輪	草花文	不明	18C~1860	内面白地に草花?
429	451	追跡外	北側土丘	追出面	鉢	底部	-	<1.0	-	透明輪	草花文	不明	18C~1860	内面口縁に萬葉
430	467	追跡外	112b	-	鉢	口縁部	-	-	<2.0	透明輪	草花文	不明	18C~1860	内面口縁に萬葉
431	461	追跡外	萬葉	-	鉢	底部	-	-	<1.2	透明輪	草花文	不明	18C~1860	
432	468	追跡外	112b	-	鉢	口縫部	-	-	<2.5	透明輪	草花文	不明	18C~1860	
433	475	追跡外	112b	-	鉢	口縫部	-	-	<2.8	透明輪	草花文	不明	18C~1860	内面口縫に萬葉
434	473	不明	-	-	鉢	底部	-	(4.6)	<1.9	透明輪	草花文	不明	18C~1860	
435	471	追跡外	112a	-	鉢	底部	-	5.6	<1.3	透明輪	草花文	不明	18C~	南台表に文様
436	405	追跡外	-	-	鉢	底部	-	-	<1.2	-	-	不明	不明	
437	393	追跡外	112b	-	鉢	底部	-	-	<6.6	鉄輪	-	不明	30C	
438	430	追跡外	-	-	鉢?	口縫部	-	(2.0)	<5.0	-	-	不明	不明	
439	482	RD071	112b	津土中	鉢(古鉢)	牛尾+底部	(10.0)	3.8	3.6	外腹青釉輪	見込瓦片	足?	万朝?	素輪有「縁」
440	493	RD072	112b	津土面上	鉢	牛尾+底部	-	(3.9)	(3.9)	灰輪	-	小字	18C後半	
441	494	RD072	112b	津土面上	紅色	底部	4.4	1.7	1.8	透明輪	南古伊豫紋	吉野?	18C後半	
442	494	RD072	112b	津土面上	鉢	底部	(2.0)	-	(4.5)	透明輪	-	不明	18C後半	
443	495	RD076	112b	津土上	變	口縫部	-	-	<2.4	白毛輪	波状翼目	不明	18C後半?	

439~443参考資料

第16表 銅鏡觀察表

回数No.	整理No.	造形名	出土地點	層位	特性	材質	大きさ(cm)	幅	厚さ(cm)	重さ(g)	文様	鉢	備考	
444	3	RD071	112b	撫士下位	病強	銅	6.3	6.3	0.3	19.4	水仙圖	村田森京家	江戸中期	
445	4	RD077	112b	撫士下位	病誠	銅	11.7	7.2	0.3	27.3	風葉圖	-	江戸中期?	
446	1	RD078	112b	撫士下位	病強	銅	<10.1>	10.2	0.3	45.8	丸に楕円紋	水草圖	罪旗光長	江戸中期
447	2	RD078	112b	撫士下位	病誠	銅	7.2	7.2	0.3	52.6	花文款	瓦輪紋	病利+安土桃山?	

第17表 煙管觀察表

回数No.	整理No.	造形名	出土地點	層位	特種	材質	長さ(cm)	幅	厚さ(cm)	重さ(g)	分析	備考
448	2	RD071	112b	撫士下位	煙管嘴首	銅	5.6	17	0.9	6.7	V類	
449	3	RD071	112b	撫士下位	煙管嘴首	銅	4.3	18	1.1	3.1	V類	
450	4	RD071	112b	撫士下位	煙管嘴首	銅	<5.0>	11	11	5.3	V類	
451a	6-a	RD076	112b	撫士下位	煙管嘴首	銅	5.2	15	1.2	6.1	V類	
451b	6-b	RD076	112b	撫士下位	煙管嘴首	銅	7.1	11	0.6	15.9	V類	
452	5	RD077	112b	撫士下位	煙管吸口	銅	6.8	13	1.1	6.4	V類	布片付着
453a	1-a	RD078	112b	撫士下位	煙管嘴首	銅	5.7	18	1.0	6.4	V類	
453b	1-b	RD078	112b	撫士下位	煙管吸口	銅	5.1	17	0.8	2.0	V類	

444~453b 参考資料

第18表 古錢観察表

掲載No	整理No	遺構名	出土地點	層位	部類	初時代	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	直径(cm)	重さ(g)	備考
454	1	RD075	1K8t	埴土下位	寛永通宝(新)	1697	24	24	-	0.7	25	
455	2	RD078	1K8g	埴土中	寛永通宝(文)	1668	25	25	-	0.9	32	
456	3	RD078	1K8g	埴土上	寛永通宝(新)	1697	22	23	-	0.6	22	
457	4	RD078	1K8g	埴土中	寛永通宝(新)	1697	24	24	-	0.6	25	
458	5	RD077	1K9g	埴土中	寛永通宝(文)	1668	25	25	-	0.6	23	
459	6	RD077	1K9g	埴土下位	寛永通宝(新)	1697	22	23	-	0.6	23	
460	7	RD077	1K9g	埴土下位	寛永通宝(新)	1697	23	24	-	0.6	22	
461	8	RD077	1K9g	埴土下位	寛永通宝(新)	1697	21	21	-	0.7	14	
462	9	RD077	1K9g	埴土下位	寛永通宝(新)?	1697	<19>	<20>	-	0.6	10	
463	10	RD077	1K9g	埴土下位	寛永通宝(新)	1697	24	25	-	0.6	36	
464	11	RD077	1K9g	埴土下位	寛永通宝(新)	1697	<20>	<21>	-	0.6	15	
465	12	RD079	1K8t	埴土下位	寛永通宝(新)	1697	24	25	-	0.6	30	
466	13	RD079	1K8t	埴土下位	寛永通宝(新)	1697	23	23	-	0.7	17	
467	14	RD079	1K8t	埴土下位	寛永通宝(新)?	1697	22	22	-	0.6	-	2枚発見
467	14表	RD079	1K8t	埴土下位	寛永通宝(新)?	1697	22	22	-	0.7	44	2枚発見
468	15	RD079	1K8t	埴土下位	寛永通宝(新)?	1697	<22>	<22>	-	<0.6>	44	2枚発見
469	28	遺構外	1K	I型	寛永通宝(新)	1697	19	17	0.1	0.6	18	
470	29	遺構外	1K	かく形	寛永通宝(新)	1697	25	25	0.2	0.5	27	
471	30	遺構外	1K23b	I型	寛永通宝(新)	1697	24	23	0.2	0.6	32	
472	31	遺構外	1L3b	山崩	寛永通宝(古)	1636	24	23	0.1	0.7	16	
473	32	遺構外	1Jf7y	IIa層	高武通宝	1368	1.8	1.8	0.05	0.7	0.5	壁成形
474	33	遺構外	2K1u	1層	永安通寶	1408	1.9	1.9	0.05	0.5	0.9	壁成形
475	26	遺構外	1J8u	II型	寛永通宝(新)?	1697	24	24	0.1	0.6	20	壁成形
476	27	遺構外	1K	かく形	寛永通宝(新)	1697	28	28	0.1	0.6	41	

454~466参考資料

第19表 鉄製品観察表

掲載No	整理No	遺構名	出土地點	層位	部類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
477	1185	RA022	1K10s	埴土中	刀子?	57	19	0.2	55	保存処理
478	977	RA023	Q4	1層	針?	30	0.5	0.3	13	保存処理
479	978	RA023	Q4	2層	鍛旗?	43	14	0.3	18	保存処理
480	1182	RD032	1K16c	埴土上	針	61	0.9	0.5	6.8	保存処理
481	1183	RD033	1K17d	埴土	模(?)鉄製品	77	16	0.5	25.6	保存処理
482	1186	RD053	1K8t	埴土上層	板状鉄製品	41	11	0.5	3.7	保存処理
483	980	RD071	1K9e	埴土下位	針?	45	0.5	0.4	2.6	保存処理
484	1131	RD013	PP124	柱裏中	針	45	0.7	0.4	2.0	保存処理
485	981	遺構外	1J8o	IIa層	他鉄製品	28	0.5	0.4	1.1	保存処理

第20表 繩文土器観察表

掲載番号	仮番	路線	部類	出土位置	文様	外向調査	内向調査	時期・その他		
486	371	縄鉢	口縄部	旧河道	1J10ox4g II層~カクラン	沈底	ナデ	内面に沈底がないのが気になるが、大規模(C2~Aぐらの口縄部の口縁か)		
487	485	鉢	頭部~胴部	旧河道	1J10q×4 KIIIb層	頭部沈縫 地文LR	ナデ	焼物か		
488	489	鉢	頭部~胴部	旧河道	1J10q×4 KIIIb層	地文LR	頭部沈縫 ナデ	焼物か		
489	488	鉢	口縄部~底部	旧河道	1J10q×4 KIIIb層	頭部沈縫~地文LR	ナデ	焼物か		
490	490	鉢	胴部	旧河道	1J8q×4 KNIIIb層	地文LR	ナデ	焼物か		
491	487	瓦鉢?	口縄部	遺構外 東側	複乱縫	陰沈底	ナデ	中期		

VI まとめ

1 古墳時代末

RD051土坑1基が検出された。この時期と確認される遺構はこの土坑1基のみである。調査区東側に位置し、近代の削平で大半が失われているため、全容が不明である。土坑としたが、竪穴状遺構や住居跡となる可能性もある。

出土した土師器杯は、丸底で開口部が屈曲して直線的に外傾する器形から八木編年のA～B期、伊藤編年のd期に相当し、7世紀後葉と考えられる。

2 奈良時代

(1) 遺構

奈良時代の遺構は竪穴住居跡2棟、土坑2基、竪穴状遺構1基がある。このほか、未調査区に延びていて調査をしてはいないが、遺物のみ若干量を取り上げたRA036竪穴住居跡も奈良時代に含まれる可能性が高い。

今回の調査で、本遺跡ではじめて奈良時代の竪穴住居跡を検出した。過去の調査区は、今次調査区の北側のほぼ余域であったが、この区域は、第5・6次及び今回の調査で検出された東流する旧河道を挟んで一段低くなっているため、奈良時代の集落は営まれていない。今回の調査区は、地形的には南側及び西側に延びる細谷地遺跡と同一の自然堤防上にあり、古代の集落はむしろ細谷地遺跡と一体とした方が自然である。細谷地遺跡では奈良時代の竪穴住居跡20棟が遺跡の中心からやや東寄りから検出されており、今回検出の住居跡が集落の北端であろう。

2棟の竪穴住居跡は調査区西寄りに位置し、1棟は中世以降の改変によって北半分ほどが削平されている。

第21表 向中野館遺跡・細谷地遺跡検出の奈良時代の竪穴住居跡一覧

No	遺跡	遺構番号	調査次	埋造方向	長辺	短辺	カマド位置	知れの形態	時期
1		RA063	10	N-62°-W	4	3.8	北西	削り貫き式	8c後半～末
2		RA054	9	N-46°-W	4.5	4.22	北西	掘り込み式	8c中ごろ
3		RA055	10	N-47°-W	4.58	4.35	北西	削り貫き式	8c中～後半
4		RA066	10	N-26°-W	2.67	2.89	北西	削り貫き式	8c中～後半
5		RA057	10	N-42°-W	4.44	4.12	北西	削り貫き式	8c中～後半
6		RA058	10	N-37°-W	3.19	3.09	北西	削り貫き式	8c後半
7		RA059	10	N-35°-W	3	3	北西	削り貫き式	8c後半
8		RA060	10	N-59°-W	3.27	3.03	北西	不明	8c後半
9		RA061	10	N-66°-W	3.01	2.93	北西	削り貫き式	8c後半
10	細谷地	RA062	10	N-30°-W	6.2	4.4	北西	不明	8c中～後半
11		RA063	10	N-50°-W	3.09	3	北西	削り貫き式	8c
12		RA113	14	N-55°-W	4.72	4.32	北西辺中央	削り貫き式	8c中～後半
13		RA114	13	N-45°-W	5.5	5.5	北西辺中央	?	8c中～後半
14		RA115	14	N-72°-W	4.1	4.1	西辺中央	掘り込み式	8c後半?
15		RA116	13	N-53°-W	4.28	4.25	北西辺中央	掘り込み式	8c後半
16		RA117	13	N-46°-W	4.45	4.45	北西辺中央	削り貫き式	8c後半
17		RA118	14	N-54°-W	5.08	4.72	北西辺中央	掘り込み式?	8c中～後半
18		RA119	11	N-60°-W	4.5	4.5	北西辺中央	削り貫き式	8c後半
19		RA120	14	N-55°-W	3	2.5	北西片	掘り込み式?	8c中～後半
20		RA128	14・16	N-70°-W	4.08	3.76	西辺中央	削り貫き式	8c後半
21	向中野館	RA018	10	N-92°-W	4.22	4.09	西辺中央	不明	8c中葉
22		RA031?	11	N-95°-W	4.1	-			8c

カマド煙道方向は全容が明らかになったRA018竪穴住居跡がほぼ真西、削平されたRA031竪穴住居跡も南壁が真西方向を指している。過去の細谷地遺跡検出の奈良時代の住居跡は、主軸は北西方向に向いており、それより大きく西に振れる傾向がある。

規模は一辺の長さが4m程であり、本集落では平均的な規模である。柱穴は両者から検出されなかつた。また、RA018竪穴住居跡では壁際に壁溝が検出されている。

床はRA018竪穴住居跡が疊層の直上まで掘り込んでいるが、貼り床がないのに対し、RA031竪穴住居跡は掘り方の上に貼り床を敷設している。

カマドはRA018竪穴住居跡のみ残存している。土師器甕、坏を袖手前に芯材として設置しており、縦よりの袖は地山の削り出しである。煙道は割り抜き式で、底面は傾斜がなく、平坦である。

RA031竪穴住居跡のカマド対面の壁寄り床面からステップ状の施設を検出した。

時期としては過去の調査では8世紀後葉が主体であったが、今回のRA018竪穴住居跡は中葉と考えられ、やや古い様相を呈している。

(2) RA018竪穴住居跡出土土器について

RA018竪穴住居跡は、埋土の状況から焼失住居跡で、人為堆積はないとみられ、良好な資料を得ることができた。

器種は土師器及び須恵器坏、土師器高坏、土師器鉢、甕（大小）、球胴甕である。

土師器坏は、①内外に段を持ち底部が丸底のもの、②外面に明瞭、内面に不明瞭な段を持ち底部が丸底風の平底となるもの、③内外に段、沈線がなく、底部が丸底風の平底になるもの、の三種がある。

高坏は脚部が欠けている。坏部は外面にのみ段を持つ。

甕の口唇部は①平坦なもの、②丸みのあるものの2種あり、口縁部に①平行の沈線、段を有するもの、②頸部にのみ段を有するものがある。底部は円盤状で突出がなく、内面が平坦である。外面調整は、ハケメ、ヘラナデ、ヘラケズリが共存する。 球胴甕には赤彩されたものが存在する。

以上のような特徴をもつ土器は從来の編年研究（伊藤1998）に照らせばf期～g期に相当し、8世紀中葉の年代観を与えることができる。

さて、今回1点のみ出土した須恵器坏（6）は、

- ① 切り離しは静止糸切りで、底部周縁及び体部下端に手持ちヘラケズリ調整、内面の底部と体部の境に沈線（コテの痕跡）がみられる。
- ② 口径と底径の比率は0.56、器高3.8cm。
- ③ 体部は直線的に外傾する。
- ④ 胎土は灰褐色で粗く、白色粒、ガラス質の黒色粒を含む。

という特徴がある。

以上の特徴を持つ須恵器坏は、宮城県色麻町の日の出山窯跡出土資料にも見ることができる。

日の出山窯跡は多賀城へ瓦を供給しており、当該窯跡では多賀城I期創成期の瓦が焼成されたことが明らかになっている。昭和44年度のA地点の発掘調査では静止糸切りで、底部周縁～体部下端の手持ちヘラケズリ調整の坏が7・8号窯跡から、平成5年のC地点の調査では1号窯跡、2号窯跡、4号窯跡、5号窯跡、6号窯跡から出土している。C地点のこれらの窯跡は、出土した瓦の種類による年代観から天平九年（737年）をさかのばらない年代観が与えられている。

日の出山窯跡の製品については、宮城県多賀城調査研究所において実際に見る機会を得たが、細谷地遺跡の資料と違和感はなく、よく似ているという印象を持った。

さらに、宮城県黒川郡大衡村の黄刈場窯跡、A地点SR2窯跡及びSR3窯跡、仙台市宮城野区安養寺配水場前窯跡灰原からも、静止糸切り、手持ちヘラケズリ調整、内面に残るコテ痕跡という製作技法、同様の法量をもつ須恵器坏が出土している。これら2か所の窯跡の時期は8世紀第二四半期とされている。

今回出土した須恵器坏が以上のいずれかの窯跡の製品であった場合は、伴出した土師器の年代観と矛盾しない。

3 平安時代の遺構

平安時代の住居跡は旧河道と堀を除き調査区のほぼ全域に分布するが、1K25l~25p、2K1g~2q付近には住居跡のみならず、土坑などの遺構もない空白地帯である。

豊穴住居跡15棟、掘立柱建物跡3棟、土坑16基、豊穴状遺構1基がある。

(1) 豊穴住居跡

ほとんどが攪乱によって削平されており、全容が明らかになったものは5棟のみである。規模は、壁の一辺の長さ（2辺以上計測できた場合は長い方の計測値）でみると、最大が5.8m、最小が2.52mである。4m前後のものが最も多く7棟ある。

貼り床は7棟から検出された。掘り方は一様に細かい凹凸があり、特に深浅はみられない。床面は平坦でしまっているものが多いが、貼り床を持たないものも、硬化した面がある。

カマドの煙道方向はほぼ東3棟、西3棟、南東5棟、北西1棟、南西1棟、不明2棟である。カマドは付け替えで、複数の痕跡を持つものが2棟ある。

カマドは壁の中央ではなく、いずれかの隅によっている。袖が残存していたものは8棟で、残存状況が比較的良かったものは5棟、天井が一部でも落下することなく残存していたものは1棟のみである。カマド袖の芯材は繩を使っているもの5棟、土器を使っているもの1棟である。

煙道は割り貫き式7棟、掘り込み式2棟、不明が6棟である。掘り込み式の煙道を持つRA028豊穴住居跡は煙道入口付近の壁に須恵器大壺の破片がたて並べられている。煙道の底面は掘り込み式の場合は、平坦か、煙出しのみ若干下がる程度、割り抜き式の場合は、煙出しに向かって下降するもの、平坦なもの、平坦で、煙出しのみ若干下がる程度の3種ある。RA032豊穴住居跡の煙道は掘り込み式であるが、煙出し部分に煙道より一回り大きい深い土坑状の掘り込みを持っています。当初土坑と切りあっている土坑と考えたが、断面を観察したところ、一体のものと判断した。煙出し開口部が広がる形態のものと思われる。

最大の住居跡を除き、明確な柱穴を持たない。壁溝は部分的に認められるものが2棟ある。

カマドわきに土坑を持つものが8棟ある。土坑は①カマドわきの床面に土坑が構築されているもの、5棟、②カマドわきの壁が張り出すように構築されていて、床面からの深さはごく浅いもの3棟で、2形態認められる。②の場合、2棟の土坑の床面が明瞭に焼土化している。RA032・033豊穴住居跡のように底面の焼土層の上に貼り床が施されているものがあり、RA032豊穴住居跡はさらにその上面に焼土が堆積していた。このほか、明確な掘り込みではなく、土坑とも張り出しありといえないが、RA027豊穴住居跡はカマドわきの床面に土師器壺の破片が貼られており、その上を覆っている土が焼土化していた。以上の焼土層はほとんどが現地性と思われ、純粹で縮りがある。

②のようにカマドわきにごく浅い土坑が張り出し気味に構築される例は、細谷地遺跡RA05・19・

073・103・146・149竪穴住居跡があるが、土坑床面が焼土化している例は、隣接する遺跡のなかでは今次調査検出の例のみである。

そのほか、入口状、棚状の施設等は検出されなかった。

(2) 挖立柱建物跡

桁行き2間×梁行き2間の建物跡は2棟で、総柱、側柱それぞれ1棟である。削平により規模、構造を確認できなかったものは1棟である。側柱のものは柱間寸法が228~275cmで、柱穴口径も32~50cmと大きい。総柱の建物は柱間寸法が122~182で、柱穴口径30~48cmとやや小さめである。残る1棟の建物跡も周辺での検出例（細谷地遺跡第4・5次調査2002、細谷地遺跡第16・17次調査2009、飯岡才川遺跡第3次調査2002）から、桁行き2間~3間程度の建物の可能性が高い。

総柱の建物は構造上、一般に倉庫と想定されているが、側柱の小型の建物も貯蔵施設であった可能性が高いとされている（高島・山中ほか 1998）。隣接する細谷地遺跡第4・10・13~17次や西側に隣接する飯岡才川遺跡第3・8・9次でも2間×2間、あるいは2間×3間の総柱及び側柱の建物が12棟検出されており、今次調査区も竪穴住居と倉庫（掘立柱建物）で構成される集落と考えられる。

(3) 土 坑

今次調査で検出された16基のうち、埋土の堆積状況や土坑の形状から墓壙と推定される土坑が1基ある。

また、壁、底部、埋土中に確実に焼成が行われた痕跡が残る焼成土坑とされるものが6基ある。そのほか平安時代と特定できないが古代と推定される焼成土坑は3基である。今回の調査では、何のために焼成を行ったか、目的を特定できるような遺物は出土しなかった。

(4) 遺構間接合

平安時代の土器について、須恵器、土師器とともに今次調査区内で遺構間接合を行ない、11点を接合した。重複する遺構間（RA020とRD032、RA033とRD061）や、3m程度の至近距離、遠くても25~30mでの接合が多い。接合関係のある遺構は以下のとおりである。

27、30 RA020+RD032、 31 RA020+RB009、 64 RA025+RA033+RD064

46 RA023+RA026、 73 OA026+RD062、 38 RA022+RE004

34 RA022+RA023、 71 RA026+旧河道、 145 RD055+RD064

66 RA025+RA033

（太字は遺物番号）

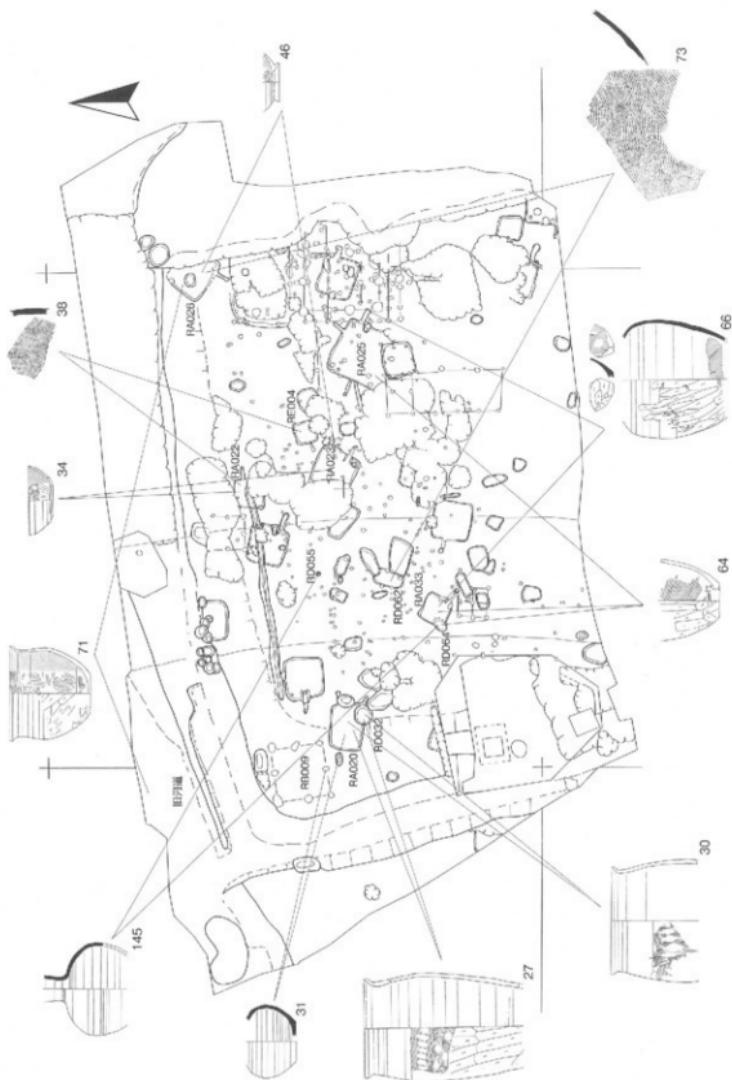
4 平安時代の土器について

(1) 土 器 の 年 代

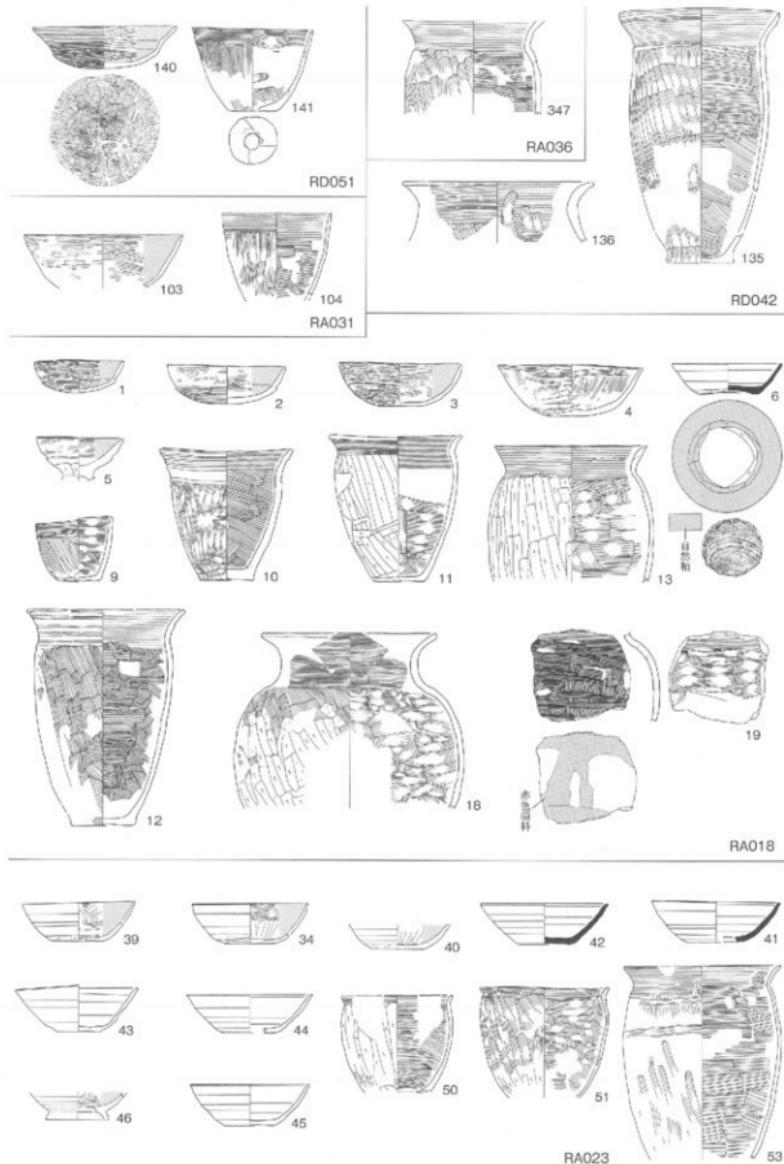
ここでは、壺類及び甕に注目し、遺構ごとの年代観について考えたい。遺構ごとの絶対量が少ないため難しい面があるが、4点以上の壺を含む土器群を概観すると以下のとおりである。

RA023竪穴住居跡

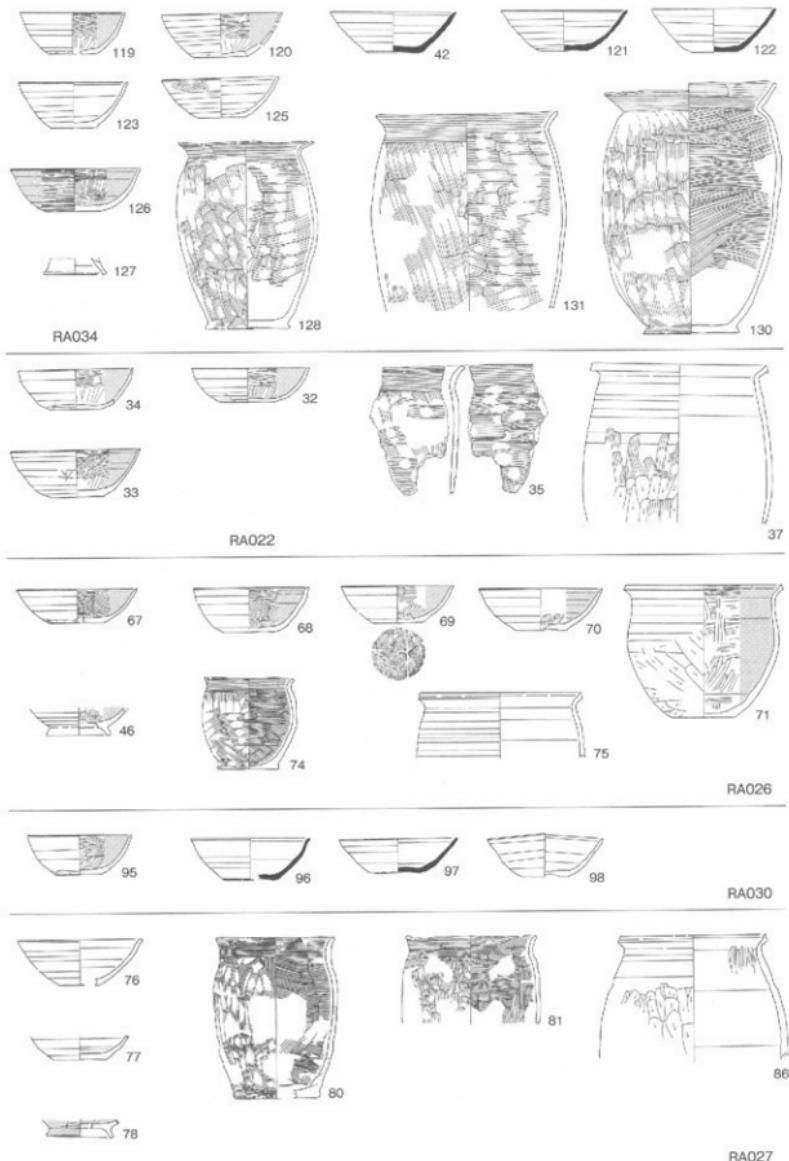
9点の壺は内黒土師器、黒色処理のない土師器、須恵器とともに3点ずつである。内黒土師器はすべて手持ちヘラケグリの再調整が施されている。壺の口唇部は内湾気味かまっすぐ収まるものが多い。器高は5cm内外、底径は6cm内外から7cm未満である。内黒の高台付壺を伴う。甕はすべて非ロクロ



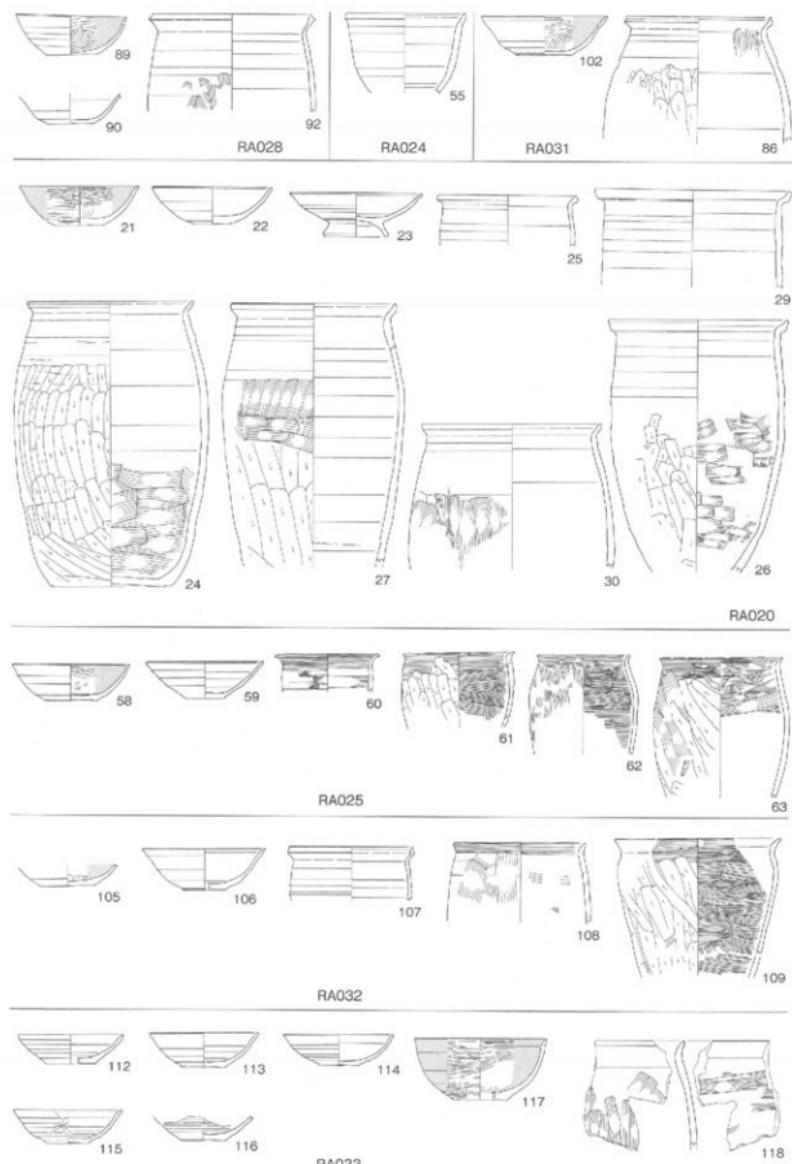
第105図 土器接合状況



第106図 造構別土器集成図（1）



第107図 遺構別土器集成図（2）



第108図 遺構別土器集成図（3）

であり、小型の壺2点はいずれも口縁部が短く、外側に外反している。大型はやや口縁部が長く、外反気味である。

RA034堅穴住居跡

8点の壺は内黒土師器2点、土師器2点、須恵器3点、両黒土師器1点である。内黒土師器は2点とも手持ちヘラケズリの再調整が施される。壺の口唇部は両黒土師器を除いてまっすぐに收まる。器高は5~5.5cm内外、底径は5.5~6cm内外である。高台付壺を伴う。壺はすべて非ロクロであり、口縁は大きく開き気味に外反、または外傾する。

RA026堅穴住居跡

4点の壺は、すべて内黒土師器である。再調整のあるものは1点のみである。口唇部は外反気味である。器高は4~5.5cm、底径は6~6.5cm内外である。内黒の高台付壺を伴う。壺は非ロクロの小型のもの1点が、口縁部が短く外傾し、ロクロの大型のものが短く外傾する。

RA033堅穴住居跡

壺5点は、すべて黒色処理のない土師器である。再調整はない。口縁部は外反気味のものが2点ある。器高は3.6~4.3cmである。両黒土師器の碗を伴う。壺はロクロ使用で、口縁部がごく短く外反する。

以上のうち、RA023・034・026堅穴住居跡の土器は調整や器形の特徴から八木編年（八木1992）のG期、H期、伊藤編年k期、I期に相当し、9世紀後半~10世紀初頭の土器群と考えられる。また、RA033堅穴住居跡については、八木編年のH~I期、伊藤編年のm~n期に相当し、10世紀前半と考えられよう。

一方、多くの土器が出土した旧河道及び旧河道内の遺物集中区RZ017の土器はどうであろうか。土器は1点を除き、To-aを含むⅢb層及びその直下の層から出土している。壺については、器形の復元できる94点のうち、内黒土師器36点（うち再調整のあるもの17点）、土師器38点、須恵器20点である。内黒土師器の口唇部は直に収まるものほか、やや外反するものがあり、土師器はやや外反しているもののが主である。須恵器は直に収まるものもあるがやや外反しているものが多い。高台付壺は器形の復元できるものが内黒土師器7点、両黒土師器1点、土師器3点である。土器組成、器形からこれらの土器は八木編年のG~Hに相当するものと思われ、9世紀後葉から10世紀初頭に属すると考えられる。出土層位もTo-aが堆積する直前及び同時期であることを物語っており、年代観は矛盾しない。

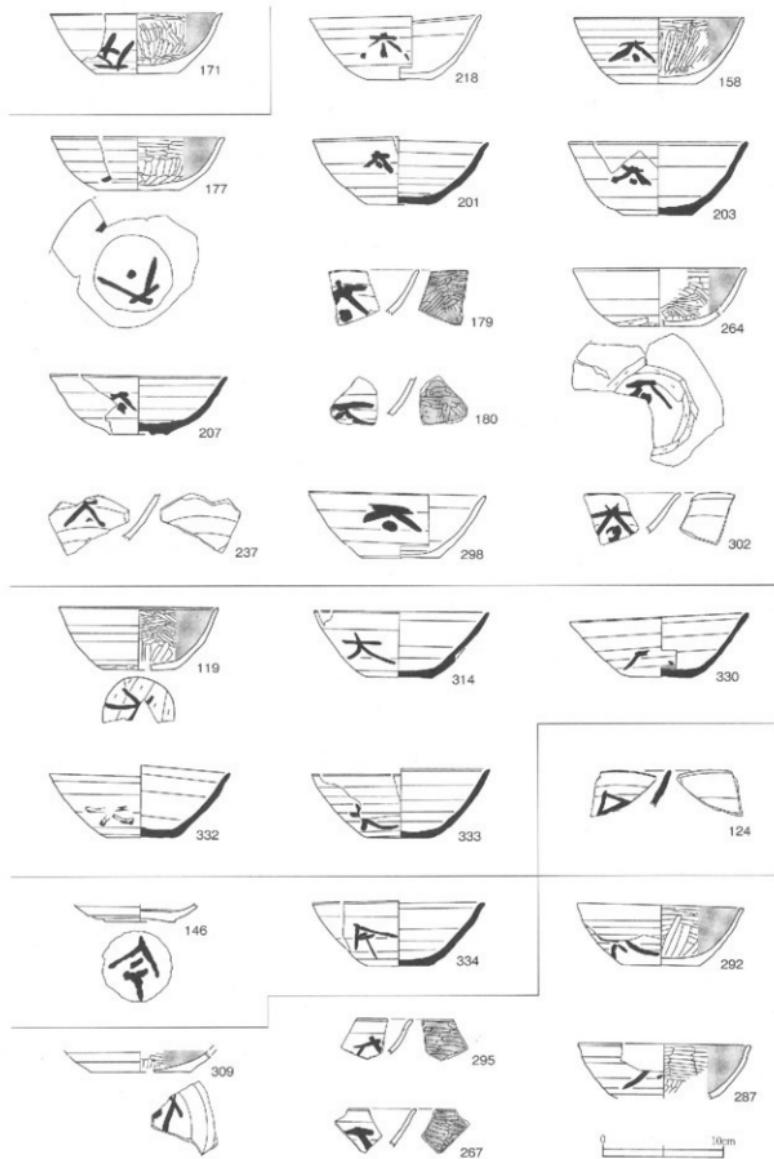
（2）墨書き土器・刻書き土器

今回の調査で出土した墨書き土器は79点、刻書き土器は29点である。堅穴住居跡、土坑から出土したものは墨書き土器4点、刻書き土器5点で、圧倒的に旧河道及び旧河道中の遺物集中区RZ017からの出土が多い。

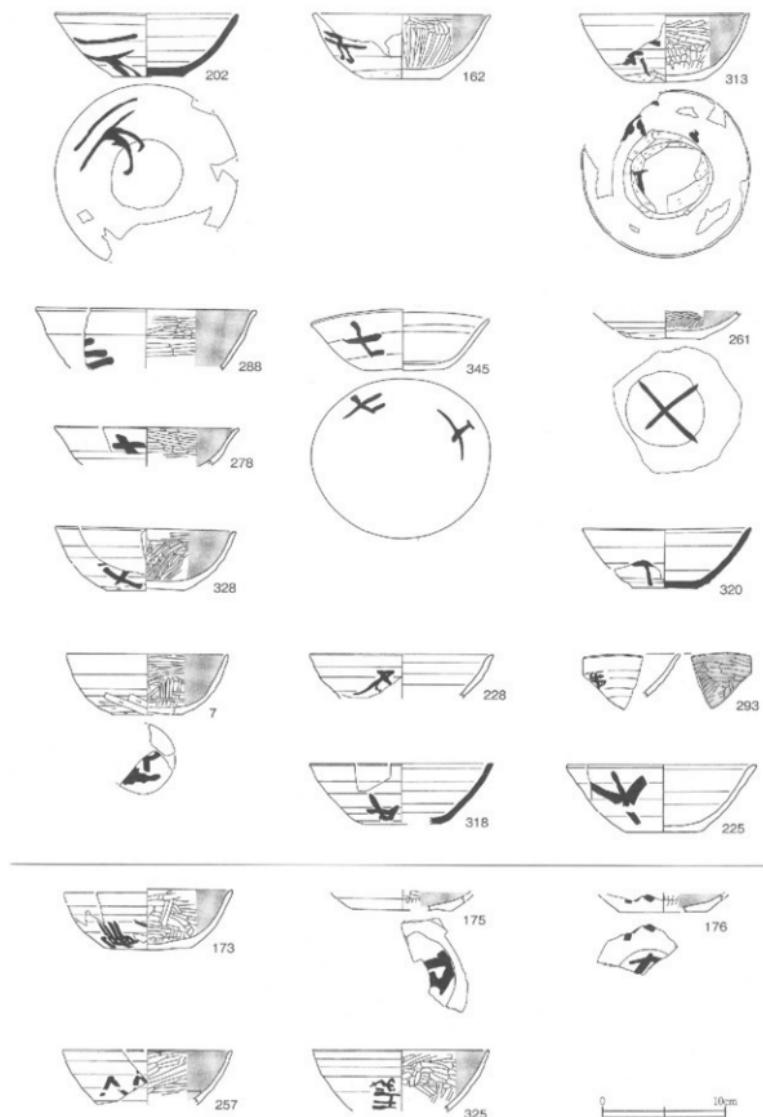
墨書き土器は須恵器16点、内黒土師器46点、土師器17点である。器種は壺、高台付壺に限られる。刻書き土器には須恵器ではなく、内黒土師器22点、両黒土師器4点、土師器3点で、これも壺、高台付壺のみである。

积文は墨書き土器、刻書き土器いずれも、「太」及び「大」という文字かこれに類する形のものが多い。积文をお願いした石崎高臣氏によると、文字のように見えても記号として書かれている可能性もあるとのことである。

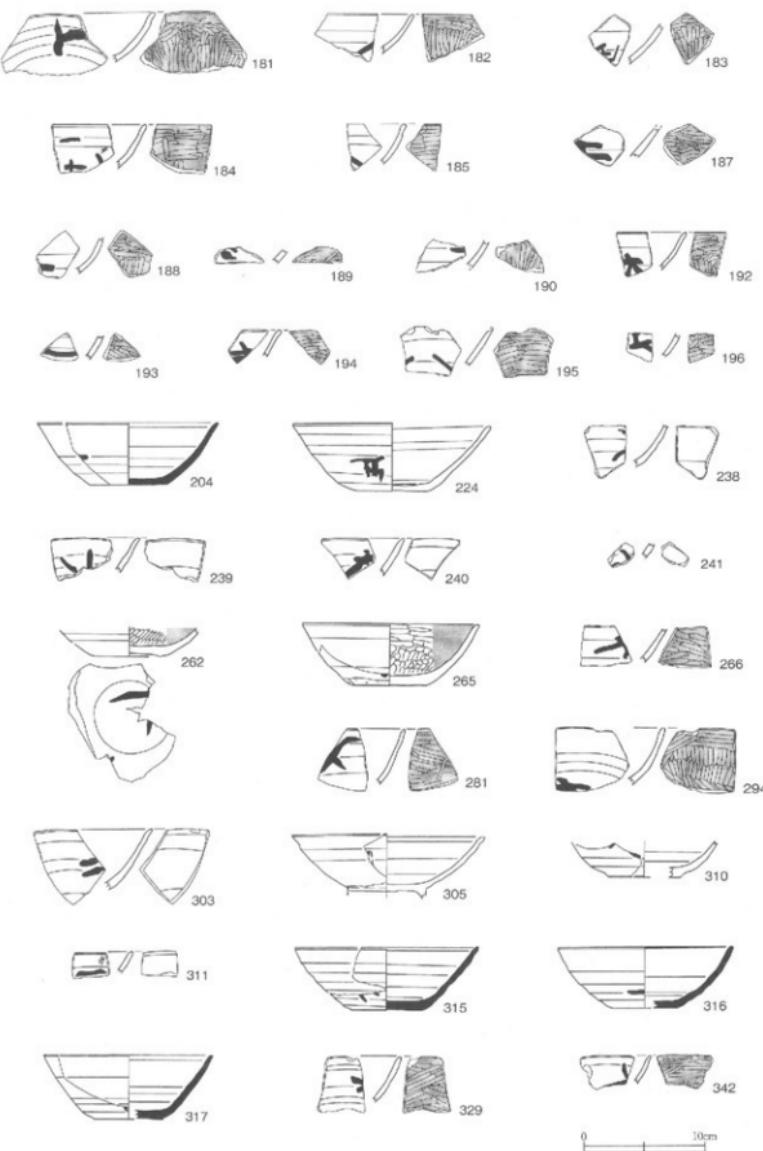
このほか、墨書き土器は「本」「今」「一万」「十万」「七」「十」「辻ヶ」「生ヶ」「又」が散見される。刻書き土器は、「一万」「十万」「千」「×」という文字及びこれに類する記号があり、底部に刻書きされる「|」



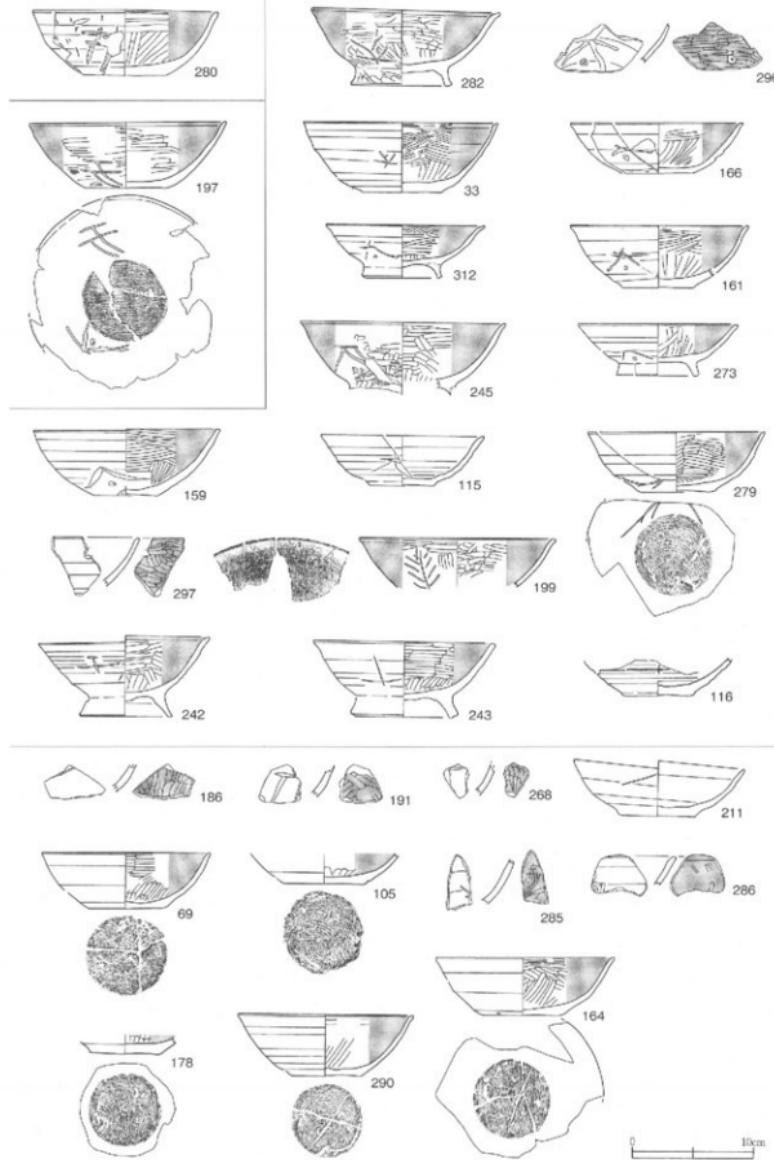
第109図 墨書き土器集成図（1）



第110図 墨書き器集成図 (2)



第1111図 墓書土器集成図 (3)



第112図 刻畫土器集成図

第22表 墓書土器・刻書土器一覧表

施設番号	種別	種類	出土地點	証書位置	記文等	施設番号	種別	種類	出土地點	証書位置	記文等	
7	墨書	内黒土鉢器	坏	RA018	底部	117	墨書	内黒土鉢器	坏	「口」(左) タ		
119	墨書	内黒土鉢器	坏	RA091	头部	120	墨書	内黒土鉢器	坏			
121	墨書	須恵器	坏破片	RA034	体部	「太」記号	303	墨書	土師器	坏破片	旧河道	体部 正位 止字 記号
146	墨書	土師器	坏破片	RD056	底部	「今」	304	墨書	七輪器	高台坏	旧河道	底部
158	墨書	内黒土鉢器	坏	RZ017	体部 正位	「太」記号	305	墨書	七輪器	高台坏	旧河道	底部
162	墨書	内黒土鉢器	坏	RZ017	体部 正位	「秀」	309	墨書	内黒土鉢器	坏破片	旧河道	体部
171	墨書	内黒土鉢器	坏	RZ017	体部 側位	「本」	310	墨書	土師器	坏破片	RZ017	体部
173	墨書	内黒土鉢器	坏	RZ017	体部 2字所	「口」・墨痕あり	311	墨書	土師器	坏破片	RZ017	体部
175	墨書	内黒土上器	坏	RZ017	底部	墨痕あり	313	墨書	内黒土陶器	坏	旧河道	体部・底部 「口」(左) (研)
176	墨書	内黒土の器	坏破片	RZ017	体部・底部	「京」・側面墨 痕あり	314	墨書	須恵器	坏	旧河道	体部 正位 「大」
177	墨書	内黒土下器	坏	RZ017	体部・底部	「京」・記号	315	墨書	須恵器	坏	旧河道	体部 「口」
179	华書	内黒土上器	坏破片	旧河道	体部	「太」	316	墨書	須恵器	坏	旧河道	体部
180	墨書	内黒土下器	坏破片	RZ017	体部	「人」記号	317	墨書	須恵器	坏	旧河道	体部 墓痕あり
181	墨書	内黒土下器	坏破片	RZ017	体部	墨痕あり	318	墨書	須恵器	坏	旧河道	体部 「牛」記号
182	墨書	内黒土下器	坏破片	RZ017	体部	墨痕あり	320	墨書	須恵器	坏	旧河道	体部 「口」(左)、今タ
183	墨書	内黒土上器	坏破片	RZ017	体部	墨痕あり	321	墨書	内黒土上器	坏	旧河道	体部 「口」
184	墨書	内黒土下器	坏破片	RZ017	体部	墨痕あり	322	墨書	内黒土上器	坏	旧河道	体部 「十」
186	墨書	内黒土上器	坏破片	RZ017	体部	墨痕あり	323	墨書	内黒土下器	坏破片	旧河道	体部 墓痕あり
187	墨書	内黒土下器	坏破片	RZ017	体部	墨痕あり	324	墨書	内黒土上器	坏	旧河道	体部 「口」(左)
188	墨書	内黒土上器	坏破片	RZ017	体部	墨痕あり	325	墨書	内黒土上器	坏	旧河道	体部 「口」(左)
189	墨書	内黒土下器	坏破片	RZ017	体部	墨痕あり	326	墨書	内黒土上器	坏	旧河道	体部 「十」
190	墨書	内黒土上器	坏破片	RZ017	体部	墨痕あり	327	墨書	内黒土下器	坏	旧河道	体部 墓痕あり
191	墨書	内黒土下器	坏破片	RZ017	体部	墨痕あり	328	墨書	内黒土上器	坏	旧河道	体部 「口」
193	墨書	内黒土上器	坏破片	RZ017	体部	墨痕あり	329	墨書	内黒土下器	坏破片	旧河道	体部
194	墨書	内黒土上器	坏破片	RZ017	体部	墨痕あり	330	墨書	須恵器	坏	旧河道	体部 「口」(左)
195	墨書	内黒土上器	坏破片	RZ017	体部	墨痕あり	332	墨書	須恵器	坏	旧河道	体部 正位 「大」
196	墨書	内黒土上器	坏破片	RZ017	体部	墨痕あり	333	墨書	須恵器	坏	旧河道	体部 正位 「大」
201	墨書	須恵器	坏	RZ017	体部	「京」記号	334	墨書	須恵器	坏	旧河道	体部 正位 「今」
202	墨書	須恵器	坏	RZ017	体部	「万」	342	墨書	内黒土上器	坏破片	旧河道	体部 墓痕あり
203	墨書	須恵器	坏	RZ017	体部	「人」記号	345	墨書	土師器	坏	旧河道外	体部 2字所 墓痕「七」・「下」記号
204	墨書	須恵器	坏	RZ017	体部	墨痕あり	331	刻書	内黒土上器	坏	旧河道	体部 「牛」記号
207	墨書	須恵器	坏	RZ017	体部	「京」記号	332	刻書	内黒土上器	坏	旧河道	体部 「口」(左)、今タ
212	墨書	土師器	坏	RZ017	体部	墨痕あり	333	刻書	内黒土上器	坏	旧河道	体部 「口」
214	墨書	土師器	坏	RZ017	体部	墨痕あり	334	刻書	内黒土上器	坏	旧河道	体部 「十」
228	墨書	土師器	坏破片	RZ017	体部	「ト」記号	346	刻書	内黒土上器	坏	旧河道	体部 墓痕あり
237	墨書	土師器	坏破片	RZ017	体部	「五」記号	347	刻書	内黒土上器	坏	旧河道	体部 「口」(左)
238	墨書	土師器	坏破片	RZ017	体部	「火」記号	348	刻書	内黒土上器	坏	旧河道	体部 墓痕「七」・「下」記号
239	墨書	土師器	坏破片	RZ017	体部	墨痕あり	349	刻書	内黒土上器	坏	旧河道	体部 「口」(左)として
240	墨書	土師器	坏	RZ017	体部	墨痕あり	350	刻書	内黒土上器	坏	旧河道	体部 「口」(左)記号
241	墨書	土師器	坏	RZ017	体部	墨痕あり	351	刻書	内黒土上器	坏	旧河道	体部 「口」(左)記号
257	墨書	内黒土下器	坏破片	旧河道	体部	「口」	352	刻書	内黒土上器	坏	旧河道	体部 「口」(左)記号
261	墨書	内黒土上器	坏破片	旧河道	底部	「」	353	刻書	内黒土上器	坏破片	旧河道	体部 墓痕「十」
262	墨書	内黒土下器	坏破片	旧河道	体部	墨痕あり	354	刻書	内黒土上器	坏	旧河道	体部 「口」(左)記号
264	墨書	内黒土下器	坏	旧河道	底部	「」・「記」	355	刻書	内黒土上器	坏破片	旧河道	体部 墓痕「千」記号
265	墨書	内黒土下器	坏	旧河道	体部	墨痕あり	356	刻書	内黒土上器	坏	旧河道	体部 墓痕「千」記号
266	墨書	内黒土下器	坏破片	旧河道	体部	墨痕あり	357	刻書	内黒土上器	坏破片	旧河道	体部 墓痕「千」記号
267	墨書	内黒土下器	坏破片	旧河道	体部	墨痕あり	358	刻書	内黒土上器	坏	旧河道	体部 墓痕「千」記号
278	墨書	内黒土下器	坏破片	旧河道	体部	「口」・「カ」	359	刻書	内黒土上器	坏	旧河道	体部 墓痕「千」記号
281	墨書	内黒土下器	坏破片	旧河道	体部	墨痕あり	360	刻書	内黒土上器	坏	旧河道	体部 墓痕「千」記号
287	墨書	内黒土下器	坏	旧河道	体部	墨痕あり	361	刻書	内黒土上器	坏	旧河道	体部 墓痕「千」記号
288	墨書	内黒土下器	坏	旧河道	体部	墨痕あり	362	刻書	内黒土上器	坏	旧河道	体部 墓痕「千」記号
292	墨書	内黒土下器	坏	旧河道	体部	正位 墓痕あり	363	刻書	内黒土上器	坏	旧河道	体部 墓痕「千」記号
293	墨書	内黒土下器	坏破片	旧河道	体部	「口」(左) タ	364	刻書	内黒土下器	坏	旧河道	体部 墓痕「千」記号
294	墨書	内黒土下器	坏破片	旧河道	体部	墨痕あり	365	刻書	内黒土下器	坏	旧河道	体部 墓痕「千」記号

という記号も5点みられる。また、葉脈状の刻文を持つものが1点あることが注目される。これらの文字や記号はおむね本遺跡の第5次・第6次調査において、今回検出した旧河道の北側や東側の延長を調査した際にも共通してみられるものである。

このうち「大」及びそれに類する記号は、第5・6次調査において墨書き土器で7点、刻書き土器で1点（註：報告書訳文では3点とあるが、実測図で見たところ大1点、太2点のように見えるので、そのように数えた）、今次調査では墨書き土器で4点の計12点出土している。「太」及びこれに類する記号は第5・6次調査において墨書きで2点、刻書きで2点、今次調査では墨書きで6点、刻書きで6点の計16点と両者が他を圧倒して多い。

「大」の墨書き、刻書きは旧河道のほか、今回の調査ではRA034堅穴住居跡からも出土している。平成14年までの盛岡市の盛南地区の墨書き土器に関する集成調査によると（北村 岩堀文2007）、「大」は細谷地遺跡第4・5・8次、飯岡沢田第3次、本宮熊堂遺跡第4・20次でも出土しており、本遺跡西側に隣接し距離が近い細谷地遺跡第4・5・8次調査区からの出土点数が他よりも多い。

向山野館遺跡第5・6次調査において、大量の墨書き土器が出土した所以について調査担当者の北村氏は「居住域とは異なる場の利用（たとえば水場祭祀）がなされた結果」と推定している。北村氏も指摘していることであるが、To-a降下前後の時期に、少なくとも細谷地遺跡の「大」の墨書き土器、刻書き土器をもつ住居跡に住む人々は、水辺に下りてさかんに祭祀を行ったと思われる。

文字あるいは記号の持つ意味や水辺の祭祀遺構の例に関しては類例を集め、今後の課題としたい。

5 中世の遺構

今次調査では、中世と推定できる遺構はRA035堅穴住居跡1棟である。方形の堅穴の壁際に柱穴があり構造の建物は、第9次調査でも1棟検出されている。床面は隙間を除き硬化面が形成されていて、炭片と焼土ブロックが部分的に検出されている。遺物はない。なお、土壙と堀は年代を確定しうる遺物が出土しなかった。
(金子)

6 近世の墓壙について

調査区北側土塁斜面、1K9f~1K8iグリッド付近から10基検出された。大部分が重複していることから埋葬が繰り返されていたと思われる。形態はほぼ円形・橢円形を呈する。1基のみ隅丸方形を呈し他の墓壙からやや離れた場所に位置することから埋葬時期が他と異なる可能性が考えられる。規模は1m未満6基、1m以上4基で最小0.55m²、最大1.19m²となっている。

埋土については、殆どの墓壙が埋土上層は暗褐色の土でしまりがない状態である。棺桶の腐食等により上部の土が一気に崩落したものと推測される。RD077墓壙のみ上部の土が崩落せず、棺桶等のみが腐食したために空洞の状態で遺存していた。埋土下層は黒褐色土主体に粘性のある土でしまりがある状態である。骨や棺桶等が腐食し崩落によって上部の土により圧縮され堆積した層と推測される。切りあいは上記の埋土の様子から遺構ごとの埋土の識別が困難で判断が難しかった。1基を検出して精査中に壁面に新たなプランを検出するような状態であった。

人骨が出土した墓壙については全て土葬墓である。人骨の遺存状態が悪いため埋葬姿勢は不明である。棺桶はRD075・RD076墓壙で底板と思われる板材が出土している。一部分しか出土していないため棺桶全体の形状は不明だが墓壙の形態などから樽型のいわゆる早桶と推測される。また、人骨が出

土していない土坑についても検出状況や形態などから墓壙と考えられる。

副葬品は、寛永通宝、煙管、鏡が出土している。遺物が出土した墓壙は重複して出土したものも含めて全部で6基である。寛永通宝出土4基、煙管出土4基、鏡出土3基となっている。遺物の出土が墓壙により偏っているのは、埋葬を繰り返すことにより遺物が他の墓壙に混入してしまったことが推測される。また、人骨や副葬品が出土していない墓壙については改葬の可能性が考えられる。

埋葬者については不明である。副葬品の鏡に「丸に抱絆」の家紋が見られる。家紋は家名を表しているが、江戸時代は農民等にも苗字はあるものの許可されたものしか苗字を名乗ることが許されなかつた。明治3年（1870年）平民苗字許可令、明治8年（1875年）平民苗字必称義務令により苗字を名乗ることが義務化される中、苗字が無くお寺や神社に名づけてもらった者やその地の文配者の苗字をつけた者もいるようである。また、同じ家紋で複数の家名が存在することなどから墓碑等もなく埋葬者を特定することはできなかつた。

時期については寛永通宝や煙管の分類、鏡の製作銘などから江戸時代中葉以降と推測される。江戸時代中葉は幕政においては8代将軍徳川吉宗の享保の改革（1716～1745年）に始まり、老中田沼意次の政治（1767～1786年）など行政改革が進められた激動の時期にあたる。また、全国的にも宝暦の大飢饉（1755年）天明の大飢饉（1783年）、岩手では岩手山噴火（1719年）など天災が続き、大変な生活を強いられる中生きていたに違いない。

今回検出された墓壙はこのような時代におそらく本調査区に居住していた一族の家墓であると思われる。明治初頭の飯岡新田絵図（第二地割）の中に第百三十四番宅地に墓として記されているのがこれに当たると思われる。その他、調査区内に近世と思われる建物跡が検出されている。出土遺物が少なく断定できない部分が多いが柱穴から18世紀後半の肥前の鉢が出土している。

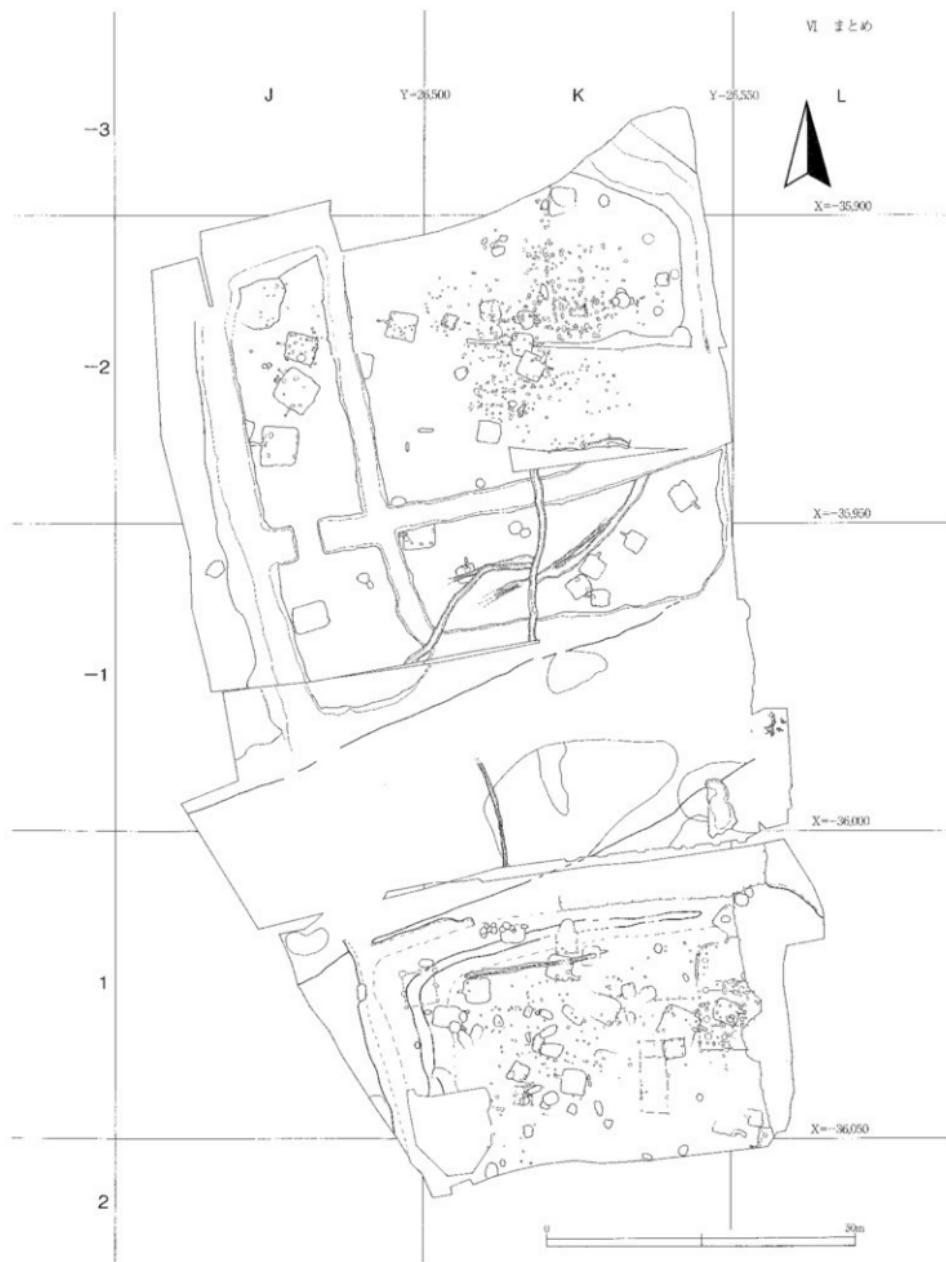
余談だが、調査区内にあったエゾエノキは推定樹齢220年とされ、植樹されたのは江戸時代中葉にあたる。もしかすればエゾエノキを植えた人たちと関係があるのかもしれない。（本多）

7 向中野館南館について

向中野館については、南部震書の『志和軍戦記』に飯岡氏の重臣として「東野文七向中野館に居住して東の押へと承る」という飯岡氏の東方の出城としての記述がある。それによれば、飯岡氏の居城である飯岡館を中心として、湯沢大館、小館、太田館などに臣下を配し、向中野館もその一つと記されている。『志和軍戦記』は後世の物語であり、記述をそのまま受け止めることはできないが、飯岡氏の臣下であるとすれば、斯波氏による飯岡氏の滅亡とともに向中野館跡も廃絶したはずで、その時期は16世紀後葉と考えることができる。昭和11年刊の『飯岡山の今昔』には向中野館には北館と南館があり、北館に向中野金吾、南館に東野文七が配されたと記されている。

向中野館遺跡は、平成10年度より本調査が行われ、北館のほぼ全域の調査を終了している。これまでに、堀で区画された4つの曲輪や土橋、北館の主体部とみられる曲輪から中世の遺構として掘立柱建物跡2棟、竪穴建物跡3基、柱穴群、近世及びそれ以降の遺構として掘立柱建物跡6棟、井戸跡などが検出されている。遺物は中世とみられるものは大変少なく、16世紀中ごろとみられる天目の破片、永楽鏡5点、堀から出土した木製品、北館と南館をえざる旧河道出土の木簡2点、珠洲産陶器破片1点、唐津産陶器破片3点、瀬戸美濃産の陶器破片1点である。

このように、中世の遺構、遺物ともに極少ないことから、北館は非常時の詰めの城で、南館が常の居所として使われていたのではないかとみられてきた。



第113図 向中野館遺跡遺構配置図（第3～11次調査）

今次調査では、その南館と言われる部分の大半の調査を行った。その結果、土壘と曲輪の西側、北側の一部、東側を囲む堀跡が検出されたが、中世と推定できる遺構は整穴建物跡1棟のみで、可能性があるものとしては時期不明の掘立柱建物跡1棟がある。300を超える柱穴跡も見つかっているが、建物として抽出できたものは平安時代の3棟、近世末～近代の1棟、前述の時期不明の1棟である。

中世の遺物は、遺構外出土の永楽銭と洪武銭が各1点、近世の墓壙から出土した銅鏡1点とたいへん少ない。

一方、近世の遺構は土壘北側から墓壙が10基検出された。これらの墓壙は土壘を切って掘られていることは確実で、年代は18世紀中葉以降である。この年代までには土壘が構築されており、以来墓壙群の場所は墓地として現代まで認識されていた。明治初頭の「飯岡新田絵図」にも墓所として、描かれており、地主の高橋家によると「他所から移ってきたので、先祖の墓ではないがおまいりしている」ということである。土壘上のエゾエノキの樹齢が約220年とされることも、18世紀後葉の時点で土壘があったことを示すものである。調査区東側から検出されたRB013掘立柱建物跡は近世末～近代と思われ、近代末頃において調査区東端に水田が造成される前まで使用されていたと思われる。

遺物に関しては18世紀後葉のものが散見され、幕末から明治ぐらいのものが圧倒的である。18世紀中葉以前の生活の痕跡は陶磁器の中に人柄編年のⅡ期に相当すると考えられる磁器片が1点あるに過ぎない。

以上の点から18世紀中葉には土壘北斜面に墓をつくった人々がいて、以降若干の断絶や入れ替わりはあったにせよ、現代に至るまで生活の場であったことが確かめられている。

西側の堀は旧河道を挟んだ北館のRG006堀跡の南延長線上に検出され、堀幅7.4m、深さ1.8mである。上塁は一部が現況でも確認できるほど残存しており、幅8～9m、最大高2.5mである。このような土壘と堀に囲まれた向中野館の南館はどのような場所だったのであろうか。

中世城館跡だとすると、曲輪の大半を調査したにもかかわらず、遺構、遺物が極端に少ないと気になる。建物として抽出できない柱穴が多く残っているが、もし中世の建物だとすれば、ごく小規模なものであろう。南館は遺構、遺物の検出状況から常の居所とは考えにくく、むしろこちらこそが詰めの城のようである。

今後は、近世の豪族屋敷（遠藤 2007）などの可能性も視野に入れ、検討することが必要と思われる。

（金子）

引用・参考文献

- 八木光則1992「古代斯波郡と爾蘭体の上器様相」「第18回古代城柵官街遺跡検討会資料」
- 西野 修1988「城柵と地域社会の変容—北上盆地北部の様相—」「第24回古代城柵官街遺跡検討会資料」
- 伊藤博幸1988「城柵と地域社会の変容—北上盆地南部の様相—」「第24回古代城柵官街遺跡検討会資料」
- 色麻町教育委員会1993「日の出山窯跡群—詳細分布調査とC地点西部の発掘調査—」色麻町文化財調査報告書第1集
- 宮城県教育委員会1970「日の出山窯跡群」宮城県文化財調査報告書第22号
- 宮城県教育委員会1995「豊刈場窯跡」「下草古城跡はほか」宮城県文化財調査報告書第166号
- 宮城県多賀城跡調査研究所2008「六月坂跡はほか」多賀城周辺遺跡発掘調査報告書第33号
- 東北古代土器研究会2008「東北古代土器集成—須恵器・窯跡編—『陳堤』」
- 櫻井友耕2008「奈良時代における多賀城周辺の須恵器生産」『考古研究』第35号
- 仙台市教育委員会1997「高屋敷遺跡はほか 調査報告書」仙台市文化財調査報告書第223集
- 遠藤栄一2007「胆沢地方における豪族屋敷の成立と展開」「岩手考古学」第19号
- 高橋静歩2007「東北地方北部の赤彩土器から豪爽集団の動向を探る」『岩手考古学』第19号

付編 向中野館遺跡の自然科学分析

1 向中野館遺跡の堅穴住居跡から出土した炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

1 はじめに

向中野館遺跡は、北上川の支流である宇石川が形成した自然堤防上に立地する。第10次調査区では、曲輪、堀、土塁、堅穴住居跡、掘立柱建物跡、柱穴列、土坑、堅穴状遺構、焼土遺構、近世墓壙、柱穴土坑、旧河道等の遺構が検出されている。今回の分析調査では、堅穴住居跡（RA018）から出土した炭化材の樹種を明らかにするために、樹種同定を実施する。

2 試 料

試料は、焼失家屋であるRA018から出土した炭化材5点である。

3 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柵目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の剖断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴については、島地・伊東（1982）やWheeler他（1998）を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

4 結 果

樹種同定結果を表1に示す。炭化材は、広葉樹2分類群（コナラ属コナラ亜属コナラ節・ケヤキ）に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

- コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus subgen. Quercus sect. Prinins*） ブナ科

環孔材で、孔圈部は1～2列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織がある。

- ケヤキ（*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino）ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圈部はほぼ1列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状あるいは帶状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互

表1. 樹種同定結果

分析No	遺構	取上No.	樹種
No1	RA018	炭4	コナラ属コナラ亜属コナラ節
No2	RA018	炭8	コナラ属コナラ亜属コナラ節
No3	RA018	炭9	コナラ属コナラ亜属コナラ節
No4	RA018	炭10	ケヤキ
No5	RA018	炭12	コナラ属コナラ亜属コナラ節

状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1~6細胞幅、1~50細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

5 考 察

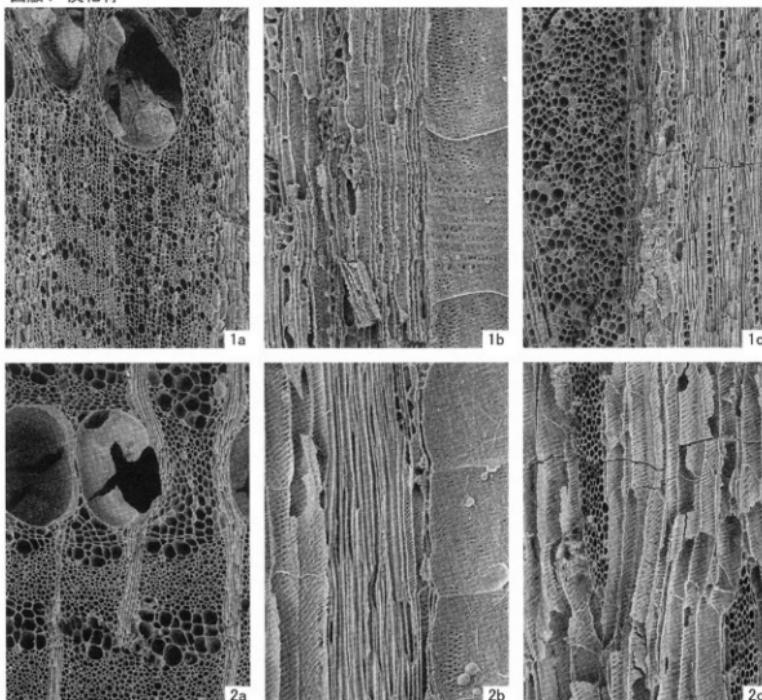
RA018堅穴住居跡は焼失家屋と考えられており、埋土最下層である4層から床面にかけて多数の炭化材や焼土が堆積している。樹種同定を実施した炭化材は、全て4層から出土しているが、出土位置や形状等の詳細は不明である。樹種同定を実施した結果、コナラ節4点、ケヤキ1点が認められ、炭化材には少なくとも2種類の広葉樹材が含まれていることが明らかとなった。コナラ節は、二次林等に普通に見られ、木材は重硬で強度が高い材質を有する。ケヤキは、河畔等に生育し、木材は重硬で強度・耐朽性が高い材質を有する。このことから、強度の高い木材が選択・利用されている可能性がある。

周辺地域では、台太郎遺跡の平安時代とされる堅穴住居跡から出土した炭化材の樹種が明らかにされており、ブナ属、クリ、モクレン属、カエデ属、トネリコ属、マツ属が確認されているが、コナラ節は奈良時代の住居跡出土炭化材に1点認められているのみで、平安時代の住居跡からは確認されていない（高橋、1999a, 1999b）。一方、本遺跡からはやや離れるが、野古A遺跡では8世紀代の住居跡床面から出土した炭化材にクリ、10世紀中葉とされる住居跡床面から出土した炭化材にコナラ節が確認されている（パリノ・サーヴェイ株式会社、2003）。

引用文献

- 林 昭三、1991、日本産木材 調微鏡写真集、京都大学木質科学研究所。
- 伊東 隆夫、1995、日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ、木材研究・資料、31、京都大学木質科学研究所、81~181。
- 伊東 隆夫、1996、日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ、木材研究・資料、32、京都大学木質科学研究所、66~176。
- 伊東 隆夫、1997、日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ、木材研究・資料、33、京都大学木質科学研究所、83~201。
- 伊東 隆夫、1998、日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ、木材研究・資料、34、京都大学木質科学研究所、30~166。
- 伊東 隆夫、1999、日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ、木材研究・資料、35、京都大学木質科学研究所、47~216。
- パリノ・サーヴェイ株式会社、2003、野古A遺跡の自然科学分析、「野古A遺跡第12次発掘調査報告書 盛岡南新都市計画監修事業間違遺跡発掘調査」、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第420集、財团法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、174~175。
- 島地 謙、伊東 隆夫、1982、説明木材組織、地球社、176p.
- 高橋 利彦、1999a、台太郎遺跡出土炭化材樹種同定「難堂B遺跡第5次・台太郎遺跡第16次発掘調査報告書 盛岡南新都市計画監修事業間違遺跡発掘調査」、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第293集、財团法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、地域振興整備公団、97~104。
- 高橋 利彦、1999b、台太郎遺跡出土炭化材の樹種、「台太郎遺跡第15次発掘調査報告書 盛岡南新都市計画監修事業間違跡発掘調査」、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第309集、財团法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、盛岡市、197~204。
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編)、1998、広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト、伊東 隆夫・藤井 賢之・佐伯 浩（日本語版監修）、海青社、122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

図版1 炭化材



1. コナラ属コナラ亜属コナラ節 (RA018; 炭4)

2. ケヤキ (RA018; 炭10)

a:木口,b:弦目,c:板目

— 213 —
200 μm:a
200 μm:b,c

2 向中野館遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

向中野館遺跡は、岩手県盛岡市飯岡新田2地割133-2（北緯39°40'40"、東経141°08'20")に所在する。測定対象試料は、RD064土坑の壁際から出土した木炭（No.1:IAAA-82760）、RA032竪穴住居跡の北壁際から出土した木炭（No.2:IAAA-82761）、RA018竪穴住居跡の4層から出土した木炭2点（No.3・4:IAAA-82762・82763）、旧河道西杭2・KKⅢb層から出土した木片（No.5:IAAA-82764）、旧河道中央杭2・KKⅢb層から出土した木片（No.6:IAAA-82765）、旧河道東杭4・礫層から出土した木片（No.7:IAAA-82766）、合計7点である。

2 測定の意義

遺構の年代を明らかにしたい。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・上等の表面的な不純物を取り除く。
- (2) 酸処理、アルカリ処理、酸処理 (AAA: Acid Alkali Acid) により内面的な不純物を取り除く。
最初の酸処理では1Nの塩酸(80°C)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液(80°C)を用いて数時間処理する。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAaAと記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸(80°C)を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90°Cで乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- (3) 試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空中で封じ切り、500°Cで30分、850°Cで2時間加熱する。
- (4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用して、真空ラインで二酸化炭素(CO₂)を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(水素で還元)し、グラファイトを作製する。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

4 測定方法

測定機器は、3 MVタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9 SDH-2)を使用する。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) 年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polash 1977)。

- (2) ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として測る年代である。この値は、 $\delta^{13}\text{C}$ によって補正された値である。 ^{14}C 年代と誤差は、1 枠目を四捨五入して10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (‰) で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定した場合には表中に (AMS) と注記する。
- (4) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。
- (5) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせて過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。历年較正プログラムに入力される値は、下一行を四捨五入しない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal04データベース (Reimer et al 2004) を用い、OxCalv4.0較正プログラム (Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

6 測 定 結 果

^{14}C 年代は、RD064土坑の壁際から出土した木炭が 1270 ± 30 yrBP、RA032堅穴住居跡の北壁際から出土した木炭が 1270 ± 30 yrBP である。历年較正年代 (1σ) は、共に 685~771 AD に含まれる。

RA018堅穴住居跡の4層から出土した木炭2点が 1390 ± 30 yrBP、 1470 ± 30 yrBP であり、2点には年代差がある。試料採取にあたっては、確認された年輪の中で最外部を採取しているが、これらの木炭には樹木の最外部がみられなかったため、樹木の枯死・伐採年代を幾らか遡る年代が得られたと予想される。

旧河道では、西杭2が 200 ± 30 yrBP、中央杭2が 180 ± 30 yrBP、東杭4が 70 ± 30 yrBP である。いずれも历年較正年代 (1σ) に時間幅があるが、17世紀後半から20世紀前半の年代に含まれる。

炭素含有率は、木炭が 65% 前後、木片が 55% 前後であり、それぞれ十分な値であった。化学処理および測定内容に問題は無く、妥当な年代と判断される。

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
					(AMS)	Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-82760	No 1	RD064 壁際	木炭	AAA	-27.02 \pm 0.73	1,270 \pm 30	85.32 \pm 0.34
IAAA-82761	No 2	RA032 北壁際	木炭	AAA	-24.62 \pm 0.76	1,270 \pm 30	85.33 \pm 0.36
IAAA-82762	No 3	RA018 4層	木炭	AAA	-23.86 \pm 0.77	1,390 \pm 30	84.15 \pm 0.33
IAAA-82763	No 4	RA018 4層	木炭	AAA	-22.77 \pm 0.73	1,470 \pm 30	83.28 \pm 0.33
IAAA-82764	No 5	旧河道 西杭2	木片	AAA	-27.16 \pm 0.82	200 \pm 30	97.49 \pm 0.39
IAAA-82765	No 6	旧河道 中央杭2	木片	AAA	-24.49 \pm 0.79	180 \pm 30	97.74 \pm 0.39
IAAA-82766	No 7	旧河道 東杭4	木片	AAA	-24.90 \pm 0.71	70 \pm 30	99.10 \pm 0.40

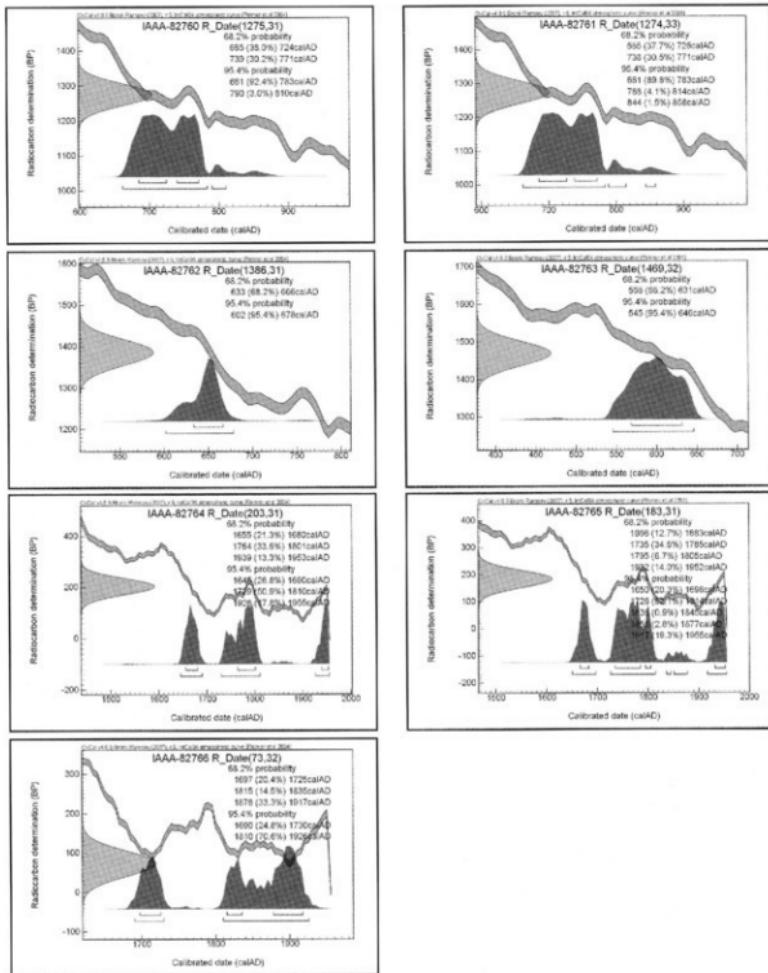
[#273]

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用 (yrBP)	1σ 年代範囲	2σ 年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-82760	1310 ± 30	84.97 ± 0.31	1,275 ± 31	685AD - 724AD (38.0%) 739AD - 771AD (30.2%)	661AD - 783AD (92.4%) 790AD - 810AD (3.0%)
IAAA-82761	1,270 ± 30	85.39 ± 0.33	1,274 ± 33	685AD - 726AD (37.7%) 738AD - 771AD (30.5%)	661AD - 783AD (89.8%) 788AD - 814AD (4.1%) 844AD - 858AD (1.5%)
IAAA-82762	1,370 ± 30	84.35 ± 0.30	1,386 ± 31	633AD - 666AD (68.2%)	602AD - 678AD (95.4%)
IAAA-82763	1,430 ± 30	83.66 ± 0.31	1,469 ± 32	568AD - 631AD (68.2%)	545AD - 646AD (95.4%)
IAAA-82764	240 ± 30	97.06 ± 0.35	203 ± 31	1655AD - 1680AD (21.3%) 1764AD - 1801AD (33.6%) 1939AD - 1953AD (13.3%)	1645AD - 1690AD (26.8%) 1729AD - 1810AD (50.9%) 1926AD - 1955AD (17.8%)
IAAA-82765	180 ± 30	97.84 ± 0.35	183 ± 31	1666AD - 1683AD (12.7%) 1735AD - 1785AD (34.8%) 1795AD - 1805AD (6.7%) 1932AD - 1952AD (14.0%)	1650AD - 1696AD (20.3%) 1726AD - 1814AD (52.1%) 1836AD - 1845AD (0.9%) 1851AD - 1877AD (2.8%) 1917AD - 1955AD (19.3%)
IAAA-82766	70 ± 30	99.12 ± 0.37	73 ± 32	1697AD - 1725AD (20.4%) 1815AD - 1835AD (14.5%) 1878AD - 1917AD (33.3%)	1690AD - 1730AD (24.8%) 1810AD - 1926AD (70.6%)

*Warning! Date may extend out of range [参考値]

参考文献

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19, 355-363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon 37(2), 425-430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon 43(2A), 355-363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43(2A), 381-389
- Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029-1058



3 向中野館遺跡第10次出土 鉄滓類の成分分析

JFEテクノリサーチ株式会社
分析・評価事業部
埋蔵文化財調査研究室

1 はじめに

岩手県盛岡市飯岡新田に所在する向中野館遺跡から出土した鉄滓の遺物について、化学成分分析、顕微鏡組織観察を含む自然科学的観点での調査を依頼された。鉄滓関連遺物の組成分析、マクロ的特徴観察、ミクロ組織観察、X線回折などにもとづき出発原料、製造工程上の位置づけなどを中心に調査した。以下にその結果について報告する。

2 調査項目および試験・観察方法

(1) 調査項目

調査資料の記号、出土構造・注記および調査項目を表1に示す。

(2) 調査方法

(i) 重量計測、外観観察および金属探知調査

資料重量の計量には0.1gまで測定可能な電子天秤を使用した。各種試験用試料を採取する前に、資料の外観をmm単位であるスケールを同時に写し込みで撮影した。資料の出土位置や資料の種別等は提供された資料に準拠した。

着磁力調査については、直径30mmのリング状フェライト磁石を使用し、6mmを1単位として35cmの高さから吊した磁石が動きは始める位置を着磁度として数値で示した。遺物内の残存金属の有無は金属探知機（MC：metal checker）を用いて調査した。金属検知にあたっては参照標準として直径と高さを等しくした金属鉄円柱（1.5mm ϕ x15mmH、2.0mm ϕ x20mmH、3.8mm ϕ x3.8mmH、5mm ϕ x5mmH、10mm ϕ x10mmH、16mm ϕ x16mmH、20mm ϕ x20mmH、30mm ϕ x30mmH）を使用し、これとの対比で金属鉄の大きさを判断した。

(ii) 化学成分分析

化学成分分析は鉄鋼に関するJIS分析法に準じて行っている。

- ・ 全鉄 (TFe) : 三塩化チタン還元-ニクロム酸カリウム滴定法。
- ・ 金属鉄 (M.Fe) : 吳素メタノール分解-EDTA滴定法。
- ・ 酸化第一鉄 (FeO) : ニクロム酸カリウム滴定法。
- ・ 酸化第二鉄 (Fe₂O₃) : 計算。・化合物 (C.W.) : カールフィッシャー法。
- ・ 炭素 (C)、イオウ (S) : 燃焼-赤外線吸収法。
- ・ ライム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化マンガン (MnO)、酸化ナトリウム (Na₂O)、珪素 (Si)、マンガン (Mn)、リン (P)、銅 (Cu)、ニッケル (Ni)、コバルト (Co)、アルミニウム (Al)、ヴァナジウム (V)、チタン (Ti) : ICP発光分光分析法。
- ・ シリカ (SiO₂)、アルミナ (Al₂O₃)、酸化カルシウム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO)、二酸化チタン (TiO₂)、酸化リン (P₂O₅)、酸化カリウム (K₂O) : ガラスビード螢光X線分析法。但しCaO、

MgO, MnOは含有量に応じてICP分析法またはガラスピード蛍光X線分析法を選択。

・酸化ナトリウム (Na₂O) : 原子吸光法。

なお、鉄滓中成分は、18成分（全鉄T.Fe、金属鉄M.Fe、酸化第一鉄FeO、酸化第二鉄Fe₂O₃、シリカSiO₂、アルミナAl₂O₃、ライムCaO、マグネシアMgO、酸化ナトリウムNa₂O、酸化カリウムK₂O、二酸化チタンTiO₂、酸化マンガンMnO、酸化リンP₂O₅、コバルトCo、化合物C.W.、炭素C、ヴァナジウムV、銅Cu）を化学分析している。分析は各元素について分析し、酸化物に換算して表示している。

鉄中成分の化学分析は、13成分（炭素C、シリコンSi、マンガンMn、リンP、イオウS、銅Cu、ニッケルNi、コバルトCo、アルミニウムAl、ヴァナジウムV、チタンTi、カルシウムCa、マグネシウムMg）を化学分析している。

(iii) 顕微鏡組織観察

資料の一部を切り出し樹脂に埋め込み、細かい研磨剤などで研磨（鏡面仕上げ）する。炉壁・羽口・粘土などの鉱物性資料については顕微鏡で観察しながら代表的な鉱物組織などを観察し、その特徴から材質、用途、熱履歴などを判断する。津闇連資料も炉壁・羽口などと同様の観察を行うが特徴的鉱物組織から成分的な特徴に結びつけ製・精練工程の判別、使用原料なども検討する。金属鉄はナイタル（5%硝酸アルコール液）で腐食後、顕微鏡で観察しながら代表的な断面組織を拡大して写真撮影し、顕微鏡組織および介在物（不純物、非金属鉱物）の存在状態等から製鉄・鍛冶工程の加工状況や材質を判断する。原則として100倍および400倍で撮影を行う。必要に応じて実体顕微鏡（5倍～20倍）による観察もある。

(iv) X線回折測定

試料を粉碎して板状に成形し、X線を照射すると、試料に含まれている化合物の結晶の種類に応じて、それぞれに固有な反射（回折）された特性X線を検出（回折）できることを利用して、試料中の未知の化合物を同定することができる。多くの種類の結晶についての標準データが整備されており、ほとんどの化合物が同定される。

測定装置 理学電気株式会社製 ロータフレックス (RU-300型)

測定条件

- ① 使用X線 Co-K α (波長=154178Å)
- ② K β 線の除去 グラファイト単結晶モノクロメーター
- ③ 管電圧・管電流 55kV・250mA
- ④ スキャニング・スピード 4.0°/min
- ⑤ サンプリング・インターバル 0.020°
- ⑥ D.S.スリット 1°
- ⑦ R.S.スリット 0.15mm
- ⑧ S.S.スリット 1°
- ⑨ 検出器 シンチレーション・カウンター

3 調査結果および考察

結果を図表にまとめて222～224頁に示す。表1に調査項目を示す。表2に化学成分分析結果を、表3にはX線回折結果を示す。

資料の外観写真を224頁に、資料の切断面を225頁に、顕微鏡組織を225～229頁に、X線回折チャート

トを229頁にそれぞれ示す。

鍛冶滓、着融度：4、メタル反応：5mmよりやや大

外観：重量105.2g、長さ49.5mm、44.8mm、31.8mm。

重量感のある不整四角形の鍛冶滓である。色調は暗褐色で上面の右下部には5mm大をやや超えるメタル反応があり、赤さびと黒錆が観察される。上面には不明瞭ながら小さな木炭痕が數カ所観察され、突起状の凹凸や小さな気孔が見られる。下面側は津滴が滴下したように5mm大位の瘤が垂れ下がった様相を呈する。破面は側面に一ヶ所あり、小さな気泡が見られる。

切断面、顕微鏡組織：切断面写真に見られるように滓の中に小さな金属鉄が2ヶ所見られ、一方はまとまっているが他方はまとまる前の段階にある。滓は気泡が多く、不均質である。顕微鏡観察では酸化土砂、ファイヤライト (Fayalite : 2FeO·SiO₂)、ウスタイト (Wustite : FeO) などが観察される。外側から金属鉄の存在する部分に向かって以下のように連続的に変化する。写真1～写真5までは連続撮影である。

①錆と粘土質の泥との混合状態の酸化土砂の部分（写真1）、から②鉄鉱石の製錬滓やTiO₂の非常に少ない砂鉄精錬滓に見られるファイヤライト (Fayalite : 2FeO·SiO₂) 主体の滓組織（写真2、写真3）の部分へ変化し、さらに③鍛冶滓に多く見られる凝聚ウスタイト (Wustite : FeO) に近い鉄酸化物相（写真4）、④周囲に酸化物である凝聚ウスタイト (Wustite : FeO) に覆われた金属鉄に変化する（写真5）。金属鉄はほとんどCを含まない純鉄のフェライト (Ferrite : α-Fe) 組織である。

写真6は鉄鉱石製錬滓やTiO₂の非常に低い砂鉄精錬滓にみられるファイヤライト (Fayalite : 2FeO·SiO₂) とその周縁に析出するハーシナイト (Hercynite : FeO·Al₂O₃) の組織である。写真7は金属鉄の周囲に見られる凝聚ウスタイト (Wustite : FeO) である。金属鉄はフェライト単相である。顕微鏡組織からは本資料は鉄塊系遺物を処理する過程の精錬初期の滓と推察される。

X線回折：結果をX線回折チャート1に示す。ウスタイト (Wustite : FeO) が強い回折強度を示し、ファイヤライトとマグнетサイト (Magnetite : Fe₃O₄) が弱い回折強度を示している。このほかにはリュウサイト (Leucite : KAlSi₂O₆) の微弱な回折線が認められる。顕微鏡観察とほぼ一致する結果である。化学成分：分析結果を表2に示す。T.Feは65.9%でM.Feは1.69%とやや多く含まれる。化合物は1.30%で、ゲーサイト (Goethite : α-FeOOH) などの錆化鉄が含まれると思われる。FeO、Fe₂O₃はそれぞれ58.0%、27.3%でSiO₂は8.67%と少ない。砂鉄の指標成分であるTiO₂は0.11%とわずかであり始発原料が砂鉄か否か判断できない。造滓成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+Na₂O+K₂O) は12.2%と少ない。FeO-Fe₂O₃-SiO₂の3成分系に換算するとFeO、Fe₂O₃、SiO₂はそれぞれ61.7%、29.1%、9.2%となり参考(2)の3成分系平衡状態図の上ではウスタイト (Wustite : FeO)、マグネットサイト (Magnetite : Fe₃O₄) が晶出する位置にある。ゲーサイト (Goethite : α-FeOOH) などのFe₂O₃が含まれるため、実際にはよりウスタイト側によるためウスタイトが主要で、これにマグネットサイト (Magnetite : Fe₃O₄) とファイヤライト (Fayalite : 2FeO·SiO₂) が混じると見られ、顕微鏡観察、X線回折強度の結果とほぼ一致する。

図1、2、3はTiO₂とT.Feの関係、造滓成分とT.Feの関係、MnO/TiO₂とTiO₂/T.Feの関係を示す図で、これまでの蓄積データをもとにして鉄滓の化学成分の特徴から製鉄工程における滓の生成位置(工程)を解析・検討する図である。図1、図2、図3のいずれにおいても鍛錬鍛冶滓と位置づけられる位置にある。顕微鏡観察の資料の不均質性、ファイヤライトの多量検出などを考慮すると、本資料は精錬工程の末期か鍛錬工程の比較的初期に生成した可能性が高いように思われる。

4 ま と め

本資料は砂鉄を始発原料とし、精錬工程の末期か鍛錬鍛冶の初期に生成した鐵滓と推察される。

5 参 考

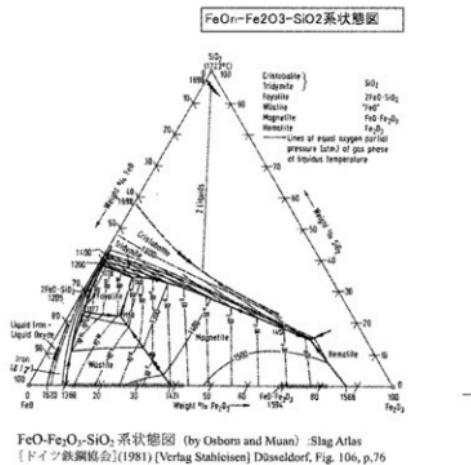
(1) 鐵滓の顕微鏡組織について

鐵滓を構成する化合物結晶には、表A1のような鉱物組織がある。酸化鉄 (Fe_2O_3 、 Fe_3O_4 、 FeO)、二酸化ケイ素 (シリカ: SiO_2)、アルミナ (Al_2O_3) および二酸化チタン (TiO_2) を組み合せた化合物 (固溶体) が多く、これら鉱物結晶は含有量にも依存するが、X線回折により検出され確認できる。鐵滓中の低融点化合物がガラス相 (非晶質) を形成することがあるがX線回折では検出されない。

表A1 鐵滓の顕微鏡鉱物組織とその観察状況

鉱物組織名(和)	鉱物名(英)	化学式	偏光顕微鏡観察状況
ヘマタイト	Hematite	$\alpha\text{-Fe}_2\text{O}_3$	赤褐色～赤紫色
マグネタイト	Magnetite	Fe_3O_4	白青色、四角または多角盤状
ウスタイト	Wustite	FeO	灰白色、薔薇玉または樹枝状
ファイヤライト	Fayalite	$2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$	薄い青灰色、短冊状の長い結晶
ウルボスピネル	Uvospinel	$2\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$	白色、四角～角形板状結晶
イルメナイト	Ilmenite	$\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$	白色、針状・棒状の長い結晶
シュードブルッカイト	Pseudobrookite	$\text{FeO}\cdot2\text{TiO}_2$	白色、針状の結晶
ハーシサイト	Hercynite	$\text{FeO}\cdot\text{Al}_2\text{O}_3$	ウスタイト中に析出、ごま粒状。
アカゲナイト	Akageneite	$\beta\text{-FeOOH}$	組織は不明
ゲーサイト	Goethite	$\alpha\text{-FeOOH}$	白～黄色、リング状が多い。
レピドクロサイト	Lepidocrosite	$\gamma\text{-FeOOH}$	
アノーサイト	Anorthite	$\text{CaO}\cdot\text{Al}_2\text{O}_3\cdot\text{SiO}_2$	
石英(シリカ)	Silica	$\alpha\text{-SiO}_2$	白色～半透明
リューサイト	Leucite	KAlSi ₂ O ₆	

(2) 鉄滓の平衡状態図

FeO-Fe₂O₃-SiO₂系状態図 (by Osborn and Muau) :Slag Atlas
[ドイツ鉄鋼協会] (1981) [Verlag Stahleisen] Düsseldorf, Fig. 106, p.76

6 図表・写真

・調査資料と調査項目

表1 調査資料と調査項目

資料 No.	出土遺構・層位・ 取り上げ番号	資料 種別	重量 g	着 磁 度	M C 反 応	外 観 写 真	化 学 成 分	組 織 写 真	X 線 回 折
鐵治滓	RA019堅穴住居跡壁際床面直上	鐵治滓	105.2	○	○	○	○	○	○

化学成分分析結果

表2 鉄滓の化学成分分析結果 (%)

T. Fe	M. Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	K ₂ O	Na ₂ O	比 率(%)
								FeO	Fe ₂ O ₃	
65.9	1.69	58.0	27.3	8.67	2.06	0.44	0.16	0.53	0.16	

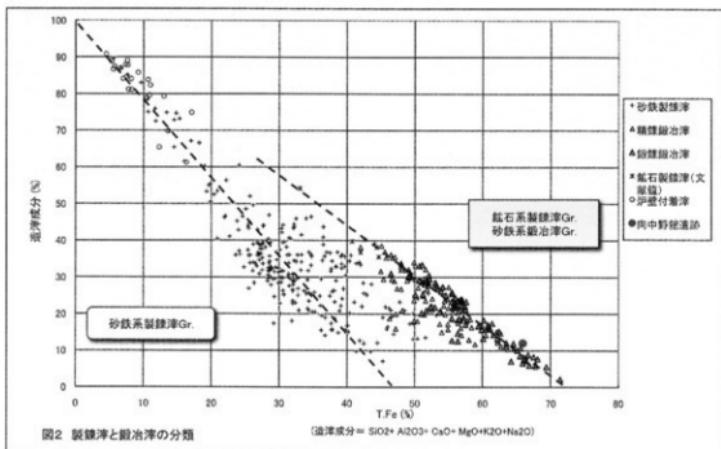
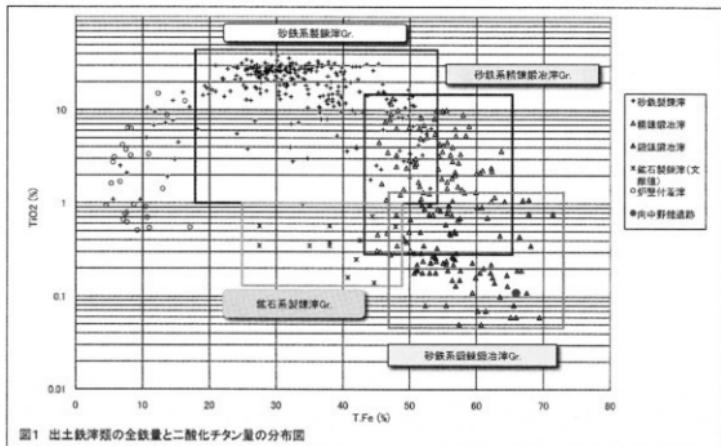
TiO ₂	MnO	P ₂ O ₅	Zr	C.W.	C	V	Cu	TiO ₂ /T.Fe	MnO/TiO ₂	造滓 成分%
0.11	0.05	0.237	0.003	1.30	0.10	0.015	0.002	0.0017	0.455	12.02

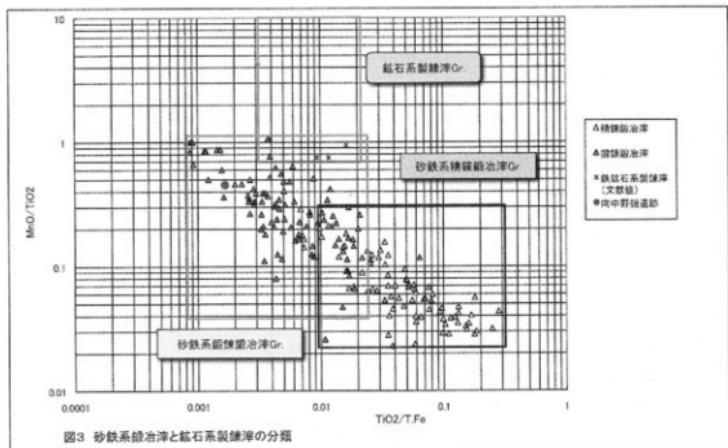
C.W.=化合水、造滓成分= SiO₂+ Al₂O₃+ CaO+ MgO+ Na₂O+ K₂O

表3 X線回折結果

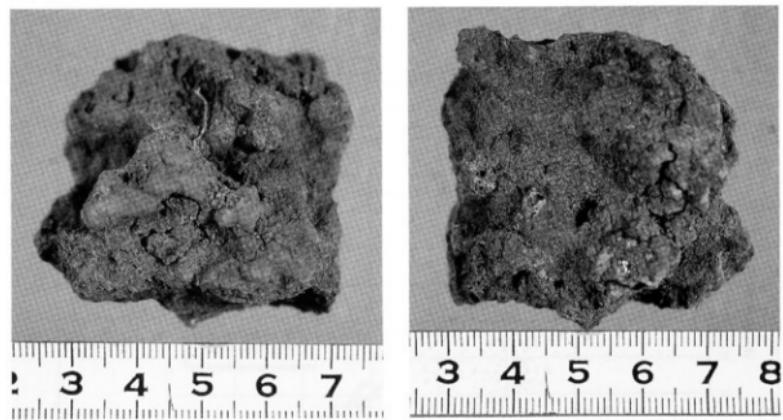
種別	回折強度
鐵治津	W強、F弱、M弱、Le微

W:ウスタイト、M:マグнетタイト、F:ファイヤライト、U:ウルボスピネル、Go:ゲーサイト、Le:リューサイト、最強、強、中、弱、微は回折強度を示し、微は氷物相が同定できる程度の回折強度であることを示す。

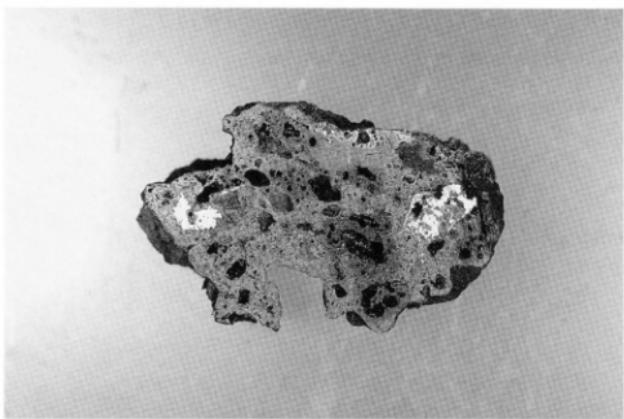




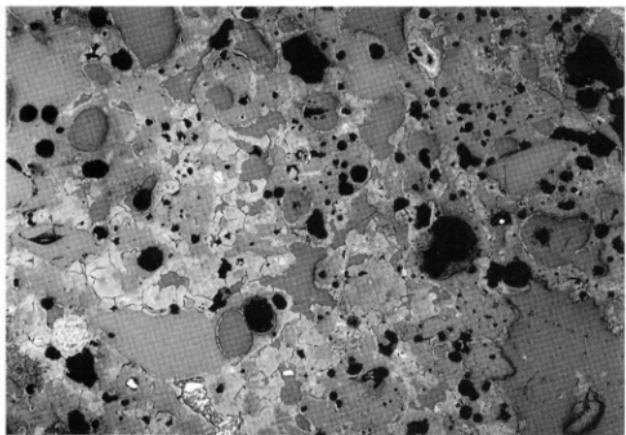
外観写真



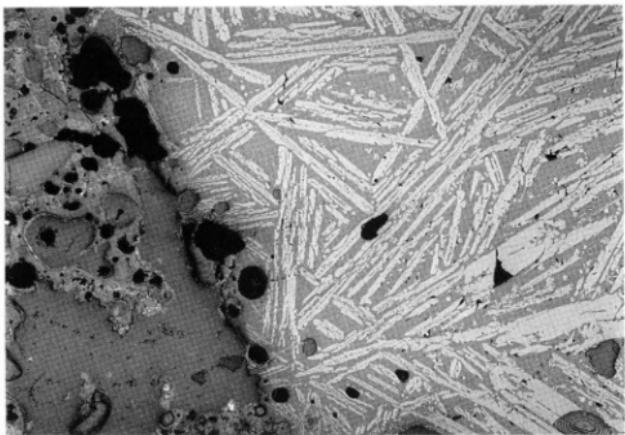
第1図 遺跡位置図



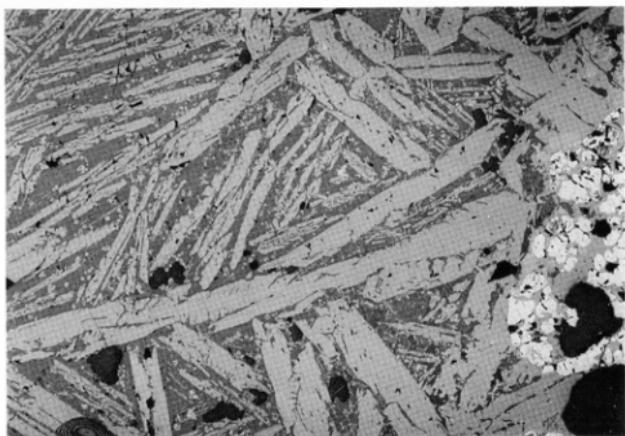
切断面写真



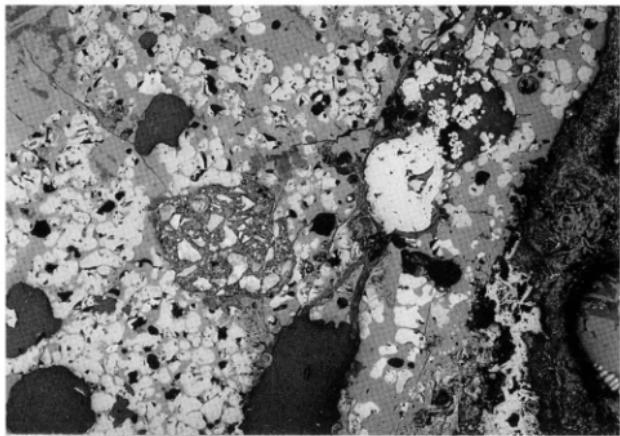
x 100
顕微鏡写真 1



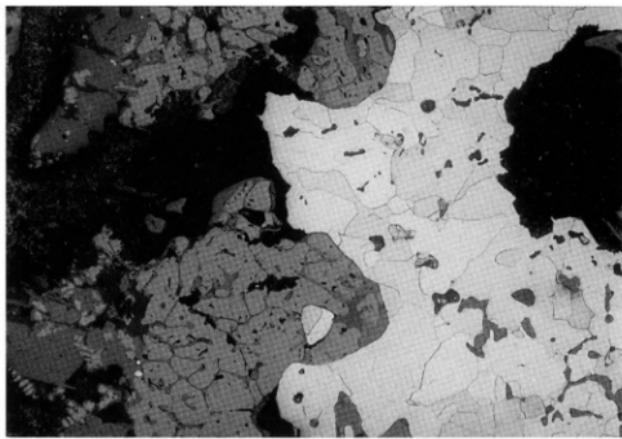
x 100
顕微鏡写真 2



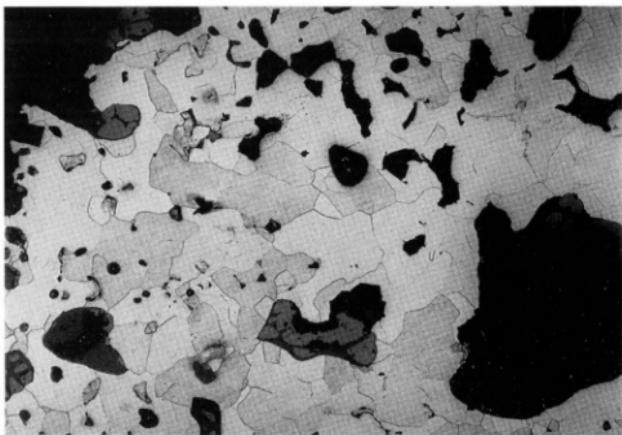
x 100
顕微鏡写真 3



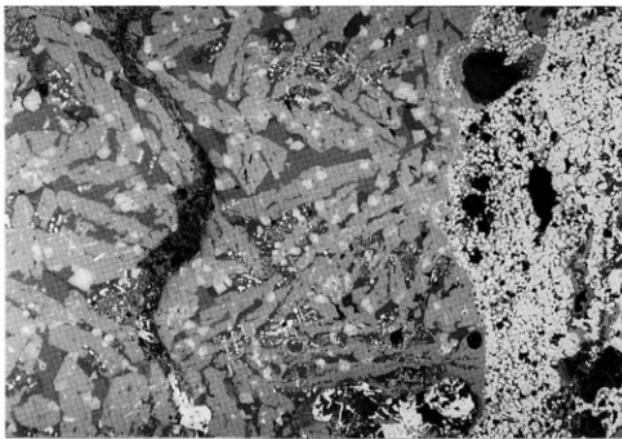
x 100
顕微鏡写真 4



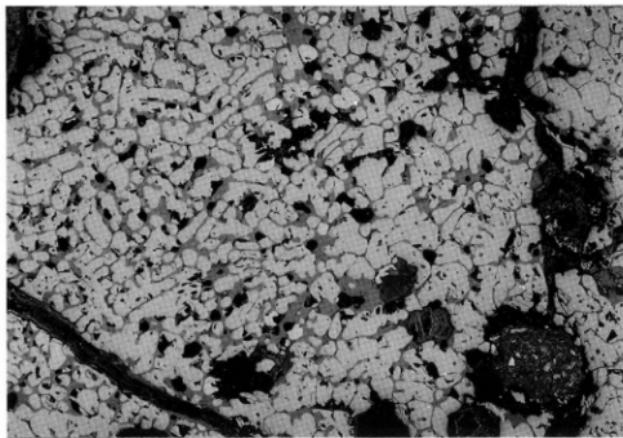
x 100
顕微鏡写真 5



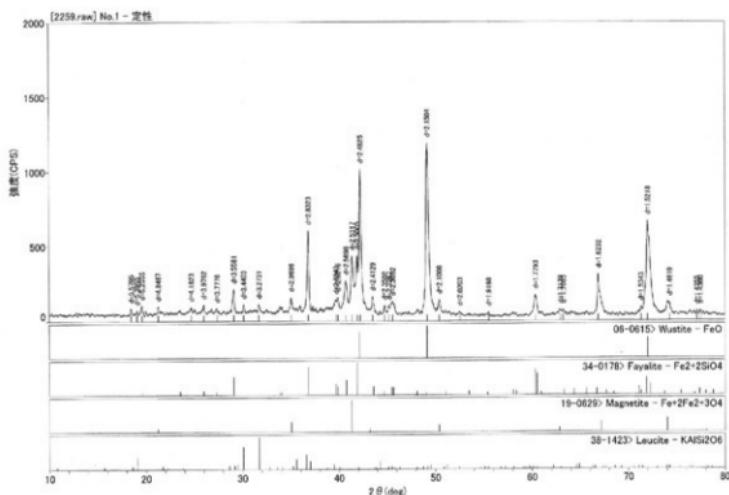
x 100
顕微鏡写真 6



x 100
顕微鏡写真 7



x 100
顕微鏡写真 8



X 線回折チャート

4 向中野館遺跡10・11次調査における火山灰の分析調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

1 はじめに

季石川の沖積低地上に立地する向中野館遺跡では、これまでの発掘調査により中世および平安時代とされる遺構・遺物が検出されている。今回の分析調査では、平安時代とされる土坑の覆土や旧河道の埋積層中に、火山灰（テフラ）とされる堆積物が認められたことから、その碎屑物の性状を明らかにする。テフラである場合には、噴出年代の明らかにされている指標テフラとの対比を行い、遺跡の年代に関わる資料を作成する。

2 試 料

試料は、向中野館遺跡10・11次調査区で確認された、平安時代の土坑とされる遺構の覆土から採取された堆積物2点と、旧河道の埋積層から採取された堆積物5点の合計7点である。試料には、試料番号1～4・6・8・9が付されている。

試料番号1および2は、平安時代の土坑覆土中にレンズ状に堆積した状況が発掘調査時に確認されており、試料番号1は灰黄褐色の砂質シルト、試料番号2は褐色の砂質シルトである。試料番号3、4、8は、旧河道側壁斜面に堆積した砂質堆積層中に認められた堆積物であり、いずれも灰黄褐色～褐色を呈する砂質シルトである。なお、これらの試料が採取された砂質層からは、平安時代の土器器等が多く出土している。試料番号6および9は、上記試料が採取された旧河道砂質層の下位に堆積する泥層から採取された堆積物である。発掘調査所見では、泥層中で色調の明るい土として認識されている。2点ともに褐色を呈する砂質粘土質シルトである。

各試料の採取された遺構名および層位等は、分析結果を示した表1に併記する。

3 分析方法

試料は、その外見上の特徴から、火山ガラス質テフラの可能性があると考えられるため、ここではテフラの検出同定により碎屑物全体の状況を確認し、火山ガラスが認められた場合には火山ガラス比を求め、さらにその屈折率の測定を行う。処理手順は以下の通りである。

1) テフラの検出同定

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破碎片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた纖維束状のものとする。

2) 火山ガラス比分析

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径

1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm~1/8mmの砂分をポリタンクス
テン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離、軽鉱物分における砂粒を250粒数え、その
中の火山ガラスの量比を求める。火山ガラスの形態分類は、上述のテフラ分析に準ずる。

3) 屈折率測定

屈折率の測定は、古澤（1995）のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

4 結 果

（1）テフラの検出同定

結果を表1に示す。試料番号6と9の2点以外の試料には、火山ガラスおよび軽石が認められた。各試料の火山ガラスおよび軽石の特徴は、いずれも同様である。軽石は、最大径約2mm、白色を呈し、発泡は、良好、やや良好、やや不良のものが混在する。火山ガラスは、無色透明の軽石型がほとんどであり、その中には纖維束状のものも含まれている。また、微量の無色透明のバブル型も混在する。

各試料における火山ガラスの量比は、試料番号1と8に多量、試料番号4に中量、試料番号2と3に少量それぞれ含まれる。軽石の量比は、試料番号1と8に多量、試料番号2~4に中量含まれる。試料番号2と3には少量である。なお、これら5点の試料には、微量の黒曜石の破片や灰色の火山岩片および斜方輝石の遊離結晶などが認められた。

試料番号6の処理後に得られた砂分は、石英および長石類の鉱物片と酸化鉄塊から構成され、極めて微量の火山ガラスを含む。酸化鉄塊は、褐色~赤褐色を呈し、最大径約0.7mm、多くは径0.1mm以下である。

試料番号9の処理後に得られた砂分は、ほとんど酸化鉄塊から構成される。酸化鉄塊は、最大径約10mm、径0.1~0.2mmのものが多い。

（2）火山ガラス比分析

結果を表2、図1に示す。試料番号1には約70%、試料番号4および8には約40%、試料番号2には約30%、試料番号3と9には約10%のいずれも軽石型火山ガラスが含まれる。また、各試料には微量の中間型火山ガラスが伴われる。試料番号6には約0.4%の中間型火山ガラスが計数されたのみである。

（3）屈折率測定

火山ガラスの屈折率測定結果を図2に示す。試料番号6と9以外の5点の試料は、ほぼ同様の結果を示した。レンジはn 1.500~1.508という比較的広い値を示し、モードはn 1.503~1.505である。

試料番号6と9は、計測できた火山ガラスの粒数自体が少數であり、レンジを特定できるものではないが、計測された値はn 1.502~1.505であった。

5 考 察

試料番号6と9以外の5点の試料から検出された軽石および火山ガラスは、上述した各特徴と黒曜石片や斜方輝石の遊離結晶を伴うこと、さらにはこれまでに研究された東北地方におけるテフラの産状（町田ほか（1981;1984）、Arai et al. (1986)、町田・新井（2003）など）との比較から、十和田aテフラ（To-a）に由来すると考えられる。To-aは、平安時代に十和田カルデラから噴出したテフラであり、給源周辺では火碎流堆積物と降下軽石からなるテフラとして、火碎流の及ばなかった地域では軽石質テフラとして、さらに給源から離れた地域では細粒の火山ガラス質テフラとして、東北地方のほぼ全域で確認されている（町田ほか1981）。また、町田ほか（1981）は、淡緑色・淡褐色を呈す

る n 1502以下の低い屈折率の火山ガラスを主体とする To-a の上部火山灰層は、南方へは広がらず十和田周辺とその東方地域に分布が限られるとしているが、今回の試料でも低屈折率の火山ガラスは微量含まれている。なお、To-a の噴出年代については、早川・小山（1998）による詳細な調査によれば、西暦 915 年とされている。

発掘調査所見による覆土や堆土における座状と軽石および火山ガラスが砂分の主体を占めていることなどから、試料番号 6 と 9 以外の 5 点の試料が採取された堆積物は、To-a の降下堆積物がその後のかく乱を受けながらも、土坑覆土や河道埋積層中に保存されたものであると考えられる。すなわち、試料番号 1 と試料番号 2 の採取された各土坑は、To-a の噴出以前に構築された可能性が高いと考えられ、試料番号 3・4・8 の採取された旧河道は、To-a の噴出以前から流れしており、河道を埋積する砂質層の堆積は、To-a の噴出前後に堆積したと考えられる。

なお、試料番号 6 と 9 で採取された堆積物はテフラ層ではなく、何らかの原因により泥層の中で酸化鉄塊が濃集した部分であると考えられる。これらの試料からも微量の火山ガラスが検出されているが、その形態や屈折率は他の試料に含まれる To-a と類似する。おそらく、これらの試料に含まれる火山ガラスは、上位の砂質層に堆積する To-a の火山ガラスが、植物根などによる亀裂を経由して泥層に混入したもの等であろう。

引用文献

- Arai,F.・Machida,H.・Okumura,K.・Miyauchi,T.・Soda,T.・Yamagata,K.1986.Catalog for late quaternary marker-tephras in Japan II -Tephra occurring in Northeast Iloshu and Hokkaido- Geographical reports of Tokyo Metropolitan University No.21,223mm 250.
- 古澤 明.1996.火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的解析に基づくテフラの識別.地質学論誌.101,123mm 133.
- 早川由紀夫・小山真人.1998.日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日-十和田湖と白嶺山-火山,43,403mm 407.
- 町田 洋・新井房夫.2003.新編 火山灰アトラス 東京大学出版会,336p.
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広.1981.日本海を渡ってきたテフラ.科学,51,562mm 569.
- 町田 洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦.1984.テフラと日本考古学-考古学研究と関連するテフラのカタログ-渡辺真経(編) 古文化財に関する保存科学と人文・自然科学.同朋舎,865mm 928.

表 1 テフラ分析結果

試料番号	出土地点	層位	その他	スコリア		火山ガラス		軽石		
				量	量	色調	形態	量	色調	発泡度
1	RD030土坑	2層	レンズ状堆積	-	+++ +	cl·pm>>cl·bw	+++ +	W·g~sb~sg	1.5	
2	RD029土坑	埋土中位	レンズ状堆積	-	++	cl·pm>>cl·bw	++ +	W·g~sb~sg	1.5	
3	1K6aグリッド	Ⅲb層	旧河道	-	++	cl·pm>>cl·bw	+++	W·g~sb~sg	2.0	
4	1K6bグリッド	Ⅲb層	旧河道	-	++ +	cl·pm>>cl·bw	++ +	W·g~sb~sg	2.0	
5	1J8pグリッド	Ⅲd層	Ⅲb層の下 旧河道	-	(+)	cl·bw	-			
6	1J10oグリッド	Ⅲb層	旧河道	-	+++ +	cl·pm>>cl·bw	+++ +	W·g~sb~sg	1.5	
7	1J10oグリッド	Ⅲd層	旧河道	-	-		-			

凡例 -:含まれない, (+):きわめて微量, +:微量, ++:少量, +++:中量, ++++:多量,

B:黒色, G:灰色, Br:褐色, GB:灰褐色, GBr:灰褐色, R:赤色, W:白色,

g:良好, sg:やや良好, sb:やや不良, b:不良, 最大粒径4mm,

cl:無色透明, br:褐色, bw:バブル型, md:中間型, pm:軽石型,

表2 火山ガラス比分析結果

試料番号	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
1	0	0	175	75	250
2	0	0	71	179	250
3	0	4	16	230	250
4	0	1	107	142	250
6	0	1	0	249	250
8	0	0	100	150	250
9	0	1	18	231	250

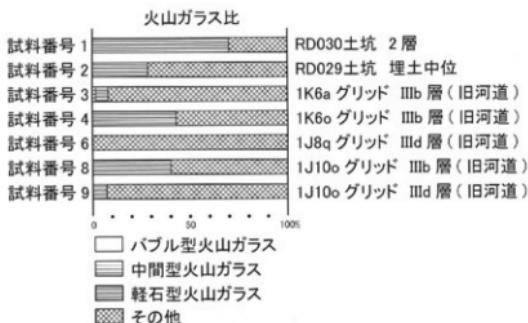


図1 各試料の火山ガラス比

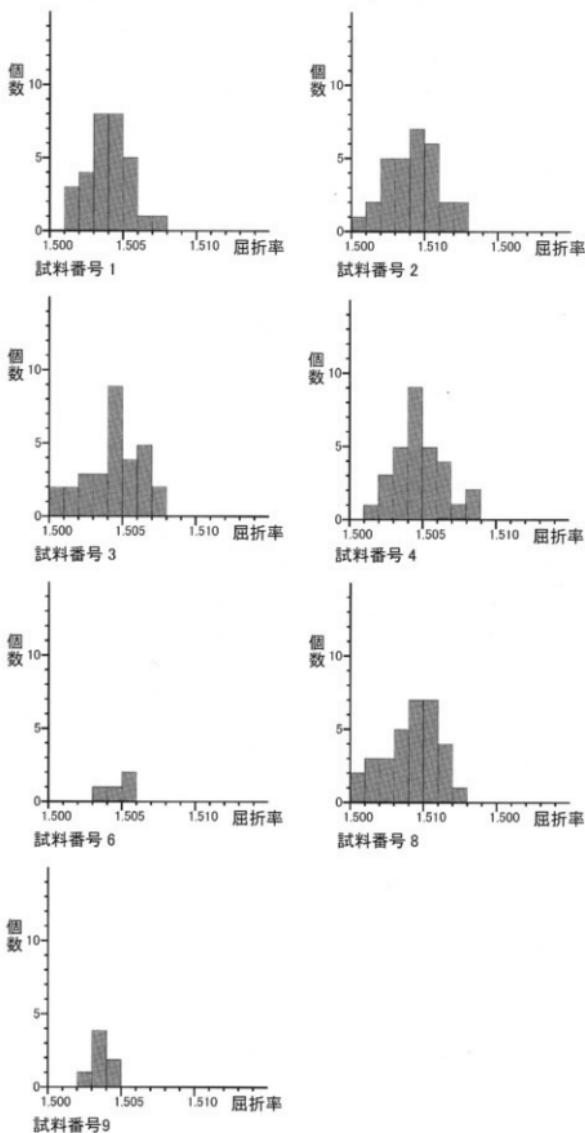
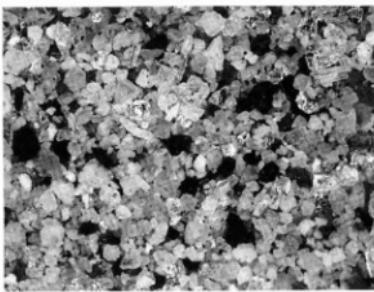


図2 火山ガラスの屈折率測定結果

図版1 軽石・火山ガラスおよび砂分の状況



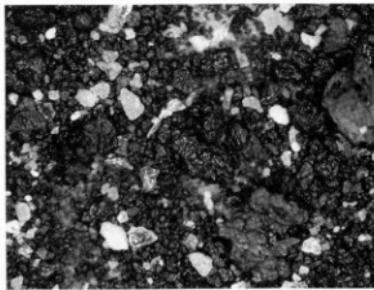
1.軽石(試料番号1)



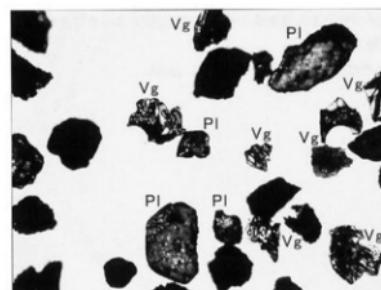
2.砂分の状況(試料番号6)



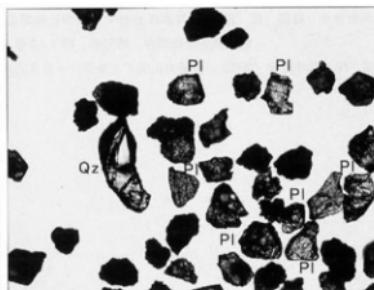
3.軽石(試料番号8)



4.砂分の状況(試料番号9)

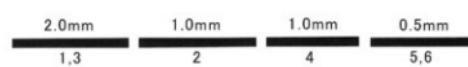


5.火山ガラス(試料番号1)



6.軽鉱物分の状況(試料番号6)

Vg:火山ガラス, Qz:石英, Pl:斜長石.



5 向中野館遺跡10・11次調査出土の堆積物について

弘前大学・理工学部・地球環境学科
柴 正敏

盛岡市向中野館遺跡より採集された、火山ガラスを含む堆積物サンプル7試料について、以下の観察・分析を行った。

これら試料について、超音波洗浄器を用いて水洗し、粘土鉱物など数マイクロメーター以下の粒子を除去した後、偏光顯微鏡を用いて、火山ガラスの有無、火山ガラスが存在する場合にはその形態、構成鉱物の種類を観察・記載した。その結果を表1に示した。火山ガラスは、その形態、屈折率、化学組成、共存鉱物などにより給源火山を推定することができる（町田・新井、2003）。火山ガラスの化学組成を決定する方法として、近年、電子プローブマイクロアナライザー（以下EPMA）が用いられるようになってきた。本報告では、7試料の火山ガラスについてEPMA分析を行った。使用したEPMAは弘前大学・機器分析センター所属の日本電子製JXA-8800RL、使用条件は加速電圧15kV、試料電流 5×10^{-9} アンペアである。補正計算はZAFに従った。

本遺跡より採集された堆積物より見出された火山ガラスは、その化学組成、形態、共存鉱物により十和田カルデラ起源である（表1及び2）。表2から明らかなように、9成分の含有量について、既存の十和田aテフラ起源のガラス組成（青木・町田、2006）と良く一致する。

試料1～6には、径0.3～1.0mmの軽石粒子が多量に含まれている。また、試料1・2・3・5及び7には、プラントオパールが認められる。

試料1及び7には、帰属不明なガラス ($\text{SiO}_2 = 78.3\text{--}78.0$, $\text{TiO}_2 = 0.13\text{--}0.04$, $\text{Al}_2\text{O}_3 = 11.9\text{--}11.8$, $\text{FeO}^+ = 1.3\text{--}1.2$, $\text{MnO} = 0.07\text{--}0.00$, $\text{MgO} = 0.06\text{--}0.08$, $\text{CaO} = 1.0\text{--}0.8$, $\text{Na}_2\text{O} = 4.4\text{--}4.0$, $\text{K}_2\text{O} = 3.2\text{--}3.6$) も認められる。周辺に分布するテフラのガラス組成のデータベース化が必要である。

引用文献

- 青木かおり・町田 洋 (2006)、日本に分布する第四紀後期広域テフラの主元素組成 — $\text{K}_2\text{O}\text{-}\text{TiO}_2$ 図によるテフラの識別。
地質調査研究報告、第57巻、第7/8号、239–258。
- 町田 洋・新井房夫 (2003)、新発火山灰アトラス – 日本国列島とその周辺 –、東京大学出版会、pp.336。

表1 向日野熊瀬跡、坪根物の構成試料及び火山ガラスの帰属

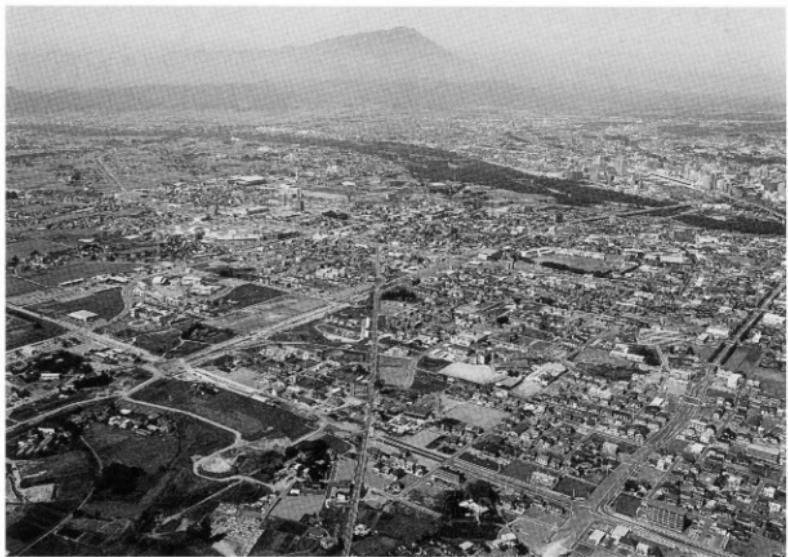
試料No.	出土地点	層位	ガラス及び鏡物		ガラスの帰属	等級	備考
			測土中位	(pm>bw)		60.5~1.0mm	
1	RD029土坑		ガラス (pm>bw)	褐色ガラス、斜長石、石英、斜方輝石、單斜輝石、鉄鉱	To-a	60.3~1.0mm	
2	RD000土坑	2層	ガラス (pm>bw)	褐色ガラス、斜長石、石英、斜方輝石、單斜輝石、鉄鉱	To-a	60.5~1.0mm	
3	1K6aグリッド	Ⅲb層	ガラス (pm>bw)	褐色ガラス、斜長石、石英、斜方輝石、單斜輝石、鉄鉱	To-a	60.5~1.0mm	田河道
4	1K9cグリッド	Ⅲb層	ガラス (pm>bw)	褐色ガラス、斜長石、石英、斜方輝石、單斜輝石、鉄鉱	To-a	60.5~1.0mm	田河道
5	1J6cグリッド	Ⅲb層	ガラス (pm>bw)	褐色ガラス、斜長石、石英、斜方輝石、單斜輝石、鉄鉱	To-a	60.3~0.8mm	田河道
6	1J10cグリッド	Ⅲd層	ガラス (pm>bw)	褐色ガラス、斜長石、石英、斜方輝石、單斜輝石、鉄鉱	To-a	60.3~1.0mm	田河道
7	1J10cグリッド	Ⅲd層	ガラス (pm>bw)	褐色ガラス、斜長石、石英、斜方輝石、單斜輝石、鉄鉱	To-a	なし	田河道

pm : 鋼石型ガラス、bw : バブルウォール型ガラス、To-a : +和田アフタ。

表2 向中野館遺跡、テフラガラスのEPMA分析値

試料No.1 RD029土坑 埋土中位												N	EPMA
		SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	Total		
最小	75.71	0.27	11.11	1.70	0.00	0.37	1.87	4.15	1.21				
最大	78.42	0.48	12.96	2.25	0.17	0.51	2.24	4.75	1.61				
平均	76.87	0.37	12.42	1.93	0.08	0.44	1.99	4.47	1.42	99.51	19	WDS	
標準偏差	0.524	0.054	0.380	0.140	0.049	0.039	0.091	0.165	0.088				
試料No.2 RD030土坑 2層													
最小	76.10	0.20	11.82	1.49	0.06	0.32	1.84	4.04	1.18				
最大	77.48	0.42	12.83	2.13	0.22	0.52	2.22	4.70	1.54				
平均	76.95	0.34	12.42	1.87	0.11	0.42	2.02	4.45	1.42	98.58	22	WDS	
標準偏差	0.340	0.063	0.235	0.146	0.042	0.054	0.103	0.167	0.083				
試料No.3 1K6aグリッド III b 層													
最小	76.22	0.24	11.87	1.71	0.02	0.36	1.89	4.01	0.96				
最大	77.64	0.51	12.99	2.52	0.18	0.52	2.24	4.98	1.59				
平均	76.86	0.35	12.40	1.95	0.09	0.42	2.04	4.52	1.37	101.62	18	WDS	
標準偏差	0.383	0.055	0.281	0.168	0.046	0.045	0.090	0.210	0.165				
試料No.4 1K9rグリッド III b 層													
最小	76.47	0.30	11.96	1.78	0.05	0.32	1.82	4.04	0.71				
最大	77.81	0.47	12.80	2.14	0.22	0.52	2.17	4.78	1.64				
平均	76.89	0.38	12.47	1.99	0.13	0.43	1.99	4.44	1.28	101.88	18	WDS	
標準偏差	0.344	0.041	0.220	0.111	0.044	0.045	0.108	0.187	0.220				
試料No.5 1J6oグリッド III b 層													
最小	76.55	0.18	11.28	1.76	0.01	0.35	1.78	4.03	1.23				
最大	77.87	0.48	12.78	2.17	0.24	0.52	2.13	4.67	1.53				
平均	77.10	0.34	12.41	1.97	0.09	0.42	1.99	4.31	1.38	98.92	22	WDS	
標準偏差	0.322	0.073	0.330	0.127	0.061	0.045	0.102	0.167	0.076				
試料No.6 1J10oグリッド III b 層													
最小	76.39	0.26	12.06	1.83	0.01	0.32	1.89	3.86	1.04				
最大	77.84	0.54	12.83	2.17	0.18	0.50	2.08	4.53	1.49				
平均	76.94	0.39	12.62	1.97	0.11	0.42	1.95	4.24	1.36	99.85	14	WDS	
標準偏差	0.400	0.086	0.205	0.124	0.043	0.046	0.051	0.188	0.112				
試料No.7 1J10oグリッド III d 層													
最小	76.68	0.17	11.66	1.16	0.00	0.10	2.01	4.33	1.38				
最大	78.90	0.31	12.63	2.01	0.16	0.44	2.14	4.60	1.46				
平均	77.50	0.26	12.17	1.72	0.09	0.30	2.05	4.49	1.41	99.07	3	WDS	
標準偏差	1.218	0.077	0.487	0.491	0.084	0.178	0.073	0.140	0.042				
青木・町田(2006)													
To-a													
Sample ID	77.75	0.36	12.73	1.62	0.09	0.38	1.81	3.90	1.37	98.41	19	WDS	
Sample ID	77.69	0.36	12.74	1.68	0.09	0.35	1.80	3.99	1.31	98.53	8	WDS	
Sample ID	76.17	0.42	13.41	1.89	0.09	0.38	1.99	4.08	1.56	92.89	18	WDS	

FeO* : 鉄はすべてFeOとした、WDS : 波長分散型EPMA、To-a : 十和田a テフラ。



南東から



東上空から

写真図版1 航空写真（1）



土壌・堤検出状況 北側から



完掘状況 北側から

写真図版2 航空写真（2）



北から

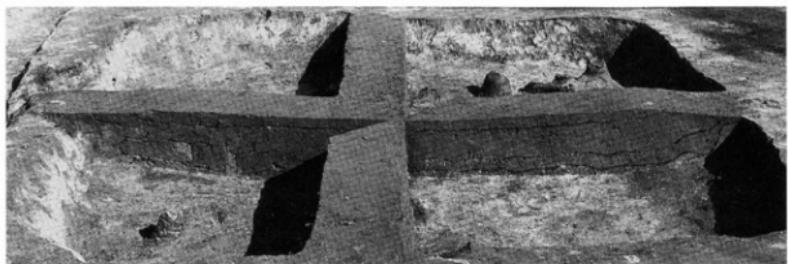


東から

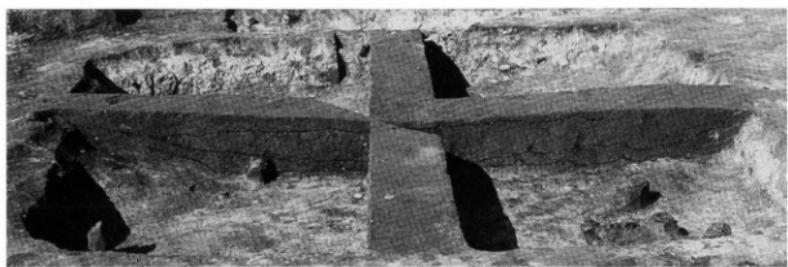
写真図版3 調査前風景



完掘（東から）



断面（西から）



断面（南から）

写真図版 4 RAO18竪穴住居跡（1）



カマド



カマド断面



カマド袖構築土器



炭化材検出状況（東から）

写真図版 5 RA018竪穴住居跡（2）



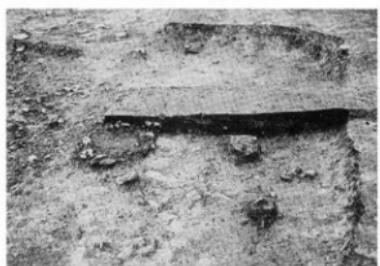
RA019完掘（南から）



RA019断面（東から）



RA024完掘（東から）



RA024断面（東から）

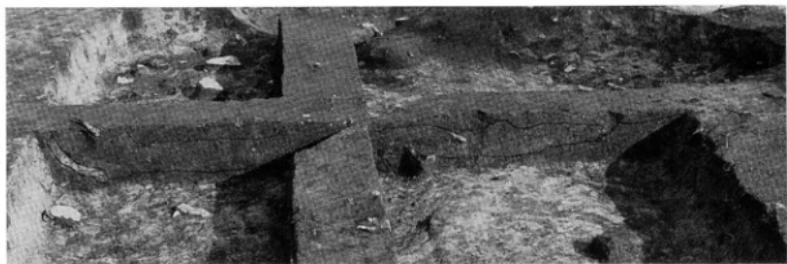


RA024土坑1断面

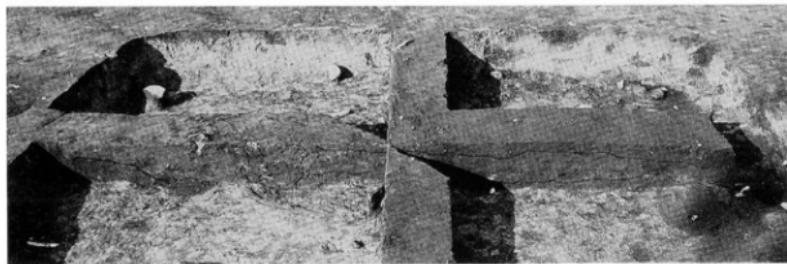
写真図版6 RA019・024竪穴住居跡



実掘（西から）

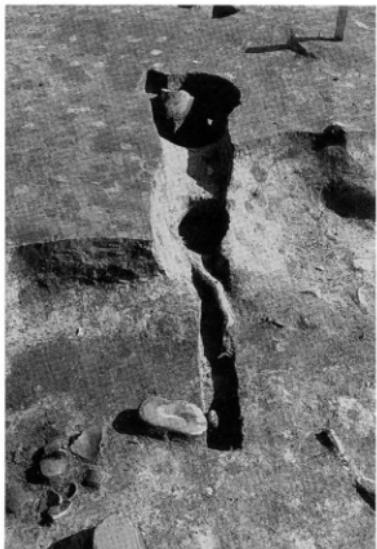


断面（西から）



断面（南から）

写真図版 7 RA020堅穴住居跡（1）



1号カマド



2号カマド



1号カマド煙道・煙出し断面



2号カマド煙道・煙出し断面



遺物出土状況



遺物出土状況

写真図版 8 RA020竪穴住居跡（2）



完掘（西から）

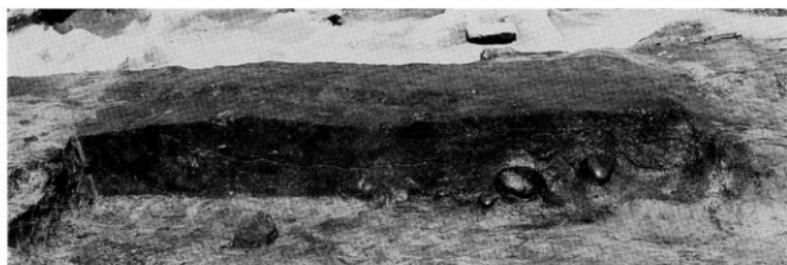


断面

写真図版9 RA021竪穴住居跡



実掘（西から）



断面（南から）



カマド断面



カマド左袖下遺物出土状況

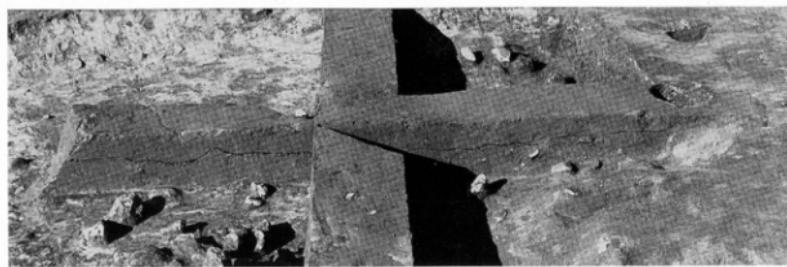
写真図版10 RA022竪穴住居跡



完掘（西から）



断面（西から）



断面（南から）

写真図版11 RA023竪穴住居跡（1）



カマド



カマド断面



土坑 1 断面



遺物出土状況（西から）

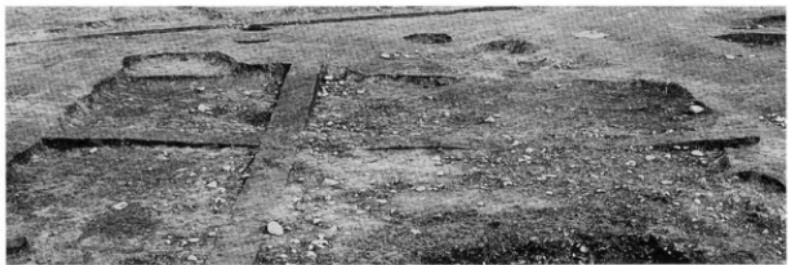
写真図版12 RA023竪穴住居跡（2）



完掘（南から）



断面（東から）



断面（南から）

写真図版13 RAO25竪穴住居跡（1）



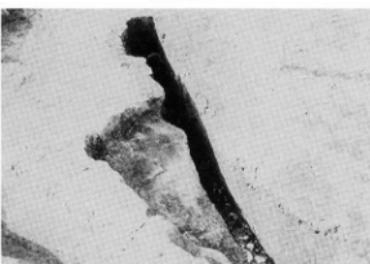
1号カマド



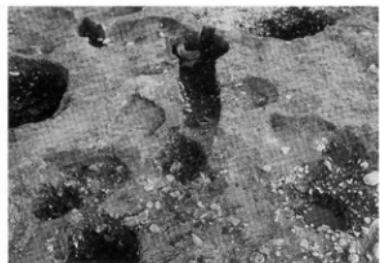
2号カマド



1号カマド断面



2号カマド煙道断面



3号カマド



3号カマド煙道・煙出し断面

写真図版14 RA025竪穴住居跡（2）



実掘（北東から）



断面（南から）



断面（西から）

写真図版15 RA026竪穴住居跡（1）



カマド



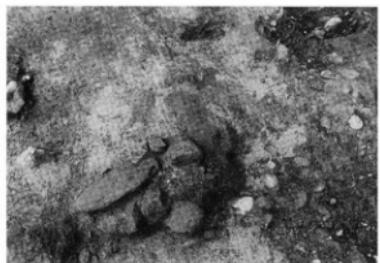
煙道・煙出し断面



カマド袖断面



焼土検出状況



焼土検出状況



焼土検出状況

写真図版16 RA026竪穴住居跡（2）



完掘（西から）



断面（西から）



カマド塗断ち割り



カマド左脇焼土下土器出土状況

写真図版17 RA027竪穴住居跡



実掘（西から）



カマド



埋土断面



カマド煙道・煙出し断面

写真図版18 RA028竪穴住居跡



実掘（東から）



断面（東から）



カマド



カマド断面

写真図版19 RAO29竪穴住居跡



完掘（北から）



断面（北から）



カマド



カマド断面

写真図版20 RA030竪穴住居跡



実掘（北から）



断面（南東から）



断面（西から）

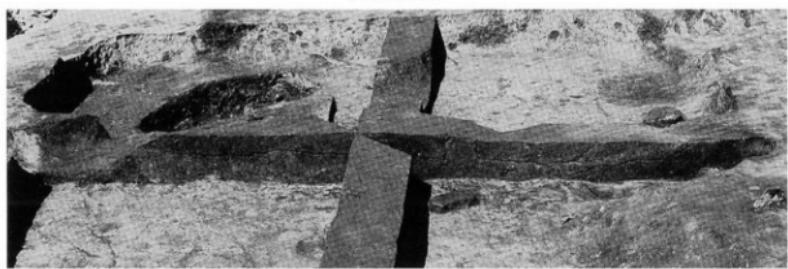
写真図版21 RA031竪穴住居跡



完掘（西から）



断面（西から）



断面（南から）

写真図版22 RA032整穴住居跡（1）



カマド



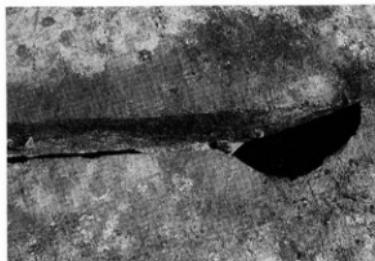
カマド構築礎



カマド断面



カマド断面



煙道・煙出し断面

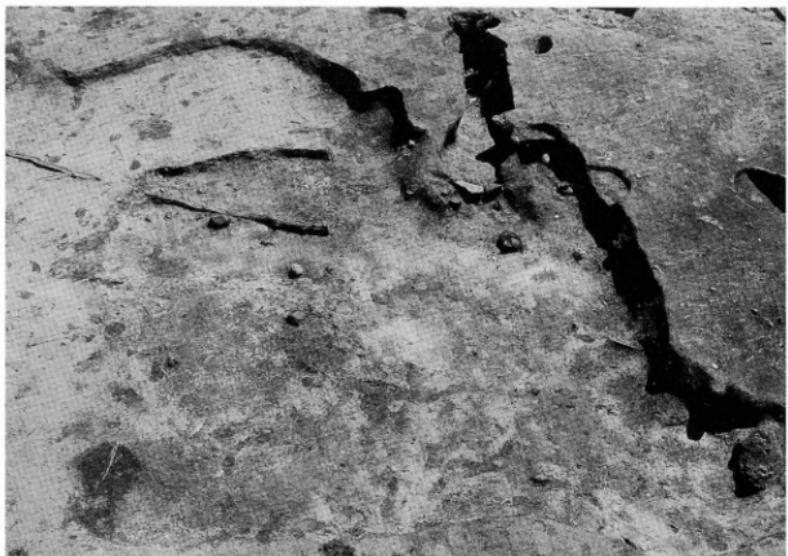


土坑1断面

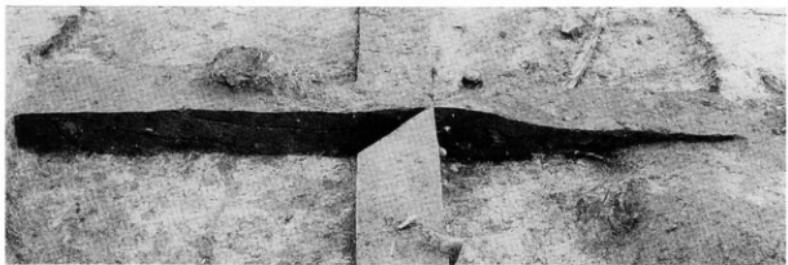


土坑2断面

写真図版23 RA032竪穴住居跡（2）



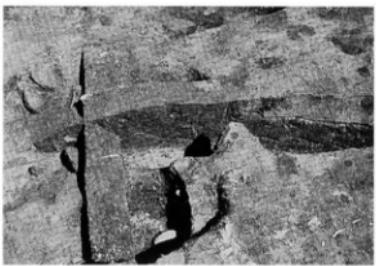
完掘（北面から）



断面（南東から）

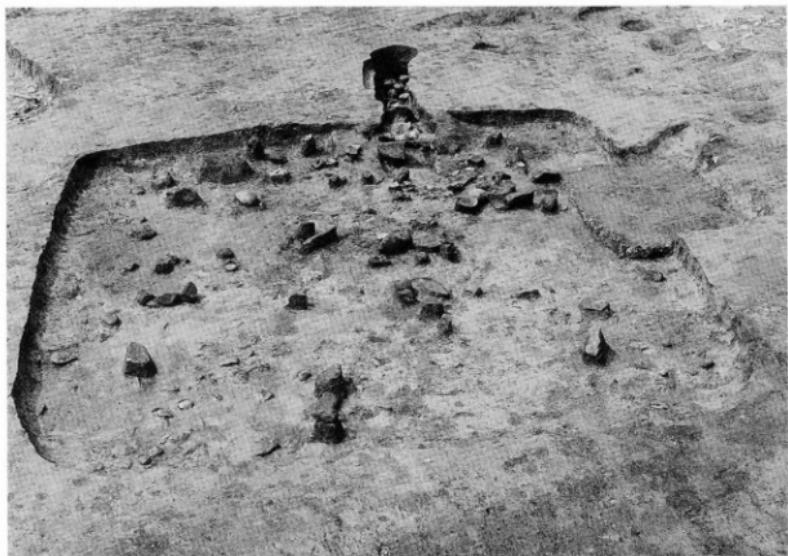


カマド



カマド断面

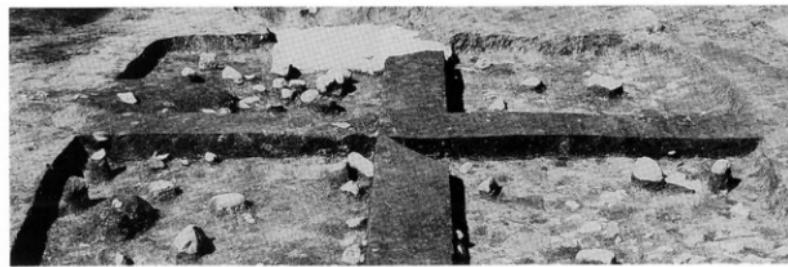
写真図版24 RA033竪穴住居跡



実掘（東から）



断面（西から）



断面（南から）



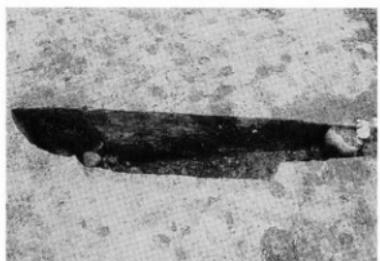
カマド



カマド断ち割り



カマド断面



煙道断面



カマド断面

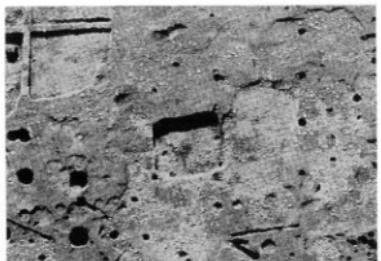


カマド遺物出土状況



遺物出土状況

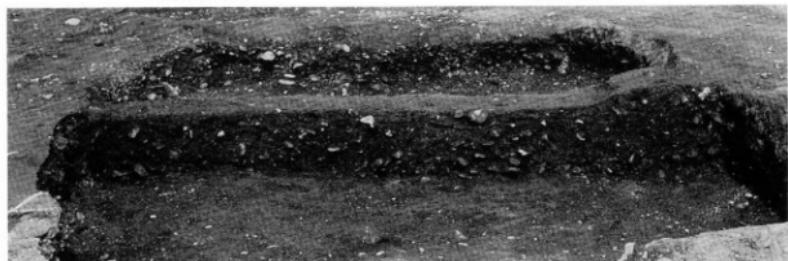
写真図版26 RA034竪穴住居跡（2）



RA035（航空写真）



床面、焼土、灰たちわり



RA035断面



RB009完掘（南から）

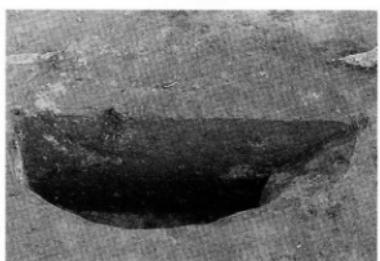
写真図版27 RA035竪穴住居跡、RB009掘立柱建物跡（1）



PP109断面



PP108断面



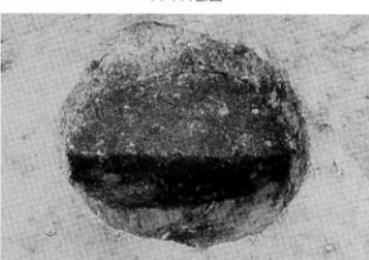
PP131断面



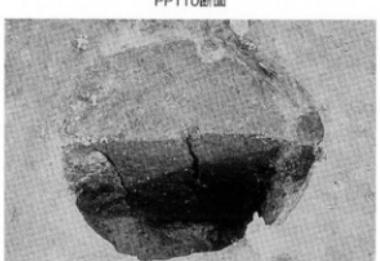
PP111断面



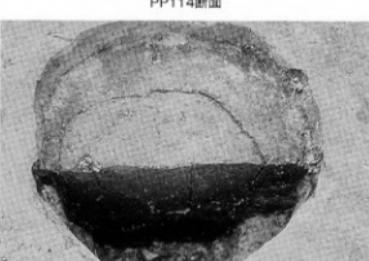
PP110断面



PP114断面



PP113断面



PP112断面

写真図版28 RB009掘立柱建物跡（2）



RB010完掘（西から）



RB010 PP91断面



体験学習風景



調査風景

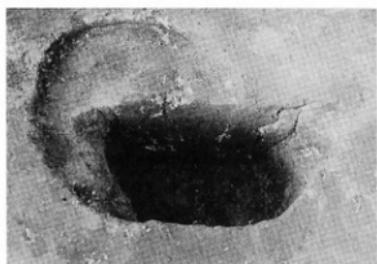


調査風景

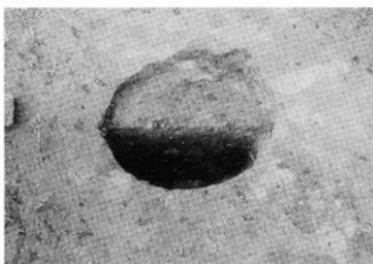
写真図版29 RB010掘立柱建物跡



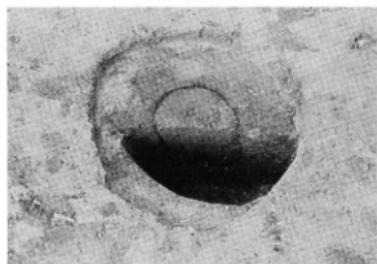
RB011実掘（南から）



PP18断面



PP19断面

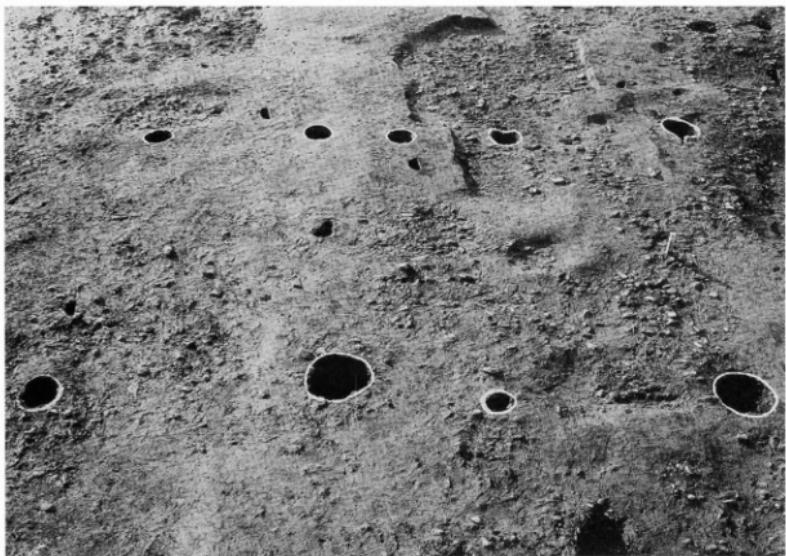


PP21断面

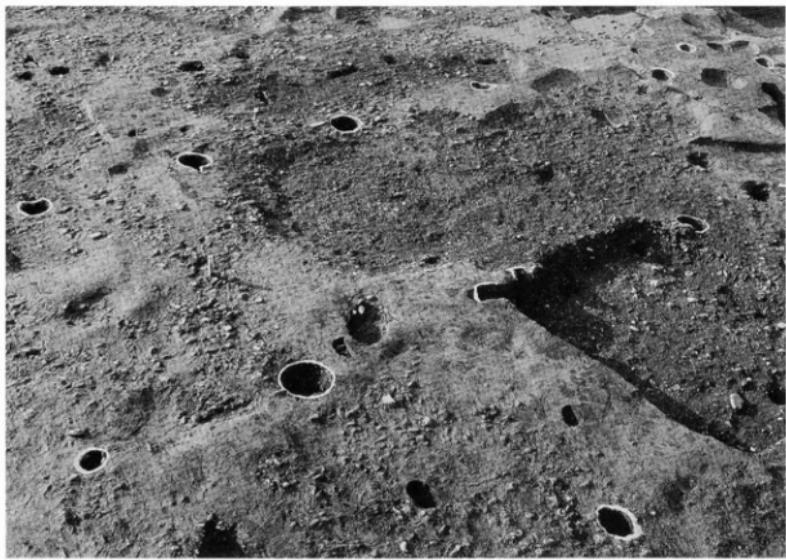


PP22断面

写真図版30 RB011掘立柱建物跡



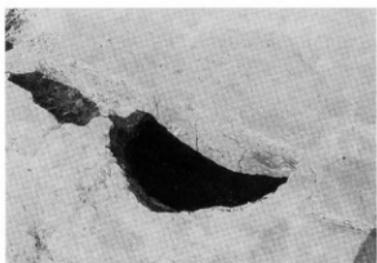
完掘南側（東から）



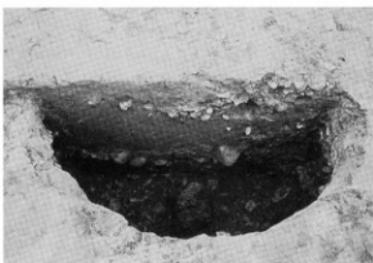
完掘北側（東南から）



RB013完掘（南から）



PP115断面



PP116断面



PP118断面



PP119断面

写真図版32 RB013掘立柱建物跡（1）



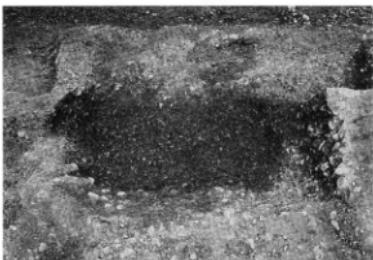
PP121断面



PP123断面



RC001穴掘（西から）



RD027穴掘



RD027断面



RD028穴掘



RD028断面

写真図版33 RB013掘立柱建物跡（2）、RC001柱穴列、RD027・028土坑



RD029 完掘



RD029 断面



RD030 完掘



RD030 断面



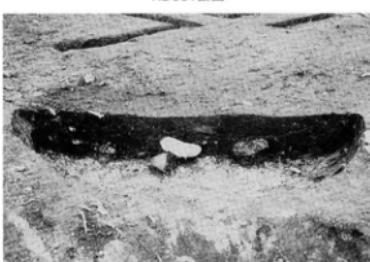
RD031 完掘



RD031 断面



RD032 完掘



RD032 断面

写真図版34 RD029~032土坑



RD033完掘



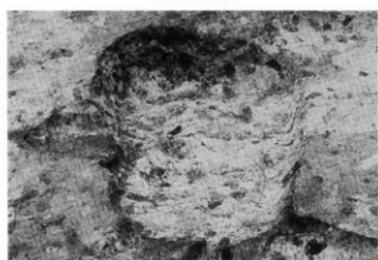
RD033断面



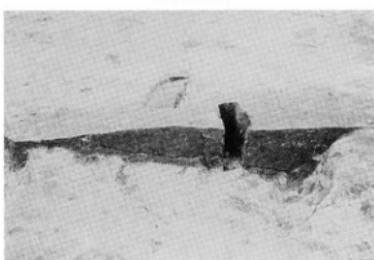
RD034完掘



RD034断面



RD035完掘



RD035断面



RD037完掘



RD037断面

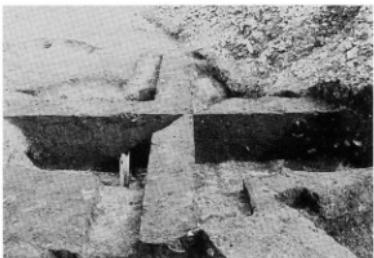
写真図版35 RD033~035・037土坑



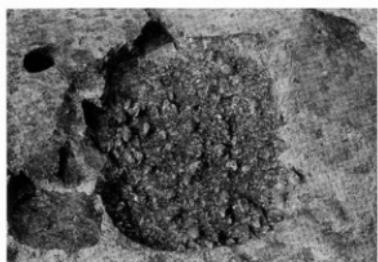
RD036完掘



RD036断面



RD036断面



RD038完掘



RD038断面



RD039完掘

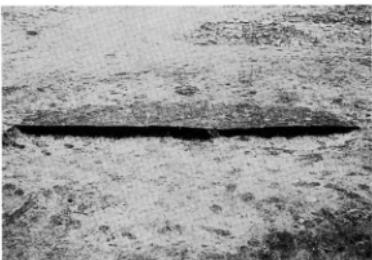


RD039断面

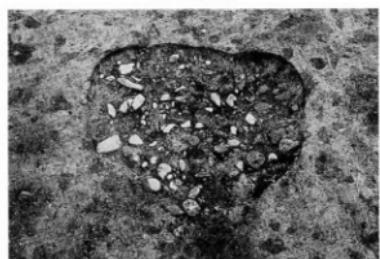
写真図版36 RD036・038・039土坑



RD040完掘



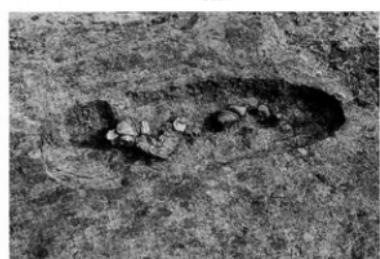
RD040断面



RD041完掘



RD041断面



RD042完掘



RD042断面



RD043完掘



RD043断面

写真図版37 RD040～043土坑



RD044完掘



RD044断面



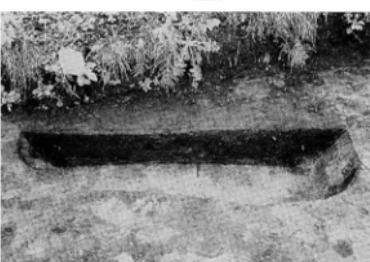
RD045・052完掘



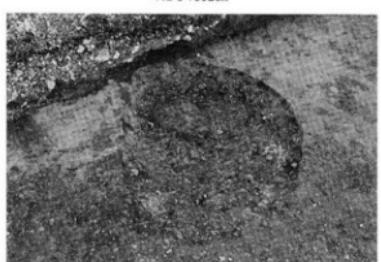
RD045断面



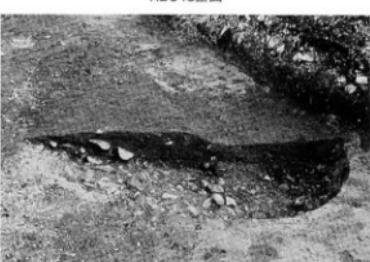
RD046完掘



RD046断面



RD047完掘

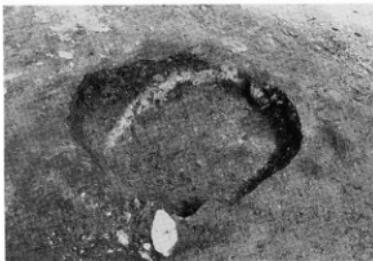


RD047断面

写真図版38 RD044～047・052土坑



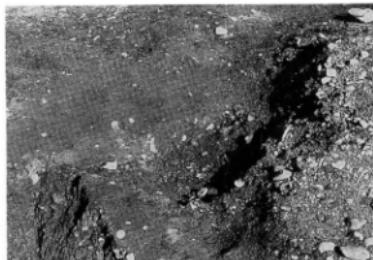
RD048馬骨出土状況



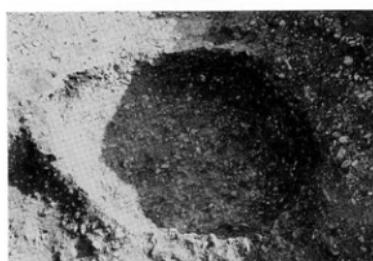
RD048完掘



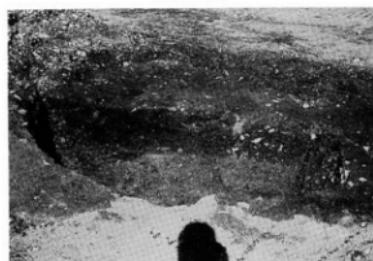
RD049完掘



RD049断面



RD050完掘



RD050断面



RD054完掘



RD054断面

写真図版39 RD048~050・054土坑



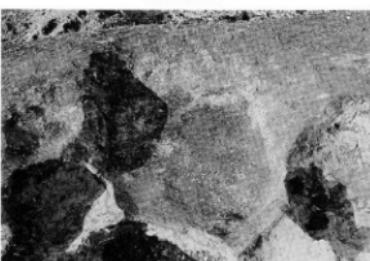
RD051完掘



RD051断面



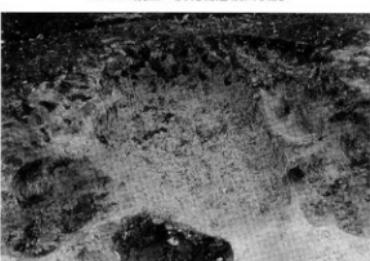
RD051土器出土状況



RD053燃土・炭化物層様



RD053断面



RD053完掘



RD055完掘



RD055断面

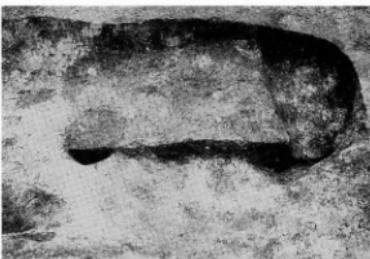
写真図版40 RD051・053・055土坑



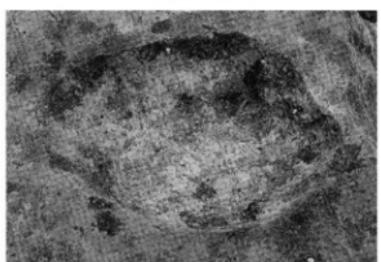
RD056使用面



RD056断面



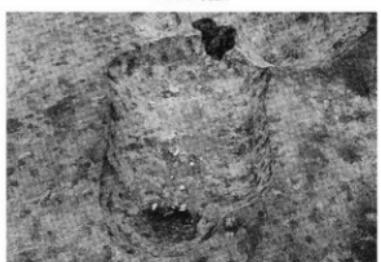
RD056断ち割り



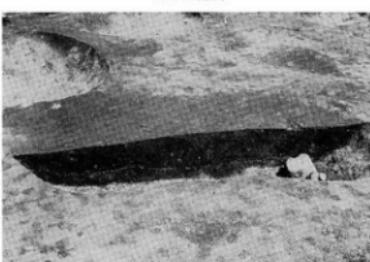
RD057完標



RD057断面



RD058完標



RD058断面

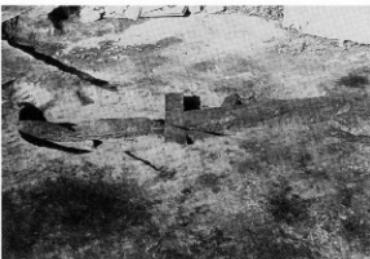
写真図版41 RD056~058土坑



RD059完掘



RD059断面



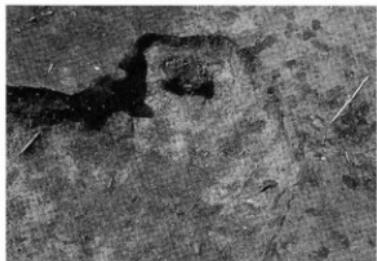
RD059断面



RD060完掘



RD060断面

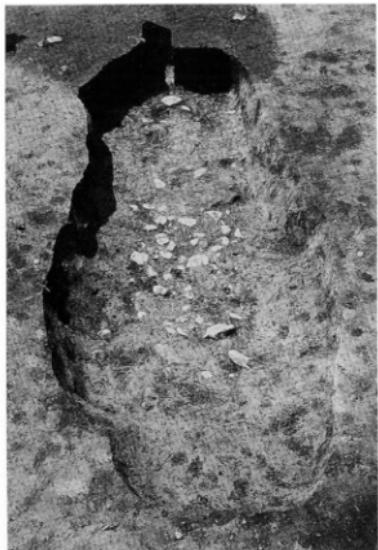


RD064完掘

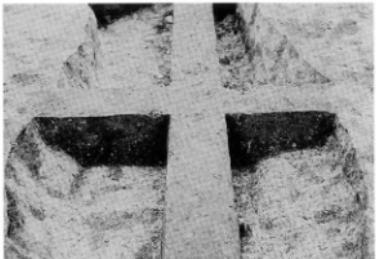


RD064断面

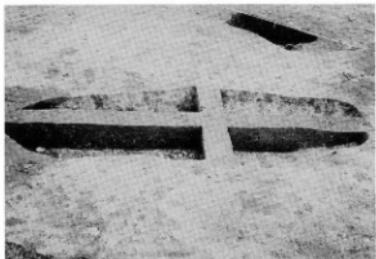
写真図版42 RD059・060・064土坑



RD061完掘



RD061断面



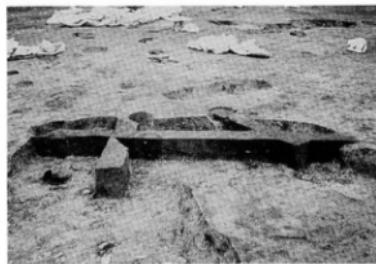
RD061断面



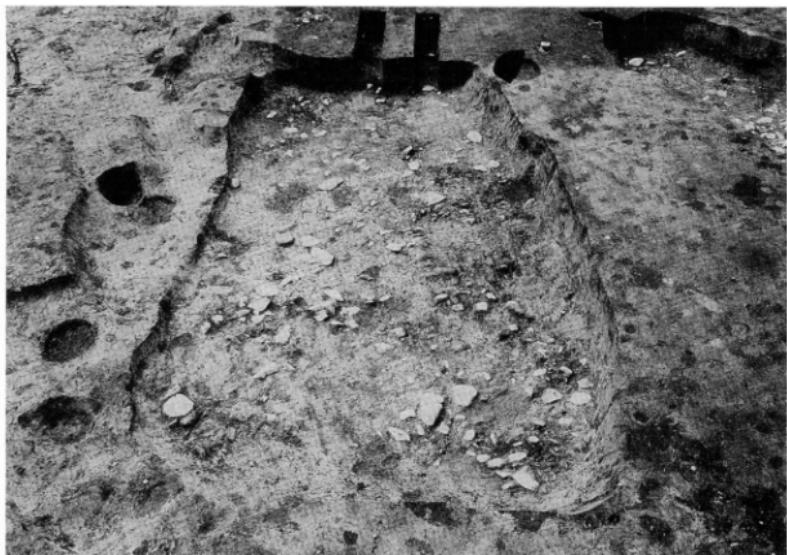
RD062完掘



RD062断面



RD062断面



RD063完掘



RD063断面



RD063断面



RD065完掘

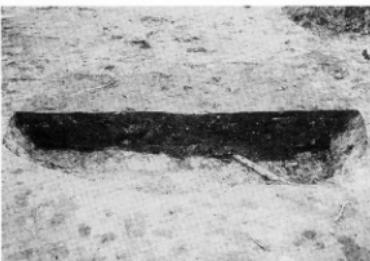


RD065断面

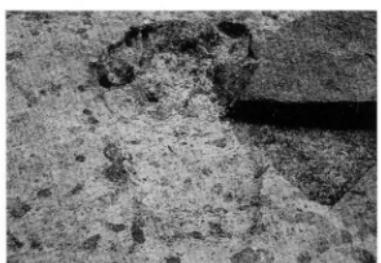
写真図版44 RD063・065土坑



RD066全図



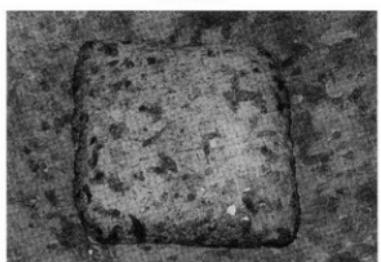
RD066断面



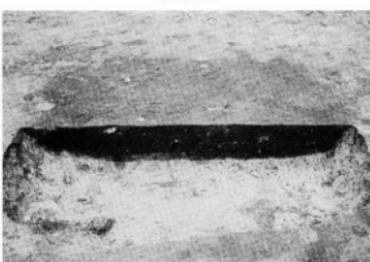
RD067全図



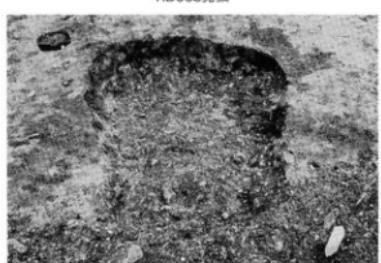
調査風景



RD068全図



RD068断面



RD069全図

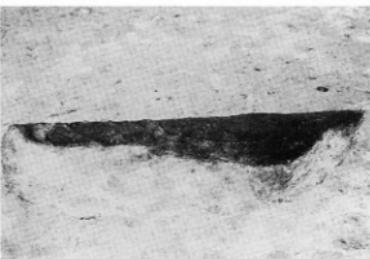


RD069断面

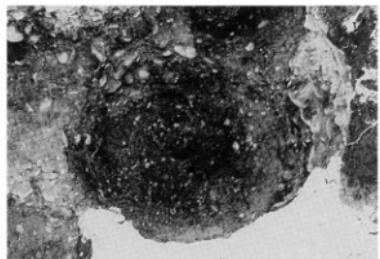
写真図版45 RD066~069土坑



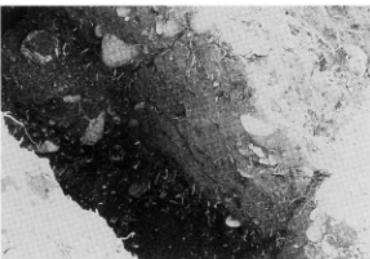
RD070全觀



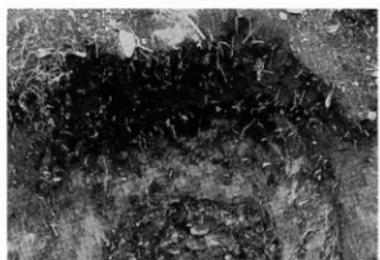
RD070断面



RD071全觀



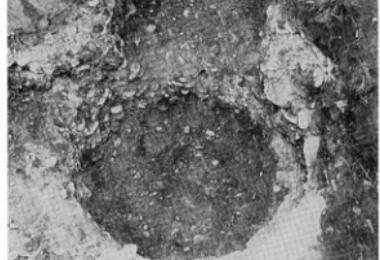
RD071断面



RD072全觀



RD072断面

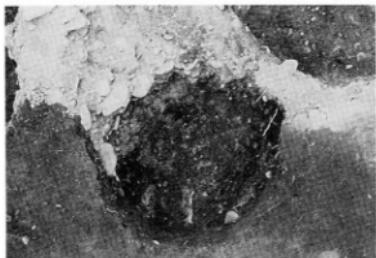


RD072全觀

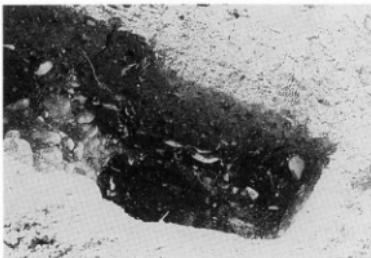


RD072人骨出土狀況

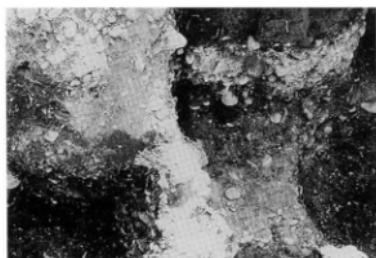
写真図版46 RD070~072土坑



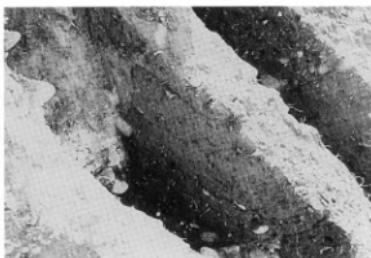
RD073完掘



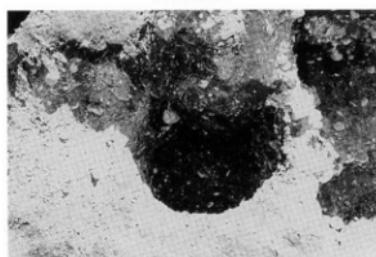
RD073断面



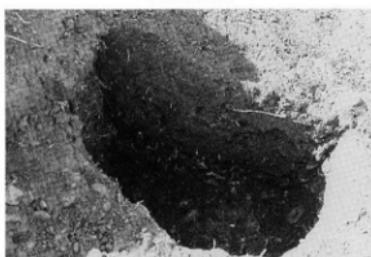
RD074完掘



RD074断面



RD075完掘



RD075断面

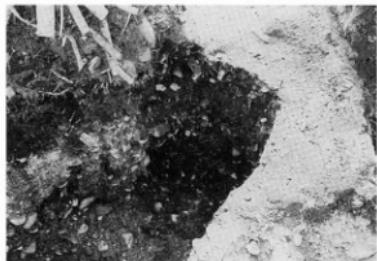


RD076完掘



RD076検出状況

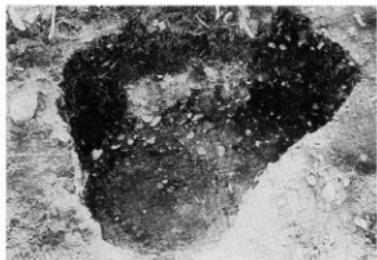
写真図版47 RD073~076土坑



RD077検出状況



RD078検出状況



RD078検出状況



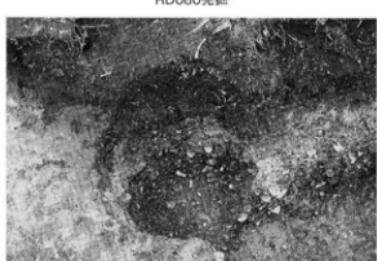
RD078断面



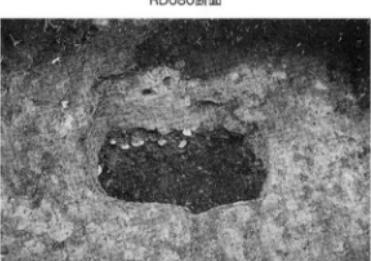
RD080検出状況



RD080断面



RD079検出状況

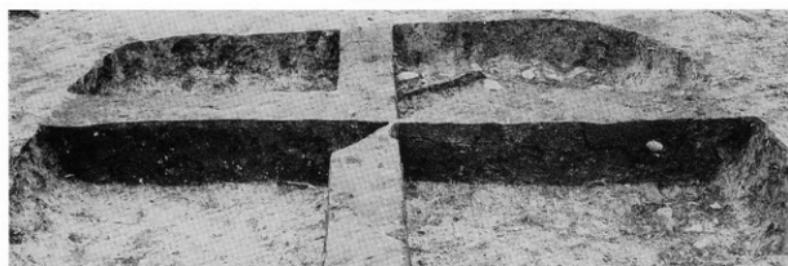


RD081検出状況

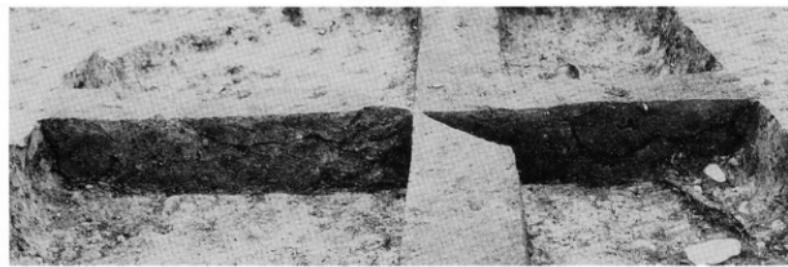
写真図版48 RD077~081土坑



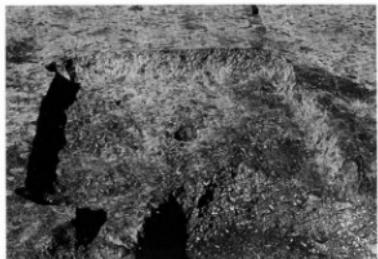
穴掘（南から）



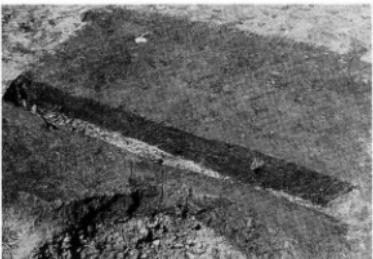
断面（南から）



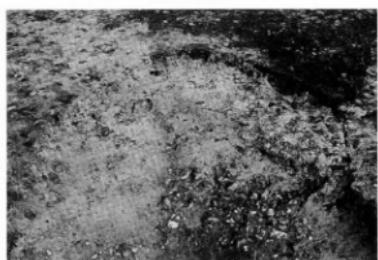
断面（東から）



RE004完掘



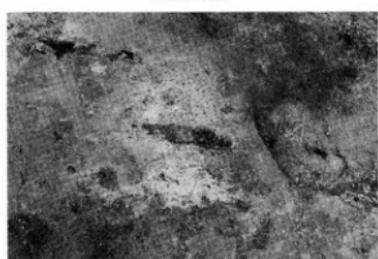
RE004断面



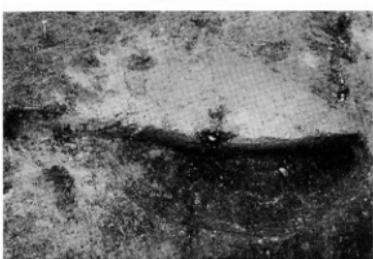
RE005完掘



RE005断面



RF003棱出状況



RF003断面

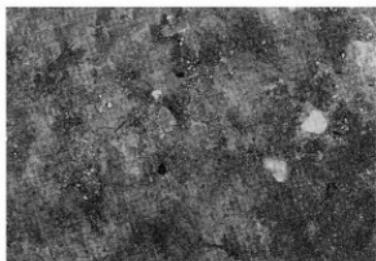


RF004棱出状況



RF004断面

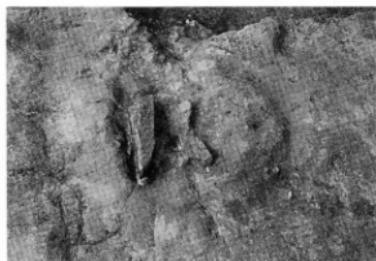
写真図版50 RE004・005竪穴状遺構、RF003・004焼土遺構



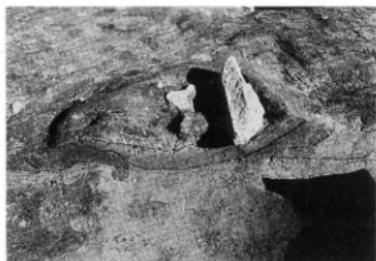
RF005出土状況



RF005断面



RF006出土状況



RF006断面



RF007断面



調査風景



PP6出土状況



PP7出土状況

写真図版51 RF005~007焼土遺構



RG012西辺（南から）



西辺断面（南から）

写真図版52 RG012堀跡（1）



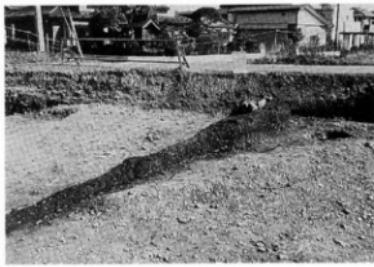
RG012北辺（東から）



RG012断面（西から）



RG013（北西から）



RG013断面（南西から）

写真図版53 RG012 (2)・013堆跡



RG014 (東から)



断面A-A'



断面B-B'



RG015 (南から)



断面A-A'



断面B-B'

写真図版54 RG014・015溝跡



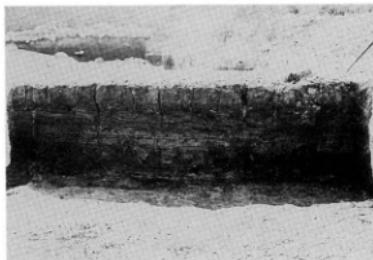
旧河道（東から）



旧河道（西から）



断面（西から）



断面（東から）



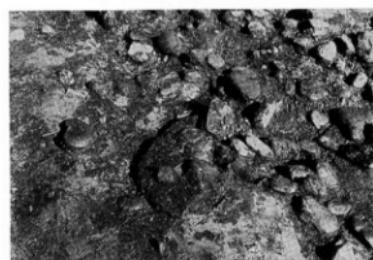
RZ017遺物集中区



RZ017遺物集中区

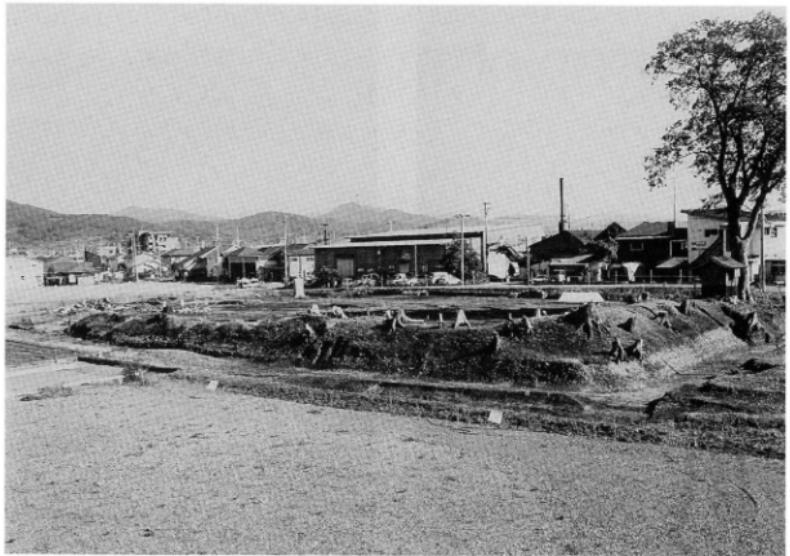


土器出土状況



土器出土状況

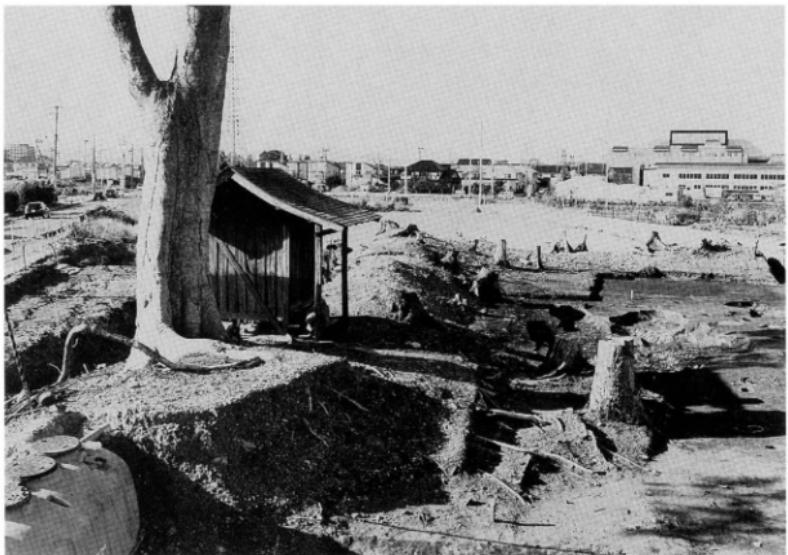
写真図版55 旧河道、RZ017遺物集中区



検出状況（北西から）



検出状況（東から）



西辺（南から）



西辺断面（東から）

写真図版57 RZ018土壙跡（2）



北辺断面（南から）



北辺断面（東から）

写真図版58 RZ018土壌跡（3）



PP223・224・249～263



PP125・233～247

写真図版59 柱穴群



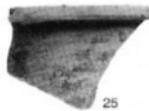
写真図版60 土器（1）



写真図版61 土器（2）



24



25



26



27

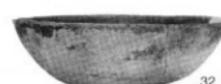
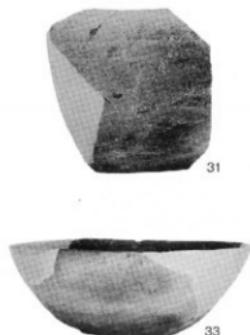


28

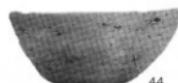


29

写真図版62 土器（3）



写真図版63 土器（4）



44



45



46



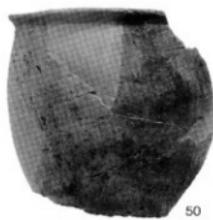
47



48



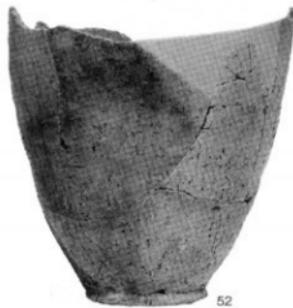
49



50



51



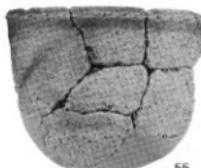
52



53



54



55

写真図版64 土器（5）



56



57



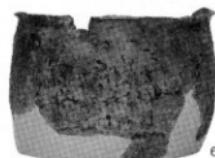
58



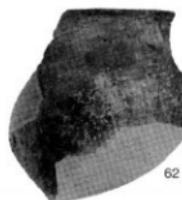
59



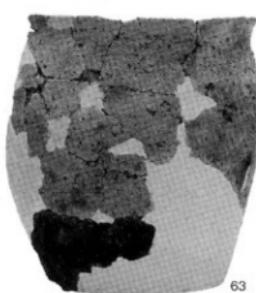
60



61



62



63



64



65



66



67

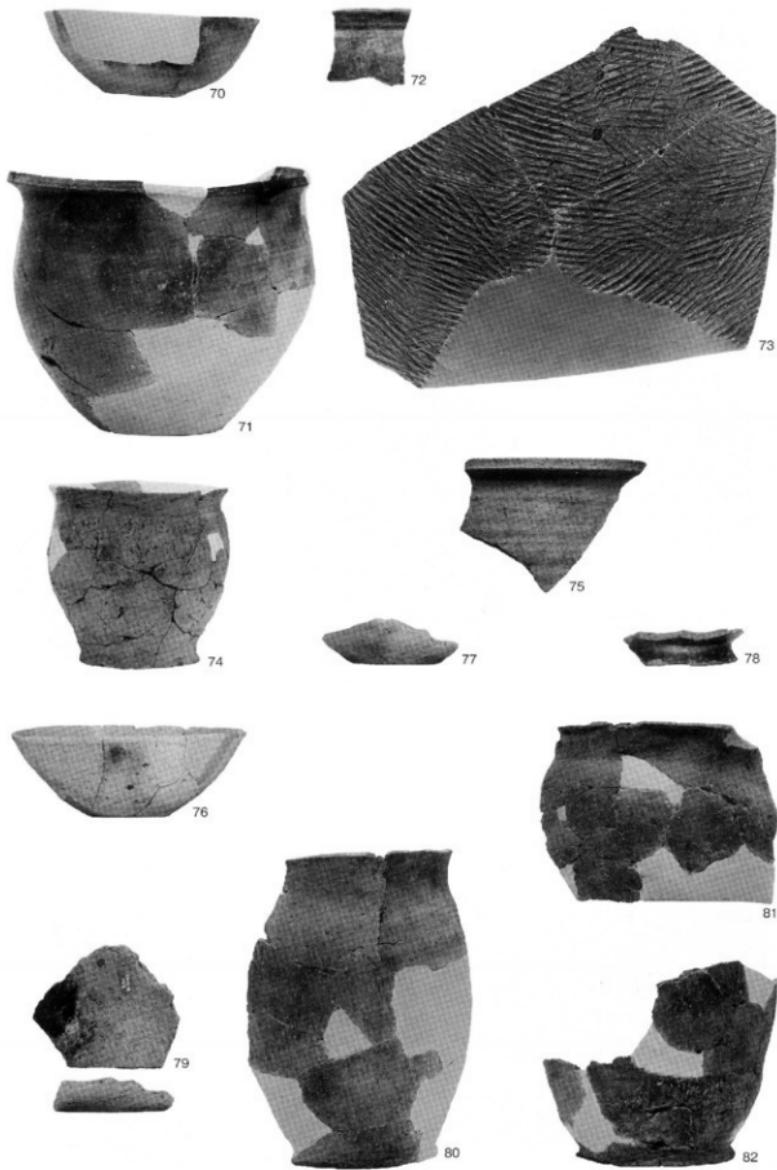


68

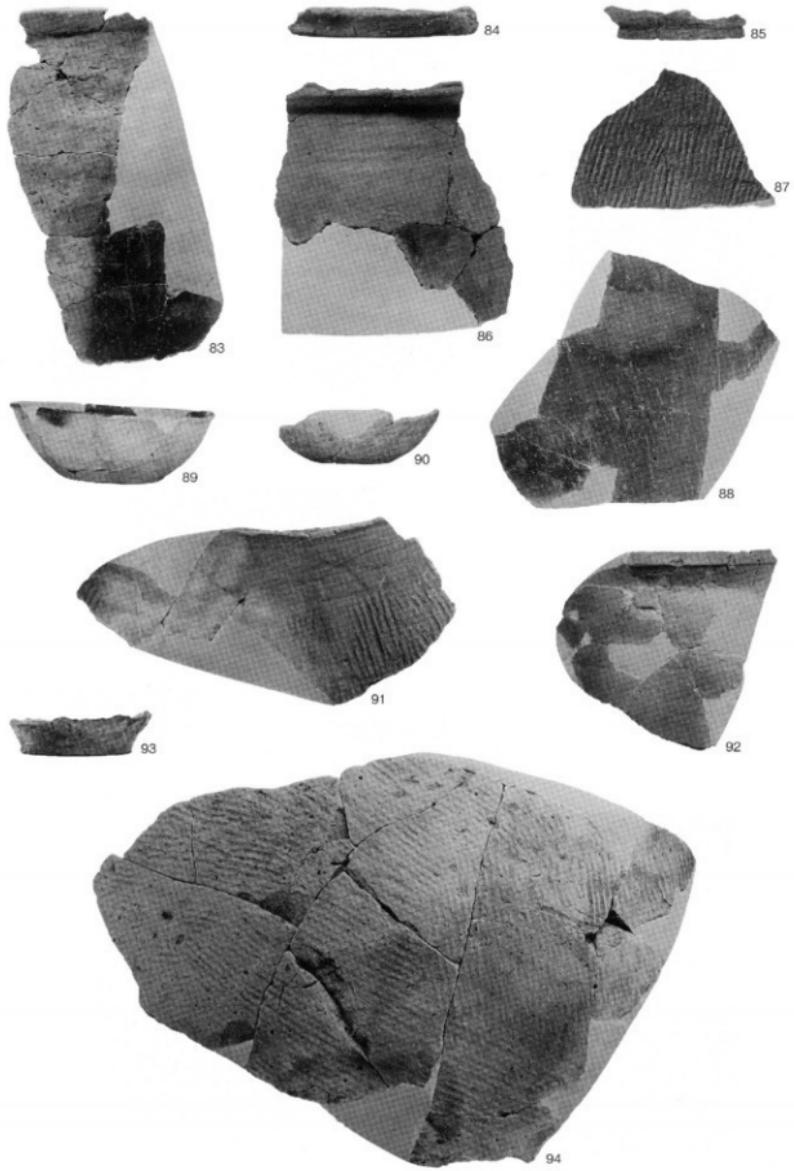


69

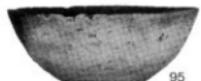
写真図版65 土器（6）



写真図版66 土器 (7)



写真図版67 土器 (8)



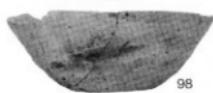
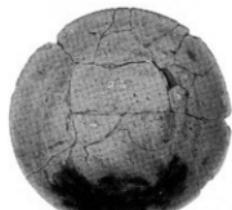
95



96



97



98



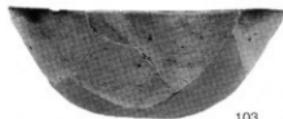
100



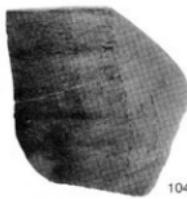
101



102



103



104



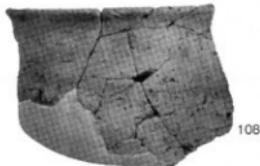
105



106



107

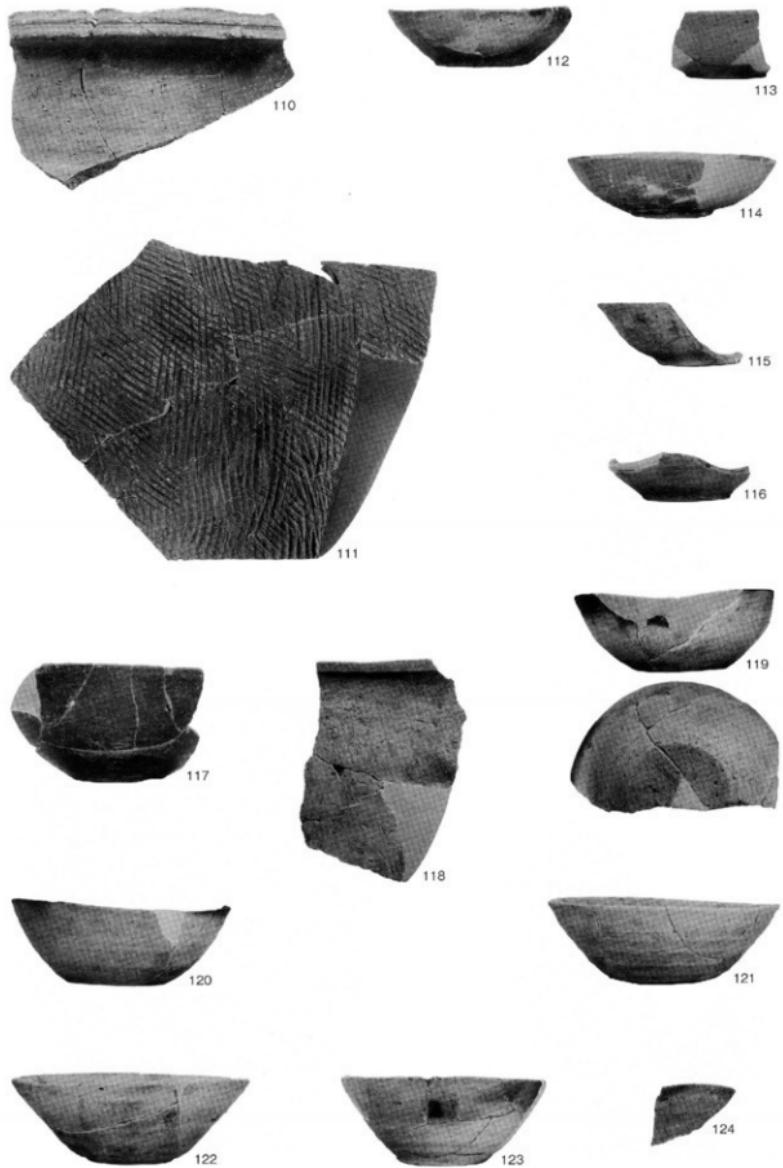


108

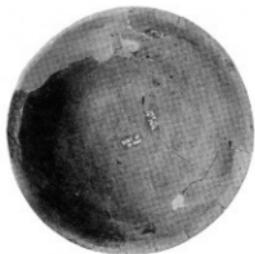


109

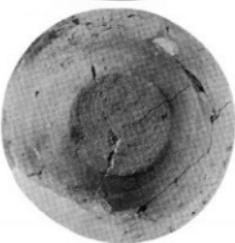
写真図版68 土器（9）



写真図版69 土器 (10)



125



126



129



127



128



130

写真図版70 土器 (11)



写真図版71 土器 (12)



142



143



144



145



146



147



148



149



150



151



152



153



154



155



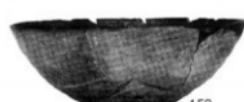
156



157



158



159



160

写真図版72 土器 (13)



161



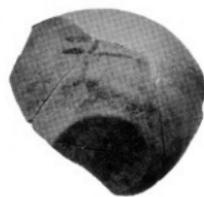
162



163



164



165



166



167



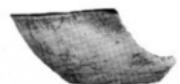
168



169



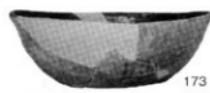
170



171



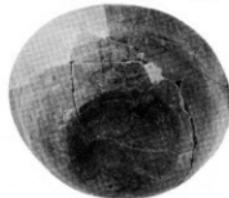
172



173



174



175

写真図版73 土器 (14)



176



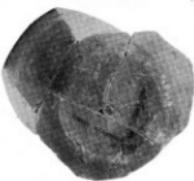
177



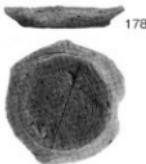
179



180



181



178



182



183



184



185



186



187



188



189



190



191



192



193



194



195



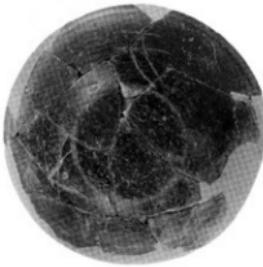
196



197



198



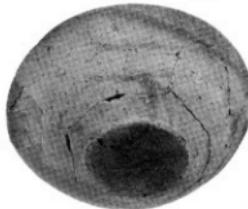
199



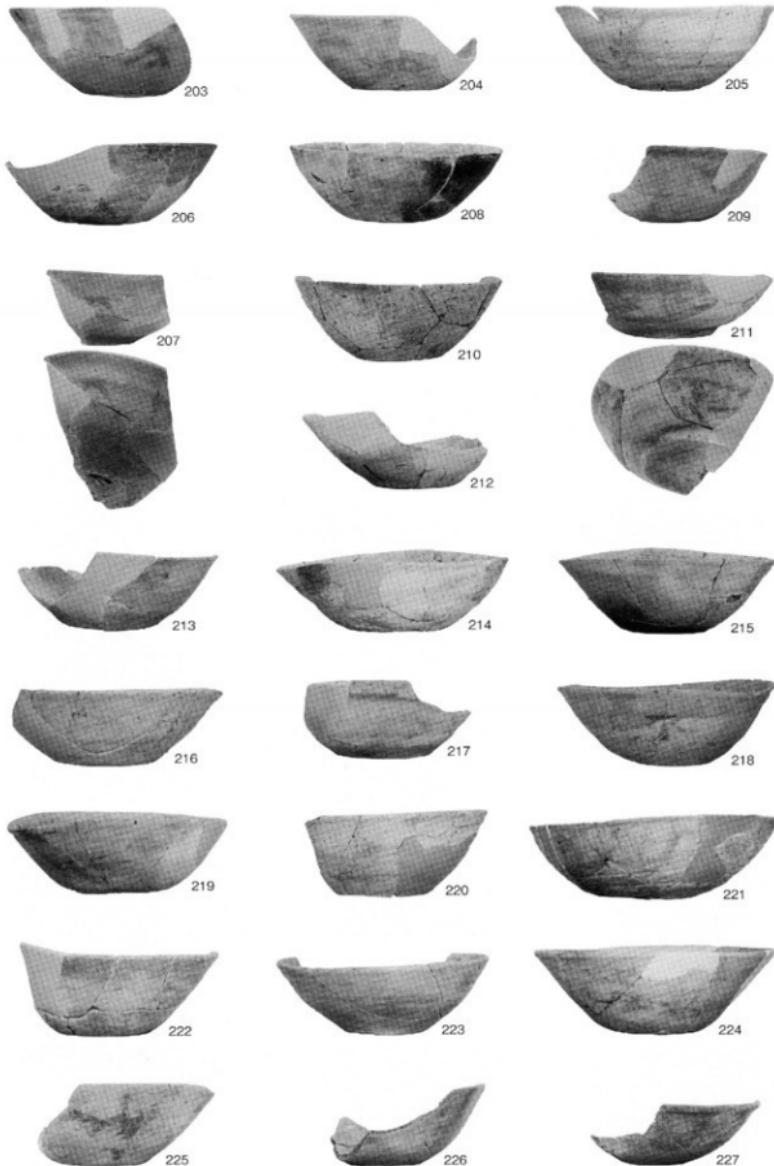
200



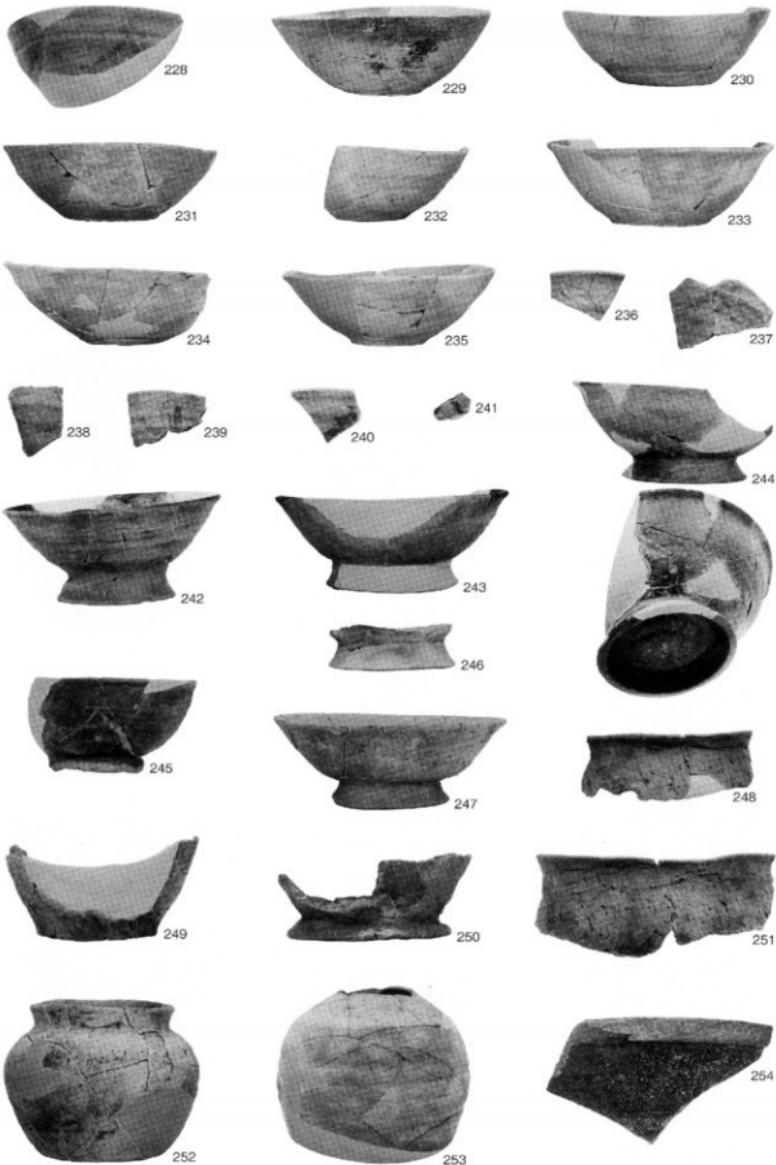
201



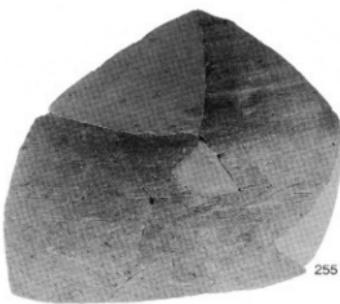
写真図版74 土器 (15)



写真図版75 土器 (16)



写真図版76 土器 (17)



255



256



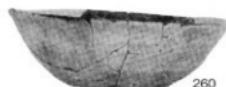
257



258



259



260



261



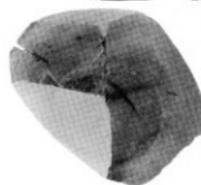
262



263



264



265



266



267

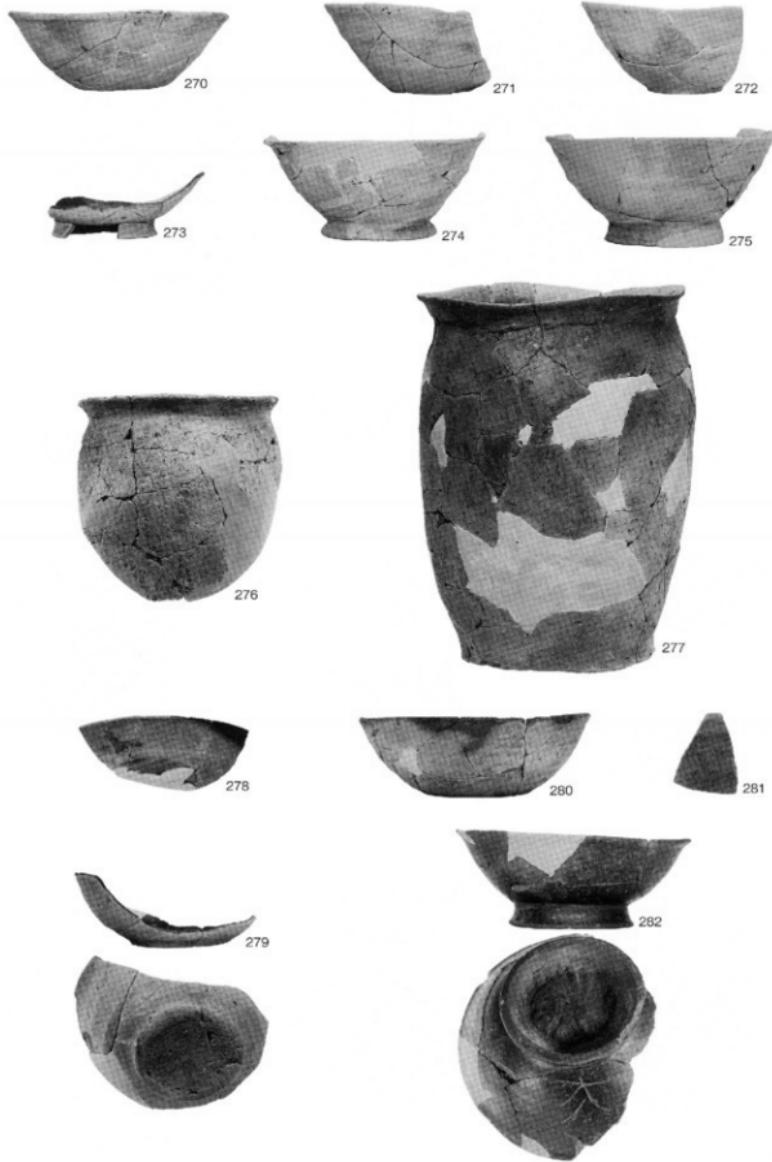


268

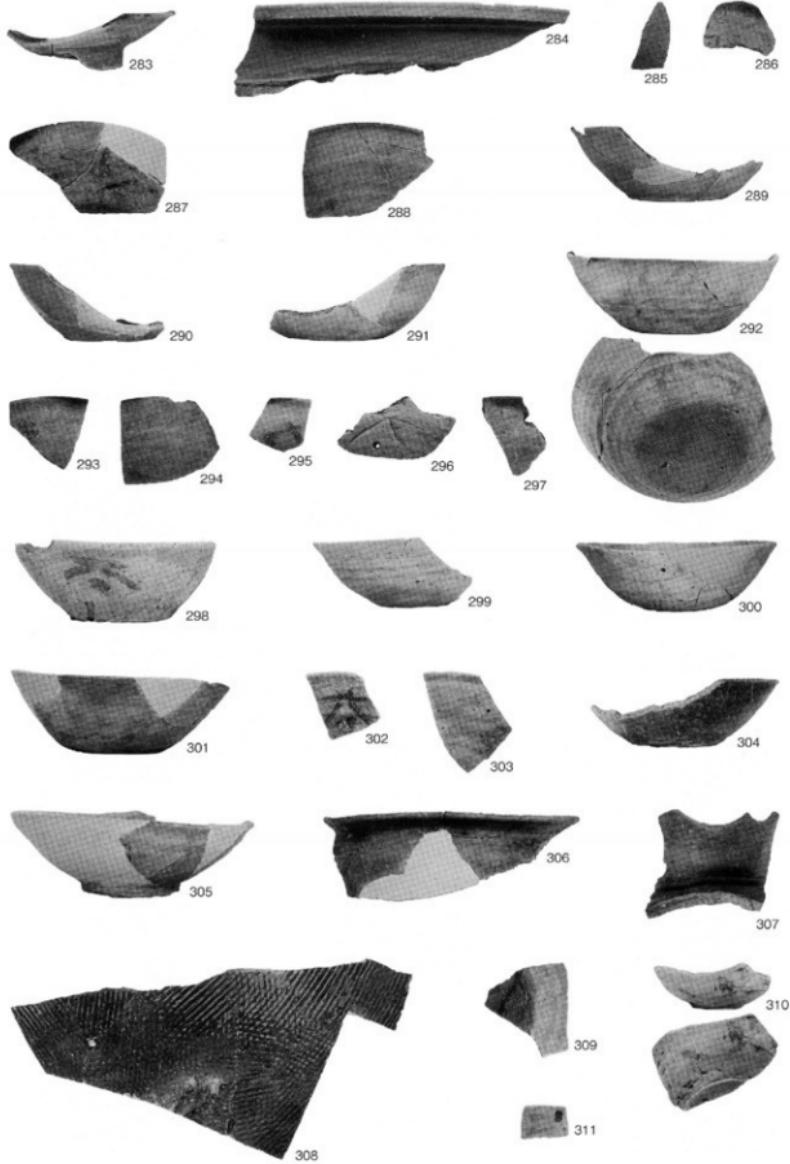


269

写真図版77 土器 (18)



写真図版78 土器 (19)



写真図版79 土器 (20)



312



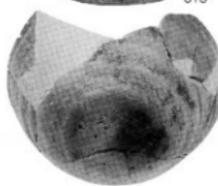
313



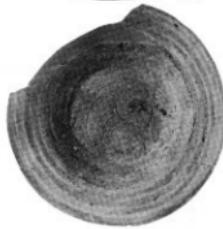
315



314



316



317



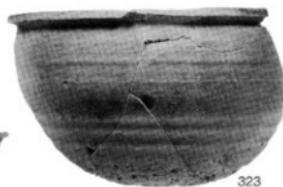
318



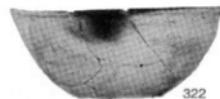
319



320



321



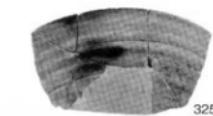
322



323



324



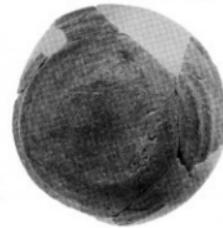
325



326



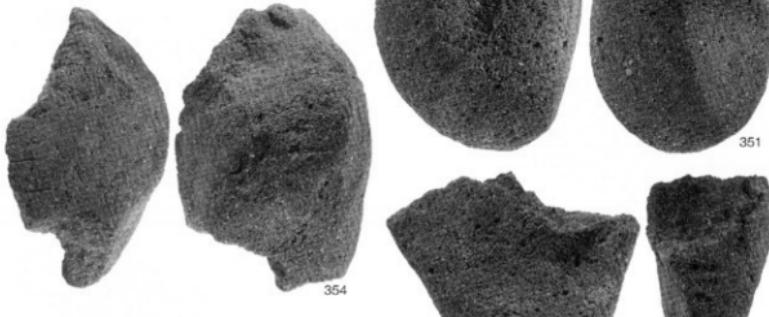
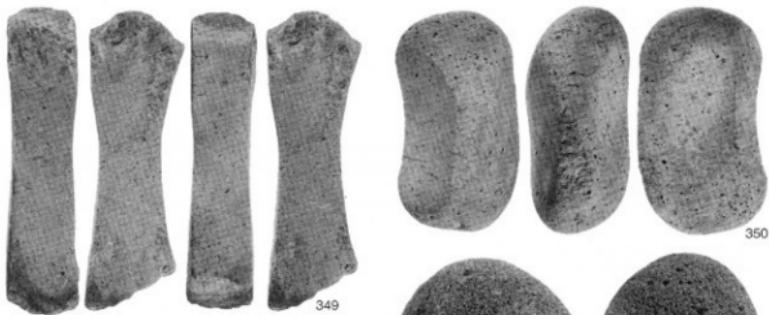
327



写真図版80 土器 (21)



写真図版81 土器 (22)



写真図版82 石器（1）



355



358



359

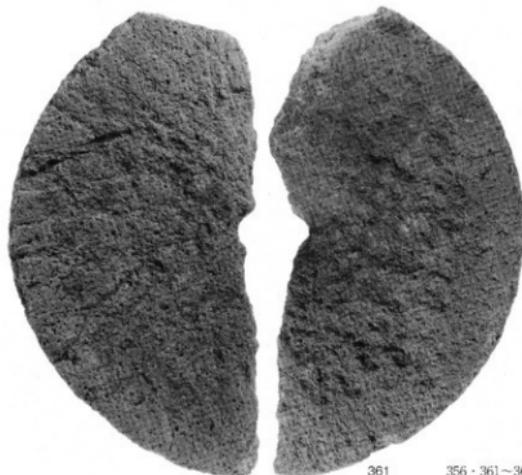
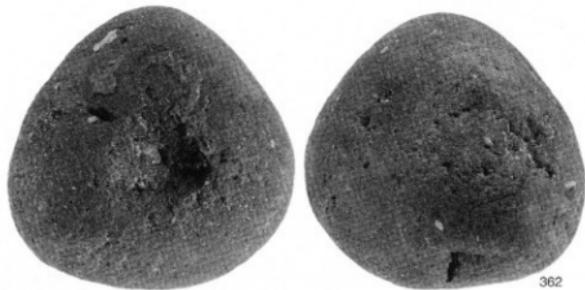


360

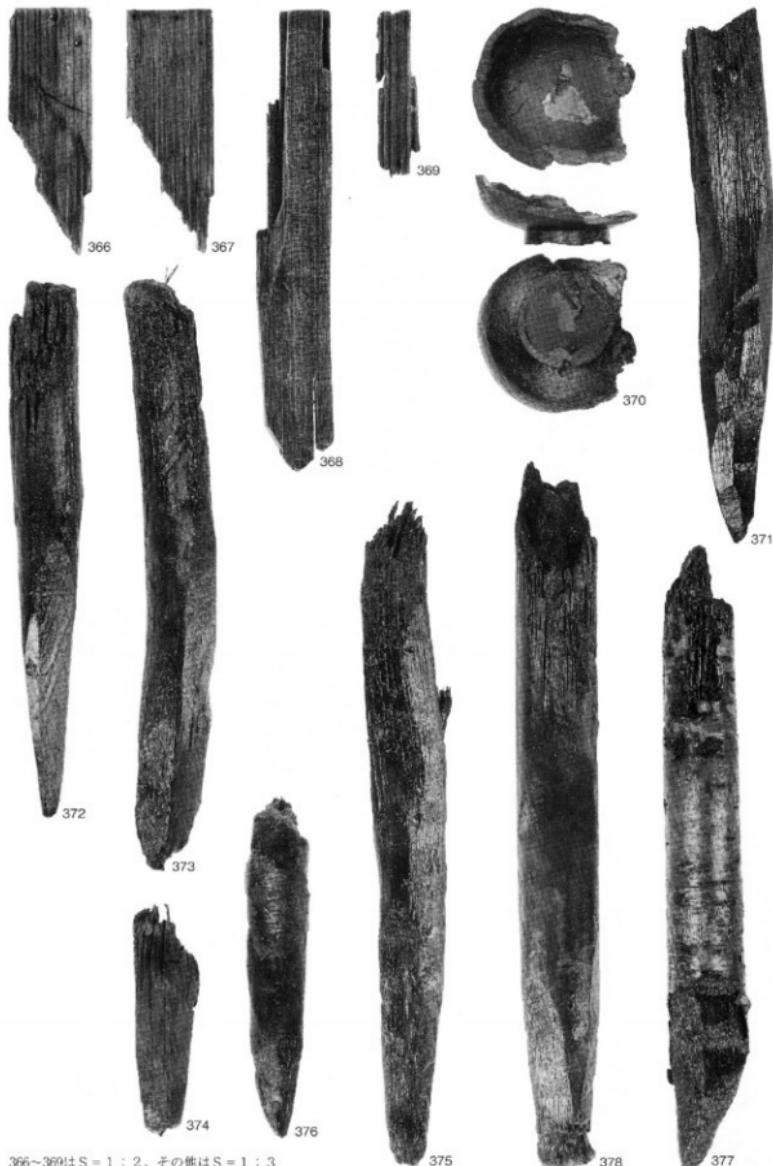


357

写真図版83 石器（2）



写真図版84 石器 (3)



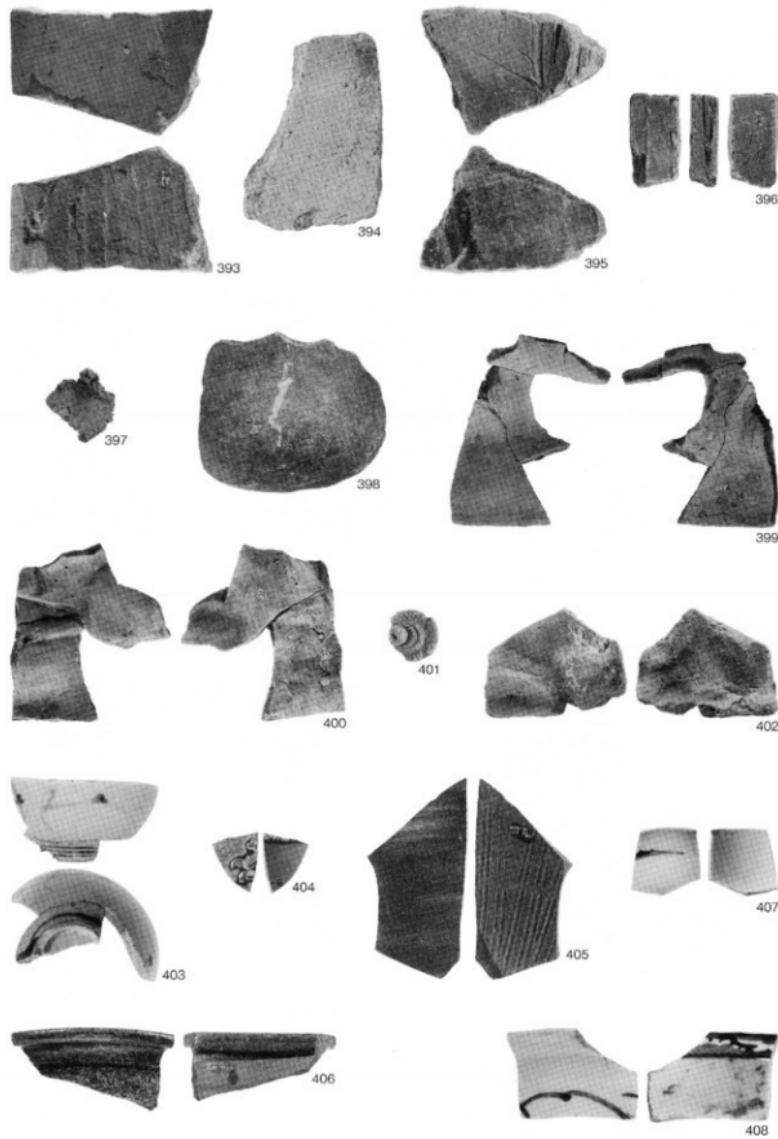
366～369はS=1:2、その他はS=1:3

写真図版85 木製品（1）



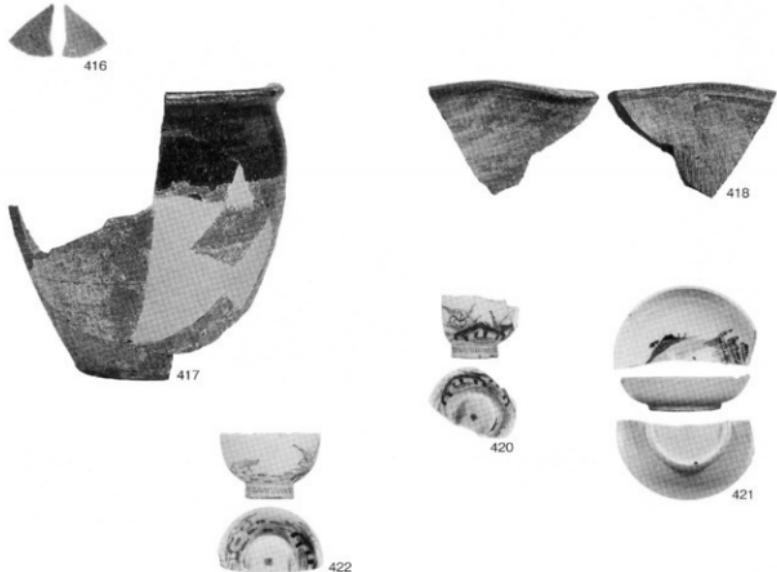
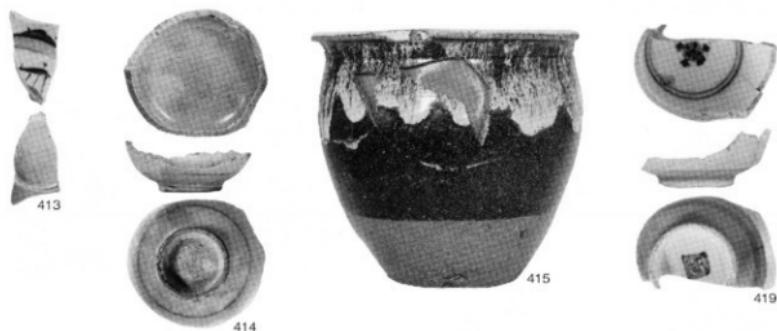
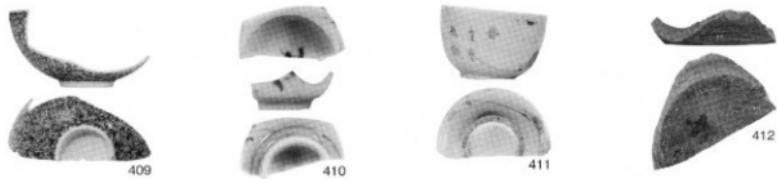
379~381はS=1:3、382~392はS=1:2

写真図版86 木製品（2）

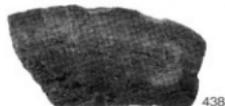
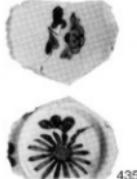
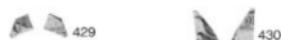
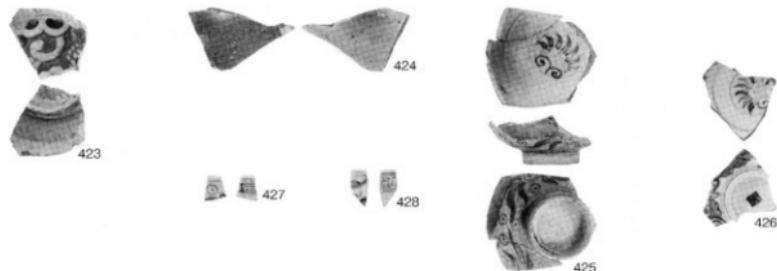


393～402はS=1:2、その他はS=1:3

写真図版87 土製品・陶磁器（1）



写真図版88 陶磁器（2）



写真図版89 陶磁器（3）・参考資料1（陶磁器）



446



445



447



444



453a



453b



448



449



450



452



451a



451b

S = 1 : 2

写真図版90 參考資料2 (銅鏡・煙管)



454



455



456



457



458



459



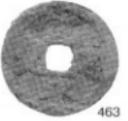
460



461



462



463



464



465



466



467



468



469



470



471



472



473



474



475



476

S = 1 : 1

写真図版91 参考資料3 (古錢)・古銭



482



480



481



479



477



485



478



484

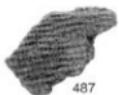


483

S = 1 : 2



486



487



488



489



490



491

S = 1 : 3

写真図版92 鉄製品・縄文土器

報告書抄録

ふりがな	むかいなかのたていせきだいじゅう・じゅういちじはくつちょうさほうこくしょ						
書名	向中野館遺跡第10・11次発掘調査報告書						
副書名	盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査						
卷次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第557集						
編著者名	金子佐知子・本多準一郎						
編集機関	JR岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001						
発行年月日	2010年3月10日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
むかいなかのたていせき 向中野館遺跡 (第10・11次)	市町村 岩手県盛岡市 飯岡新田2地割 133-2ほか	LE26-0205	39度 40分 40秒	141度 08分 20秒	第10次 2008.05.01～2008.11.10 第11次 2008.04.11～2008.11.10	2,916m ² 615m ²	盛岡南新都市 土地区画整理事業
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
向中野館遺跡 (第10・11次)	集落跡	古墳時代末 奈良時代	土坑 1基 堅穴住居跡 1棟 土坑 2基	土器・須恵器	須恵器坏が共伴		
		平安時代 (9世紀後半 ～10世紀 前半)	堅穴住居跡 15棟 掘立柱建物跡 3棟 土坑 16基 墓壙 1基 堅穴状遺構 1基 旧河道の遺物集中区 1ヶ所		旧河道の遺物集中区から 墨青土器・刻畫土器が多く 出土		
		古代	堅穴住居跡 1棟 堅穴状遺構 1基 土坑 11基				
		中世～近世	曲輪 1ヶ所 土壘 1条 堀跡 2条 堅穴住居跡 1棟	洪武通寶・永樂通寶	曲輪内に建物見当たらず 各1点		
		近世	土坑墓 10基	陶磁器	中世土器に近世墓群		
		近世末～	掘立柱建物跡 1棟 土坑 9基 溝跡 3条				
		近代以降	柱穴列 1条 焼土遺構 5基				
		時期不明	柱穴状土坑 多数 掘立柱建物跡 1棟 堅穴状遺構 1基 溝跡 2条 土坑 5基				
要約	<p>今回は8回目の本調査である。調査区は、渡渓の南側で南斜と呼ばれている地質のほとんどである。これまでの調査では小世城跡の船と北船と呼ばれる北船の地盤、北船と南船を満てる旧河床の調査が行われており、北船には建物が少ないと、西側の飯岡川遺跡から広がる平安時代の聚落もあること、旧河床から多くの平安時代の漆器土器、刺繡土器、木簡などが出土し、土器で祭器が行われていた可能性が高いことがわかつた。</p> <p>今回の調査では、南斜は土器と罐が廻っており、東西の範囲が判明したが時期を示すような遺物ではなく、曲輪内部には建物がほとんどないことが明らかになった。また、本地盤は南斜の細谷地遺跡から森良、平安時代の聚落が広がっており、9世紀後半～10世紀初頭の聚落に加え、これまで最も古い8世紀半ばの住居跡や、7世紀後半の土坑が検出された。特に8世紀半ばの住居跡から在地の土器器に加え、宮城県の出山塗の製品に類似する須恵器も出土したことが注目される。</p>						

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書557集
向中野館遺跡第10・11次発掘調査報告書

盛岡南新都市上地区面整理事業関連遺跡発掘調査

印 刷 平成22年3月5日

発 行 平成22年3月10日

編 集 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話 (019) 638-9001

発 行 盛岡市都市整備部盛岡南整備課
〒020-8531 岩手県盛岡市津志田14地割37番地2号
電話 (019) 651-4111
(独) 都市再生機構岩手都市開発事務所
〒020-0864 岩手県盛岡市西仙北1丁目16番地10号
電話 (019) 636-1511
(財) 岩手県文化振興事業団
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番地1号
電話 (019) 654-2235

印 刷 (株) 吉田印刷
〒020-0016 岩手県盛岡市名須川町23番地27号
電話 (019) 625-2323



